謙虚な使い魔～ブロントさんがルイズに召喚されたようです～

駒鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
謙虚な使い魔～ブロントさんがルイズに召喚されたようです～

【Ｎコード】
Ｎ３１７４Ｐ

【作者名】
駒鳥

【あらすじ】
ブロントさんがルイズに召喚されたようです。

（作者に代わりＷｉｋｉ管理人による二重投稿です、詳しくはｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ４０．ａｔｗｉｋｉ．ｊｐ／ｋｅｎｋｙｏｔｓｕｋａｉｍａ／）

第1話　「ああ！奇跡の出会い！」

一人の騎士は仲間と共に巨獣と対峙していた。
騎士は仲間と連携を取り、仲間を守るために盾となって巨獣の攻撃を一手に引き受けていた。
騎士が巨獣が繰り出す凶腕の薙ぎ払いを左手に持った盾により受け止めている間騎士の仲間達は
武器を手に巨獣に向かう者、魔法を詠唱する者、呪歌を歌う者、矢を射掛ける者、傷を癒す者、と
彼ら各々に与えられた役割を果たし、「絆」で繋がれた力は一つの巨大な力となり巨獣に対し獅子奮迅していた。

追い詰められていた獣はその命の最後の灯火を燃え上がらせその巨大な角を突き出し荒れ狂うようにその巨大な力の中心となっていつ騎士に向かい突進した。
手にした禍々しい風貌の剣で受け流そうと体を捻らせたが予想以上の衝撃により剣は騎士の手から弾かれてしまった。

騎士は剣が弾かれた方向を一瞬だけ一瞥した後、再び巨獣に目を向け盾を構えたが巨獣はすでに息絶えていた。
仲間の魔道士の古代魔法の詠唱が完了しており、巨獣の遺体となった体は燻る火に埋もれていた。

事が終わった事を確認した騎士は落とした剣を拾いに向かった時、剣が刺さっていた雪土の傍らに一輪の夢幻花が咲いていた事に騎士は目を留めた。
本来咲く所とは違う場違いな地に咲くその一つの花の香りは騎士の中に眠る懐かしい記憶に触れた
騎士は何気ない気持ちでその花を土ごとそっと引き抜き、腰に充

てたかばんにそっと仕舞った

その瞬間、

ふと誰かに呼ばれたような気がした

――――――――――

うしろを振り向く騎士

――――――――――きて

声を聞いた騎士

――――――はやくきて

彼を呼ぶ声を聞いた騎士

―私の使い魔はやくきて！！

少女の悲痛な声が彼を呼んでいると気付き辺りを見回し再び正面

に振り向きなおした瞬間
　騎士の前に突如鏡の様なものが現れ咄嗟に盾を構えたが甲斐も無く一人の騎士は鏡に吸い込まれていった

◆　◆　◆　◆

　時同じくしてハルケギニア大陸トリステイン王国トリステイン魔法学院
　ここでは学院生徒二年生による春の使い魔召喚の儀式が行われていた。
　学院の側にある広場に集まった生徒たちは自分と生涯を共にする使い魔との初めての出会いに、
　一人、また一人と感銘を表している中、今だ使い魔の召喚に成功していない生徒が一人いた。
　その生徒、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、
　幾度となくサモンサーヴァントの呪文を唱えたが、
　爆発によって地面が抉れるのみで一向に使い魔が現れてこないのだ。
「早くしろよ”ゼロ”のルイズ」
「”ゼロ”が何か召喚するまえに広場が爆風でなくなっちまう」
「何をやらせても”ゼロ”しかできないんだな」
　皆召喚を終わらせ、ルイズ一人のために待たされている生徒達の

心無い野次が飛び交いはじめた。
「…ミス・ヴァリエール、非常に残念ですが・・・」
ルイズの肩にそっと手をのせたのは今年の召喚儀式の担当教師コルベール。
「ミスタ・コルベールお願いです！もう一度だけチャンスをください！」
ルイズはその目に涙を浮かべながら必死に食い下がった。
コルベールは知っていた、魔法が使えない彼女がこの日のために、毎日幾度となく召喚の儀式に関する事を他の生徒の幾数倍も勉強していた事。
”ゼロ”と他の生徒に馬鹿にされつつも、彼女は自分ができる事を期待以上にこなしていた事。
しかし運命は残酷な事にひたむきで努力家である彼女にたった一つ肝心な要素、
「魔法」の才能を与えてくれなかったらしいのである。
コルベールとて教え子の中でも一番熱心に授業に受けていた彼女のメイジとしての未来を閉ざしてしまう事には不本意であった。
しかしまた学院の教員の一人として使い魔召喚の儀式ができない生徒は退学させなければいけないのであった。
「ではミス・ヴァリエール、深呼吸をして、気を落ち着かせてからもう一度だけ試しなさい」
そういってコルベールはルイズの肩をぽんぽんと叩いた。
「落ち着いてまだ見ぬ使い魔の事を強く念じながら呪文を唱えなさい」
そう言われルイズはすぅーっと息を吸い、はぁーと吐き、再度杖を構え、
――――お願い！なんでもいいから　私の使い魔はやくきて！
と念じながら声を高らかにあげ呪文を詠唱した。
「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ！　神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！　私は心より求め、訴える！　我が導きに、応えな

さい！！」

途端、今まで以上の爆音が学園中を響き渡り広場は前が見えないほど濃い砂煙に覆われてしまった。

ルイズと共に他の生徒も咳き込み、煙を振り払ってるうちに煙が晴れ上がり、爆発した箇所の中心にきらきらと光る鏡の様なものが浮かんでいた。

（やった！サモン・ゲートよ！ついに召喚に成功したんだわ！）

と砂埃で汚れた姿なっていた事も忘れて喜ぶルイズは小さく杖を持つその手をぐっと握り締めていた。

サモンゲートは使い魔を召喚した主の下へと送り届ける空間転移魔法である。

どんなメイジであれ基本中の基本であるこの魔法を唱える事自体は簡単とされていた。

しかしどういうわけか使い魔がすでにいる状態ではゲートを作る事はできず、

また主側から使い魔の所へは通れない一方通行の門なのである。

一度サモンゲートが開いたのであれば必ず使い魔が必ず現れてくると言う所まではメイジ達の間でも知られている。

しかしそれ以外の詳しい原理は謎に包まれたままで『そういうものである』と言う認識の下で使われている魔法でもあった。

学院二年生達に囲まれ、期待がいっぱいに込められた目でルイズがゲートを見つめ佇む中

その期待に答えるようにゲートはきらきらと光るだけであった。

しばしの沈黙の間ゲートが水面のように揺らいで、「何も起きない」とルイズを含むその場に居合わせた者全員が思いはじめたとき、

ぽつりぽつりと様子を見物していた生徒達は口を開いた。

「おい、使い魔は？」

「爆風で吹き飛ばされたんじゃないのか？」

「さすが”ゼロ”のルイズ！召喚するものも”ゼロ”だ！」

「”ゼロ”は蟻んこを召喚したかもしれない、皆足元気をつけろよー」

いつもの”ゼロ”を馬鹿にする嘲笑が始まっている時、

教師であるコルベールはこの「前例が無い」事態に関して様々な考えを巡らせていた。

（ゲートは開いたと言うことは使い魔呼び出されているという事だ、しかし一向に使い魔らしき存在は見当たらない）

コルベールは以前変わり無く揺らめくゲートを全方向から観察し、確かにサモン・ゲートであると確認した

（だが生徒達の言うように姿が確認できぬほど小さい使い魔だとしても、

ゲートを通じてきてこの場にすでに何かを召喚したのであれば役目を終えたゲートはもう閉じているはず。）

そして一度開いたゲートは必ず使い魔を召喚する事である事も踏まえ、

コルベールが達した結論は『この空中に浮かんだ鏡はまさに使い魔を召喚している途中』ということであった。

ルイズもその事に気づいたのか、それとも中々姿を現さない使い魔にあせったのか、

「も、物凄い使い魔が召喚されて…そう、ちょっと準備に時間かかっているだけなんだから！」

と周りの嘲笑に対し弁明するかの様に答えていた。

一方コルベールはこの事態の対処に悩んでいた。

サモン・ゲートが開かれたのであれば若きヴァリエール家の三女は「召喚の儀式ができなかった」訳ではなかった。

しかし使い魔との契約を済まさなければ「召喚の儀式が完了した」とも言えなかった。

とにかく使い魔が現れるまで待つしかないのだ。

「えー、とりあえず皆さん使い魔の召喚おめでとうございます。

召喚を終えた者達は自分の使い魔の事をもっと知りたいと思っているでしょうから本日の授業はここまでとし、解散して結構です。私はミス・ヴァリエールの儀式が完了するまで付き添います。」

そうコルベールが言い終えたのを聞き、

一時は面白がって見ていた生徒達も何も変化が起きない状況に飽きてきていたので、

各自＜フライ＞の魔法を唱え、使い魔と共に思い思いに飛んでいく。

その内の一人が「お前は歩いてこいよ”ゼロ”のルイズ！」と暴言を吐く者までいた。

そうしてルイズは教師のコルベールと共に静かに煌き輝くサモン・ゲートの前に立っていた。

「ミス・ヴァリエール、気を落とさないでください。前例が無い状態ですがこうしてサモン・ゲートが現れたのですから貴方の使い魔は必ず出てきます。」

などと残されたルイズを励まそうとするコルベールであったが、

ルイズは心中穏やかではなかった。

いままで基本的なコモンマジックでさえ『一度』も成功した事が無かったルイズである。

今日行ったサモン・サーヴァントでさえ最初の数回は明らかな失敗であった。

ならばこのサモン・サーヴァントも失敗しているのではないか？

時間が経つにつれ、ルイズの心は自分の無力さを呪う気持ちがじわじわと広がっていった。

その気持ちに対抗するかの様にルイズは無意識につぶやいた。

――はやくきて

使い魔がサモン・ゲートから現れてくる事を願ってひたすらつぶやいた。

――はやくきて！

四半刻も過ぎた頃、ルイズの中で不安が限界まで溜まり、そして『叫び』という名の濁流となって泣け叫んだ！

「はやくきて！私の使い魔はやくきて！！！！」

それに呼応するかの様にサモン・ゲートが眩く光り、白く輝く一人の『男』が引き摺りだされる様に現れた。

２００サントは超えるであろう長身痩躯の『男』は王宮の衛兵が着ている様な白い板金鎧の上に同じく白いサーコートをかけていて、その左手には落ちかけた太陽の光でさえ眩しく反射する金縁で彩られた蒼い金属の盾が『男』の顔を遮る様に構えられていた。

（まさか人間が召喚されちゃうなんて！？）

（まさか人間が使い魔として召喚されるとは！？）

不意に現れた予想外の使い魔に二人は驚愕した。

『男』の全身が引き出されると、役目を遂に終えたサモン・ゲートは見る見ると萎み、そして消えた。

そして自分がいた場所とは違う所に連れてこられた事に気づいた『男』はその掲げた盾を降ろし、辺りを見回し、

目前にはポールのような杖を携えた頭髪がやや寂しい男性とマントを羽織った少女の姿を見た。

『男』は直感的にその少女が自分が聞こえた声の持ち主であると感じ、少女をじっと見つめた。

『男』その顔は肌色やや浅黒く、端整な顔立ちに物静かにルイズの事をじっと見つめる目は鋭く釣り上がり、

首元まで伸びている長髪は着ているものを反映しているような煌く白い銀髪であった。

そしてその頭髪から突き出るように伸びた両の耳・・・

「「え、エルフ！？」」
ルイズとコルベールは同時に二度目の驚愕をした。
人間が使い魔として召喚される事は今まで無かった。
ましてやハルケギニアの人々にとっては天敵とされているエルフが召喚されるなどあってはならない事である。
ハルケギニアの人々が信仰する始祖ブリミルが遂に聖地奪還を果たせなかった最大の原因とされているのが、
エルフと言う亜人の存在があったからだと言われている。
始祖ブリミルが人々に伝えたとされる現存する火・水・土・風の四属性の系統魔法はもちろんの事、
始祖ブリミル自身が扱っていたと言われる現在は失われし「虚無」魔法でさえ梃子摺ると言われた、
「先住魔法」を自在に操る種族がエルフなのだ。
メイジが何人いようと対抗手段にすらならないエルフの力は、
ハルケギニアの人々にとっては『畏怖』を飛び超え、純粋に『恐怖』の対象とされていた。

「おいィ？一体誰だおまえ？」
『亜人』のドスが聞いた突然な発言に、生徒を守る立場であるコルベールは咄嗟に杖を構えたが、
相手がエルフであれば彼一人ではなす術も無いことは明らかだった。
必要以上に相手を刺激する事は無いとコルベールは判断し、杖を元の通りに持ち直した。
コルベールはメイジとしての経験と勘でこのエルフと直接やり合うのは無謀であるだけではなく、
傍にいる教え子を悪戯に危険へと巻き込んでしまうだけと判断した。
「ほう、俺を強いと感じてしまってるやつは本能的に長寿タイプ」
一方ルイズの方は自分が呼んだ使い魔の姿に困惑していた。

今まで実際のエルフを見た事は無かったとは言え、ルイズが座学で学んでいたエルフのイメージ像とはずいぶんかけ離れていた。
エルフが扱うとされている先住魔法の一つ、＜カウンター＞はいかなる系統魔法も物理攻撃をも防ぐと言われている。
その様なエルフはわざわざ重量がある金属鎧を着る必要がないのである。
確証はされていないが、金属はむしろエルフが扱う先住魔法の精霊の流れを悪くすると言われている。
なのに、目の前の『男』は武器を手に持って戦う剣士のような出で立ちで、
まるで昔読み聞かされた事とある絵本の勇者の様に勇壮なかつ純白に輝く神々しい姿をしていた。
判らない事だらけだったが、ルイズは一つだけ確信していた。
この『亜人』こそ自分が呼んだ使い魔だ、という事を。

「あなたを召喚した私の名はヴァリエール公爵家が三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。あんたは？」
「俺か？――――」
ピンク髪の少女の目をじっと見つめて『亜人』は答えた。
「――――俺はブロント。ただのブロントだ。」

第2話　「異界の使い魔」

ブロントと名乗った耳長の亜人は目前の二人に聞いた。
「俺はジュノ大公国北東のクひィム島でキングベヒんもスと戦っていたんだが。どこだここ？」
独特な韻を持つ訛りがあったが、内容が聞き取れない訳ではなかった。
質問された二人には「ジュノ大公国」や「クフィム島」がどこか地方を指す固有名詞だと想像ができたが、
歴史の科目が得意であったルイズや教師であるコルベールでさえも聞いた事が無い地名であった。
「島」はともかくとしても、「大公国」と名が付けられる程の国家を地図から見逃すはずが無い。
可能性があるとすればエルフが住む地より遠く東方のロバ・アル・カイリエ周辺に、その様な国家があるのかもしれない。
「戦っていた」と聞いてこの召喚された使い魔が衛兵かまたは傭兵の様な風貌をしている事に多少は納得がいった。
もっとも二人には「きんぐべひんもす」とは何か軍団名なのか、誰かの名前かは分からなかったが、
目の前の亜人はエルフの軍人の類であろうと想像した。
ただでさえエルフの事はあまり細かい部分までは知られてはいなかったので、
研究好きなコルベールにとっては興味が尽きないことばかりであった。

「ここはトリステイン王国のトリステイン魔法学院です。ジュノ大公国ですか・・・聞いた事がない地名ですね。ああ、申し遅れました私はジャン・コルベールと言う者でこちらの学院で教鞭を取っています。」

「トリステイン？俺の知っている地名には何も無いな。」
ブロントは冒険者としてヴァナ・ディールの様々な場所を訪れた事はあったが、トリステインは初めて聞く名詞であった。
とはいえ、日ごろから『旋流する渦』や『禁断の口』等に突如吸い込まれ、
遠地、異世界、更には裏世界や過去世界にも訪れた事があったため、別段驚きはしなかった。
魔法学院と言われ、ブロントは改めてルイズの服装を観察した。
どことなくシュルツ流軍学塾生の制服に似ているような気もした。
「ええ、このミス・ヴァリエールの使い魔として、貴方は『サモン・サーヴァント』と言う魔法によってここに召喚されたのです。」
コルベールは続けて説明し、ルイズを指差した。
「『使い魔』？何だ俺はペットのようなものか？獣使いにはみえないようだが。」
「ペ、ペットぉ！？」
端麗な顔立ちをした青年の口からさらっとでた言葉で、ルイズはバカ犬の様に振舞うブロントの姿想像して、
顔を真っ赤にして俯いてしまった。
その間ブロントは獣使いの仲間である一人のことを思い出していた。
毎日違うモンスターを引き連れており、いつも強烈な臭いがする汁を入れた瓶を持ち歩いていた。
彼に染み付いた臭いが嫌がられたのかあまり人との付き合いに関して運がある奴ではなかったが、
獣使いの彼が呼ぶと、如何なる場所であっても、主人の下に現れる籠付きのカニにはブロントも一目置いていた。
過去であろうと、裏世界であろうと、主人の下に馳せ参じるカニに、
ブロントは自分の中にある騎士道精神に通じる物があると感じ取っていた。

「いえいえ、使い魔とは召喚したメイジと生涯を共にする大事なパートナーとなる存在です。ここトリステイン魔法学院では代々伝わる『使い魔の儀式』と言うものがありまして、各生徒の魔法の傾向を見るためにも毎年春になりますと、生徒達は『サモン・サーヴァント』により召喚した生き物と使い魔の契約を交わさなければいけない決まりなのです。突然呼び出され不本意かもしれませんがミス・ヴァリエールと契約していただいてくれませんか？」

ブロントは生涯をかける契約と聞かされても、別段気にはならなかった。

すでにサラヒム傭兵派遣会社に命を丸ごと投げ捨てる契約を交わしていたり、

自分でも良く覚え切れないほど様々な所で契約していたような気もする。

交わすだけであれば、契約はとりあえずどんどんが交わしておくのが冒険者の常であった。

冒険者としての行動が束縛されなければ、誰の下に属しようがあまり関係の無いことだった。

それよりもブロントにとって気になる点があった。

「『サモん・サッヴぁんト』で召喚したと言ったが元いた所に戻る事はできにいのか？」

新天地を冒険するために、ここに残る事はやぶさかではなかった。

しかし、ベヒーモスの縄張りの雪土に挿したままで、まだ拾っていない長年共にしてきた愛剣のグラットンソードの事が気になった。

なによりも現在持っている武器は、厳密に武器と呼べるか怪しい、左手にある盾しかなかった。

『盾』の役目を最大限に引き出すためには、『武器』が無くてはなんとも心許なかった。

一方、ルイズはせっかく呼んだ使い魔が「帰る」と仄めかす事を

いい始めたので、内心焦った。
「ちょっと！せっかく召喚したのにあなたにいなくなられたら困る！」
と騒いだがコルベールはルイズを諫め、話を続けた。
「残念ですが『サモン・サーヴァント』で使い魔は呼び出すことはできても、送り返す事はできないのです。ジュノ大公国でしたでしょうか？聞いた覚えがない国ですが、遠い東方のエルフの地であれば、ここトリスタニアからすぐに戻る事は難しいでしょう。代わりと言ってはなんですが、当面の衣食住は貴方の主人となるミス・ヴァリエールが負担しますので、とりあえず契約をしていただけませんか？このまま宛ても無く戻る旅をするよりも、足掛かりの拠点を作る事が貴方にとっても良いと思うのですが。」
流石のブロントでも武器も持たずに新天地を冒険する気にはならなかった。
ジュノ大公国が知られていないのであれば、手持ちのギル通貨は使えないのだろう、
となると武器を調達する事も容易ではないので、この提案はブロントにとっても都合は良い内容ではあった。
ブロントは、ふと自分のかばんの中に羊皮紙に『デジョン』の魔法が込められた呪符が入っていることを思い出した。
丸めた羊皮紙を取りだしたブロントに「なんですかな？」と聞いてきたコルベールを余所目に、
呪符に込められた魔法を開放して＜デジョン＞を自分に掛けた。
途端、ブロントは低く響き渡る音を立てながら、インクの塊の様なオーラに包まれて消えた様に見えた。
が、すぐまたサモン・ゲートが先ほどまであったその場にまた現れた。
「い、今一体何したの！？」
「今確認したが確かにすぐには戻れないようだが」

魔法を開放し、使い物にならなくなった羊皮紙を再び丸めてかばんの中に押し込みながら、しれっとブロントは言った。
まさかこの使い魔が、ハルケギニアにまた戻れる保証も無いのに、取りあえずデジョンで帰ろうとした、とはルイズは気付いていなかった。
自分の位置を把握するための先住魔法か何かだろうとコルベールとルイズは思っていた。

「してもいいぞその使い魔の契約」
ブロントが淡々と告げた。
その言葉を聞いたルイズは、これで学院の退学、と言う誉れ高きヴァリエール家にとっての最大の恥となる最悪の事態は免れた事に安心して、ほっと息を吐いた。
が、すぐに自分の姿を思い起こし慌てて貴族としての毅然とした態度を取って、手にした杖を振りかざしながら朗々と呪文を唱え始めた。
「――我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔と成せ！」
そう唱え終わった後、ルイズは毅然とそびえたつ２００サントはある自分の使い魔を見上げ、
爪先立ちしてみても、ちっとも埋まる気配のない距離の遠さに絶望しながら、
聞こえるか聞こえないか程小さく拗ねた声で、
「・・・ちょっと・・・跪きなさいよ・・・」
と地面を指差す。
「ほう」
騎士の『肩打ち』のような事でもするのだろう、とブロントは思い、祈るような姿勢で片膝を付いた。
ようやく自分の顔が届く高さとなり、間近に真っ直ぐな眼で見つ

めてくるブロントの視線を受け、
ルイズはこれからする事を想像したらボンッ！と頭から湯気がでる気持ちになり、顔を真っ赤にした。
ブロントの顔は「美形」の部類に入る方である。エルフである事を除けば学院の女生徒達がこぞって黄色い声をあげてしまう様な顔立ちだった。

「かかかか勘違いしないでよね、こ、ここれはあくまで契約の儀式であって・・・その・・・もにょもにょ」
「そのなんだ？」
ええい！ままよ！と決心したルイズは両手でがっとブロントの顔を掴み、口付けをした。
「おいぃ？！なにいきなりキスしてきてるわけ？」
突然の事に語尾を上げながら高らかに叫ぶブロント。
「ちちちち違うわよ！そ、そんなのじゃ無くて契約の儀式なのっ！そんな大声で言わないでよ…き、キ…だなんて…」
と心の中で毛布を頭から被りたい気持ちになりながら、何とか言い繕うとするルイズは本日一番に顔を赤くして、
手を振り回しながらブロントの胸をガツンと叩いたが、
白い革のサーコートの下に金属の鎧が着込まれているとは思わず、声も出せず、なんともいえない痛みにルイズは自分の手を抑えて、悶絶した。

――そして
「おいぃぃぃぃイイイイ！！？？」
ブロントの左手に焼けるような激痛が走った。
咄嗟に盾を落とし、手の内側からその痛みが生じていると感じたブロントは左手の篭手を外した。
そこには光を発する何と書いてあるか読み取れない文字らしき文様がじりじりと浮かび上がる。

「すぐ終わるわよ！『使い魔のルーン』が刻まれているだけよ！」
ブロントは過去にも皇国の不滅隊に「何か」を埋め込まれ、タトゥーを刻まれたり、
依頼により勝手に呪いを掛けられたり、制約魔法を掛けられたりもした事もあったが、
今回もこの様なルーンが激痛を伴って刻まれるなど、つくづく冒険者とは損な役割だなと痛みをごまかすように思いながら左手を抑えていた。
（なんでしょう・・・このルーンは・・・？）
儀式の終始を傍観していたコルベールは、ブロントの左手に浮かぶルーン文字があまり見ない形をしていた事に気付いた。
ただでさえエルフと言う前代未聞の使い魔の出現に充分驚いていたが、
その手に浮かび上がったルーンも他の生徒の使い魔に現れるものとは随分と形が変わっていた。
「失礼！その手のルーンを少し私に見せてください！」
使い魔のルーンが完全に浮かび上がり、ルーンが刻み終わると同時に痛みも嘘のようにさっと消えた事を感じたブロントは、
異常がないか確認するように自分の左手を数回開いたり閉じたりした後、コルベールに見えるように手の甲を向けた。
ふーむ、と言いながらコルベールがルーンの文様を紙に書いている間、ブロントはルイズに聞いた。
「これでいいのか？」
「うん、これで私はあなたのご主人様であなたは私の使い魔よ。」
ルイズは”ゼロ”と呼ばれ苦渋をなめ続けた学園生活を送っていたが、
エルフという強力な使い魔をものにした事で”ゼロ”と呼ぶ同級生達を見返せると思っていた。
理想を言えばドラゴンとかグリフォンのような凄さがわかりやすい幻獣の使い魔がよかったが、

この使い魔も良く見れば見た目凛々しく、神聖そうで、（多分）強そうで、この使い魔もある意味呪文通りの使い魔だった。

特に代々互いに並ならぬ因縁を持つ、鼻持ちならないツェルプストー家の娘をぎゃふんと言わせそうだ。

（もう”ゼロ”だなんて誰にも言わせないわ！）

そうルイズが心の中で決心したとき、

「ああ、もう終わりましたよ。もう結構ですよ―」

とコルベールはルーンを書きとめたノートをパタンと閉じた。

「―ミス・ヴァリエール、使い魔の召喚おめでとうございます・・・と言って本日は終わりにしたい所なんですが、彼をこのまま学院連れて行くのは得策では無いと思うのです・・・その目立ち過ぎると申しますか・・・」

生まれて初めて成功した魔法にうかれていたルイズは今まで思いつかなかったが、

コルベールが説明するにはエルフとすぐわかる耳長のブロントをそのまま学院に連れて、

他の生徒・教員達の目に触れさせる事は色々と問題があった。

トリステイン魔法学院には王宮に直接通じている生徒や教員達の他に、近隣諸国からの留学生も多数在学している。

特にエルフに占領された『聖地』の奪還を、国で推し進めているロマリア連合皇国の留学生に知られでもすればただ事ですまない事は明白だった。

異端審問の名で学院関係者が連行されたりしてしまうのは学院側としては非常にまずい事なのである。

幸いこの場でブロントの姿を見ているルイズとコルベールはエルフの恐ろしさを聞き及んでいるとは言え、

ルイズはせっかく呼んだ自分の使い魔を手放すような事をする気はなかったし、

研究者思考の強いコルベールも、迫る危険が無いようであれば色々未知に包まれているエルフの文化や技術の事も知りたかったので、

ブロントとは友好的に接して行きたいと思っていた。
傍から話を聞いていたブロントは半分ぐらいは状況を理解していた。
ブロントは冒険者としての生活の中で、バストゥーク共和国で似たような問題を見てきている。
女神アルタナの子と呼称される『人間』の一種族であるガルカ族は、
他の種族とかけ離れた巨体を持ち、人間離れした風貌や独特な精神文化の所為で、
同じ共和国に住む多数派であるヒューム族から度々迫害を受ける事が多々あった。
どうやらここトリステインではエルヴァーンであるブロントのように長い耳をもった『エルフ』という種族はあまり歓迎されておらず、
このままでは非常にまずい事になると察した。
「俺はエルフがなんであるかはわからないが。とにかくこの耳がまずいのか？」
「エルフが何かわからないって、だってあなたエルフでしょ？」
首を傾げていたブロントに合わせるかの様にルイズも首を傾げる。
「俺はエルヴぁーんなんだが」
『エルフ』とどことなく発音が似ている新しい単語を聞きルイズはコルベールの方へ答えを期待するように見た。
もちろんコルベールも聞いたことがない単語であったが、その言葉の響きの類似性から一つの推測を思い浮かんだ。
「もしかして彼の住む遠い地では、自分達エルフの事をエルヴァーンと呼んでいるのかもしれません。
私達ハルケギニアの人々は『エルフ』と呼んでいますが、彼らは別な方法で自分達の事を呼んでいるのかもしれません」
少し変わった発音で言葉を発するブロントであった、そこで固有名詞の些細な違いが出る事があってもおかしくない、とルイズ達は

思った。
「とにかく隠せばいいんだなこの耳」
ブロントはかばんから壜を一つ取り出した。
瓶の蓋を開け、壜を傾けるとさらさらとした粉が光を乱反射しながら自分の手の上に出した。
小さじ一杯分のきらきらと光る粉をその手に載せると、徐にそのこなを自分の耳に塗布した。
ルイズは「何をしているの？」とブロントに聞こうと思った矢先ブロントの銀髪から突き出ていた耳が消えていた。
「あ、あんた、耳をどうしたの？」
「プリズんムぱうダーで耳を隠したんだが？」
恐る恐る聞くルイズに対し、ブロントはさも当たり前であるかの様に答えた。
ルイズはブロントに頼み耳を少し触らせてもらった。
手を耳があった思われる場所に伸ばすと、何かが指に触れる感触と共にうっすらと元あった耳の形に空気がピクピクと揺らいだ。
ルイズとは別にコルベールも感銘受けていた。
「おお！＜フェイスチェンジ＞が行えるマジックアイテムですか？」
「それほどでもない」
ブロントは二人にグラスファイバーとレンズを組み合わせて、砕いて粉にして作られたこの『プリズムパウダー』の事を簡単に説明した。
多少の知識は必要とは言え、材料さえ揃えば誰でも簡単に作れるという事。
本来は一瓶使って全身に塗る事によって完全に姿を隠す事ができるという事。
今は塗っている部分が極端に小さいため、よっぽどの強い衝撃を受けなければかなり長時間持続するという事。
もっとも態々話す必要も無いと思いクリスタル合成の事や、ヴァナ・ディール式の『錬金』の技術が使われている事をブロントは省

いた。
　コルベールは話を聞き、試しに＜ディテクト・マジック＞を粉が入っている壜にかけて見たが、
　ブロントの言うとおり全く何も魔法がかかっていない事が判明した。
「その姿なら平民の使い魔として学院内では通じるでしょう。不用意に魔法などを使わなければ感づかれる事もないし。それと貴方は遥か東方のロバ・アル・カイリエの出身とでもしておけば大まかな話の辻褄は合うでしょう。それにしても・・・」
　魔法を使わず風と水を合わせた高等魔法である＜フェイスチェンジ＞と似た事を成し遂げたこのアイテムに、
　コルベールの研究者の血が騒いでいた。
　少年のようにきらきらと輝かせた目で手にある壜をじろじろと見る頭髪が寂しい男を見て、
　ブロントは少々うざいやつがいるな、と思いつつもまだかばんにはまだ他にもたくさんパウダーの瓶を持っていたので、
　広い心をもってまだ自分で使う分以上に持っている事をコルベールに伝え「パウダーをおごってやろう」と、先ほど使用した瓶の残りをコルベールに手渡した。
　まさか譲って貰えるとは思ってはいなかったコルベールは目を丸くして瓶を受け取ることになった。
「ほ、本当に良いのですか!?いやはや、実にありがたいです。お礼にと言ってはなんですがもし私で力になれる事がありましたらこのジャン・コルベール、力になりますぞ!実は学院内に私はちょっとした研究室みたいなものを設けていますが、必要な物がありましたら幾つか都合させて頂きましょう」
　と言ったものの、コルベール自身にとっても「他にも珍しいもの見せてもらえるかもしれない」と言うささやかな下心も込められていた。
　早速手に入れたプリズムパウダーを大事に手にもって＜フライ＞

を唱え嬉々として学院へと戻っていった。
　学院に向かって飛んでいくコルベールを感心した様子でブロントはつぶやいた。
「ほう空を飛ぶ魔法か」
「＜フライ＞を知らないって、まさか先住魔法にも似たようなものは無いの？」
「言っておくが俺は先住魔法というものを知らない」
「え？ああ、えーと何だっけ、確かエルフ達の間では『精霊魔法』と呼ばれていると聞いた事があるわ」
「そうか精霊魔法。だが俺はまったく使えないぞ精霊魔法」
「え？」
「俺が精霊魔法を使う事は無理に不可能。」
　ただでさえルイズは自分が呼んだ使い魔がただの平民であると振舞わなければいけない上、
　この粗野な口調で語る使い魔は実際に耳が尖っているだけの平民なのかもしれないと思い、
　さきほど奮い立った「もう”ゼロ”と呼ばせない！」という決心がバラバラに引き裂かれていった。
「な・・・なんだか今日はとにかく疲れたわ・・・」
　と頭を抱え学院にとぼとぼと歩き始めたルイズに、追い討ちをかける様にブロントが疑問を投げかけた。
「お前は＜フライ＞しないのか？」
「う、うるさいわね！今日は疲れたからちょっと歩いていきたい気分なの！」
　こうして傾きかけていた太陽を背に一人の主人とその使い魔は学院へと歩いていった。

第3話　「若きルイズの悩み」

「おいィ、月が二つあるようなんだが。」

ルイズの部屋の窓からブロントは月を見上げていた。

空には青と赤の双月が浮かんでいた。

ヴァナ・ディールでは月の光る色や位置で曜日や時間を計り、そしてその満ち欠けによって様々な事柄が影響されている、

と信じられていたので野外で活動する事が多い冒険者とっては月の観測は大事な行動の一つだった。

最初はヴァナ・ディール内のどこか遠方に召喚されいたと思っていたのだが、

こうして窓の外にはっきりと双月がある所を見てしまうと、単純に遠方に来ただけでは無い様に思えてきた。

完全なる異世界に来たのであれば帰還の魔法『デジョン』で戻れなかった事もそれとなく納得がいった。

「平民を装うのは良いけど、いくら平民でもそこまでは馬鹿じゃないわよ。月なんていつも二つでしょ」

エルフの最大の特徴である先住魔法も使えず、平民として振舞うしかない使い魔に対する扱い方を考えていた最中に、

すっとぼけた事を言うブロントにルイズはイライラしていた。

部屋に戻る途中に出会った同級生の何人かにも、平民を召喚したという事でからかわれた。

ただでさえ皆に”ゼロ”と馬鹿にされてきたのだ、せめて自分の使い魔になめられる事だけは避けたかった。

少し不思議な道具などは持っているようだが、魔法も使えないエルフなど長耳が生えた程度の平民でしかない。

エルフとばれて問題が起きる可能性があるだけ、普通の平民よりも性質が悪いと言えた。

そのぶっきら棒な口を開かなければ見た目はいいので、やはりビシビシと躾けて行こうとルイズは思った。

「俺がいたところには月は一つしかないが？」

「何よそれ？ずっと東方からは月が一つしか見えないとでも言うの？一体どれほど東にそのジュノ大公国とかというのはあるのよ。まさか本当にロバ・アル・カイリエの方にでもいたの？」

結局今回も双方の話がどこか噛み合わず、平行線のまま進歩しなかったので、この話題は取りあえず置いておく事にした。

「俺は使い魔となったようだが何をすればいいんだ？」

「まずは使い魔は主人の目となり、耳となる能力が与えられるわ」

「ほう、それは便利だな」

「でもあんたじゃ無理みたいな、何も見えないし聞こえないもん」

「なんだ『リんクパっル』みたいなものがあればいいのか」

と言ってブロントはかばんから一つの貝殻のようなものを取り出し、その貝の口から綺麗な真珠の様な物を取り出した。

『リンクパール』と呼ばれるそれは、ブロントがハルケギニアに召喚される前までその真珠を通して離れている仲間と会話をするために使っていた道具だった。

しかしハルケギニアに召喚された時から真珠からは、声がぱったりと途絶えていた。

『リンクパール』は同じ『リンクシェル』から作られたもの同士でしか通信できず、

本体であるリンクシェルに異常があると築き上げた通信の輪は断たれてしまうのであった。

ヴァナ・ディールにいる仲間の声が届かないのはリンクシェル自体に何か問題がある可能性もあったので、

その確認という事も含め取り出したリンクパールをルイズに渡した。

「これをもってちょっとまってろ」
といい部屋を出るブロントをキョトンとした顔でルイズを両手でリンクパールを持ったまま見つめていた。
そして数秒後―

「――おいィ？聞こえるか？聞こえていたらパールにはなしかけてみるべき――」

とパールからブロントの声が発せられた。
突然語りだしたパールにビックリしてルイズは軽く飛び上がった後
「き、聞こえたわよ！？」
と大声でパールに向かって叫んだ。

「――怒鳴らなくてもいい――」

とパールが答えたと同時にブロントが再び部屋に入ってきた。
「さすがに見ているもの見えないがこれでなるだろ耳」
「驚いたわ、遠くてもこれを通して会話できるの？」
「俺は細かい事まではわからないんだが、海の向こうにいる奴とも会話できる」
ブロントはリンクシェル自体に何か問題があるわけではないと安心した反面、会話ができないほど仲間達から離れている事だと知り落胆もした。
「これ私貰っていいの？貴重なものじゃないの？」
「俺がいた所では店で売っててだれでも買えるんだが」
ほぇーと惚けるルイズの気を惹く様に手を振ったブロントが続いた。

「他に使い魔がする事はあるのか？」
「え？ええ。えーと・・・二つ目に、使い魔は主人の望むものを見

つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」
「秘薬？エリクサーとかパナケイアとかか？」
「そんな伝説上の霊薬なんて期待してないわよ。特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とかコケとか・・・でも流石にこれはあんたには――」
王宮に衛兵としてでも黙って立っているのが相応しいこの男が、つるはしをもって掘っていたり、まさかりを担いで木を切り倒したり、草刈鎌で植物を集めるわけが――

「丁度いい。色々あちこち見ておきたかったからな。そのついでに集めておこう」
「――見つけてこれ・・・ってええっ？できちゃうの？」
「ああ、俺は依頼でよくそういう類の物を集めていたんだが」
「依頼？」
「俺は冒険者なんだが、入手が難しい素材の入手や僻地への届け物などの仕事を良く引き受ける事となっていた」
「そ、そう。では何か必要となったら頼むわ。」
この使い魔に対する評価が今日一日で波を打って上下するので喜ぶべきなのか落胆するべきなのか困ってしまうルイズだった。
「他にはにいのか？」
「後は・・・使い魔としてこれが一番なんだけど、使い魔は主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！」
「誰に話しかけていると思っているわけ？ナイトであるこの俺が『盾』として他の使い魔に遅れを取るはずがない」
「あんた、エルフなのに『シュヴァリエ』なの！？」
「エルヴァーンだ、そしてその『シュッバリエ』なんてものではない。だが仲間の『盾』となって守ってしまうのがナイト」
ルイズには半分もよく理解できなかったがブロントが言うナイトとは、貴族の称号として意味ではなく、一種の役割や生き方である

らしい。
　確かにこのブロントは何かと戦っていた所で召喚されたと言っていた。先住魔法は使えないと言ってはいたが、
　強力な防御魔法＜カウンター＞を持っているエルフ達を守る役割を担っていたのであれば、
　少しは期待できるかもしれないと思った。
　もっとも魔法が使えないのであれば平民の衛兵程度なのであろうとあまり期待はしていなかった。

「そ、そう、思っていたよりは色々できそうな使い魔ね。」
「それほどでもない。召喚される前に剣を落としてしまって武器がない。この盾だけでも守れなくも無いができれば剣の一つも持っておきたいのだが」
「ここは魔法学院だからそんなものは無いわね。ああ、それからアンタは私の使い魔なんだから雑用もしてもらうわよ。」
「雑用だと？」
「そうよ洗濯。洗濯。今は一応平民として振舞うんだから貴族であってあんたのご主人様である私に雑用任せるのは不自然でしょ？」
「あまりそういうのは得意ではないが仕方が無い」
　冒険者として外出が多かったブロントは家の事は人間達にとっては珍しく友好的であった獣人のモーグリ達にまかせっきりであった。
　外出中の野営の仕方や自分の身の回り事は自分の力でなんとかなったが、家の事となるとモーグリが勝手に済ませてしまうので自分で掃除や洗濯をやった事はあまりなかった。
「じゃあそこにあるものを明日になったら洗濯しておいて」
　とルイズは洋服が入った籠を指差した。
「わかったその依頼はやっておこう」
「全然わかってないわよ、報酬をだす依頼と違ってこれは使い魔としての義務なんだから。あんたがやって当然なの」
「ほう、まあ使い魔の役割は大体わかった。それ以外の時は自由に

していていいか？なるべく周りの事を調べておきたいんだが何かあればリんクパールで伝えてくれればいい」

「そうね、あんたどうもこの辺の常識がわかっていない所があるみたいだから私が恥をかかないためにも色々知っておくといいわね。でもこれは絶対に約束してよ、アンタが起こす恥は主人である私の恥になるんだからくれぐれもヴァリエール家の恥となる事だけはしないでよ」

「ああ誓おう。ナイトである俺がそんなへまはしない」

「ならいいわ――それにしても今日は何かとっても精神的に疲れたわ。もう寝るからちょっと着替えるの手伝いなさい」

「勝手に着替えればいいだろう？」

「あんたねえ、一応貴族の従者なんだから主人が着替える時は手伝うのもさっき言った雑用の一つなの」

いつ野獣や獣人にに襲われるか判らない野営中でも重い甲冑を素早く着替える術を持っていたブロントには着替えを他人に手伝わせる意味がわからなかったが「そういうものなんだろう」と思い黙った。

そしてルイズが命じるままに洋服棚からネグリジェと下着を出して、

（なんだ防具的価値も無いただのお祭り装備か）

とその手にもったネグリジェを鑑定してから服を脱ぎ始めたルイズを

ブロントはルイズをじっとみつめた。

「ほう意外と凄いものだな」

「！！」

「思っていたよりもいい」

上半身が裸になり始めたところで突然思ってもいなかった事を口走る美形の使い魔にルイズは顔を真っ赤にして慌てた

「ば、ばば馬鹿！あんた一体主人である私を見て何考えて「いい素材を使った実に魔道士向けだ、この服」大体私のむ・・・え？」
「ただの布装備としては思ったよりある程度の耐久性はあるようだな。魔法が唱えやすそうな工夫もしてあるようだ」
「・・・そ、そうなんだこの制服・・・も、もちろんそっちのほうの話よね。・・・もう」
そうしてルイズはネグリジェ姿になり「わたしの胸だってそのうち・・・」とかぶつぶつ呟きながらベッドに入り始める
「俺はどこで寝ればいい？」
「あんたの寝床はそこの床、毛布ぐらいは貸してあげ「ここを使っていいんだな」」
とルイズがブロントに渡す毛布の一枚に手を伸ばし目を離した隙に「パカン！」と言う音がしてさっき寝床に使って良いと指した床の位置には

―実に寝心地よさそうな木製のベッドがあった。

「植木鉢も置いていい「まて」」
「何だ？植物は嫌い「まてまて」」
「世話は俺が「ちょっと！待ちなさいよ！」」
ルイズは自分のベッドから飛び上がり、突如現れたもう一つベッドを指差した。
「何よそれ！何よ！？」
「マホガニーベッドだが？お前知らないのか？」
ブロントは手を顎に当て首を傾げる。
「そういう事聞いてるんじゃないわよ！どっからそれ持ってきたの！？」
「かばんにはいっていたものだが？」
「一体どこの馬鹿がベッドを運んだまま歩き回るっていうの！」
「これはたまたま人に貸していたものを返して貰ってそのまま冒険

にでていた事は稀によくある事」
「ないわよ！そもそもアンタのかばんにそんな大きなものが入るわけ無いでしょ！」
はビシッとブロントの腰に充ててある枕程度の大きさのかばんを指差した。
「少し入れ方を工夫すればいい。入れる順番を考えれば入る」
「そんな事で入るか！」
「何だやっぱり木製なのが嫌いか？何だったらブロンズベッドを―」
「そこ、さりげなく更に恐ろしい事言わない！確かに普通よりちょっと大きく見えるけれどそのかばんは一体どれだけはいるのよ！」
「かばんを大きくして貰った奴に『ゴウツバクリ』とかは言われたな。どれ位入っているのか中身だし―」
「それだけはやめなさい、いや、本当お願いだからやめて。何かこの部屋がとんでもない事になりそうだからやめて。」
「他にも植木鉢を一つだけ置いておきたいんだがそれぐらいはいいか？」
ルイズはハァーとため息を付いた
「・・・アンタねえ・・・その『でてしまった』ベッドと鉢植え一個だけなら特別に許すから本当にそれだけよ？言っておくけどここは私の部屋なんだから！ご主人様である私の部屋なの！」
「わかった」
とブロントはそう言ってかばんから取り出す所を見る間も無くいつの間にか手にしていた植木鉢を窓の側に置いて、そしてその鉢に土がついていた夢幻花を丁寧に植えた。
その白い薔薇のような花は窓から風が吹き込むたびに何かとても落ち着く香りが部屋中に漂わせた。
「良い香りね、その花どうしたの？」
「俺が召喚される前に採ったものなんだが鉢に変えて置かなければこれはすぐに枯れてしまう。」

「へぇーアンタ見た目によらず花の事詳しいんだ？」
「それほどでもない俺はどちかというと花は全然わからない方だ。ただこの夢幻花だけは気に入ってる。」
「そう、良い夢がみれそうな花の名前ね」
と答えた後ルイズはしばらく自分のベッドの上からしばらくその白い花を眺めていたのかだんだん睡魔が本格的になってきたのを感じて
「・・・明日・・・朝起こしてよね・・・」
と、うつらうつらとした様子でベッドに潜り込み、寝息をすぅすぅと立て始めた。
その様子をしばらく見守っていたブロントは部屋の明かりを吹き消し、自分もまたルイズに続いて自分のベッドで眠りに落ちた。

第5話　「落とし主は誰だｉｎトリスティン」

「生徒は使い魔を召喚した後の最初の授業は使い魔のお披露目もかねて連れて行くことになっているの」
ルイズはそうブロントに説明しながら教室へ入った。
教室と呼ばれたその部屋はブロントが知っているウィンダス連邦にある耳の院の魔法学校の教室よりはるかに広く、
許容人数がおよそ三倍はあった。
そして何よりブロントが気付いた点は、魔力の扱いに関してもっとも長い歴史を持つタルタル族の姿が、
食堂にいた時も、教室にいる時も見かけなかった。
魔法学院と言うぐらいであるから、タルタル族が主であると思っていたが、
この教室にヒューム族しかいないという事実を前にして、トリスティインはヒューム族による完全なる単一種族国家であるのだとブロントは分析した。
耳長であると言う点だけで国家問題に発展する恐れがあると騒ぐ位なのであれば、
バストゥーク共和国以上に、深刻な種族間の間に大きな亀裂が在るのだろうと、思案しながら不可視の己が耳を意識した。
「俺はどこにいればいいんだ?他の使い魔と共に立っていればいいのか?」
「普通の使い魔ならそうだけど、アンタは椅子に座れるんだから特別に私の隣に座らせてあげる。
といってもどうせいつも空いてるし。」
ルイズの言葉最後の部分だけ、少しだけふて腐れた感情が込められいた事にブロントは気づいて何かを言おうとしたが、
考え直して黙ってルイズの隣の席へと座った。
やがて残りの生徒達も使い魔を連れて教室に集まり、先ほどまで

広いと思った教室も生徒と使い魔でいっぱいになった。
最後にふくよかな風貌をした中年女性が席に座る生徒達の前に位置する教壇に立った。
「皆さん。春の使い魔召喚は皆大成功だったようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔を見るのがとても楽しみなのですよ」
「先生！まだ一人使い魔を召喚できてない生徒がいます！ルイズは誰も見ていなかったのをいいことにただの平民を雇って自分の使い魔と言い張っています！」
待っていたかの様に飛び出した言葉と同時に、ブロントは無数の視線が向けられている事に感じた。
その中の一部はブロント自身にも向けられたものだったが、一番ブロントの癇に障ったのがルイズに向けられた無数の気分の悪いじっと見つめる視線だった。
シュヴルーズと名乗った教師はゴホンと咳を払って
「いえいえ、召喚に多少時間はかかったようですが、最後まで立ち会ったミスタ・コルベールから少し変わった使い魔をミス・ヴァリエールはちゃんと召喚したと言う事を聞いています」
「”ゼロ”が魔法で成功するもんかよ！」
「きちんと召喚したもの！こいつが来ちゃっただけよ！」
と『コイツ』と席にだまって座っているブロントをルイズは指差した。
「見た目だけ立派に着飾らしても平民は平民だぞ”ゼロ”！」
「”ゼロ”などと学友を悪く言う事は許しませんよ」
「でも”ゼロ”は”ゼロ”以外に呼びようがありま・・・」
そう小太りの生徒の少年が言い切る前に、シュヴルーズは杖をひゅっと振りかざすと”ゼロ”と囃し立てていた声がぴたりと止まった。
耳障りな言葉を発していた少年の口には赤い土がびったりと張り付いていた。

「貴方はしばらくその格好で授業を受けなさい、では授業を始めますよ。」

そうして黒板に書かれた文字は読めなかったが、授業を聞いていたブロントはハルケギニアに関する幾つかの事学んだ。

ヴァナ・ディールとは違い「火」「土」「風」「水」の四属性で魔法の系統が分かれている事。

（氷雷光闇は使わないのか？）

メイジの等級が四つのクラスに分かれている事。

（突破した限界の壁の数みたいなものか）

『貴族』とは魔法が使える者であるという事。

（ウィンダス連邦以上に魔法が主なのか）

そして授業の内容は『錬金』に関する内容に移ったが、ブロントが知る『錬金術』とは少し違っていた。

ハルケギニアの『錬金』は、ブロントが知る職人による機材を使った調合で薬品を作る技術を指すものではなく、むしろブロントの様な冒険者が一般的に行ってきた『クリスタル合成』の技術そのものに意味は近かった。

活動先で機材を持ち運べない冒険者達は、クリスタルという八属性の力が込められた結晶を使用する事によって、

切削や接合と言った行為を手持ちの素材に掛け、錬金術を含む調理から鍛冶まで様々な技術を自分のイメージ力の強さによって行う事ができた。

ハルケギニアの『錬金』ではクリスタルは用いない様だが、その代わりメイジ自身の扱う魔法がクリスタルの代わりになっていた。

又、『クリスタル合成』とは違い、『錬金』では完成品となる物の素材は全て揃わずともメイジの力量によってはある程度材質が似ていれば違うものも作りだせるとのことだった。

「・・・の以上が『錬金』の概要です。では誰かに実演して貰いましょう・・・ではミス・ヴァリエール貴方にこの小石に簡単な『錬

金』でいいのでやって頂きましょう」
先ほどの一騒動の名誉挽回の機会をルイズに与えてみようとシュヴルーズは親切心でルイズを指名した。
「ミセス・シュヴルーズ、それはやめたほうが良いかと思います」
待ち受けている悲劇を予測しているキュルケはシュヴルーズの余計な『おせっかい』を思い留めるように言ったが、シュヴルーズは首を横に振る、
「どうしてですか？」
「危険です。」
「何が危険なのですか？」
「ミセス・シュヴルーズはルイズを教えるのは初めてですよね？」
「ええ、そのためにもミス・ヴァリエールの『錬金』も見ておきたいのです」
シュヴルーズは、キュルケがルイズに意地悪を言っているのだと思い、せっかくの警告を無視してルイズに『錬金』を行うように促した。
「私やりますっ！」
ルイズはすくっと立ち上がりと教壇へと向かった。
「ちょっと、ルイズやめて！」
キュルケの制止を振り切り教壇に向かうルイズを中心として、他の生徒達は距離をとり始めた。
教壇に近い者は机の下に隠れ始めた。
（この騒ぎが広範囲魔法の前兆なのは確定的に明らか！）
尋常じゃない周りの反応を見たブロントは、席から立ち上がり教室を離れる生徒達の間を縫うようにして自分も教壇へと向かった。
「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を強く心に思い浮かべるのです」
シュヴルーズの言葉を聞いたルイズは目を瞑り、呪文を唱え、目を見開き手に持った杖を振った瞬間
閃光に包まれる小石との間にガシャと鎧の音を立てたブロントの

姿が割り込んできた。
「ちょ・・ブロンうきゃぁ！？」
とルイズは両肩をガシッと掴まれブロントに抱えられると
ドグァァァアアアアアン！！！
小石が爆発した。

ブロントは爆風を背中で受ける様な形でルイズを両手抱え上げ、両足を開き踏ん張っていた。
ぱらぱら、と吹っ飛んだ教壇の破片が辺りに落ち、教室中からは生徒達の悲鳴や非難の声が上がった。
爆風で吹き飛ばされ、黒板にぶつかった哀れシュヴルーズは床に倒れ気絶していた。
「ちょっと、もういいからブロント離しなさいよ！」
両肩を掴まれ宙に浮くように抱え挙げられたルイズは足をバタバタさせながら言い、ブロントはパッと手を離した。
教室中が阿鼻叫喚の騒ぎとなった。
自分の両足で再び立ったルイズは、まったく気にしてないといった態度を装いながら、スカートに付いた粉塵を払った。
「ちょっと失敗したみたいね」
大した事では無かったかの様に言った。
「おい、『ちょっと』じゃないだろ”ゼロ”のルイズ！」
「やっぱり魔法成功率”ゼロ”じゃないか！その使い魔もどうせ自分の親に頼んでつれて来たんだろ」
ルイズは飛び交う愚痴をものともしない毅然とした態度で、自分の席に戻り座った。
一方、ブロントは飛び散った教壇の跡を見て、自分の背中を手で触り確認した。
ブロントの爆風を受けた背中は熱を帯びてなかった。だが爆風の衝撃は鎧をすり抜け直接ブロントの体に響いていた。

（火属性じゃにいのか？光や闇でもないようだが・・・それとも無属性か？）

しかしあまりにも瞬間的な事であったので、ブロントはそれ以上の考察をするための検証数が足りなかった。

それよりもまずは主人のルイズの事が気になった。ルイズは平気な顔をしていたが杖を持つ手が小さく震えていた事をブロントは見逃さなかった。

教師が気絶した事で生徒達は自主的に授業に終わらせ、早めの休み時間へと入った。

ただルイズ一人残して。

惨状を作った原因として、ルイズは罰として散らかった教室を一人で片付ける事となった。

黙々と教室を掃除していた使い魔とその主人だったが、沈黙に耐え切れなかったルイズの方から口を開いた。

「どうしてわたしが”ゼロ”呼ばれるかわかったでしょ？アンタもどうせ私の事を無能だと思っているんでしょ？わたしはお姉さま達と違って・・・」

とルイズの目には涙が浮かび始めた。ブロントは箒を動かしていた手を止め、鎧をガチャと鳴らした。

「――お前はそれでいいのか？」

「え？何よいきなり」

「持っていないものばかりを見てお前の手元にあるものを見てもいない。お前はそれでいいのか？」

「だって私は貴族なのよ！魔法が使えない貴族なんていないわ！私は何もできない”ゼロ”の無能なのよ！」

「ほう俺にはよくわからなかったんだがさっき起きたのはなんだ？」

「『錬金』を失敗して爆発したのよ！それだけじゃないわ他の魔法をやろうとしてもどれもこれも爆発しちゃうのよ！」

「それは”ゼロ”と言わないんだが」

「え？どういう事よ？」
　ブロントは掃除して集めた破片の中から、教室の一部か何かであると思われる石の破片を手の平に載せた。
「俺が今から『錬金』をしてやろう」
「え？」
　そうルイズがきょとんとブロントの手の中にある石片を見た。ブロントはその石を宙に投げ、
　左手に持っていた盾で石の欠片を叩くと石は空中で粉々になった。
「どうやら『錬金』は失敗したようだが・・・」
「当たり前じゃない、アンタその盾で叩いただけなんだから魔法ですらないわよ」
　少し期待があっただけに、何かとっても呆れたルイズ
「俺は持っていたこの『盾』を使って石をバラバラに砕いた。じゃあルイズは何を使って爆発させたさっきの石？」
「呪文を唱えて杖を・・・あっ」
「どうみても魔法なのは確定的に明らか」
「でも成功できなきゃやっぱり”ゼロ”じゃない」
「俺が持っている盾は本来ああいう使い方はしない守るために使うもの。ルイズも本来の使い方をしていないだけで俺の盾よりも凄い何かを確かに持っている。
だからルイズは”ゼロ”ではない。完全に論破して終了したので会話は終了」
　ルイズは少し考え込み、何かに気づいたかの様に答えた
「・・・うん、そうよね。確かに私の爆発は平民も他のメイジもできない私にしか出来ない事よ。簡単な魔法には向いてないだけで私向きの魔法で頑張ればいいんだわ」
　そういって杖を持つ自分の手を見つめながら、ルイズは両手をぐっぐっと握り締めた。
「そうだ、もう”ゼロ”じゃなくて”何か”のルイズだな」
「ちょっと・・・何よ、その”何か”って。回りくどい仕方をして

ご主人様私をやっぱり馬鹿にしてるんじゃない！”ゼロ”よりなんか響きが悪いじゃないの”何か”って！」
「それほどでもない」
「悪いわよ！もういいわ！あんたが今散らかした分は一人で片付けなさい！私は先に食堂行ってるから少し反省してなさい！」
そう吐き捨ててるルイズは大足でずんずんと教室を出てバタンと扉を閉めてから小さく呟いた、
「でも・・・さっきは守ってくれてありがとう・・・」
ブロントは何も言わずガチャと鎧を鳴らして箒を履いた。
教室の掃除を終わらせたブロントは取り合えず食堂へと向かっていた。
何時食事ができるかわからない冒険者として、空腹感に対しては強い耐性を持っていたが、ずっと何も食べないわけには行かなかった。
しかしパンとスープと言う最悪の食い合わせのために、使い魔は本来入ってはいけないという食堂に態々行く理由もなかった。
そう思案しながら歩いていたブロントは途中、声をかけられた。
「ブロントさん、こんなところでどうかしましたか？」
「ああ、ルイズが先に食堂で昼食をしているようなんだがその間何をしようかと考えていたんだが」
「今朝ミス・ヴァリエールに『使い魔の餌』として頼まれてパンとスープをお出ししたのですが、
片付ける時食されてなかった様なので、もしかしてと思いますがブロントさんはまさか朝から何も食べてないのでは？」
「そうだな」
「では是非こちらにいらしてください！」

と言ってシエスタはブロントを食堂の裏にある厨房へと連れて行った。

厨房の中はブロントが知るウィンダスの調理ギルドの様に様々な調理器具が並べられ、コック達が忙しそうに鍋やオーブンを前に奮闘していた。

「ここでちょっと待っててくださいね」

シエスタはブロントは厨房の一角の椅子に座らせ、厨房の奥から皿に盛られた湯気立つ具材がゴロゴロ入ったシチューを持ってきた。

「貴族の方々にお出しする料理の余りモノで作った私達の賄い用のシチューですけど、よかったら食べてください。」

「む？この匂い・・・もしかして魚介類か！？」

「ええ、海に慣れ親しんでいない貴族の方々も多いので何かと海の食材が余るんです。あの・・・もしかしてブロントさんは魚介類が苦手でした？」

ブロントはニコッと微笑みガチャと鎧の肩当を鳴らし、スプーンを手に持ち立てると

「俺は魚介類が大好物なんだが」

そう言いブロントは一口シチューを口に運んだ。

「この感じ・・・甲殻類がふんだんに使われているな。食べた者の生命力を上げ、更に体を頑丈にしてくれるとてもうまいシチューだ」

「ふふ、ブロントさんってとても面白い表現をするんですね。お口に合うようでよかったです」

最初にした味見の一口の後、ブロントは目にも止まらない物凄い早さでシチューを平らげた。

「ああ、まだお代わりありますから、ゆっくり食べていってくださ い・・・」

シエスタはおろおろとして言った。

「俺はどこでも食事できるように早飯が特技なんだがすまない。だがこのうまい一杯で三日は食べなくても平気な事になった。俺の体

力はしばらくおさまる事を知らない」
「ちょっと大げさですよブロントさん、でもその賄いを作ったコック長が聞いたら喜ぶと思います。もしお腹が空いたらまたいつでもきてくださいな。私達が食べるもので良かったらお出ししますから」
「とてもありがたい。俺が何か出来る事はないか？」
「そうですね、私これからデザート運ぶのでそれを手伝ってくださいな」
シエスタは微笑んで言った。

ブロントは右手にデザートのケーキを沢山載せた大きなトレイを持ち、シエスタが一つずつ配った。
食堂で昼食をとっていたルイズは使い魔が中々こないのでどうしたのか気になり始めていた頃、その使い魔がいつの間にか目立つ白い鎧姿で給仕の真似事をしていた。
ルイズは口に含んでいたワインを噴出しそうになったが、それを堪え、飲み込んだ後ブロントの所へつかつかと歩み寄り、
「ちょっと返してもらうわよ」とシエスタに一言残して食堂の端までブロントの腕を引っ張った。
「ブロント！あんた一体何やってるのよ！掃除から中々やってこないと思ったら、私の使い魔が何でケーキを給仕しているわけ？」
「あのメイドに世話になったから少しの礼にでもと手伝っているだけなんだが？」
「まったく、今回はいいけどくれぐれも私の恥となる様な勝手な事だけはしないで―」
そう説教し始めたルイズを中断するように、騒がしい声が食堂中に響いた。
ざわめきの中心では一人の貴族が二人の女性から頬を引っぱたかれていた。
そして頬を腫らした気障な格好をした貴族は近くにいたシエスタ

に指を指した。
「君のおかげで二人のレディの名誉が傷ついた、どうしてくれるんだね！？」
気障ったらしい風貌の貴族が頭を垂れるシエスタの前で凄んでいた。
「あ、あ、あの。申し訳ありません！」
只管に震え、謝る事しか出来ないシエスタ。
「いいかい？僕は香水の壜を渡された時、知らない振りをしたじゃないか。貴族に奉仕する平民なら話に合わせる位の機転があってもよかろう？」
「申し訳ありません！申し訳ありません！」
「いいや、貴族として僕は平民の君に一つ罰を与えないといけない―」
「おいィ？」
ブロントはガチャと鎧を鳴らしながら二人の合間に割り込んだ。
「何だね！君は！？僕はこの教養が行き届いてないメイドに罰を与えなければ―」
「何か粘着がいつまで立っても鬼の首みたいに粘着してるが時代は進んでるここで一歩引くのが大人の醍醐味」
「いや、今のうちに躾けて置かないと平民どもはすぐに付け上がるからな、それより・・・ああ・・・君は・・・”ゼロ”のルイズが連れてきた平民だったな。
まったく主人が”ゼロ”なら使い魔の程度もたかが知れているな」
ブロントは体を大きく揺すり、鎧をガチャン！と大きく鳴らした。
「お前勝手に”ゼロ”と呼ばれる奴の気持ち考えたことありますか？マジでぶん殴りたくなるほどむかつくんで止めてもらえませんかねえ・・？」
先ほどまで騒動の中心となっていた貴族とメイドに対する注目の目がいつの間にか貴族と使い魔へと移り変わっていた。
「まったくこのギーシュ・ド・グラモンに敵意を見せる野蛮人がい

るとは、ルイズはどうしようもない平民を連れているようだ」
「キッシュとグラタン？そもそもその安易な名前に寒気すら感じる始末」
「貴様！よくも我が名誉あるグラモン家の名を侮辱したな！よかろう、この平民に少し礼儀を教えてやろう、決闘だ！」
周りで傍観していた貴族の生徒達が『おお、決闘だ！』『ギーシュが平民と決闘するぞ！』とどよめいた。
「勝てるとでも思った浅はかさは愚かしい俺はなんでもいいんだがそれはタイマンか？」
ギーシュを顔を歪めてブロントを睨む
「何だタイマンとは？」
「タイマンは真剣な喧嘩の意味だ」
「いいだろう！だがここではやらない。平民の血で貴族の食卓を汚すわけにいかないからな。ヴェストリ広場で待ってる！」
ギーシュはくるりと体を翻すと、ギーシュの友人達は「いい見ものができた」と言う顔でギーシュの後を追った。
シエスタはブロントの後ろでぶるぶると震えていた。
「あ、あなた、殺されちゃう・・・貴族を本気で怒らせたら・・・」
シエスタは、だーっと走って逃げてしまった。

「ブロント！あんたまったく何しでかしているのよ！さっき勝手な事をしないでって。何勝手に決闘の約束なんてしてるのよ！」
「何かルイズが”ゼロ”とか言ってる奴はバカとしか思えないであわれになる」
ルイズはため息をついて肩を竦めた。
「あんたがどれだけ強いか知らないけど魔法も使えないのにメイジ相手に無事ですむわけ無いでしょ。いいから謝っちゃいなさいよ」
「断るそれこそルイズの名に恥が付く事になるのは確定的に明らか」
「こんな事で意地張ってる場合じゃないの！あんた怪我するわ。最悪怪我だけじゃすまないわ魔法も使えないあんたじゃメイジには絶

対勝てないの！」
　ブロントは左手を挙げ盾をルイズに見せた。
「ルイズ。俺は教室でお前の『爆発』は小石を砕く程度の事しかできなかった俺よりも凄いと論破したのは覚えているな？」
「え？ええ、覚えているわ、ついさっきのことだもん。」
「つまりあいつの魔法が実は砕けた小石程度だとこの盾で簡単に叩き落として論破可能」
「へ？」
　ブロントはテーブルに残っていたギーシュの連れと思われる一人に話しかけた
「ヴぇソつリ広場はどこだ？」
「こっちだ。平民」
「・・・ああもう！ほんとに勝手な事ばかりする使い魔なんだから！」
　少し遅れてルイズはブロントを追いかけた。

第6話　「守るべき何か」

所変わってここは魔法学院本塔の最上階に位置する学院長室
コルベールは連日ルイズが召喚した使い魔の左手に現れたルーンの事が気になって学院図書館で調べてものをしていた。
そこで発見したものを学院長のオールド・オスマンへ報告するために、
コルベールは先ほどまで調べていた書物『始祖ブリミルの使い魔たち』を手に、泡を飛ばしながらオスマン氏に説明していた。
「ふむ、それでその今年新しく召喚された使い魔のルーンが始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』のものであると、というわけじゃね？」
そういってオスマンは白いヒゲと髪を揺らして、コルベールに渡されたブロントの手に現れたルーン文字の写し書きをじっと見つめていた。
「そうです！あの青年の左手に刻まれたルーンは伝説の使い魔『ガンダールヴ』に刻まれていたモノとまったく同じであります！」
「で、君の結論は？」
「あの青年は、『ガンダールヴ』です！」
オスマンはコルベールによって持ち込まれた『始祖ブリミルの使い魔たち』の1ページのルーン文字と写し書きのルーン文字を見比べていた。
「ふむ……確かにルーンが同じじゃ、ルーンが同じと言うことは、ただの平民だったその青年は、『ガンダールヴ』にでもなったと言うのかね？それだけで、そう決め付けるのは早計かもしれん」
「いえ……『ただの平民だった』、は少し正確ではありません。」
少しばつは悪そうにするコルベール。
「どういうことじゃ？」
「この事が学院中に知られるのは学院としても何かと問題になると

思いまして隠してましたが・・・・・・」
「なんじゃ、もったいぶらずに言いたまえミスタ・コルベール」
辺りを見回し警戒し、コルベールは小さな声でオスマン氏に説明した。
「実はエルフなんです、彼」
「なんと!?『ガンダールヴ』のルーンの上に実はエルフじゃと?」
「ええ、確か大昔にあった『ガンダールヴ』の再来騒ぎではその者がエルフだったとかとも伝え聞いています」
「ふむ、５００年程前のことじゃな。ただの偶然が重なりあっただけ、と言うわけでもなさそうじゃの。どうしたものかな」
オスマン氏は手で自分のヒゲをいじりながら考え込んだ。
その時ドアがノックされた
「誰じゃ?」
扉の向こうから女性の声が聞こえてきた
「私です、秘書のロングビルです。」
「なんじゃ?」
ロングビルと名乗った理知的で顔立ち凛々しい女性は『失礼します』といって学院長室に入室した。
「ヴェストリの広場で、決闘を始めた生徒がいるようです。大騒ぎになり始めています。止めに入った教師がいましたが、生徒達に邪魔されて止められないようです」
「まったく、暇をもてあました貴族ほど性質の悪い生き物はおらんわい。で、誰がそんな事を始めておるのかね?」
「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」
「あのグラモンとこのバカ息子か。オヤジも色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ、おおかた女の子の取り合いじゃろう。相手は誰じゃ?」
「……それがメイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の青年のようです」
オスマン氏とコルベールは顔を見合わせた。

「教師達は、決闘騒ぎで怪我人が出るのを防ぐために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」
　オスマン氏はしばらく考え、何か名案を思いついたのか目を鷹の様に光らせた
「アホか。退屈な学院生活で生徒達も刺激が欲しいんじゃろう、そんな事で一々秘宝を使ってどうするんじゃ。念のために医務室を用意しておくだけでいいわい」
「わかりました。では担当のメイジに伝えておきます」
　そう言って部屋をでたミス・ロングビルの足音が遠ざかると、コルベールはつばを飲み込んで、オスマン氏を促した。
「オールド・オスマン」
「うむ、二つの要素が揃っただけではまだ偶然と言えるが、これで三つ目があるか確認できるの」
　オスマン氏は壁にかかった大きな鏡に杖を振り、そこにヴェストリ広場の様子を映し出した。

　ヴェストリ広場は日々の平穏とした学院生活で退屈していて刺激を求めて決闘の噂を聞きつけた生徒達で溢れていた。
　その人ごみで出来た輪の中心にギーシュは薔薇の造花を同じく輪の中にいたブロントに向けた。
「もうきたか、思ったより早かったな。平民の癖に逃げずに来た事だけは少し認めてやろう。もっとも貴族の名を愚弄した事は許すつもりは無いがね」
　そうギーシュが高らかと言うと周りも合わせて声を上げた。
「その生意気な平民の鼻へし折ってやれギーシュ！」
「腕の一本や二本折って自分のいる立場わからせてやれ！」
「いっそ殺して”ゼロ”のルイズが再召喚で魔法使えるかどうか見てやろうぜ！」
　ブロントに向けられた様々な嘲笑の中に”ゼロ”と持て囃す言葉

が幾つか入ってることを輪の外から聞いていたルイズは唇を噛み締めていた。

一方ブロントは自分の空の右手の感触を確認していた。

ブロントは多少の徒手空拳の格闘技術も鍛えた事があったがかつてヴァナ・ディールで共に冒険したことがある、己の肉体を鋼とし戦う仲間のモンクの格闘技術と比べれば半分程度の格闘技術であった。

更に両腕と足を素早く繰り出すのが本領である格闘では、重量のある板金鎧や腕の動きを制限する盾は最良の装備とは言えなかった。

だが、ブロントがもっとも得意とする剣どころか他の武器も持ち合わせていないのであれば、現時点のブロントは消去法で自分の拳を武器として選ばざるえなかった。

もっとも、ギーシュの様なひ弱そうな気障男相手に遅れを取るつもりもブロントには無かった。

「それでは始めるか、使い魔君。剣の一本も持たずその飾りの盾だけでメイジを相手にしている事を後悔していてももう遅いがね！」

ギーシュは手に持った薔薇を振りかざすとそこから一枚の花びらが宙に舞い、それが広場の地に付いた瞬間――

甲冑を着た女戦士の形をした人形になった。

「おいィ？タイマンだと言っていたがそれくらいも出来ない卑怯者はマジでかなぐり捨てンぞ？」

「言い忘れたな、僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。そして僕はメイジだ。だから魔法で戦う。従って僕の魔法によって作り出された青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

ブロントは盾を前の掲げ、拳を握って右手を腰にためた時、同時にギーシュのワルキューレがブロントに向かって突進した。

ワルキューレが右の拳を振りかぶると同時にブロントは左の盾でワルキューレの拳を受け止めると金属同士がぶつかる大きな音が広場に響いた。

ぶつかった衝撃で仰け反り下がるワルキューレをブロントは目で追った。
（なんだ練習相手にもならないか）
先ほどの衝突でそう感じたブロントは半人前の拳でもこのワルキューレに通用すると判断し、カカッっとワルキューレとの距離を詰める様にして駆けた。
ギーシュが薔薇を薙ぎ払うとワルキューレは再度拳を振り上げた。
その拳が突き出る前にブロントはワルキューレの動きを止める牽制として左手の盾でワルキューレを強打した。
盾を振り抜くほんの一瞬、ブロントは盾を持った手の篭手から光が漏れ出すのを見た。

「ああ！？僕のワルキューレが！？」
ギーシュはワルキューレに再度殴らせかけた時、ブロントが神速とも言える速さで盾を振りぬいていた。
そして金属が破裂する音と共にワルキューレの上半身が丸ごとバラバラに砕け、吹っ飛んだ。
飛び散った青銅の欠片が傍観していた生徒達に降りかかった
「破片が飛んで危ないだろ！ちゃんと真面目に生成しろ！」
「ギーシュ！そんな平民に手加減なんてしてやらなくてもいいぞ！付け上がるだけだ！」
事に気が付いていない観衆は不甲斐ない姿を現したギーシュをからかった。楽観視している周りと違いギーシュはかなり青ざめていた。
下半身だけ武器を持たせなかったとは言え、ギーシュのワルキューレは『青銅』の名の通り、それなりな頑強さを与えられ作られていた。
ラインクラス以上のメイジの魔法ならいざ知らず、平民程度相手にそう無様にワルキューレは破壊されないのである。
（そうか！あの綺麗に飾られた盾はマジック・アイテムか！だから

武器も持っていないのか！ならば盾を封じれば……）

ギーシュは冷たく微笑み再度薔薇を振るうと今度は一度にそれぞれ武器をもった六体のワルキューレを生成した。

「まずは、誉めよう。ここまでメイジに楯突く平民がいることに、素直に感謝しよう。だから僕も本気で行かせて貰う！」

すると前二体のワルキューレがブロントに向かい同時に突進した。

「そういうお前はかかってこないのかよ―」

ブロントの言葉を無視するように、続けざま一体のワルキューレが槍を持って距離を取りながら、ブロントの盾を誘うように左側をなぎ払った。

ブロントがそれに反応して盾で薙ぎを受け止めるのを確認したと同時にもう一体がメイスでブロントの右側から襲い掛かった。

ガシィン！

振りかぶられたメイスがブロントの肩に添える所で止まり、ワルキューレの頭部にはブロントの右手が突き刺さっていた。

「―見ろ、見事なカウンターで返した」

そう言うと同時にメイスを持った一体のワルキューレは２００サント程浮き上がり、人の形をした只の青銅となって地面にぐしゃと音を立てて衝突した。

ギーシュは言葉も無く呆然としていたが、同時にブロントも内心驚いていた。

盾を振るった時からブロントの体は羽の様に軽く感じ、それに拳を握るその右手は幾戦と格闘をし続けた者の技術が染み付いた様に感じ取られた。

体が自然とワルキューレの攻撃に合わせカウンターを放っていた。

そしてヴァナ・ディールで見てきたモンクの仲間の技を自分自身が繰り出す様を容易にイメージできた。

「普段ではナイトだが今ではモンクタイプ。俺普段で１００とか普

通に吹き飛ばすし」
　周りの生徒達や騒ぎに駆けつけてきた平民の使用人達が騒ぎ出した
「おい！あの平民、素手でギーシュのゴーレムをぶっ壊したぞ！？」
「さっきの一体目はギーシュが手加減していたんじゃなかったのか？」
「凄いぞ！アイツ貴族の魔法と対等に渡り歩いている！」
　そこへブロントが一喝入れた。
「うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り」
　その迫力に観衆が一瞬にして黙った。
　その間我を取り戻したギーシュは必死が鬼になって叫んだ。
「ワルキューレ！」
　薔薇を振るうとギーシュを守る陣形を取り待機していた内一体を残して、三体を前に加わて合わせて四体のワルキューレでブロントに攻撃を加えた。
　一斉に迫り来るワルキューレに対しブロントは守りを固め、一切のスキを作らなかった。盾で攻撃をいなし、右手で剣撃を払った。そして避けきれぬ攻撃は鎧の強固な部分で受けとめ耐えた。
　形振りを構わなくなったギーシュはブロントに手を出させてはいけないとワルキューレに一定の距離を保ちつつブロントを囲みワルキューレに攻撃を続けさせた。
「平民の癖によくも貴族に対し歯向かったな！こうしてしまえば手も出せないだろう！」
「見苦しいし何も進展性がないのでおれは怒りが溜まってきてる」
「ふん、攻撃受けながらそんな減らず口がまだ叩けるとは、この狂犬はまだ教育が足りないと見て僕も用心してこのまま続けさせてもらうよ！」
　長得物を持ったワルキューレをブロントの前面に配置して、ブロントの両手を抑える様に攻撃をしながら、
　剣やメイスを持ったワルキューレでブロントの背後から牽制していた。

ようやく人ごみを掻き分けてこれたルイズは震え泣きそうな声になってブロントに叫んだ。
「ブロントもういいわアンタはもう良くやったから！私の名前なんてもういいから大怪我する前に早く謝って！これ以上絶望的な戦いは続けないで！」
「それほどでもない」
ブロントは一瞬ルイズに向かい微笑みかけて鎧をカチャと軽く鳴らしてまたワルキューレの攻撃を受け続けた。
「そうは粋がっても防御に専念するしかないな！凄い一撃は持っているみたいだが攻撃でそれを押さえ込んでしまえばなんて事は無い！さて、一体いつまで持つかな？ハハハ！」
ギーシュが高らかと笑った。そしてその言葉に答えるかの様にブロントは言った
「攻撃を最大の防御と言う言葉はあまりに有名」
その瞬間、ブロントは体勢を低く取り、右手を引き込み、体を捻らせた。そしてブロントの頭の中ではモンクの技の一つの姿が鮮明に映し出された。

「スピんアタッコォ！」

叫ぶと同時にブロントは捻ったゴムがとき離れた如く、胴を回転させながら握り締めた拳で地面を抉り、右手でアッパーカットを突き上げて『スピンアタック』を繰り出した。
すると、ブロントを中心に土砂と共に四体のワルキューレが同時に空に舞い上がり、そのままワルキューレ達はバラバラと降り落ち、地に突き刺さった。
自分のゴーレムがただの鉄くずとなって崩れるのを見て、ギーシュは声にならないうめきをあげた。
そしてブロントがゆっくりとガチャ、ガチャ、と鎧を鳴らして歩み寄った。

「お前メガトンパンチでボコるわ・・」
「ひっ！」
咄嗟にギーシュは最後の一体のワルキューレの影に隠れた。
「へイ気障野郎！いつまでママのスカートに隠れるんだい？」
ブロントがそう挑発するとガコン！という音と共に最後のワルキューレもブロントの盾の強打によって遠くに吹き飛ばされた。
ギーシュは腰が抜けペタンと地面に座り込んだ。
「わ、わかった。ま、まいった…」
「地位と権力にしがみついた結果がこれ一足早く言うべきだったな？お前調子ぶっこき過ぎてた結果だよ？」
ブロントはギーシュの襟首を左手で持ち上げて無理やり立たせた。
「俺は今からシエスタを脅した分、ルイズを”ゼロ”と呼んだ分、そして俺個人的な分で合計三発入れるんだが」
そういって右手をギリリッと握り締めてみせた。
「そ、そんな！」
「仏の顔を三度までという名セリフを知らないのかよ」
『おい、ギーシュが負けたぞ！』とか、『あの平民、やるじゃないか…っておい誰か止めろ！』とか、
『俺に言うな！あの使い魔の相手はしたくない！』とか、見物していた連中から悲鳴の様な歓声が届いた。

その先何が起きたかはギーシュは良く覚えてはおらず、気が付いた時にはそのまま数日間学院の医務室で栄養食を食べるハメになっていた。
ただギーシュの心にしっかり刻まれたのはブロントの恐ろしさと『ホトゥケ』と言うとても顔面が頑丈な存在がこの世にいるらしいとの事だった。

一方、オスマン氏とコルベールは『遠見の鏡』で決闘騒動の一部始終を見終えると、顔を見合わせた。
コルベールは震えながらオスマン氏の名前を呼んだ。
「オールド・オスマン」
「うむ」
「あのエルフ、魔法も使わず勝ってしまいましたが…」
「うむ」
「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』メイジですが、魔法も使わない相手に後れをとるとは思えません。そしてあの動き！素手で魔法のゴーレムを蹴散らすなんて見た事もない！まさに『ガンダールヴ』が現代に蘇ったんです！」
「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」
「そのとおりです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』。主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在だと伝え聞きます。そして５００年前の『再来』時はエルフの姿をしていたと言われる以外にその姿形に関する記述ありません」
「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……その強力な呪文ゆえに。知ってのとおり、詠唱時間中のメイジは無力じゃ。そんな無力な間、己の体を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ。その強さは……」
「千人もの軍隊を相手に一人で主人を守りきる程の力を持ち、あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかったとか！」
「で、ミスタ・コルベール」
「はい」
「そのエルフはなぜ先ほど先住魔法の一つも使わなかったんじゃろうか」
「はい、召喚した際に平民として振舞った方が学院で生活する上で面倒事が避けられると思い、そうする様に私が言って置いたからだと思います」
「そんな制約を自らにかけてもあれほど強いエルフなんて化け物を、

現代の『ガンダールヴ』にしたのは。誰なんじゃね？」
「ミス・ヴァリエールですが……」
「彼女は、優秀なメイジなのかね？」
「いえ、努力家ではありますが、実際にメイジとしては無能というか……」
「さて、その二つの要素が一緒なのは実に不自然じゃ」
「ですね」
「無能なメイジが召喚した使い魔が『武器』も『魔法』も無くメイジ相手に戦い抜いてみせたとてもとても強力なエルフの『ガンダールヴ』。まったく、謎じゃ。理由が見えん」
「どうしましょうか……王室に報告するのも些か問題が多すぎると思いますが」
「そうじゃの、王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい。そんなことすればいい戦道具を手に入れた、とまたぞろ戦でも引き起こすじゃろうて。それでなくともエルフを輩出したとして学院が異端審問を受ける事になるか、アカデミーの連中に珍しいエルフの実験材料として主人共々連れて行かれるじゃろう。」
「ははあ。学院長の深謀には恐れ入ります。」
「この件は私が預かる。使い魔がエルフであると言う事はくれぐれも他言は無用じゃ。」
「は、はい！かしこまりました」
オスマン氏は杖を握ると窓際へと向かった。遠い歴史の彼方へ、思いを馳せる。
「始祖ブリミルの伝説の使い魔『ガンダールヴ』か……。いったい、どのような姿をしておったのだろうなあ」
コルベールは夢見るように呟いた。
「始祖ブリミルが用いた『ガンダールヴ』は、あらゆる『武器』を使いこなし、敵と対峙したとありますから……」
「ふむ」

「とりあえず腕と手は八本ほどはあったんじゃないでしょうか？」
「なんじゃ？その無数の手で伝説の剣を集めていたとでも言うのかね？」
「いえ……なんでもありません……」
コルベールはばつが悪そうに頬を掻いた。

第7話　「グルメな人々」

◆　◆　◆　◆

――ルイズは夢を見ていた。
まどろみの中でもそう確信できたのはルイズが今まで訪れた事も無い何処かの港町で、
数多くのエルフの様に耳が尖った人々が行きかっていた。他にも亜人らしき小人や猫人、
オーク鬼の様な巨体で蒼白な者もチラホラと見かけた。
数少ないながらも通常の人間も何事も無い様に港の昼頃の生活を送っていた。
その雑踏の外れでルイズは搬入された貨物箱に寄りかかり、きらきらと光る海を眺めていた。

『――探したわ、お父様の遺言に書かれた家に行ってみれば、ここ数年人は住んでいないも抜けの空になっていたもの。』
ローブを着た人物が腰を屈みルイズの顔を覗き込んできた。
『・・・誰？』
（あれ？私何も言ってないのに？）
ルイズが答える前に勝手に自分の口が開いた。
『私は――――、――――の――――――、もう聞き込みで大体貴方が探し人だと宛ては付いているけど、貴方の名前は？』
『……――――――だよ。ただの――――――。』
肝心の名前の部分が波打つ音に消されよく聞き取れない。
『お父様の遺言に貴方と貴方のお母様の事を頼まれたのだけれども家の方には誰もいなかったわ、お母様は？』
『……二年前に病気で死んだよ……』
『そうだったの・・・・・・悪い事聞いちゃったわね。その時から

家には帰ってないの？あ、隣良いかしら？』

ルイズの頭が自然とうなずくと、隣にローブの人物が座り込んだ。

『うん、家にいても誰もいなくて寂しいからいつもここで海を眺めている。食べていくにも僕一人だけなら自分で何とかやっていけている。』

『まったくお父様も自分が病で倒れた時にもっと早く私に伝えてくれたらよかったのに……。――――侯爵家のプライドがあったのは理解できるけど自分の家族を省みないで家名なんてあったもんじゃないわ。早くにお母様が亡くなられて赴任先で恋はするなと言わないけど持つべき責任はちゃんと持って貰わないとその侯爵家当主の跡を引き継ぐ私が困るわ・・・・・ああ、ごめんなさい、ちょっと愚痴っぽくなって』

『――――？父さんの事知っているの？』

『そう、――――侯爵は貴方のお父様であって、私のお父様でもあるの。お互いお母様は違うけど私達は姉弟って事になるわね』

『僕の姉さん？』

そう呼ばれたのが嬉しいのかローブの人物は頭のフードを外してにっこりと微笑んだ。現れた両の耳がエルフの様に尖っていたとは言え、その少しウェーブが掛かった赤髪で綺麗で凛々しく整った女性の顔を崩す程の笑みがルイズの一つ上の優しい姉の笑顔に何処か似ていた。

『フフン……♪　これからは貴方はもう一人じゃないわ。お姉さん、まとめて面倒みてあげる。』

◆　◆　◆　◆

目を覚ましたルイズはふと自分の二人の姉達や親の事を思い返していた。

そして夢の中の自分の境遇を思い出すとぞっとした。ルイズも今では親元離れて学院で生活しているが、夢の中の自分は天涯孤独の身となって、目的も無く、寂しさを紛らわせるために海を一人で眺めていた。

（帰る家も無かったら私は一人でここでの学院生活なんて耐えていられなかったわ。）

自分の姉達や両親がいなかったらと想像したらふと涙が零れそうになった。

でも、その夢の中で現れた『姉』と名乗る存在が、どんなに嬉しくて、救われたか。

（亜人の街でエルフと会話する夢を見るなんて随分不思議な夢ね・・・・使い魔のブロントと何か関係があるのかしら・・・・・）

ルイズは使い魔の姿を探すと彼は既に起きていて植木鉢の世話をしていた。

ギーシュとの決闘騒ぎから一晩経ったが、ブロントは特に問題も無く学院生活に馴染み始めていた。

貴族であるギーシュに大怪我（主に顔面に）を負わせたブロントだったが、正式な『決闘』であったという事とオスマン氏の計らいによってちょっとした注意を受けたぐらいで大したお咎めも無かった。

（そう言えばブロントにも家族はいるのかしら。特に戻りたいという様子は全然見せてないけれど）

ルイズの視線に気付いたのかブロントは植木鉢の世話をやめルイズに挨拶した。

「もう起きたのか、今日は早いなルイズ」

「おはようブロント。まだ朝早いから私の着替えはその花の世話が終わってからでいいわ」

「そうか」

ブロントは植木鉢に取り掛かった。

「・・・・・ねえ、ブロントって家族はいるの？」

ルイズはこの事を聞かずにいられなかった。
「・・・・・家族がまだいるのかわからない」
「え?どういう事よそれ?」
ブロントは植木鉢の世話を続けながら言った
「俺には二十年より前の記憶が無いんだが、気付いた時既に一人だった」
「記憶が・・・まったく無いの?」
ルイズの脳裏に夢の中の自分の姿が映し出される。
「俺が覚えている事は自分の名前と身に付けていたこの夢幻花だけになっていた。冒険者になったのも誰か俺を知っている奴に会えるかと思ってやっている」
「そ・・・そうなの・・・ところで二十年より前の記憶が無いって事は自分の歳も?」
「わからないな」
ルイズはエルフはかなり長命だとは知識として座学で学んだ事はあったが、その見た目からはブロントは自分より少し上程度の二十歳前だとばかり今まで思っていた。
家族の記憶が無いと言う自分の使い魔の話と先ほどの夢が重なり、ルイズはとても寂しい気持ちになった。
「帰りたいと思わないの?」
「特に戻る理由はないな。そもそも帰る場所がにい」
「そ……そう……ま、まあ私の使い魔なんだから帰す訳にいかないけど勝手に帰られても困るから聞いてみただけよ!」
帰る気はあまり無いと聞いてルイズは安心した反面、『帰る場所』がないと言わせてしまった自分を少し呪った。
「と、とにかく、折角早く起きたのだから私の着替え手伝って。使い魔とおしゃべりしてて授業遅刻したなんて悪い冗談にもならないわ」
ブロントは甲斐甲斐しくルイズの着替えを手伝った後、ルイズを朝食の食堂までへと付き添った。

ルイズはブロントが丸一日何も食べていないと思っており、一緒に食べていけばいいと勧めた。
だが昨日の今日で貴族にホトゥケも驚く三発を入れて医務室送りにした平民が貴族のみに許された食堂で食べるのは問題だろうから厨房で賄いでも貰っておくとブロントは返した。
「そ、そうね。使い魔にしてはちょっと頭が回るようで安心したわ」
「何かあったらリんクパッルで呼んでいい。俺はこれから洗濯をする事となった」
そう言って部屋に戻るブロントの背中を見つめながらルイズは呟いていた
「……でも一人切りの食事なんて寂しいじゃない……」
ブロントは鎧をカチャリと鳴らして、行った。

ブロントは洗濯籠を抱えて以前シエスタに教えてもらった水場まで来ていた。そこには先に洗濯を始めているシエスタの姿もあった。
「俺は洗濯物をするんだが、少し場所借りていいか？」
「あっ！ブロントさん」
シエスタはバチャっと水から手を引き抜き手ぬぐいで軽く拭くと深々と頭を下げた
「なんだ？」
「あの……、すいません。あのとき、逃げ出してしまって。け、怪我はありませんでしたか？」
「怪我なんてものはにい。そもそもあれは俺が勝手に始めた事なんだが……」
「私の事を庇ったのは判ってます……ほんとに、貴族は怖いんです。私みたいな、魔法を使えないただの平民にとっては……」
シエスタは目を輝かせて顔を上げた
「でも、もう、そんなに怖くないです！私、ブロントさんを見て感激したんです。『魔法』も『武器』も無く平民が貴族に勝てるんだ

って！ブロントさんってすごいですね」
「それほどでもない」
「その謙虚な所も憧れちゃいます」
ブロントは小さく微笑み鎧をカチャと鳴らすと自分の持っていた洗濯籠を指した。
「俺にはこの絹のパンツの洗濯が繊細すぎて破る始末、それができるシエスタは俺にとっては憧れる」
「ふふ、これもちょっとしたコツさえ覚えればブロントさんにも簡単にできますよ」
シエスタの教えを貰いながらブロントは洗濯を済ませた。
「そうそうブロントさん、朝食はまだですよね？もしよろしければちょっと厨房の方へきませんか？皆も改めてブロントさんに挨拶がしたいと言っていました」
「時間はあるからいってやってもいいぞ」

厨房へとやってきた二人
「おお、『我らの盾』が来たぞ！」
そう叫んでブロントを歓迎したのは学院コック長のマルトー親父である。四十過ぎの太ったおっさんのマルトーがブロントの背中をバンバンと叩きながらブロントのために用意していた一角の椅子に案内した。
マルトー親父は平民であるのだが、魔法学院のコック長ともなればそれなりに羽振りもよかった。そして魔法学院のコック長を務めているくせに貴族と魔法を毛嫌いしていた。
その間シエスタは温かいシチューが入った皿をだした。
「む！？」
シチューの香りがブロントの鼻をくすぐった。
（ダルメルシチューか？）
「今日のシチューは特別ですわ」
シエスタは嬉しそうに微笑んだ。ブロントは一口シチューを頬張

ると、眼光を光らせた。
「ほう、昨日のと違って肉を使ったシチューか。シナモンと岩塩がうまく使われて野性味溢れる味が引き出されているな。うまさに気がひゅんひゅん行くが力もみなぎってくると言う事もつけくわえないとダメだな」
そう感銘を漏らすと、包丁を持ったマルトー親父がやってきた。
「『我らの盾』は強いだけじゃなくて、『とてもとても違いの分かるヤツ』だっただなんて、俺が工夫したところをぴったり言い当てるとは嬉しいねえ」
「見事な食事は魔法よりも凄いと関心する。俺が思うにいい食事のあるなしで勝敗が決まる事が結構あるらしい。俺が昨日傷も付けられず良く戦えたのもあのうまいシチューのおかげ」
「お…おお……」
「あ、あの、マ…マルトーさん!?」
シエスタはふるふると震えるマルトーを見るとその両目からぶわぁと涙が流れだした事にビックリした
「うぉー、わ、われら”のだでよぉ……ぐず……お前って奴は一体どこまでいいやつなんだ!そこまで言ってもらえると料理人冥利に尽きるぞ!
そうさ、そりゃメイジだってその魔法で鍋や城を作ったり、とんでもない火の玉出したり、果てはドラゴンを操ったりするが、この絶妙な味はそこらのメイジにだってできない、言うなれば一つの魔法さ」
マルトー親父は手ぬぐいで涙でぐしゃぐしゃになった顔を拭いた。
「なあ、『我らの盾』!俺はお前の額に接吻するぞ!こら!いいな!」
マルトー親父はブロントの首根っこにぶっとい腕を巻きつけた
「おい、やめろ馬鹿」
ブロントは必死が鬼になって思いっきりマルトー親父の顔を引き離した。

「どうしてだ？」
「凍える寒気がする始末」
マルトー親父はブロントから体を離すと、両腕を広げて見せた。
「なあ、一体お前はどこで鍛えた？どこで鍛えたらメイジのゴーレムをその腕一本で吹っ飛ばせるんだ？まさに神の左手と右手よ！」
「それほどでもない」
「お前達！聞いたか！本当の達人と言うのは、こう謙虚なものだ！見習えよ！達人は謙虚であるべし！」
若いコック達が声を揃えて唱和する。
「「「達人は謙虚であるべし！」」」
「シエスタ！『我らの盾』にアルビオンの古いのを注いでやれ！」
「はいっ！」
二人の様子をニコニコと眺めていたシエスタが酒棚から一本のぶどう酒を取るとブロントのグラスになみなみと注いだ
「ほう、いいワインだな。」
ワインを堪能したブロントはワインが心地良く全身を巡り、心身ともにリフレシュしていた。そこにリンクパールからルイズの声が届いた。

「――ブロント、私は朝食が終わったからこのまま授業にでるけど、教室にこられても面倒事は避けたいから今日は自由にしててていいわ――」
「お？何か言ったかいブロントさん？」
「いや、なんでもない……ところでここではパイとかも作れるのか？」
「お、『我らの盾』は甘党でもあったか？好き嫌いが五月蝿い貴族連中の大事な大事なご子息様達がいる学院なんで、料理の材料の種類ならトリステイン一に揃ってるからパイぐらいはお手の物だぞ！」

「作って貰いたい物があるんだが」
「おう！『我らの盾』の頼みとあっちゃ何だって作るぞ！」
「材料は……」
ブロントはマルトー親父にヴァナ・ディールのあるレシピをハルケギニアで代用できる材料をマルトー親父に相談しながら伝えた
「ほほう、なかなか画期的なレシピに思えるな。さっそく、うちの若いやつに作らせよう、おい」
マルトー親父はレシピのの概要を書いたメモを一人のコックに渡した。
「パイは晩飯の後にでもあればいい」
「おう、わかったそれまで用意しておくから好きなときに取りに来てくれ」

その後も掃除等の雑用も終わらせたブロントは学院やその周辺を把握するためにぶらりと周る事でルイズが授業終えるまで過ごしていた。その内授業が終わったルイズに呼ばれ、ともに図書館まで付き添われた。
「何冊か借りて行くからブロント、あんたが持ちなさい」
「ほう、調べものか？」
ドスドスとブロント手の上にルイズは本をどんどん載せていく。
ブロントにはハルケギニアの文字が読めないので何の本かは判らなかったがどこぞの偉人の言行録や戦記ではないだろうとその装丁から判断していた。
「取り合えず私が今『持っている』得意な事は知識を集める事よ。それに今はうまく魔法を使え無いかもしれないけれど、調べていけば私の『爆発』を応用できるものがあるかもしれないもの。」
「そうだな、自分ができる自分の得意な事を伸ばせばいい。」
「昨日のあんたが起こした騒ぎを見て『魔法』は必ずしも万能じゃない事はわかったわ。使い方を間違えれば魔法も使えない素手のあんたに負けるぐらいなんだから。いざ私も魔法使いこなせる様にな

ったとき使い方ぐらいは完璧にしておきたいじゃない。」
ブロントは積み上がる本を持ち運びながらカチャと鎧を鳴らしてルイズの後をついて行った。

その日の夜、夕食も取らずにルイズは部屋に篭もり借り出した本を開き勉強に没頭していた。
(そう言えばそろそろ出来ている頃か)
ブロントはひたすら何かを書き留めるルイズを一瞥し、邪魔しないよう部屋を出た。

音を立てぬ様ルイズの部屋の扉を閉めると同時にとなりのキュルケの部屋の扉ががちゃりと開いた。
部屋から出てきたのはキュルケの使い魔のフレイムだった。
そのサラマンダーはブロントを警戒するように眺めた後、きゅるきゅると言いながらブロントの方へと近づいてきた。
ブロントもフレイムの事をじっと見つめた。
(サラむんダーの肉は調理するとなるとやはりレッドカレー。いや、キョフテにして攻撃と防御の両方があわさ……)
途端、その燃え盛る尻が凍えるほどの危険な何かを感じ取ったフレイムは物凄い勢いでキュルケの部屋に戻っていった。
「なんだ?」
サラマンダーの不自然な行動にブロントは不思議そうな顔をしてそのまま厨房へと向かっていた。

一方キュルケの部屋
「ようこ……あら、フレイムどうしたのよ、ちゃんとブロントさん連れてきたの?」
悩ましい下着姿でブロントを待ち構えていたキュルケは自分の使い魔が部屋の隅まで逃げ込みその巨体を小さく丸めてしまった。
「ちょ、ちょっとほんとにどうしちゃったのよフレイム!?ブロン

トさんを連れて来てって頼んだでしょ？」
フレイムはひたすらキュルケに向かって頭をぶんぶんと横に振った。
「まるで天敵にでも会ったみたいに震えちゃって……ふぅ今晩は諦めるしかないね。今度また頼むからちゃんとブロントさんを連れてくるのよ」
その言葉を聞いたフレイムはその晩自分の尾の炎を涙で濡らしたとか濡らさなかったとか。

程なくしてブロントは二つの紙の包みを持ってルイズの部屋に戻った。
相変わらずルイズは書物と睨めっこを続けているようだった。
「ルイズ」
「何よ、ちょっと邪魔しないで……って」
部屋中に香ばしい香りが漂った。そしてルイズの体の方もその匂いに釣られたのかグーと音を鳴らした。
「俺は食後にでもと思って作ってもらったんだが。まさか夕飯もとらない事になった。お前夢中になり過ぎてた結果だよ？」
そう言ってブロントは包みの一つをルイズに放り投げた。
「ちょっと、何投げつけているのよ！」
「頭を使う時は甘いものでいい」
ブロントは自分が持っていた包みを開け始めたので、ルイズもペンを置き受け取った包みを開いた。
中には小麦色に焼かれたパイ生地に包まれたものがあった。そしてルイズにとっては特別な意味を持つ甘い香りが広がった。
「これって……もしかしてクックベリー？」
「俺はここでの材料の名前は良く知らないんだが、ロランベリーパイのレシピで作って貰った。」
「馬鹿ね、パイを持ってくるのはいいけど、食器が無きゃ食べられ

ないじゃないのよ」
「これは野営中でも食べられるように作られているから手だけでいい」
ブロントは包み紙から覗かせたパイをかじる様子をルイズに見せた。
ルイズもブロントを真似てハルケギニア風ロランベリーパイをかじり、ぽろぽろとパイ生地のカスを数片落とした。
「あ……中はゼリーで固められているから中身がこぼれない様になっているのね」
甘酸っぱいクックベリーの果汁が少し厚手のパイ生地にしみ込んで良い具合にしっとりとしていた。
勉強詰めだったルイズの脳もその甘さに喜んでいた。それに食堂でたまに出される皿に盛られた物より心なしか酸っぱさが控えにも感じられた。
「俺がいた所ではメイジ達はこれを良く好んで食べていたんだが。魔法使うのにも甘い物がいい」
「へぇー……これなら部屋でも手軽においしく食べられて便利ね、あんた使い魔にしては結構気が利くのね」
「この辺の心配りが人気の秘訣。それにこれなら一人切りの寂しい食事にはならないしな」
「え？……ちょっと!？あ、あ、あんた聞こえていたの？」
ブロントは少しにやりとして自分が身に付けていたリンクパールを指差しトントンと叩いた。
「何よこの使い魔！勝手にご主人様の事を盗み聞きな、ななんてして！」
「聞かれたくない事があるのなら首から下げる位置を少し考えるんだな」
あれからルイズはブロントからリンクパールを予備のマントの紐にパールを取り付けて首から下げていた。
「気が利くって言ったのは撤回よ。ふん、パイがおいしいって言っ

たのも私がたまたまクックベリーパイが好きだったからよ、あんたと一緒に食べた事は関係ないんだから！」

「パイくずがこぼれているぞ」

「あんたが食器も持ってこないで持ちこんだパイでしょ。私は勉強で忙しいんだから、掃除して置きなさい！」

ブロントはニヤニヤしながら箒を持ち出して床に落ちた屑を掃き始めた。

「ででも、こ、これからも夕食を抜く事が多くなると思うから、部屋で取れる簡単な物を用意しておきなさいよ」

「わかった。色々考えておこう」

ブロントは鎧をカチャカチャと鳴らしながら箒を掃いた。

「あ、それと明日は虚無の曜日だから街に連れてってあげる。あんた剣が無いって言っていたでしょ。今月は思いがけない出費も無かったから、あんたにそれぐらいなら買ってあげるわ」

「ほう、それは助かる」

「使い魔として必要になる物だから買って上げるんだからね、それ以上の贅沢は癖になるから、勘違いしてこんなパイで何でも買ってもらえると思わないでね」

そうしてブロントは部屋を掃除し、ルイズは食べかけパイを片手に本に戻り、夜は過ぎていった。

第8話　「武器の仕入れ」

早朝、ルイズとブロントは学院の馬舎に来ていた。
「おいィ!?これに乗っていくのか?」
ブロントはヴァナ・ディールでもマリード象にも匹敵する『冥路の騎士』が騎乗する六本足の馬は見た事はあるが、自分達冒険者がもっぱら乗るのは二本足で走行する鳥のチョコボであった。
『冥路の騎士』のものより二回り程小さく、足も四本しかない眼前の亜種の姿を見てブロントは何となく敬うような、祈るようなポーズをとりたくなっていた。
「馬じゃなきゃ城下町まで付く頃には日が暮れてしまうわよ、まさかあんたナイト（騎士）って言うわりに馬に乗った事無いの?」
「二本の足で走る飛ばない鳥ならある」
「空も飛ばないのにわざわざ鳥に乗るの?エルフって結構変わってるのね」
ルイズが馬に乗る様を見ていたブロントは自分も試しに乗ってみたが、意外な事にチョコボよりは気性が然程荒い生き物ではないようだった。
試しに少し乗り回して見ると速度はチョコボ程は出ないとはいえ、四本足による安定感や乗り心地は馬の方が優れているようであった。
「ところでブロント、あんたはいいとして、『かばん』をつけたまま馬に乗ってるけど、よく馬が潰れないわね」
「む?」
「いいわ、忘れて頂戴。あんたの『かばん』がまた一つとんでもないモノってだけは理解したから。それよりさっさと出かけるわよ」

その頃、ルイズ達が馬に乗って学院を出るところを目撃していたキュルケは親友のタバサの部屋に飛び込んでいた。

「タバサ。今から出かけるわよ！早く支度をして頂戴！」
読んでいた本をキュルケに取り上げられたタバサは短くぼそっとした声で自分の都合を友人に述べた。
「虚無の曜日」
「わかってる。あなたにとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしは痛いほどよく知ってるわよ。でも、今はね、そんな事言ってられないの。恋なのよ！恋！」
タバサはキュルケの手から本を取り返そうとしたが、背の高いキュルケが高く本を掲げたので、タバサの手は届かない。
「そうね。あなたは説明しないと動かないのよね。ああもう！あたしね、ブロントさんに恋したの！でね？そのブロントさんがが今日、あのにっくいヴァリエールと出かけたの！あたしはそれを追って、二人がどこに行くのか突き止めなくちゃいけないの！わかった？」
タバサは首を振った。それでどうして自分に頼むのか、理由がわからなかった。
「出かけたのよ！馬に乗って！あなたの使い魔じゃないと追いつかないのよ！助けて！」
キュルケはタバサに泣きついた。
タバサはやっと頷いた。自分の使い魔じゃないと追いつかない。なるほど、と思った。
「ありがとう！じゃ追いかけてくれるのね！」
タバサは再び頷いた。友人が自分にしかできない頼み事を持ち込んだのならば仕方の無い。
それにタバサ自身、先ほども浸っていた本の世界の勇者の姿とどこか似通っている使い魔のブロントに多少興味はあった。
タバサは口笛をピューと吹くと窓から飛び降り、キュルケもその跡を追った。
タバサの使い魔のシルフィードの背に二人が乗ると、シルフィードは空に飛び上がった。
「どっち？」

タバサは短くキュルケに尋ねた。
「あ、わかんない……。慌てていたから。」
タバサは別に文句つけるでなく、シルフィードに命じた。
「ぴかぴか、後追って」
シルフィードはきゅいと短く鳴いて了解の意を主人に伝えると、青い鱗を輝かせ、力強く翼を振り始めた。
高空に上り、馬に乗り草原を走る光輝いて見えるブロントを見つけることなど、シルフィードにとっては太陽を探すぐらいにたやすかった。
シルフィードが仕事を開始した事を認めると、タバサはキュルケの手から本を奪い取り、シルフィードの背びれを背もたれにしてページをめくり始めた。

トリステインの城下町を、ルイズとブロントは歩いていた。
ブロントは辺りを見回した。石造りの街はサンドリア王国の街並みにどこか似ていたが、
往来している人々を丸々バストゥーク共和国の人々に置き換えた様な感覚であった。
「結構賑やかだな」
「そりゃ、ここ大通りだもん」
声を張り上げる商人達や行き来する大勢の人の数はブロントが知っているヴァナ・ディールのどの街よりも賑わっていた。
「ブルドンネ街。トリステインで一番大きな通りよ。この先にトリステインの宮殿があるわ」
「宮殿に行くのか？」
「女王陛下に拝謁してどうするのよ？」
「任務の一つでも受けておこう」
ブロントがそう言ったらルイズは笑った。
道端には露天が溢れていて、ブロントが知らないモノが幾つも筵の上に並べられていた。

使えそうになるものは無いかとブロントは一つ一つ見つめていたらルイズにサーコートの端を引っ張られた。
「ほら、寄り道しない。スリが多いんだから！あんたに預けた財布……そういえば財布はどこに仕舞っているの？まさか」
「どこってそれはもちろん俺はかばんの中のベッドの下に挟んだんだが？」
「……そ、そう。……そこからスロうとするとどうなるかちょっと見たい感じもするわね」
ブロントの腰につけたゴブリン製のかばんに関して思考が麻痺し始めて来たルイズであった。
そうこうしている内にルイズはブロントを連れてゴミと悪臭が漂う路地裏に入って、四辻にでた。
「ビエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺なんだけど・・・・・・」
それから、ルイズは一枚の銅の看板を見つけ、嬉しそうに呟いた。
「あ、あった」
見るとブロントもその意味が何を表すかがわかる剣の形をした看板が下がっていた。
ルイズとブロントは石段を上がり、羽扉をあけ、店の中に入っていった。
店の親父は入って来たルイズが身に着けていた五芒星が描かれた紐タイ留めに気づく。
「これはこれは、貴族の若奥様。うちはまっとうな商売してまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これぽっちもありませんや」
「客よ」
ルイズは腕を組んで言った。
「貴族が剣を！こりゃおったまげた！」
「使うのは私じゃないわ。こいつよ」
ルイズは自分の後ろにいたブロントを指差した。

「これはこれは。なんとも頼もしそうな従者で、剣をお使いになるのは、この方で？」

主人は商売っ気たっぷりにお愛想を言った。それから、純白に輝く見栄えのいい鎧を着ているブロントをじろじろと眺めた。

ルイズは頷いた。一方ブロントは店の一角に置かれている樽を眺めていた。

「わたしは剣の事なんかわからないから。適当にこいつに合いそうなの持ってきて頂戴」

主人はいそいそと奥の倉庫に消えた。彼は聞こえないように、小声で呟いた。

「……こりゃ、鴨がネギをしょって鍋までもってやってきたわい。従者にあんな豪華な鎧に、金細工で出来た飾り盾を着けさせて、随分と見栄を張った羽振りのいい貴族様だ。せいぜい、高くふんだくるとしよう」

そして奥から煌びやかな細工が施されたナックルガードが施された細剣を倉庫から持ち出してきた。

「昨今は王宮の貴族の方々の間で下僕に剣を持たせるのがはやりでございましてね。この様な腰に下げても見た目が良い細いレイピアなんて良くお選びになるんでさあ」

「下僕に剣を持たせるのがはやってる？」

「へえ、なんでも、最近城下町を荒らす盗賊が出没しておりまして。『土くれ』のフーケと言ったかな？噂ではすでに何人かの貴族の家宝なりが盗まれたらしく、他の貴族の方々も恐れて、下僕らにも武器を持たせて歩く始末で」

その会話を傍目にブロントは細剣をじっと見つめて

「隔が短すぎて遠くまで届かないからダメだな」

の一言で細剣を付き返した。

「いやはやこれは失礼、旦那の様な立派な体躯してるお方ならもっと似合うものがありますのでちょっとお持ちしまさあ」

そして主人はまた奥の倉庫から今度は大剣を油布で拭きながらで

てきた。
　大剣は見事な装飾が鞘や柄や鍔に施されている。柄尻には玉のようなものまでついている。
「この剣なんて如何でございましょう？一般的に言えば両手で扱う大剣ですが、旦那みたいに立っ端がある方でしたら片手剣としてもいけるでしょう」
　ブロントはじっと大剣を見つめて鑑定してフゥとため息を吐いた。
「なんだこれは？お洒落装備か？」
「いやいや、実はこちらは高名なゲルマニアの錬金の大家とされるシュペー卿の作でして、特殊な魔法が施されて鉄だろうがなんだろうが一刀両断でございます。もちろんおやすかあ、ありませんが」
「少し持ってみてもいいか？」
「どうぞ」
　ブロントは片手で大剣を握って見せた。
「おお大した膂力ですな、やはり旦那にはそれぐらいの獲物が……」
　ルイズもその姿がブロントの着ている鎧と盾に凄く似合い、絵になっていると思った。
「なかなかいいわね。おいくら？」
「エキューで二千、新金貨で三千でございます」
「森の庭付きの屋敷が買えるじゃないの！」
「名剣は城に匹敵しますぜ。それが屋敷で済むのなら安いもんでさ」
　そこにブロントが口を挟んだ。
「折れる」
「「え？」」
「いや、折れるよこの剣」
　ブロントそのまま大剣をカウンターに置いた。ルイズと主人は呆気に取られてた。
「ところでそこの樽のモノも売り物なのか？」
　ブロントは先ほどから気になっていた剣がまとめて入れられた樽を指差した

「へえ、二百エキュー程度のナマクラばかりですがね」
ブロントは樽からガッチリ鞘に納められた一本の剣を引き抜いた、
「遠くから見ても、これだけがもうチカチカ輝いていたんだが」
「あ、旦那そいつはちょっと……」
主人が止めるのをよそにブロントはそのまま剣を鞘から解き放った。
「おい親父、てめ！俺をこの樽の中のナマクラと一緒にするない！」
ブロントに抜かれた刀身が細く、錆びた薄手の片刃のブロントの知る東方伝来の『刀』に良く似た長剣が鍔をカチカチと鳴らした。
「それって、インテリジェンスソード？」「ほう、レリックか」
ルイズとブロントが同時に声を出した。
「そうでさ、若奥様。そいつは意思を持つ魔剣、インテリジェンスソードでさ。一体どこの魔術師が始めた事やら…とにかくこいつはやたらと口が悪いんで閉口してまして……」
「へっ、よく言うぜ！てめの性格悪さよりはマシだ！そのちゃらちゃらした物でボッタくろうとしてたくせに」
「うるせえぞデル公！商売の邪魔するな！これ以上俺の商売の邪魔するのなら貴族に頼んで溶かしちまうからな！」
「おもしれ！やってみろ！どうせこの世にゃ…」
ブロントは剣を黙らせるように鞘に納めた。
「いくらだ？」
「へえ、大剣の相場は大体二百エキューですが、そいつを厄介払いできるってのなら・・・半額の百エキューで結構でさ」
「ちょっと、ブロント！そんなのにするの？もっと綺麗でうるさくないさっきのにしなさいよ」
「百エキュんはだせるのか？」
「そりゃあるけど、そんな錆びだらけのにしなくても・・・・・・」
ふとルイズはブロントの顔を見ると、
その剣が買えなければ今にも店の主人を殺してでも奪い取ってしまうのでは無いかと思える様な殺気がブロントの顔には込められて

いた。
　ここでたかが百エキューを出さなければルイズは己が人生を二、三年は後悔するハメになるのではないか、と心で感じた。
「わ、わかったわよ、それ位だすから財布だして」
　ブロントはかばんからルイズの財布を引っ張り出してルイズに渡した。
　ルイズは財布から百エキュー分の金貨を取り出すと、それをカウンターに乗せた。
「毎度！もしそいつがうるせえようだったら今みたいに鞘に仕舞えば大人しくなりやすから」
　二千エキューふんだくる事は出来なかったが、それでも厄介モノが金になって消えてくれたのでにんまりとする主人であった。

　ルイズとブロントは武器店から出ると、ブロントは剣を鞘から抜いた。
「てめ！話を途中で邪魔するんじゃねえ！…っておめ眩しい！俺は目はねえけどよ、ちょっと眩しい！」
「お前、何て言うんだ？」
「あ？俺か？デルフリンガーさまだ！」
「そうかデルフんガーか、俺はブロントだ」
「ちがわ！デ・ル・フ・リ・ン・ガ・ー　だ！ちゃんと覚えときやがれ！…ん？」
　剣はしばらくブロントを観察するように黙りこくった。
　そして先ほどと違い小さな声で喋った。
「おでれーた。それなりな剣士かと思ってたが。てめ、『使い手』か」
「それほどでもない」
「いや、俺にはわかる。てめ、これまたとんでもない剣の使い手だな。しかも、てめ、エルヴ…」
　ブロントはそのままガチンとデルフリンガーを鞘に納めた。

そしてルイズの事をつんつんと指で突付いた後、路地の影の方から覗いていた人物を指差した。
「何よブロント、ってキュルケ!?あんたここで何してるのよ!」
「やばっ!」
隠れてルイズ達を尾行をしていたキュルケとタバサであったが、その存在がバレてしまったと言うのであれば観念して物陰からでてきた。
「あらヴァリエール、『こんな所』で会うなんて奇遇ね」
「奇遇ねって、あんたが『こんな所』に来る用事なんて無いじゃない。どうせ私の後をつけて来たんでしょ」
「さあ?恋する乙女には色々事情があるのよ。それよりヴァリエール、あんたブロントさんに剣を買い与えて気引こうとしてるみたいだけど、そんな錆びた剣しか買えないだなんて、公爵家も大変なのね」
「なんで私が一々使い魔の気を引かないといけないわけよ?それにこいつがこの剣でいいと言ったのよ」
「はぁ、ルイズったらブロントさんの事何もわかってないのね。ブロントさんはあんたの財布の中身に気を使っていたに決まってるじゃない。ケチな主人を持つと使い魔は辛いわね」
「そんなの主人の私の勝手でしょ」
「そう、ならブロントさんにアプローチするのも私の勝手よね。ブロントさん、私がもっと貴方に相応しい立派な剣を買ってあげるわ。そこのケチなルイズと違ってゲルマニアの女は恋した殿方にはどこまでも尽くすわよ」
ブロントは左腰に下げた鞘に納まったデルフリンガーに手を当てた
「俺はこれがいいんだか」
「そうよ、ツェルプストーの者からは豆の一粒だって恵んでもらう必要はないんだから!」
「どこまでも謙虚で主人を立てるだなんてやっぱりブロントさんは素敵だわ、その魅力が判らないルイズの使い魔にして置くのはとて

も勿体ないわね」
「使い魔にまで手を出そうとするだなんて、あんたって男なら何でもいい色ボケじゃない！なあに？ゲルマニアで男漁り過ぎて相手にされなくなったから、トリステインまで留学してきたんでしょ？」
ルイズは冷たい笑みを浮かべてキュルケに指差して言った。
「…言ってくれるわね、ヴァリエール……」
キュルケの顔色が途端に変わった。
「あらあ？本当の事だったかしら？」
しばし緊張した沈黙の後、二人は同時に手を杖にかけた。
それまで本を片手にブロントの姿をまじまじと眺めていたタバサが、二人より早く自分の杖を振り、
キュルケとルイズの手から杖を風で吹き飛ばした。
「街中」
タバサは淡々と言った。
ここでキュルケの炎やルイズの『爆発』が起きれば学院内とは違って周りに大きな被害がでるとでも言いたげだった。
「何この子。さっきからいるけど」
ルイズは忌々しげに呟いた。
「あたしの友達よ」
「なんで、あんたの友達も『こんな所』にいるのよ」
「友達がいないヴァリエールには分からないかもしれないけれど、友達は友人の恋路を助けるものよ」
「ふん、馬鹿みたい。自分一人じゃ何もできない証拠じゃない」
「言ってなさい、続きは学院で決着つけましょうヴァリエール。じゃまたね、ブロントさん」
キュルケはそう言うと手をヒラヒラさせて本を読み続けるタバサを連れて帰っていった。
ルイズがふんふんと鼻息荒くしているところ、ブロントは押さえつけていた剣から手を離した。
「それでデルフん、お前何を言おうとした」

「デルフんじゃねー！まあ、とにかくよ。てめ、エルヴァーンだろ？」

ブロントは『エルフ』と言わず『エルヴァーン』と言った事が気になった。

「他にもエルヴァーンを知っているのか？」

「おう！知っているぞエルヴァーン！あれはいつだったかな……あれ？誰だっけな……あー、いや、もしかしてエルフっていったけ？……んー忘れたっ！」

ルイズはずっこけた。

「ちょっと、何？呆けてるんじゃないのこの剣は？」

「こいつが耳長だってのはわかるんだが、どっちがどっちか良く覚えてねえや、すまんなお嬢ちゃん、なんせ六千年も生きていると色々忘れる事もあらあ。ま、そのうち思い出すさ」

「ほんとこんなオンボロ剣でいいのブロント？お金ならあるんだからさっきの綺麗な方も買えたんだから」

「しゃべるレリック武器、もうここまででも十分にデルフんの勝ちは圧勝的に決まったのだが、さらに攻撃は続く次に見た目に注目するのだが、さっきの大剣はただのきらきらとした脆そうな形。あれで斬ってもすぐ折れる。しかしデルフんは片刃の部分が鋭くその部分でさらに敵に致命的な致命傷を与えられる。錆びで色も黒っぽいのでダークパワーが宿ってそうで強い」

「お？流石俺を選んだだけはあるな、よくわかってんじゃねーか！よし、決めた。お前なら俺の相棒としちゃ合格だ！ヨロシクな相棒！」

デルフリンガーは嬉しそうに鍔をカチカチと鳴らした。

「ああ、よろしくなデルフん」

「だからよ、俺はデルフリ……」

デルフリンガーはまたブロントに鞘に押し込められた。

「ルイズ」

「ん？何？」

「剣も備わり、これまでの圧倒的な防御力に加えて絶望的な破壊力も誇る破壊力を持つことになった。これからは完全なるナイトとして、ルイズお前の盾となってやろう」

たかが百エキューの剣で大げさな事を真顔で言われたルイズは少し照れくさかった。

「そ、そう。必要な物も揃ったんだから、使い魔の役目しっかり頼むわよ。ブロント、あんたは私の使い魔なんだから」

ブロントはガチャと鎧を鳴らした。

そうしてルイズはブロントに街を案内しながら、ぶらぶらと城下町で休日の残りを過ごした。

第9話　「輝けるサブリガ」

◆　◆　◆　◆

ルイズは潮の香りを感じていた。元々ルイズ本人は海とは縁が無い人生を送っていたが、この香りは何か懐かしい感じがした。

視界が鮮明になるとそこは以前ルイズが夢で見ていた港町の光景の中で何か大きな物を抱えながら駆け足で人ごみの間を駆け抜けていた。

そしてその港町の通りにある酒場の羽扉を抱えた荷物ごと押し開けて入った。

『頼まれたもの持ってきましたが』

以前の夢の時の様にルイズの口が勝手に開いていた。

『おう！坊主、ボスディン菜持って来てくれたか！早かったな！いやぁこれで助かったよ。今日は思ったより客が多くてな。夕方前に足りなくなって、うちの店の名物料理が作れなくなってしまうかと思って困ってたとこだったんだ』

顔から獅子の様に髭を生やしたオーク鬼程に巨大な亜人はワハハと笑いながら配達の駄賃を渡してくれた。

『それにしても坊主は立派だよな、まだ小さいってのに街を駆け回って自分の食い扶持は自分で稼いでるなんてよ』

『それほどでもありませんよ』

ルイズは何かとても聞き覚えがある言葉を発した様に思えた。

『坊主の頑張りは港の皆にもそこそこ知られているぜ。母ちゃんを早くに亡くしたってのに一人で頑張って生きてるだなんてよ』

『今は一人じゃないよ、姉さんもいるから』

『お、そうだったのか？そいつはよかったな！俺たちガルカは血が繋がる家族は無いが、その変わり絆で繋がった家族は沢山いる。絆

ってのはやっぱりあると嬉しいよな。お、そうだったそうだった、サラダには使えねえ余る部分で作った賄いだけどよ、味ではうちの名物料理には負けねえぜ！もって帰って食ってくれよ。姉ちゃんの分も入れておくから』

そういって大柄の亜人は酒場の厨房の奥から紙袋を持ち出して来てルイズのに手渡した。

『ありがとう』

『おう、また何かあったら頼むぜ坊主！姉ちゃんにもよろしくな！』

そうして手で袋を抱えながら港を駆け回り、一つの小さな家にはいった。

『ただいま』

『あら、おかえり――――。お仕事終わったの？』

赤いローブを着た以前の夢に登場した女性のエルフが出迎えてくれた。

『うん、おまけで昼ごはんも貰ってきた』

『ふふふ、出合った時はわたしに任せなさい、とは言ったけれど、その弟がしっかり者過ぎてお姉さんとしてはちょっと寂しいわ。生活する分ぐらいなら十分あるんだから』

『ううん、街の人の頼みをこなしていく仕事するのは僕は好きだから』

『わたしがあなたの年の頃はまだ屋敷でお母様に甘えていた時期だったというのに。――――が良ければここで一人で住まなくても私の所で一緒に暮らしていいんだから』

『ありがとう姉さん、でも僕はここの海が好きだし、それに……母さんの墓もあるし』

『そうね……わかったわ。でもこれだけは忘れないで、――――、あなたはもう一人じゃないんだからね。人間は一人だけだとはどんなに頑張っても背中は無防備になるわ、だから誰かその無防備の背中を預けられる人が必要になるわ』

『姉さんは大げさだな、今までもそうだし、僕一人で生きて行けるよ』

ローブの女性は両手をルイズの肩に乗せるとじっと見つめてきた。

『あなたは人に頼らず一人で何でもできちゃうからお姉さん逆に心配なのよ。背中を見てもらう人がいないまま大きくなったら何時かはそのまま自分の重さで背中から倒れこむ事になるわ。お姉さんのわたしがいるんだから必要な時は頼ってよ？いい？』

『わかったよ、姉さん』

『よし。わたしは明日には一度帰らないと行けないけれど、これ渡して置くから、何かあったら呼んでよ？』

そういってルイズは色は違えど、見覚えがある一粒のパールを手渡された。

『本当はもう少し居たいのだけれど、ごめんね。わたしの留守を守ってるダーリンに何時までもまかせっきりにする訳にも行かないから』

『しょうがないよ、姉さんは侯爵家の当主なんだから。それより姉さんの分も貰ってきたから昼ご飯にしようよ』

そういって紙袋から包みを取り出して、包みを開けると色とりどり海鮮物と野菜が凄く薄いパンの様な生地に挟まれた料理があった。

『フフン……♪お姉さんは知っているわ。これはこの国の名物料理のタコスでしょ？お姉さんは味にはちょっとうるさいんだから。海鮮物は私の所では中々手に入らないから、ここは良いよね、いつでも新鮮なカニや魚が食べられて』

『……姉さんってもしかしてしょっちゅう家に来るのはそれが目的なんじゃないの？』

『そんな事ないわ、――――に会いたいから来てるに決まってるじゃない。海鮮グルメはほんのついでよ。そうだ、今度お姉さんが来た時はここじゃ食べられない取っておきの王国風オムレツ作ってあげるわ』

目の前のエルフの女性がルイズににっこりと笑いかけ、『タコス』

を頬張ると次第に風景が真っ白に擦れていった。

◆　◆　◆　◆

ルイズは机に突っ伏した体勢で目が覚めた。
（あ、私また机で寝てしまったんだ）
城下町に出向き使い魔に剣を買い与えてから一週間近く経っていた。
あれからルイズは時々こうして学院図書館から借り出した書物を読み解くのに夢中になり、そのまま机で一晩過ごす事が間々あった。
肩の毛布に気づき、それを掛けたであろう使い魔の姿が部屋になかった。
「ブロント？」
ルイズは部屋をキョロキョロと見回した。ブロントのベッドも空になっており、動くものは風に揺れる植木鉢の花ぐらいだけであった。

「――起きたか、今寮の塔に戻っているんだが――」

ルイズの胸元にあったリンクパールがそう返事するとルイズの部屋のドアがガチャリと開きブロントが入ってきた。
その手には紙に包まれた物を持っていた。
「もうすぐ授業がはじまる。今から食堂行っても時既に時間切れ。だから手早く食べられるもの貰ってきた」
ブロントは包みの一つをルイズに手渡した。
「タコス？」
ルイズは自分自身『タコス』がどういうものかはよく知らないのに、ある種の既視感を感じて思わず聞いた。

「いや、さすがにここではその材料がないだろう。燻製したサーモンを挟んだサーモンサンドだ。頭が冴えるぞ」
包みを開けてみると全粒粉の黒パンに、香りよいスモークサーモンがトマトとキャベツと共に挟まれており、マスタードが掛けられていた。ほのかにビネガーの匂いも感じられた。
「これもブロントがいた所の料理？」
「ん？ああ。俺は最近あまりこれは食べないんだが、メイジには悪くは無いだろう」
ルイズはブロントに髪を梳かして貰いながらサンドを口に入れた。
「それにしてもブロントは色々な料理知ってるわね、料理人でもしていたの？」
「冒険者になると色々と詳しくなる」
ふーんと聞き流しながらサンドをはもはもと食べたルイズはブロントに着替えを済ましてブロントを付き添わせて教室に向かった。
ブロントは途中何人もの生徒達に呼び止められた。
「あ、ブロントさんおはよう！」
「ブロントさん一昨日は火打石集めてくれてありがとう、課題に必要な分が揃ったよ」
「おはようブロントさん！この前はありがとう！僕のラッキーもあれから随分と元気がでたみたいだよ」
「ねえ、ブロントさん聞いてくれる？触媒に使いたいキノコがあるんだけど、私の使い魔じゃ見つけてこれないらしいの・・・・・・」
と、すれ違う一人一人に声を掛けられる事になっていた。
「ブロント、いつの間にか随分と人気者になったみたいだわね、ご主人様の私を差し置いて」
ルイズは召喚されてから一週間程ですでに貴族と平民問わず学院中のほとんどに名前知られている自分の使い魔が少しおもしろくなかった。
何よりも『ブロントさん』と皆が呼ぶ中で誰一人として『ルイズ』に声を掛ける者がいなかった事に。

「それほどでもない、俺はルイズが授業中の暇な時間に学院内でできる依頼をこなしていただけなんだが」
「まったく、決闘騒ぎがあった後は他の皆はあんたに対してピリピリ警戒していたのに、今じゃみんな『ブロントさん』『ブロントさん』って」
ルイズも学院に入学して間も無く皆から『ゼロ』『ゼロ』と呼ばれるようになったが、それはもちろん好ましくない名の広がり方であった。
「おう！お嬢ちゃんそれが人徳ってもんよ。少しは相棒を見習…」
カチカチと口を挟んだデルフリンガーを途中でブロントは鞘に押し込んだ。

学院の広場にでた二人はそこで授業前の時間だと言うのに広場で何人もの生徒達が自分の使い魔を連れていた。
自分の使い魔に何か教え込んでいるやら、みんな多種多様に自分の使い魔に接していた。
そこで広場の生徒達を監督していた頭髪寂しい教師がルイズ達の姿に気が付いた様で近寄ってきた。
「おはようございますブロントさん、そしてミス・ヴァリエール」
先に使い魔のブロントの名前が言われた事にルイズは眉をピクッと動かした。
「ブロントさん、昨日譲って頂いたサイレントオイル、実に素晴らしいものですな！あそこまで摩擦を無くす純度の高い油は初めて見ましたぞ！
私の現在開発中のへび君に使ってみたのですが、まるで＜サイレント＞の魔法掛けたの如く、金きり音の問題が解消できて、更には回転速度まで大幅にあがってもう昨夜は興奮しぱなっしで・・・」
自分の世界に入り熱く語り続けるコルベールにルイズはこほんと咳払いをした。
「おはようございますミスタ・コルベール、ところで皆ここで何し

ているんですか？」
「ああ、これは失礼しました。私とした事が遂夢中になって語り始めてしまって。ええ、皆さんは今日の為に最後の仕上げの練習をしている所ですね」
「え・・・練習って・・・まさか今日・・・だ、だったけ？」
ルイズは顔を真っ青にした。ここの所寝る間も惜しみ書物と格闘していたので大事な今日という日の事をすっかり忘れていた。
「ええ、毎年恒例の二年生による使い魔の品評会。もう間も無く王宮の方々もお見えになると思いますよ。ああ、そう言えばブロントさん使い魔でしたな。
ブロントさんが一体何を見せてくれるのか気になりますな。ああっと何をするか言わなくてもよいですぞ、楽しみはその時までに取って置く方が良いですからな」
「あ・・・だってまだ・・・昨日がオセルの曜日で・・・えーと・・・まだ3日あるはず・・・あ、でもあの時徹夜したから・・・」
指を何度も折り返して本日は品評会を行うダエグの曜日では無い事を祈り、日にちを確認して見るルイズだった。
「では私は学院の警備に関する教諭達の会議がありますので失礼しますぞ、また品評会にて」
そういってコルベールは学院本塔へと去っていった。

「あー！どうしよう！どうしよう！何も用意してなかったわ！」
頭をわしゃわしゃしてルイズは叫んだ。
「品評会って何だルイズ？」
「毎年学院の二年生は使い魔を召喚した後、その使い魔をお披露目する『品評会』と言うがあるの！それには王宮の方々もお見えになるの！ああっ、今年は姫様も来るとお手紙まで頂いていたのに、今日になるまで忘れてたなんて不覚よ！」
「使い魔は何かそこでするのか？」
「召喚したメイジが使い魔に何か芸を一つさせるのよ。みんな召喚

して間も無い事だから大した事じゃなくてもいいんだけど・・・
逆にその短い間で使い魔をどれだけうまく扱えているかメイジの『素質』を観る為のものでもあるのよ」
「芸？」
「そうよ、芸！ねえ、ブロント何かできない？人様に見せてもいい芸！」
そういってルイズはブロントのサーコートの裾をぐいぐいと引っ張っりながら捲くし立てた。
「なんだ？踊ったり、歌ったりすればいいのか？」
「もうそれでいいわ！本当ならちゃんと準備したかったけれど、この際は贅沢言ってられないわ。ああもう来ちゃったわ！」
学院の校門に王宮からの馬車が止まり、物々しい程の数の学院の衛兵が集められ整列していた。

そうしてルイズの心の準備を無視するかの様に学院の外の広場にて品評会は着々と進行していった。

まずはキュルケのフレイムが吐く迫力のある炎のアートショーから始まった。
続いて他の生徒も自分の使い魔を使い芸を披露していった。梟の使い魔を空に飛ばして自分の腕に止まらせた小太りの主人もいれば、頬に絆創膏を張った姿のギーシュは
「モンモランシー、この僕とヴェルダンデの晴れ舞台の勇士は君に捧げるよ～！」
と叫び、ヴェルダンデと呼ばれたジャイアントモールの使い魔と舞台の上でただひたすら自分の使い魔の円らな瞳を見つめるだけのギーシュもいれば、
「あんの馬鹿。こんな皆の前で何言ってるのよ・・・」
と呆れながら、金髪縦ロールの少女モンモランシーは、手の上に乗せて、リボンで着飾ったカエルの使い魔ロビンをぴょんぴょんと

飛び跳ねさせていた。
タバサとシルフィードの番になると、見ていた王宮からの者達や学院関係者たちから歓声が沸いた。
圧倒的存在感を誇る風竜だけでも絵になるのに、それが空を飛び、急降下や回転しながら飛び回り、最後は王宮関係者の席にシルフィードが突っ込み、ぶつかる直前に身を翻してまた舞台の上のタバサの横に着地して見せて、皆をあっと驚かせた。

「では、最後は・・・ミス・ヴァリエール、お願いします」
ルイズは自分直接芸を披露するわけではないと頭ではわかっては緊張で心臓がバクバクいっていた。ブロントに「うっかり耳がばれない様に準備する、出番になったら呼べ」とだけ言われてブロントは袖幕に引っ込んでしまったのだ。
一人舞台の上に立ったルイズは皆の視線が集まる中ごくりと唾を飲み込み、意を決した。
「わたしルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、召喚した使い魔の・・・しゅ、種類は・・・・・・平民です！」

そういってブロントがいるはずの袖幕の方に手をかざした。
と、そこには静かな間だけがあった。
「どうかしたかね？ミス・ヴァリエール」
オスマン氏が声を掛けた。
（ちょっと、出番よ！早く出て来なさいよ！）
ルイズは胸元のパールを口元まで引き寄せるとそう囁いた。
舞台の上で慌てる様子を見ていた生徒達からはクスクスと言う笑いが聞こえ始めていた。

「ブロントさんに逃げられちゃうなんて、無様ねヴァリエール・・・あら何かしら？ちょっと何か聞こえないタバサ？」

観客席にいたキュルケは隣で本を読みふけってるタバサを指で突っつきながら聞いた。
「弦楽器」
本から目を離さずポツリとタバサは答えた。

デンデデッデデレ・・・・・・

デンデデッデデレ・・・・・・

リズミカルな音が袖幕から聞こえてきた。

そして舞台の端から肩にハープを当て、それを弾きながら堂々と歩いて登場する男の姿があった、

デンデデッデデレ♪

デンデデッデデレ♪

その男は頭全体を覆う白い鉄の冑を被り、裸体に上に着ているものは橙色のベストと情熱的に赤い腰布の下に履いた白く、輝く、一枚のサブリガだった。
その鍛えぬかれたしなやかな肢体、そして引き締まった臀部のサ

ブリガが舞台に現れた事により、たちまち女子生徒達から「きゃ～！」と言う悲鳴があがった。

（ちょっと！誰よこの変態！まさかブロント！？嘘よ！）

全てを否定したいルイズに反論するかの如く、目の前の鉄仮面はビシっとルイズを指差した。

――至高の踊りが男に輝きをもたらすと知れ！

男の魂の叫びがルイズの心に突き刺さる。

そしてその男は華麗なステップを踏みながら、仮面の奥から聴く者の脳が削れてしまいそうになる美声が響いた。

「おい、誰だよあいつ？」

「ルイズの使い魔だからブロントさんじゃないのか？」

生徒達の何人かは謎の仮面男が現れた事にざわつき始めていた。

「ん？オマエ今なにか言ったか？」

「いや、何も言って無いぞ？」

――『大いなる意思』が俺にもっと輝けと囁いている

（か、かっこいいきゅい～！）

先ほど芸の披露を終えたシルフィードが真っ先に食いついて仮面の男に魅入られていた。

その大きな青い首と尻尾を男が弾く竪琴の音色に合わせ振り回していた。

男が空を飛び、腕を力強く突き出すごとに舞散る汗が陽の光を集め、煌々と輝いた。

「オ、オールド・オスマン・・・」
「う、うむ」
「こ、これもガンダールヴの力なんでしょうか？」
「わしに聞くな・・・」

そうオスマン氏とコルベールが顔を見合わせる中、仮面の男は足を素早く交錯しながら、言葉としては理解できない、心で感じ取る歌を歌い続けていた。

次第に何匹かのほかの使い魔達も歌に合わせ鳴いていた。使い魔達の合唱となり始めた事、最初は笑っていた者も息を飲んで仮面の踊りを鑑賞していた。

空中で回転を披露し、音もなく舞台に舞い降りた仮面の男は背中を向け、観客に流し目を送った。

――それ以上じっと見つめるとオマエの心も掴んじまうぜ

「あああ！今の見たタバサ！ギーシュを倒した時の姿もかっこよかったけれど、今のであたし、今までに無いほど痺れたわ！ああ、この『微熱』が燃え上がったわ！まるで、まるで・・・」
「熱情」
本を読みながらタバサはポツリと付け足した。
「そう『熱情』よ！二つ名の『微熱』が『熱情』の炎となって今燃え上がっているわ！」
キュルケが興奮してタバサの両肩を持ってゆさゆさと揺らしている中、タバサも無意識の内に会場に流れる律動に合わせ、右手の人

差し指で本をトントンと叩いていた。

そうして仮面の男は最後の大詰めに大きくステップを取りながら回転し舞台の中央で止まるとハープをジャン！と鳴らして片手を上げるようなポーズを取った。

数秒の間会場がしんと沈黙した後、王宮の者も含む観客達が一斉に立ち上がり惜しみない拍手を送った。

仮面の男が優雅に礼を取るとリンクパールを通じてルイズに語りかけた。

「――こんな芸でよかったか？――」

「・・・・・格好はともかく、驚いたわ。あんた一体他にもどれだけの事ができるのよ」

「――冒険者になると色々と詳しくなる――」

「一体その冒険にいつ歌って踊る必要が出てくるのよ。それにしてもブロント・・・」

「――なんだ？――」

「あんた、よく見ると首、かなり長いわね」

ルイズは鎧をはずした己の使い魔を見て改めてそう感じてた。

「――それほどでもない――」

「誉めてないから！」

その時何かが激しくぶつかる様な豪快な音が学院中に響き渡った。

「なんじゃ！？」
「オールド・オスマン！本塔の方向にゴーレムです！」
学院本塔の前に３０メイルはある土のゴーレム両腕を振るって塔に叩き付けていた。
「やっとここまでお膳立てが揃ったてのに、このゴーレムでも壊せない厚さとは計算外だったねえ・・・」
ゴーレムの肩に乗った黒いローブの人物は焦っていた。
「かと言ってこのまま『破壊の杖』を諦めるわけにもいかないねえ・・・」
ローブの人物は歯噛みをした。宝物庫の壁はスクエアクラスの＜固定化＞が何重にも掛けられていて、自分がもっとも得意とする『錬金』すら通さなかった。
しかし存在がばれてしまった今、会場の混乱が収まり次第衛兵達も駆けつけてしまうだろう、とローブの人物は次の手をじっと考え始めていた。
品評会会場では王宮の者達や生徒達を非難させる事で教師達や衛兵達は手が一杯だった。
「皆さん、落ち着いて非難してください！」
「早く王女殿下を馬車に！」
「くそ、驚いた使い魔達が邪魔で思うように収集が付かない！」
ルイズは舞台の上から混乱に陥っている会場を見ていた。巨大なゴーレムが百メイル弱先にいると言うのに、
使い魔や生徒達の混乱の所為で王宮の者達は自分達に設けられた席から動けないでいた。
その頃ブロントは鎧をガチャリと鳴らしながらデルフリンガーを左腰につけていた。
「あ、ちょっと一体何時の間に着替え・・・・・・って、もうそれ

所じゃないわ！」
と、ふとルイズの頭にある事が過ぎった。
この現れたゴーレムの目的がこの王宮の者達だとしたら？姫様が目的だったとしたら？
その可能性に思いついたルイズはいてもたってもいられなかった。
そしてルイズは駆け出した、
「・・・おいィ？いきなりどこに行く訳？」
ブロントはその後を追いかけた。

観客席ではキュルケとタバサは雪崩れ込む人ごみを避けるように一足早くシルフィードに乗り空へ避難していた。
「あら、ルイズったらブロントさん連れてゴーレムに立ち向かっていくわよ。」
同じシルフィードの背に乗っているタバサは興味なさそうに本を読み続けている。
「タバサったら！もうこんな時まで本なんか読んで。ヴァリエールとは先週の街での決着がまだ付いていないと言うのにここで先越されるわけに行かないの！
それにブロントさんにどんな無茶させるか、何てわからないんだからお願い、タバサ私達も行きましょう！」
不安定な風竜の背の上でキュルケに掴まれぐいぐいと揺らされ観念したのか、タバサは本から目を離さず、自分の風竜に呟いた。
「本塔」
シルフィードはきゅい！と返事をするとルイズとブロント達が向かうゴーレムの元へと飛んだ。

「錬金も、ゴーレムでも歯が立たないとなったら、くやしいけど、ここは潔く引くしかないねえ」
ローブの人物は二度とこの絶好の機会を諦めるしかない事を悔しくも思いながら、ゴーレムに乗ったままその場を去ろうとした。

「逃がさないわよ！」
その場に駆けつけたルイズはすかさずルーンを詠唱しながら杖を振るった。
ルイズが唱えた＜ファイアーボール＞と言う名の『爆発』は狙った黒いローブの人物が乗るゴーレムから大きく外れ、後ろに立つ宝物庫の壁がどごーんと音を立てて爆発した。
「待ちなさい！」
ルイズは今度は外さないようにとゴーレムに不用意に歩み寄った。後ろからブロントが走りながらルイズを追いかけていた。
「ちぃ！もう邪魔が来たのかい・・・」
ローブの人物はゴーレムの腕でルイズの魔法の射線上から自分自身を庇うように覆った時、背後の壁からぴきき、とひび割れる音を聞いた。
「・・・へぇ・・・貴族の中にも大した奴もいるもんだねえ。折角のチャンスは生かさせてもらうよ！」
ローブの人物はは自分を庇っていたゴーレムの右腕を振るい上げさせ、そのままルイズとブロントの方へと振った。
ゴーレムの右腕は地面を掬う様に薙ぎ払い、土砂や塗装された石畳をルイズ達に投げ飛ばし、その勢いのままゴーレムの右手を鉄に変え、後ろの宝物庫の壁のひびが入った箇所に殴りつけた。
そして一枚の石畳の破片が物凄い早さで回転しながらルイズを目掛け飛んできた。
「きゃっ！？」
ルイズは立ちすくんだ。
バギン！
咄嗟にルイズの前に立ちはだかり庇ったブロントは盾で石畳の破片を叩き落すとその後波の様に襲い掛かった土砂にルイズ共々半身埋もれてしまった。
そして学院本塔周辺は乾いた土煙で覆われてしまった。
「あのヴァリエールったら賊が気づく前に魔法を入れるチャンスだ

ったのにまんまと外しちゃって。こんなに視界が悪くなったら今度はこちらから攻撃する事ができないじゃない！」

キュルケは本塔の周りを旋回するシルフィードに乗ったまま、上空で＜ファイアーボール＞のルーンを詠唱し終えて、杖を振る体勢を取っていた。

同じくシルフィードに乗って、本を読んでいたタバサは片手で杖を振るうと突風が巻き起こり、舞い上がった土煙を吹き飛ばした。

「ありがとう、タバサ！あのゴーレムの姿が見えたわ！」

そう言って、キュルケは自分の杖を振り、宝物庫の壁に空いた横穴に掴みかかり直立不動で立つゴーレムに＜ファイアーボール＞を当てた。

キュルケから放たれた強大な火球が土のゴーレムに触れた瞬間、ゴーレムの巨体が何は抵抗もなく、枯れた木の葉の様にボロボロと崩れ落ちた。

「あら？ちょっと手ごたえがおかしいわね？」

キュルケは首を傾げた。

「もう、逃げた」

タバサがポツリと呟いた。

「ええ！？それを早く言ってよ！」

キュルケはタバサをまたゆさゆさと揺らした。

一方ルイズ達は半分土に埋もれた自分達の体を掘り起こしていた。

「あのローブの人物、去り際何か塔から持ち出していたけれど、まさかアレが噂の盗賊メイジだったのかしら・・・」

ルイズは自分の手でぺっぺっと軽く土を取り除いていたが、あまり状態は進展していなかった。

それを見兼ねたブロントは盾をスコップの要領でルイズの周りの土の大部分を取り除いた後、ルイズの両脇を抱えて引き上げた。

「おいぃ？何いきなり突っ込んでいるわけ？痛い目を見たいのか？」

ブロントはルイズに声を上げた。

「私は貴族よ！敵に後ろを見せない者を貴族と言うのよ！」
パーン！
乾いた高い音が響いた。
ブロントは篭手を外した右手でルイズの頬を叩いていた。
「痛っ！この首長！ご主人様に一体何するのよ！」
「今のが石畳でなくて良かったな、石畳だったらお前はもう死んでるぞ」
ルイズは自分の頬を左手でさすっていた。
「だからって何も手をあげること無いじゃない！！」
「俺はお前を守るために盾をしてやってるんだからな。あのまま盾が間に合わなければすぐ死ぬくせに調子こき過ぎ。あまり調子に乗ってると土の中でひっそり幕を閉じる」
「でもここで逃げたら、ゼロのルイズだから逃げたって言われるわ！」
「逃げろとは言って無いんだが。事前にルイズが突っ込むとわかっていれば対応も出来ますが。わからない場合手の打ち様が遅れるんですわ？お？」
ブロントはルイズの両肩をぐっと掴んだ。
「俺を盾として掲げる前にルイズが先に死に急いだら敵に立ち向かう事もできずに骨になる」
声の荒げ方とは違いブロントの顔は何処かもの哀しそうだった。
「・・・わ、悪かったわね・・・確かにちょっと浅はかだったわ・・・」
ブロントはすっと手を引いた
「敵に立ち向かう時は仲間に背中を預けるものなんだが、俺はいつもそうやってきた。一人じゃないんだぞ、お前は」
ルイズにとって叱られる事は実家に居た時も上の姉や両親にされた事は過去にもあった。
だがこのブロントの様に顔を打たれて、ルイズの身を心配し、真摯になって怒られる事は今まで無かった。

ましてや自分の使い魔に叱られるとは予想もしていなくてブロントの言葉は深くルイズの心に突き刺さった。

「それと・・・さっきは叩いて悪かったな」

そう言ってブロントは右手をルイズの頬にあてがった。

ブロントの背中から覗く日の光がその白く輝く鎧に反射したのか一瞬ブロントがキラッと光った様にもルイズには見えた。

使い魔が素直に謝ったのを聞いた為か頬の痛みも幾らかは薄らだ様な気もした。

もう間も無くして、会場の混乱を治める事が終わったのか衛兵達や教師達が宝物庫前に駆けつけていた。

そして大きな風穴が新しく設けられた宝物庫の壁に文字が刻み付けられている事を発見した。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

第１０話［前編］　「ゴーレムのまなざし」

学院で盗賊騒ぎがあったその日の夕方・・・
ひとまずの事態の収拾を終えた学院中の教師達が宝物庫に集まっていた。
「白昼堂々と賊は学院に忍び込み、『破壊の杖』を奪っていきおった。王宮の方々をも招いた使い魔の品評会に衛兵を割いたとは言え、賊ながらあっぱれとしか言いようが無いのう」
オスマン氏は宝物庫に空いた横穴を見つめていた。
「で、実際にその犯行の現場を見ていたのは誰だね？」
オスマン氏が尋ねた。
「この四人です」
コルベールがさっと進み出て、後ろに控えていたルイズにキュルケにタバサと使い魔のブロントも敢えて含めて四人を指差した。
「ふむ、君達か、詳しく説明したまえ」
ルイズが進み出て、見たままを述べた。
「あの、大きなゴーレムが現れて、ここの壁を壊したんです。その時土煙が舞い上がっていて誰かは確認できなかったんですが、肩に乗っていたメイジが宝物庫の中から何かを・・・・・・、その『破壊の杖』だと思いますけど・・・・・・、持ち出した後、ゴーレムから降りて走って逃げ出して・・・・・・・
残ったゴーレムの方も崩れて土になっちゃいました」
ルイズは態々言う事ではないと思いキュルケ達の介入の事は言及しなかったので、後ろで聞いていたキュルケがふんと鼻息を鳴らした。
「それで？」
「後を追おうとしたのですが、その時私達は土に埋もれていてすぐに身動きが取れなくてそのまま西塔の方へと逃げる所しか見れませ

んでした」
「ふむ・・・・・確か昼ごろの衛兵の報告によれば西側の城壁に『錬金』によって開けられたと思われる穴があったと言っていたな。後を追おうにも、そこから先は手がかりナシというわけか・・・」
それからオスマン氏は思い出したようにコルベールに尋ねた。
「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」
「そういえば・・・・・品評会の時は他の教師達と一緒に鑑賞していたはずなんですが・・・」
「この非常時に、どこ行ったのじゃ？」
「どこなんでしょう？」
そんな噂をしていると、ミス・ロングビルが現れた。
「ミス・ロングビル！どこに行っていたんですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」
そう捲くし立てるコルベールをよそに、ミス・ロングビルは落ち着いてオスマン氏に告げた。
「申し訳ありません、昼から、急いで調査しておりましたの」
「調査？」
「そうですわ。王宮の方々をも呼んだ品評会の最中にゴーレムが現れて大騒ぎになった時、ゴーレムが学院の宝物庫前にいたので、これが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、私も駆けつけたのですが、その時にはもうゴーレムは焼かれ崩れ落ちて、フーケがすでに逃走した後だったので、すぐに逃げ先を調査いたしました」
「仕事が早いの、ミス・ロングビル」
オスマン氏は感心した様子で自分の髭をいじっていた
「そして、結果は如何に？」
「はい。フーケと思われる人物の居所がわかりました」
「な、なんですと！」
コルベールが素っ頓狂な声をあげた。

「誰に聞いたんじゃね？ミス・ロングビル」
「はい、フーケが逃げたと思われる学院西側の近在の農民に聞き込んだ所、ここ数日前から、近くの森の廃屋に黒ずくめのローブの男が住み着き、時折大きな土の塊を幾つか残していたそうです。おそらく、彼はフーケで、残った土の塊はゴーレムの跡、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」
ルイズが答えた。
「黒ずくめのローブ？それはフーケです！間違いありません！」
「そこは近いのかね？」
「馬で四時間といったところでしょうか」
「すぐに王室に報告しましょう！すぐに王室衛士隊に頼んで兵隊を差し向けてもらわなくては！」
コルベールが叫んだが、オスマン氏は首を振り怒鳴り返した。
「ばかもの！王室の兵が来るの待ってる間にフーケは逃げてしまうわ！その上・・・・・、王女殿下を含む王宮の方々を巻き込んだ騒動のみならず魔法学院の宝が盗まれたので助けてくださいなどと無駄にいらぬ借りを作ってしまうだけじゃ！盗まれた『破壊の杖』に関しては当方魔法学院の問題じゃ！当然我らで解決する！」
オスマン氏はコホンと咳払いをすると、有志を募った。
「では、捜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ」
しかし誰も杖を掲げず、お互いの顔を見合わせるだけだった。
「おらんのか？ええい、どうした！フーケを捕まえて、名を上げようと思う貴族はおらんのか！」
ルイズはブロントの顔を見て、ブロントは何も言わず頷いた。それからルイズはすっと杖を顔の前に掲げた。
「ミス・ヴァリエール！何をしているのですか！あなたは生徒ではありませんか！ここは教師に任せて・・・」
ミセス・シュヴルーズが驚いた声をあげた。

「誰も掲げないじゃないですか」
ルイズはきっと唇を結び、真剣なまなざしで言い放った。
ルイズが杖を掲げたのを見て、キュルケも続いて杖を掲げた。
「丁度良いわ、先週の決着をこれで付けましょうヴァリエール」
「ツェルプストー！君は生徒じゃないか！」
コルベールが驚いた。
そしてキュルケが杖を掲げるのを見て、タバサも掲げた。
「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから」
キュルケがそう言ったら、タバサは短く答えた。
「心配」
キュルケは感動した面持ちでタバサを見つめた。ルイズも唇を噛み締めて、お礼を言った。
「ありがとう・・・・・。タバサ・・・・・」
そんなやり取りをする三人を見て、オスマン氏は笑った。
「そうか、では、頼むとしようか」
「オールド・オスマン！わたしは反対です！生徒たちをそんな危険にさらすわけには！」
ミセス・シュヴルーズが叫んだ。
「彼女達は敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」
タバサは返事もせずに、ぼけっと突っ立っている。教師達は驚いてタバサを見つめる。『騎士』と聞いてブロントも「ほう」、と感銘を漏らした。
「本当なの？タバサ」
今まで知らされていなかったキュルケも驚いていた。
オスマン氏は、それからキュルケを見つめた。
「ミス・ツェルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？」
キュルケは得意げに、髪をかきあげた。

ブロントも先ほどゴーレムが崩れ落ちる瞬間に放たれた炎の魔法の事を思い出していた。
ブロントが知っている魔力を利用して放つヴァナ・ディール式の精霊魔法の＜ファイア＞系魔法とは何処か違っていたように感じていた。
ヴァナ・ディール式の魔力で具現化した炎とは違い、キュルケのものは実際に物理的な炎を繰り出していた。
ハルケギニアの魔法は唱えるのに杖を振るう事が必要な点やルイズが夜な夜な魔法の自習している時に良く「精神力を利用して」と呟いていた事を考慮の上で、ブロントが知っている知識に無理やり当てはめればハルケギニアの『魔法』はヴァナ・ディールで知られる溜めた精神力を基に繰り出す『武器の技巧』に性質が近いのでは無いか、と考えていた。
そう考察するブロントの横でルイズは今度自分がオスマン氏に紹介される番だとばかりに可愛らしく胸を張った。
オスマン氏は誉めるところが思いつかなくて困っていた。
「えー、その・・・ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で・・・あー、その、うむ、とても努力家なメイジと聞いているが？しかもその使い魔は！」
オスマン氏は手を顎に当て考え込んでいるブロントを熱っぽい目で見つめた。。
「平民ながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して、素手で勝ったという噂だが」
そしてオスマン氏は心の中で続けた、『と言うより実はエルフでしかもあの伝説の使い魔『ガンダールヴ』ならば、土くれのフーケなぞ相手にもならないだろう』、と。その時コルベールが興奮して調子で後に続いた。
「そうですぞ！なにせ、彼はガン・・・」

オスマン氏は慌ててコルベールの口を押さえた。
「むぐ！はぁ！いえ、彼は頑丈、ええとても頑丈との評判でして！あのグラモン息のゴーレムの攻撃をも物ともしないと！はい！」
ブロントは「それほどでもない」と軽く答えていた。
「さて、この三人とその使い魔に勝てるという者がいるのなら、前に一歩出たまえ」
オスマン氏はそう教師たちに向かって言ったが、教師たちは黙ったままで前に出る者はなかった。
「ふむ、魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」
ルイズとタバサとキュルケは三人同時に「杖にかけて！」と唱和した。
「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじゃ。魔法は目的地につくまで温存したまえ。ミス・ロングビル、彼女たちの案内を頼む」
ミス・ロングビルは頭を下げた
「もとよりそのつもりですわ」
予想通りの展開に事が進んだ事にミス・ロングビルは誰にも知られぬようににやりと笑った。

四人はミス・ロングビルを案内役に、早速出発した。
いつ襲われてもすぐに外に飛び出せるようにと屋根無しの荷車のような馬車に乗り、ミス・ロングビルがその御者を務めた。
キュルケが、黙々と手綱を握る彼女に話しかけた。
「ミス・ロングビル・・・・・・、手綱なんて付き人にやらせてばいいじゃないですか」
ミス・ロングビルは、にっこりと笑った。
「いいのです。わたくしは、貴族の名をなくした者ですから」
キュルケはきょとんとした。
「だった貴女はオールド・オスマンの秘書なのでしょ？」
「ええ、でもオスマン氏は貴族や平民だということに、あまり拘らないお方です」

「差しつかえなかったら、事情をお聞かせ願いたいわ」
ミス・ロングビルはただ優しく微笑むだけで、それは言いたくないと意思表示した。
「よしなさいよツェルプストー。昔のこと根掘り葉掘り聞くなんて」
ルイズが割り込んだ。キュルケはつまらなそうに荷台の柵に寄りかかって頭の後ろで腕を組んだ。
「暇だからちょっとおしゃべりしようと思っただけじゃないの・・・あ、これならどうかしら」
再びキュルケは起き上がり御者をしているミス・ロングビルににじり寄った。
「今日の使い魔の品評会は最後に大騒ぎになって結果がうやむやになったけれど、ミス・ロングビル、貴女は学院の教師たち側の人間として今年の優勝は誰の使い魔だと思った？」
「そうですね・・・ただの秘書の私自身には優勝者を決める権利は無いのですが・・・・・やはりミス・タバサの使い魔ではないのでしょうか？舞台に縛られず大空を飛び回るなど中々注目を集める演出だと思いましたが」
「そう？確かにタバサのシルフィードは素晴らしかったわ・・・」
そう言ってキュルケは荷台で本を黙々と読み続けるタバサを一目見た。
「・・・でもタバサには悪いけれど、会場の注目を浴びたと言う点で言えばブロントさんが文句無しに一番だったとあたしは思うわ」
「ブロントサン？」
「ええ、ヴァリエールの使い魔の彼よ。ほんと、主人がいけ好かないヴァリエールと言う所が今でも納得行かないわ」
そう言ってキュルケは二人の会話に対して背中を向けて祈る様な姿勢で静かに目を閉じているブロントを指差した。
ルイズは「何よ、悪かったわね」と言い、ふんとそっぽを向いてしまった。

「ああ・・・ミス・ヴァリエールの使い魔ですか・・・・・そうですね、厳格そうな風貌をした彼が楽器の演奏だなんて意外性がありましたね」
「意外性なんて言葉で言い表せる程度の衝撃じゃなかったわ！あの躍動で！あのセンスで！あの脚線美で！あの情熱で！あたし自身を焼く尽くされてしまうかと思ったわ！！」
キュルケは両腕で自分を抱いて体をくねらせていた、そしてその時タバサは読む本のページをめくる指を止めていた。
ミス・ロングビルはうねうねとしているキュルケに軽く苦笑いをして、手綱を引き馬を止めた。
「ここから先は森なので馬車を降りて徒歩で行きましょう、すぐ近くに情報を得た廃屋があるはずです」
馬車を降りた一行は薄気味悪い森へと入っていった。
茂る森を進む途中、ゴーレムが通ったのか一筋の道を作るように木々が激しくなぎ倒されていた。
「件の廃屋はこのすぐ先にあるはずです。フーケも近くにいるかも知れないので皆さん気をつけてください」
ミス・ロングビルがそう皆に注意を促した。一行は倒れた木々を道しるべに沿っていった先には、学院の宝物庫前にもあったような大きな盛土に半分埋もれた
ボロボロにくたびれた小屋があった。
「ここがフーケの隠れ家で間違いなさそうね」
ルイズは人が住んでいる気配がない小屋を指差した。
そこでタバサは一つの作戦を提案した、偵察兼囮が小屋の中を確認し、フーケが中にいるのであればそれを挑発し、他の者が魔法で一気にフーケを攻撃する。
「俺がその囮をやる事になるのは確定的に明らか」
タバサはこくりと頷いた。
ブロントは腰からデルフリンガーを鞘から抜いた。

「お?相棒、やっと俺の出番か!よっしゃ!ここはいっちょ・・・・・」

デルフリンガーがカチカチと鍔を鳴らした。

「うるさい、気が散る、一瞬の油断が命取り」

「わ、わかったよ相棒」

ブロントに一喝されデルフリンガーは大人しくなる。

デルフリンガーを右手に握った瞬間、ブロントの体がギーシュとの決闘の時の様に軽くなった。

ブロントは一同がいる茂みから一足跳びで小屋の窓まで近づき中を軽く覗いて部屋の間取りをざっと確認した。

「――中に誰もいないんだが――」

リンクパールを通じてその事をルイズに伝えた。

「な、何今の!?ブロントさんの声がしたけれど?」

キュルケが小屋にいるはずのブロントの声がルイズから発せられた事に驚いていた。

「ああ、これね。ブロントから貰ったものだけど。このパールを通じて遠くにいても会話ができるものなの」

そう言ってルイズは首から下げていたパールを指で摘んで見せた。

「今まで聞いた事がないマジックアイテムですね、それはどれほど遠くまで声が届くのでしょうか?」

ミス・ロングビルが興味深そうに聞いた。

「わたしも詳しい事まではわからないけれど、大陸の一つや二つぐらい離れていても通じるとはブロントは言っていたわ」

「・・・・・遠く離れた家族の声でも聞けるなんて結構な宝物ですね」

ミス・ロングビルは何処か懐かしむ様な優しい顔をしていた。

「幾つでも作れるらしいから、宝石としての価値はないらしいわよ」

「幾つでも?」

そう会話する二人にキュルケが手で遮った。
「お二人さん、今はそんな事を言っている場合じゃないわ、小屋の中を調べるわよ」
キュルケがそう言うと、タバサが小屋の扉に向けて杖を振った。
「罠は無いみたい」
そうタバサが呟くと、ブロントは扉を蹴り破り、カカッと中に駆け込んだ。
タバサも後に続いた。狭い屋内での炎の魔法や『爆発』の使用は逆に危険とタバサが事前に提案していたので、キュルケとルイズは外で見張りとして残った。
ミス・ロングビルは辺りを偵察してきますと言って、森の中に消えた。
小屋の中は半分ほどは原型を留めていたが、中にまで土が入り込んでいた。
ブロントとタバサがフーケが残した手がかりが無いか調べ始めた。
そして、タバサが土に半ば埋もれたチェストの中から盗まれた『破壊の杖』を見つけ出した。
「破壊の杖」
タバサは無造作にそれを持ち上げると、ブロントに見せた。
その『破壊の杖』を見た途端、ブロントは眉を顰めた。
「おいィ？マジでそんなものが『破壊の杖』な訳？」
タバサはこくりと頷いた。
「宝物庫にあったものは、これ」
ブロントはタバサから『破壊の杖』を受け取り、それをじっと見つめた。
禍々しい蝙蝠の細工が施された漆黒の杖は間違いなく・・・・・・
その時、
「――ブロント！来たわよ！――」

リンクパールを通じてルイズがブロントに叫んだ。
ブロントが蹴り破った小屋の入り口に振り返った時、ばこぉーんといい音を立てて、小屋の屋根が吹き飛んだ。
無くなった屋根の先には巨大なフーケのゴーレムの姿があった。
ブロントは間髪入れずに小屋を飛び出し、タバサは自分の杖を振った。
「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・・・ハガラース！」
タバサは＜アイス・ジャベリン＞を唱え、無数の氷の槍がゴーレムの足に突き刺さった。
だが刺さった氷の槍はゴーレムの土に押し出されて、ゴーレムの足は傷も残らず綺麗に元通りになっていた。
キュルケも自分の杖を引き抜き、ルーンを唱えた。
杖から火球を繰り出すとそれとゴーレムにぶつけた。ゴーレムは炎に包まれたが、先の時と違い、ゴーレムは崩れるどころかまったく意に介さない。
「やっぱりこんなでかいのを相手だなんて無理よ！」
キュルケが叫んだ。
「退却」
タバサが呟く。
キュルケとタバサは一目散に逃げ出し始めた。
ゴーレムの背後に立っていたルイズはゴーレムに杖を振りかざして、ルーンを呟き始めていたが、駆けつけてくるブロントの姿を見たとき、ハッとして、詠唱
を止めて自分もゴーレムから距離を取った。
「――奴の注意は俺が取る事になる。お前らはゴーレムの腕の範囲から離れる事が必要不可欠――」
そうブロントはルイズに伝えるとブロントはガチャと鎧を鳴らしながら、デルフリンガーの切っ先をゴーレムに向け、その足元に突

進してデルフリンガーで振り下ろすように切りつけた。
ブロントの剣戟がゴーレムの左足を紙の様に切り裂いたが、切りつけた側から土で傷が埋まっていった。
ゴーレムも斬りつけられたことによって、注意をタバサやキュルケ達から足元のブロントに向けた。
そしてフーケのゴーレムは右手を振り上げて、ブロントに叩き降ろした。

「バックステッポぉお！」

ブロントは身を翻し、後ろに跳び退きゴーレムの豪腕を避けた。
ゴーレムの拳が地面に突き刺さり、飛び散る破片を盾で防いだブロントはすかさずデルフリンガーでゴーレムの腕を一閃して切り落とした。
腕が取れたゴーレムは一瞬動きは止まったが、切り落ちた断面からまたむくむくと土が生えて来た。
（このままじゃ永延と切り裂くだけな羽目になる、無駄な時間が惜しいだろ）
ブロントは再生する腕をひたすら削るように切り続けながら突破策を練っていた。
（ここの魔法は魔力を使わず精神力を使うと言っていたが。そして杖が無いと唱えられない・・・）
そのときゴーレムの無傷の左腕がブロントをなぎ払った。
ガシャン！
「ブロント！」
ルイズはブロントがゴーレムの拳に叩き付けられた事で思わず叫んだ。
「――俺は少し試したいことがあるんだが、もう一度さっきの撃っ

て欲しい、氷の槍――」
ブロントはゴーレムの拳を押し返さんとばかりに盾でその拳撃を受け止め踏ん張って、リンクパールを通してルイズに語りかけていた。

「タバサ！お願い！」
ルイズがそう懇願するのを聞くまでも無く、横で聞いていたタバサは再度＜アイス・ジャベリン＞を唱え、ゴーレムの足を氷の槍で突き刺した。
その様子を目を光らせ待っていたブロントは土の拳をすり抜けて氷の槍が貫いた足に斬りかかった。
「ファストブレードで引き裂いてやろうか！」
刹那の間にブロントは氷の槍が刺さった箇所を一動作の間で二回剣を切りつけていた。
途端、タバサの＜アイス・ジャベリン＞が『貫通』した箇所を軸に、ブロントの剣撃による『切断』がゴーレムの足にうねり広がり、その足は物凄い勢いで『湾曲』し、捻じ曲がった。
自重に耐え切れなくなったゴーレムの両脚が崩れ落ち、ゴーレムはどっしーんと音をたてて横に倒れた。

［――思ったとおりだったな。今度は同じタイミングで炎の後に『爆発』だ――］
リンクパールからブロントはルイズに指示した。
「ツェルプストー！」
「ええ、わかっているわ！飛び切り熱いのをくれてあげるわ！」
キュルケはルーンを唱え、杖を振った。
地面に倒れ、両腕でもがくゴーレムに巨大な火球を叩き付け、ゴーレムを火に包んだ。
それに続いてルイズも呪文を詠唱し、キュルケの火を二乗にした

＜フレイム・ボール＞が当たった箇所に向けて振った。
ゴーレムを包み、その土の表面を『溶解』し始めた炎の中心から、ルイズの魔法がゴーレムを構成する土を『衝撃』で飛ばしながら爆発した。
そして粉々に飛び散った土の粉末にキュルケの炎が燃え移り、盛大な『核熱』の爆炎となってゴーレムを原形を留めないほどにバラバラに吹き飛ばした。

第１０話［後編］　「ゴーレムのまなざし」

「やったわ！あのゴーレムを、わたしの魔法で。もう、『ゼロ』・・・・・もう、わたしは『ゼロ』じゃないんだわ」

ゼロと呼ばれ続けたルイズは、皆の助けを借りつつも、初めて自分の『魔法』で何かを成し遂げられた事で感極まってその目に涙を軽く浮かべていた。

「でも、最後の大爆発は今までわたしがやってきた『爆発』じゃなかったわ。一体何が・・・・・まさか！『破壊の杖』！？」

ルイズはハッと気づいた、ブロントが『破壊の杖』を持っていた。もしかするとその大爆発はルイズではなく、ブロントが最後に唱えかけたものだったのでは？

マジック・アイテムらしき道具の数々の使い方を知っているブロントならばその可能性が高いかもしれないとルイズは一瞬思った。

その時ルイズは横から声を掛けられた。

「見事な仕事だと関心はするがどこもおかしくはない」

爆風を避けるために飛びのいたが、しこたま土埃を被っていたブロントだった。

「おう！あれは確かに正真正銘お嬢ちゃんの魔法だ！魔法を併せての＜スペル・チェイン＞だなんて久しぶりに見たぜ！」

デルフリンガーがブロントに続けて嬉しそうにカチカチと鍔を鳴らした。

「え？＜スペル・チェイン＞？」

ルイズはきょとんとした。

「ああ、魔法はなんでも同時に重ねればいいわけじゃねーんだ。少し間を挟みながら一定の順番で異なる属性の魔法を繋げる事によってさっきのお嬢ちゃんがやった大爆発の＜フュージョン＞や相棒の、ええとなんて言ったかな？ディア・・・？ディセ・・・？あ、そうだそうだ、＜ディストーション＞とかが出来るわけよ！」

「ブロントも魔法を使ったの！？」
　ブロントは首を横に振り、デルフリンガーが代わりに答えた。
「いやー、相棒のはちょっと違うな！武器の扱いが熟練された達人なら、魔法じゃなくてもその技一つで＜スペル・チェイン＞が起こせるんだ。おっと、この場合厳密に言えば＜スキル・チェイン＞って言った方がいいのか？」
「学院の本も調べたりしたけれど、＜スペル・チェイン＞なんて言葉聞いた事もなかったわ」
「そりゃそうだろうな。＜スペル・チェイン＞を起こすのに使う属性の順番とかがとにかくややこしーんだ。俺だってよくはわかってねー。俺が最後に＜スペル・チェイン＞を見たのも何百年も前だったかな？ん、あれ？＜スペル＞じゃなくて＜スキル＞の方だったかな？んー、まあ良いや。とにかくこの知識を持っている奴の数が極端に少ねえんだわ、これが。ましてや相棒みたいに＜スキル＞でやる奴なんてよ。もうおでれーたってなんのってよ！さすがエル・・・」
　そんな剣の達人の相棒になれた事がよっぽど嬉しかったのか、デルフリンガーはカチカチと鍔を止めずに饒舌になり過ぎていたので、
　ブロントはデルフリンガーを鞘に押し込んだ。
「俺がいたところの魔法ではできないんだが。ここの魔法は根本的に何かが違うようだった」
「系統魔法と先じゅ・・・・・いえ、精霊魔法の違いかしら？ってこんな事話している場合じゃないわ！ゴーレムは倒せたけれど肝心のフーケがまだだわ！フーケは一体どこ？」
　吹き飛んだゴーレムの跡の前に立つ四人は顔を見合わせた時、辺りを偵察に行っていたミス・ロングビルが茂みの中から現れた。
「皆さん大丈夫ですか！？フーケのゴーレムが現れたのを見たあと、私ではどうする事も出来ないのでフーケ本人が近くにいないか探したのですが・・・」
　そう語り、歩み寄ってくるミス・ロングビルを静止するようにタ

バサは自分の杖ミス・ロングビルに向けた。
「探す必要は無い。貴女がフーケ」
「あら?どうしてそう思います?」
ミス・ロングビルは自分がフーケであると肯定はしないものの、強くも否定せずタバサに聞いた。
「最初会った時から怪しかった。学院でゴーレムを焼いた事を誰も話していないのに貴女は知っていた」
「そうでしたでしょうか?でも土のメイジならあの土の塊見たら何となくわかりますよ」
すっとぼけるミス・ロングビルをよそにタバサは続けた。
「それと貴女はブロントの芸をする姿を見ていなかった。あの時学院の者であの場を離れていた者はフーケとしか考えられない」
「そうですか?先ほど馬車でも言いましたがちゃんと観ていましたよ?そこの彼が竪琴を『演奏』するところを」
「他には?」
タバサは目を鋭く細めた。
「他にと言われましても・・・・・ああ、彼の演奏で他の使い魔達までも歌い出してましたね。後は・・・鎧姿に竪琴は意外と絵になっていたと言う事ぐらいでしょうか・・・?」
それを聞いてルイズとキュルケもバッと身構えた。
「ミス・ロングビル、貴女はブロントさんの芸を『聞いて』いたけれど、『見て』いないのね」
キュルケは杖を構えた。
「あの時そんな状況にいたのは会場から離れていたフーケぐらいしかいないわ」
ルイズも咄嗟に杖を出した。
「なんだい、他にも何かしてたのかい、あの使い魔。あの竪琴の演奏一つだけでも立派な芸だって言うのに」
ミス・ロングビルと呼ばれていた女性はメガネを外し、優しそうだった目が猛禽類の様な鋭い目へと吊り上った。

そしてフーケは再びルイズ達に歩み寄った。
「動かないで！」
ルイズは杖をフーケに向けた。
「おっと。動かないで貰うのはそっちの方になるわ」
そう言ってフーケは素早くびゅっと杖を振るとルイズ、タバサ、キュルケの足元からゴーレムの腕の形に似た＜アース・ハンド＞が伸び、三人のを掴み、動きを拘束した。
「流石に今日一日でゴーレムを三回も召喚して、四体目を召喚する力は残っていなかったわ。でもこうして長々と話に付き合ってくれたお陰で、貴方達を握り潰す事ぐらいは出来る『手』を召喚する力ぐらいは残ってるわ」
ルイズはがっちりと掴まれた手の中でもがいた
「どうしてわざわざこんな事を！？」
ルイズがそう怒鳴るとフーケは、
「『破壊の杖』奪ったのはいいけれど、使い方がわからなかったのよ。だからこうして貴方達魔法学院の者を連れてきて使い方を知ろうと考えたのよ。
結局はよくわからずじまいだったけれど、その代わりあなたの使い魔の持っているマジック・アイテムを頂こうと思ったのさ」
「ブロントの！？」
「あの声を送り届ける真珠や持った途端に身が軽くなってゴーレムをも切り崩せる剣なんてそれぞれ一つが国宝級さね。そういう事なんで使い魔さん！早くその宝をよこしな！そうしたら主人の命だけは助けてやるよ！」
『破壊の杖』を含むほかのアイテムを握り潰したくなかったので敢えて＜アース・ハンド＞が掛けられていなかったブロントに向かってそうフーケは叫んだ。
「おっと、剣は足元に置いておきな！まずはその真珠と『破壊の杖』をよこして貰おうか！」
ブロントは何も言わず、腰のデルフリンガーを外し、地面に置い

て、かばんから『破壊の杖』を取り出した。
「こんなものがいるのか？」
ブロントは手に持った『破壊の杖』をヒラヒラと振って、フーケに見せた。
「使い方がわからなくても、せっかく盗ったものだ。こうして何人か学院の連中だまして連れてくればいつか使い方が分かるかもしれないしさ！さあ早くしな、貴方を＜アース・ハンド＞で握りつぶしてから取ってもいいんだからさ」
「そうか」
そうブロントは言うと、その左手の篭手から強く光が漏れ出して、手に持った杖を高く掲げ、上空に投げた。
フーケは咄嗟に上空に飛んだ杖を目で追った。そしてその杖は見えない軸に支えられたかのように激しく回転し始めた。
そこへブロントが続いた。
「口で語るひまがあるなら手を出すべきだったな」
「な！？」
ブロントは両手をフーケに向けて押し出した。
フーケがその場の状況理解する前に、回転した杖が凄い速さで滑空して、フーケに激しくぶつかり、吹っ飛んだ。
同時にルイズ達を掴んでいた＜アース・ハンド＞もただの土となって崩れ落ちた。
「調子に乗ってるからこうやって『天罰』にあう事になる」
ブロントは気を失ったフーケにそう言葉をかけて、地面に落ちた『破壊の杖』を拾い、デルフリンガーを再び腰につけた。
「ブロント！」
＜アース・ハンド＞から抜けたルイズがブロントに駆け寄った。
遅れてタバサとキュルケも駆け寄った。
タバサはすかさず杖を振るい、気を失っているフーケを風のロープで縛り上げた。
「あーあ、どっちがフーケを捕まえられるかで決着付けたかったの

に、これじゃまた勝敗がうやむやね」
キュルケがぼやいた。
「あんたまだそんな事言っているの？呆れたわ。とにかくわたし達で無事フーケを捕まえられたのだからいいじゃない」
ルイズは腕を組み、ふんと鼻を鳴らしながらそっぽを向いて言った。
「ま、良いわ。また次の時まで勝負はお預けって事で。それより夜が遅くなる前に戻りましょう、早くこの土に塗れた体を水で流したいわ」
一同はキュルケのその言葉に賛成して、拘束したフーケを運んで学院へと戻った。

その日の夜、学院長室でオスマン氏は机の上に『破壊を杖』を置き、戻った四人の報告を聞いていた。
「ふむ・・・・・・。ミス・ロングビルが土くれのフーケじゃったとはな・・・美人だったもので、なんも疑いもせずに採用してしまった・・・ああ、いやいや、すまんの、こんな夜遅くまで頑張ってもらったんじゃ、これ以上は時間はとらせんよ」
オスマン氏はコホンと咳払いをして、
「とにかくフーケは城の衛士に引き渡した。そして『破壊の杖』も無事戻ってきた、これで一件落着じゃ」
オスマン氏は、ルイズ、キュルケ、タバサの三人の頭を撫でた。
「君達の『シュヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじゃろう。といっても、ミス・タバサはすでに『シュヴァリエ』の爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた」
オスマン氏の爵位申請を聞いて驚いた三人だったが、ルイズは今回一番の功績者であるブロントを見つめた。
「・・・・・・オールド・オスマン。ブロントには、何もないんですか？」

「残念ながら、彼は貴族ではない」
ブロントは言った。
「既にナイトである俺に隙は無かった。爵位が欲しくてなるんじゃない。人を守ってなってしまう者がナイト」
オスマン氏はふむ、と頷いた。
「確かにその心構えが重要じゃの。さてと、無事盗賊騒動も片がついたので、明日は予定どおり『フリッグの舞踏会』を執り行う」
キュルケの顔がぱっと輝いた。
「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりました！」
「明日の舞踏会の主役は間違いなく君たちじゃ。それに備えて今日はもうゆっくり休みたまえ。舞踏会の主役が体調不良で出られない、ではつまらないからの」
三人は礼をするとドアに向かった。
その場を動かないブロントをルイズはチラッと見つめ、部屋を出るのを止めた。
「ブロントどうしたの？」
「少しオスマんに聞きたい事があるんだが」
キュルケとタバサが部屋を出るのを確認した後、ブロントは机の上に置いてある『破壊の杖』に近寄った。
ルイズは何も言わず静かにブロントの後ろで聞いていた。
「なんでこのトリートスタッフが『破壊の杖』何て呼ばれているんだ？ミミズすらも叩き倒せないものなんだが」
「なんと、この『破壊の杖』が何であるのか知っておるのか！？幾ら調べてもその正体が判らなかったので私が暫定的に『破壊の杖』と名を付けたんじゃが」
「俺が元いた世界で祭事の時に配られた杖なんだが。このトリートスタッフは俺が知っている物とは少し違うところもあるが」
「ふむ、トリートスタッフか。ところで元いた世界とは？」
「ヴァナ・ディールと言う別の世界からルイズに召喚でこの世界に呼ばれたんだが」

「なるほど・・・そうじゃったか・・・そうじゃな、君ならこの杖の元の持ち主の事が判るかもしれないな・・・」
「・・・この杖は俺が召喚されてから始めて見るヴァナ・ディールの物なんだが。誰が持ってきた訳？」
オスマン氏はトリートスタッフと呼ばれた『破壊の杖』を手に取った。
「その杖は元の持ち主であった私の命の恩人が置き忘れていったものでの、いつか返そうと思って命の恩人の事を調べ続けてもう三十年程経つのかのう・・・」
「そいつがどうしたかわからにいのか？」
「最後に会ったときが、私を助けてくれたその時限りなんじゃよ。三十年前、森を散策していた私は、ワイバーンに襲われた。そこを救ってくれたのが・・・」

――ハルケギニア　三十年前――

一人の幼児程の体躯で、獣の様な鼻をした耳長の亜人は森の中で悪態をついていた。
「まったく！冒険者の活動を促進する為に交霊祭で配るためだかわたくしの知ったこっちゃありません事ですけど、手の院の連中は杖一本もまともに作れず、つくづく無能ですこと。この多忙なわたくしがわざわざ貴重な時間を割いて協力してあげてらっしゃるのに」
その手には蝙蝠の杖頭が装飾された杖を持っていた。
「『月の力を借りて、いつでも誰にでも帰還魔法の＜デジョン＞を何度でも使用できる杖の試作品です！』何て口上は叩いて作ったはよろしいですけど、『発動の条件は月一つで半分までは満たせられる』何て月が一つ以上に増える事一生ありえないと言う重大な問題に事に気づかず作ってしまうお馬鹿さん達には困ったものですわね」

亜人は更に杖に語る様に文句を続けた。
「肝心の帰還魔法自体を込めるにもわたくしの魔力の十分の一も受けきれず、そのまま魔法を漏らして暴走してわたくしを飛ばしてしまうだなんて、杖の方としても気合が足りません事よ・・・あら？」
その亜人は森の奥で一人の男の姿を見かけた。一匹のワイバーンに襲われていた。
「オーホホホホ！そこのあなた、助けが欲しいのではなくて？」
亜人は高笑いを上げた事によって、ワイバーンの注意は目の前の男よりもか弱そうで小さい亜人の方へと向けられた。
「子供！？危ない！ここは危険だ！」
深手を負い、その場から動けなかった男が叫んだ。
「オホホホ！麗しき淑女を捕まえて『子供』だ何て心外ですわよ。確かにわたくしは身も心も何時までも若々し・・・・・・」
亜人が語る途中、ワイバーンが問答無用に突進してその頭で亜人を弾き飛ばした。
弾き飛ばされた、と怪我をしていた男は思ったのだが亜人はワイバーンの突進によりほんの一、二メイル押されただけであった。
「あら！　わたくし、ブチ切れますわよ。ただでさえ今機嫌が悪いところですの。人の話を最後まで聞け・・・・・」
ワイバーンは雄たけびを上げ、続けざまにその巨大な尾を亜人に叩きつけた。
しかしその尾が亜人に触れた瞬間、ワイバーンの尾は業火に焼かれたように触れた部分だけが焦げていた。
激痛で困惑したワイバーンは自分が叩いたはずの亜人を見た瞬間、その亜人の目が一方的にワイバーンを食い殺す存在である捕食者の目で睨まれていた。その亜人を取り囲む殺気にワイバーンは丸々と飲み込まれてしまっていた。
「・・・・・ぶっ殺す！」

そう亜人が漏らし、『ブリザド』と唱えた亜人の手から小さな氷の塊が発せられた。
戦慄で動けなくなったワイバーンはなす術も無くその氷の塊に当たった瞬間、その巨体なワイバーンの体が氷と化した。

「・・・・・ぶっ壊す!!」

続けざまに亜人は手に持った杖を空に浮かせ、浮いた杖は上空で横に激しく回って、亜人が両手を突き出すと。
回転する杖が目の前に新しくできた巨大な氷の彫像にぶつかり、そして飛竜の跡形も無く無数の氷の破片として粉砕されて辺りに散らばった。

「オーホホホホ!脆弱な生物がこのわたくしに歯向かおうなんて百万年は早いことですわよ。あら、これほど散らかしてしまって、ごめんあそばせ」
小さな亜人は手の甲を口に当てて高笑いした。
「そこのあなた・・・あら、気を失ってらっしゃるの?」
ワイバーンが粉砕されたときの迫力で深手を負っていた男は意識を手放していた。
「しょうがないですことねぇ、あなたの帰るべき場所に特別に送り届けてさしあげましょう」
そういって亜人は<デジョン>の上位魔法を唱え、気絶した男を魔法で送還した。
「あの使いようが無いトリートスタッフ、いえ、トリートスタッフー1と名づけた方がよろしいかしら?は何処まで飛んでいったでしょう?
ま、でもあんな火打石程の価値もないゴミを探すほどわたくしも暇ではなくてよ。わたくしもこんな所で油売ってる場合ではないざます」

そういい残して亜人は自分自身に帰還の魔法の＜デジョン＞をかけた。
「・・・・・なんてこと！＜デジョン＞の分際で、時空を開く事に抵抗するなんてナマイキですことよ！オーホホホホホ！」
亜人はふん！とほんの少しだけ本気を入れて自身の魔力をさらに魔法に注ぎ込み、力ずくで無理やり空間をねじ開け、元いたヴァナ・ディールへと帰っていった。
そして森にはこだまする小さな亜人の高笑いだけが残った・・・・

――ハルケギニア　現在――

「・・・・・と気を失ったうちに私は学院まで運んで貰ったようなのじゃ。怪我が回復してから再び恩人と出会った場所に赴いたんじゃが、落ちていた恩人の杖以外に手がかりは無くての。
学院まで運ばれた時も誰も恩人の姿を見ておらず、何でも私が怪我した姿で自分の部屋で倒れていたそうでの」
オスマン氏は手に持ったトリートスタッフを撫でた。
「森に残されていたこの杖を拾った私は氷漬けになったワイバーンを破砕した所から『破壊の杖』と名づけたんじゃが、実際には私にはその使い方は遂にわからんかった。ああ、もちろん別に自分で使おうと思ったのではなく、あくまでも恩人に返すための何らかしらの手がかりが無いかと思って調べただけの事なんだがね」
「その杖を空で回すのって、もしかしてブロントがフーケにぶつけた時の？」
ルイズは今日見たことを思い出して言った。
「何と！君はこの使い方を知っているのかね！？」
オスマンはブロントに詰め寄った。
「杖を回す＜レトリビューション＞はただの両手棍の技。俺は別にどんな杖でも出来るんだが。トリートスタッフの本当の使い方はそ

こではない、むしろ武器としては地位の低い雑魚。少し持たせてもらってもいいか？」

そう言ってブロントはオスマン氏の方へと手を差し出して、オスマン氏は杖をブロントに渡した。

トリートスタッフを手に持ったブロントは左手の篭手から光が漏れ出して、そしてその『ヴァナ・ディールでは重大な欠陥を持つ試作品』であるトリートスタッフに関する事の情報全てがブロントの頭の中に流れた。

「これは帰還魔法が込められたアイテムなのは確定的に明らか。俺がいたところでは本来全く使えないが、ここなら月の力が二つそなわる事によって何度でも使える最強の帰還用アイテムになったように見える」

「本当かね？」

オスマン氏は長年かけても判らなかった杖の謎をいとも簡単に解いてしまったブロントに驚いた。

ブロントは続けて左手の篭手を外した。その手に刻まれていたルーン文字が光り輝いていた。

「武器を持つとこれが光るんだが。光ると体もひゅんひゅんと素早くなるだけでなく手にした武器の扱い方も判る」

オスマン氏は光るルーン文字をしげしげと見つめた。

「ふむ、伝説の使い魔ガンダールヴの印の効果じゃな、なるほど」

「ガんダルブ？」

「そうじゃ。その伝説の使い魔はありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ。手に持った武器の扱い方がわかるのもそのお陰じゃろう」

「そうか。それより頼みたい事があるんだが・・・・」

ブロントは目を手に持ったトリートスタッフに目をやった。

「なんじゃ？君に爵位は授ける事はできないが、せめてもの礼に出来る限り力になろう」

「この杖を譲って欲しいんだが」

ルイズは慌てて口を挟んだ。
「ちょ、ちょっとブロント！オールド・オスマンのとても大事なものを譲ってだなんて！」
オスマン氏は少し自分の髭をいじりながら考え込んだ。
「俺は元々冒険者なんだがこの辺りの事はよく知らない。周辺を調べたいが必要な時にすぐにルイズの元に帰れないと使い魔の役目を果たす事をできない」
ブロントが続けた説明を聞いてオスマンはうむと頷いた。
「いいじゃろう。そもそも私の杖ではないのだからそれを決める権利は私にはないじゃろうて。危険な杖では無いとわかったし、それにここ三十年眠らせた宝物庫に保管しておくより、ヴァナ・ディールから来たという君ならその杖の本来の持ち主を探し出せるじゃろう」
「その特徴的な高笑いをする持ち主とやらはおそらく連邦のシャントットなのは絶対」
「なんと！恩人の心当たりもあるのか。それならばぜひとも君に貰って欲しい！そうか、恩人の名前はシャントット殿であったか・・・彼女は今でも息災かの？」
ブロントは苦笑いをしながら答えた。
「俺が思うにシャントットは隕石を落とされても死なないと思うが」
「そうかそうか、フーケ恩人の杖が盗まれて一時は肝を冷やしたが、逆にこうして功を奏して長年わからず終いだった恩人の事を知る事になるとはなんとも奇妙な縁じゃの。もし彼女にまた会う事があればその杖を彼女に返して欲しいが、それまでは君が自由に使っていいじゃろう」
オスマン氏はそういうと、ブロントを抱きしめた。
「よくぞ、恩人の杖を取り戻し、更にその恩人の事を教えてくれた。改めて礼を言うぞ」
「それほどでもない」
「君がした事は君にとって些細な事だったかもしれないが、私にと

ってはとても大きな意味を持つんじゃよ。今後何か困った事があったら是非頼りたまえ、力になろう」

うんうんと頷くオスマン氏に抱きしめられたブロントが少し困った顔をしたのを見つめていたルイズは少しその光景が面白く感じたのか軽く微笑んでいた。

次の日の晩、アルヴィーズの食堂の上の階にある大きなホールで毎年恒例のフリッグの舞踏会が行われていた。

中では着飾った生徒や教師達が、豪華な料理が盛られたテーブルの周りで歓談していた。

ホールの中では、綺麗なドレスに身を包んだキュルケがたくさんの男に囲まれ、黒いパーティドレスを着たタバサは、一生懸命にテーブルの上の料理と格闘している。

それぞれがパーティを満喫している中、ホールの壮麗な扉が開き、ルイズはブロントにエスコートされながら姿を現した。

門に控えた呼び出しの衛士がルイズの到着を告げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな～～～り～～～！」

ルイズは長い桃色がかった髪を、バレッタにまとめ、ホワイトのパーティドレスに身を包んでいた。肘までの白い手袋が、ルイズの高貴さをいやになるぐらい演出し、胸元の開いたドレスのつくりの小さい顔を、宝石のように輝かせていた。

一方ルイズに付き従うブロントはルイズに『パーティで甲冑姿は無粋だから何か他のものに着替えなさい』と言われたので、

幸い自分でも持っていた礼服一式に着替えていた。丈夫な霊牛のなめし革製のインナーの上に、白銀色のアルジェントコートを羽織っていた。

コートの所々に簡素な刺繍細工が施されており、その白く、謙虚なデザインはブロントという人物をうまく象徴していた。

主役が全員揃った事を確認した楽士達が、小さく、流れるように音楽を奏で始めた。

ルイズの周りには、その姿を美貌に驚いた男たちが群がり、さかんにダンスを申し込んでいた。今までゼロのルイズと呼んでからかっていたノーマークの女の子の美貌に気づき、いち早く唾を付けておこうと言うのだろう。

使い魔であるブロントに直接的にダンスを申し込む者はいなかったが、キュルケを含む何人かの女の子も群がり整然な礼服できめた長身で端整なブロントの姿をうっとり眺めていた。

ルイズは誰の誘いを断わり、ブロントの手を掴み、貴族たちがダンスを踊り始めているホールへと群がる男たちから逃げるように引っ張っていった。

そこでルイズはドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を曲げてブロントに一礼した。

「わたくしと一曲踊ってくださいませんこと。ジェントルマン」

真顔で見つめ返すブロントの反応に何か照れくさくなってルイズは顔を真っ赤に赤らめた。

ブロントは軽く微笑むと右手を自分の胸の前に当て、礼を返した。

「俺でいいのか？」

こくりとルイズが頷くと、ブロントはルイズの手を取り、ルイズをリードし踊り始めた。

ルイズが見た事も無いブロントの軽快なワルツのステップに少し戸惑ったが、徐々にルイズも合わせて踊りだし始めた。

しばらく二人とも無言で踊り続けていたが、先にルイズの方から思い切ったように口を開く。

「ありがとう」

ブロントは不思議そうな顔で見つめ返した。

「そ、その・・・・・・、フーケから二回も助けてくれたじゃない。それに・・・・・・戦う時はわたし一人じゃないって教えてくれて・・・」

ルイズはそう言うと下を俯きながらブロントと踊り続けた。
ブロントはルイズが顔を上げざる得ない様にステップを取り、その手を引っ張った。
「気にしないでいい。俺は当然の事をしただけなんだが」
「どうして？」
「俺はお前のナイトだろ」
ブロントはそう言ってルイズに静かに微笑んだ。
二つの月がルイズとブロントの白い衣装を照らすように月明かりを送り、奏でられていた一曲の最後に相応しい幻想的な雰囲気をつくりあげていた。
そんな様子をブロントの腰から観察していたデルフリンガーが、こそっと呟いた。
「おでれーた！人間である主人のダンスの相手をつとめる亜人の使い魔なんて、久しぶりに見たぜ！」

外伝・タバサと仮面　「森の仲買人」

タバサはシルフィードに乗り、ガリア王国の上空を飛んでいた。
ガリア北花壇警護騎士団のシュヴァリエである彼女はある任務を受けていた。
しかし騎士団とは名ばかりで実質ガリア王家の汚れ仕事を一手に引き受けている組織であった。
タバサが今回受けていた任務もまた国内や国外で起こる様々な面倒ごとの後始末の一つであった。
ゲルマニアとの国境沿いを埋め尽くす通称＜黒い森＞と呼ばれる森の一角になるエギンハイムの村、
そこに彼女は向かっていた。

シルフィードはバサバサと翼を羽ばたきながら背中のタバサに語り掛けていた。
「もうすぐ国境なのね。森が見えてきたのね。それにしてもおなかすいたの。すいたのーのーのー」
「うるさい」
「でもさっきお城で食べられなかったのね。シルフィこのままだとおなかすいて倒れてしんじゃうのね」
「村についたらご飯にする」
「ほんと？おにくも食べれる？ほんと？」
「約束する」
「うれしいな。うれしいな。おにくのためならシルフィ頑張るのね。おにくおにく。るる。るー、あれお姉さま、何かくるよ？」

エギンハイム上空に差し掛かった時、任務であった「村に被害を及ぼしている翼人の掃討」の対象に当てはまる四人程の翼人戦士が

タバサを迎え、飛んできた。
翼人は高度を取りながら飛ぶシルフィードを見上げ警戒するように距離を取りながら、
一人の翼人が呪文を口ずさみ、他三人の翼人もそれに続いた。
「茂りし葉は契約に基づき＜力＞を得て竜を退ける矢と化す」
「「「矢と化す」」」
すると森から矢のように鋭く尖り、鉄片のように硬くなった無数の葉がシルフィードの行く手を遮るように射掛けられた。
同時にタバサが杖を振るって氷の粒を含んだ風で、飛び来る葉の矢を薙ぎ払った。

「はぐれ風竜ではないぞ！メイジの使い魔だ！」
一人の翼人が叫んだ。
タバサはすかさず杖を構えなおしてルーンを唱えた。
「まて！我らに害意はない」
翼人の一人がそういってタバサに静止を求めた。
タバサは無言のまま杖を向けていた。
「はぐれ風竜が村へ向かってくるのと早合点をし、追い払うための威嚇のつもりだったが、まさかメイジの使い魔とはつゆ知らず。先ほどの無礼は謝らせてもらう」

そういって翼人たちは恭しく頭を下げた。
そう言われて見ると先ほどの翼人の攻撃はタバサが手を出さなくても大きく狙いを外れ、シルフィードには当たらなかっただろう、とタバサは思い、杖を下ろした。
それにそのまま空の制約無しに飛べる翼人を上空で相手にするのは分が悪かった。
速度では風竜であるシルフィードは誰にも負けないが、タバサを落とさずに小回りを利かせて飛ぶのは難儀である。
タバサ自身も＜フライ＞で飛べなくも無いが、そうすると他の呪

文を詠唱する事ができない。

「御理解頂き感謝する。こちらは大事な式の準備で何か大事があってはならぬと警戒していた所だ。
そなたはどちらに向かっていたのか聞いてもよいか？」

タバサはこの任務「対象」を前にして、どうでるか悩んでいた時、シルフィードが口を挟んだ。

「お姉さまは大事な任務でエギンハイムの村に用事があるのね！だから早く通すのね！」

態々相手に『自分が敵です』と宣言してしまったシルフィードに対してタバサは杖でぽかぽかと頭を叩いた。

「痛い！痛いのね！」

「驚いた、風韻竜か。絶滅したと聞いてその種の姿を見なくなってしまって久しいが、まだ生存していたのか」

そう驚いた翼人はパサパサと翼を羽ばたかせながら再びタバサに向かって語りかけた。

「ところでエギンハイムの村に用があるのであれば我らが案内しよう」

タバサが任務を受けた時は、エギンハイムの村人が切り倒して生計を立てているライカ欅の一つに翼人たちが住み着き始め、その翼人たちが村人を害していると聞いていたのだが、目の前の翼人との会話の様子から何か情報が食い違っているようだった。

詳しい状況を把握するためにもタバサはおとなしく翼人の案内に従う事にした。

そうして村へと案内されたタバサとシルフィードはそこで見た光景に驚いた。

住人二百人程の小さな村ではあるが、あちこちに花で拵えた飾りがしてあった。そしてせっせと飾りつける村人に混じり、何人かの

翼人も忙しそうにものを運んでいた。

タバサを案内した翼人がゴツイ一人の男を呼び寄せると
「サム殿、こちらのメイジがこの村に用事があるそうだ。そして先ほど見た風竜はこの方の使い魔だそうだ」
とタバサを村の顔役らしいこの男と引き合わせ、四人の翼人はその場を離れた。
サムと呼ばれた男はタバサのマントと手に持つ杖を確認し、横でおとなしくしている風竜に少しビクつきながら聞いた。

「も、もしかしてお城の騎士さまで？」
タバサは頷いて、短く自分の地位と名前を述べる。
「ガリア花壇騎士、タバサ」

「つかぬ事をお聞きしますが、もしかして翼人退治の件で？」
タバサはこくりと頷いた。
「やっぱりそうでしたかい。せっかく来て頂いてなんですが、実はその依頼を取り下げようと思っていたところだったんだ」
と申し訳なさそうに目の前のゴツイ男はぺこぺことした。
「どういう事？」
会話の間、村の様子を観察していたタバサには村人達と翼人達が敵対しているようには見えなかった。
「確かに数日前までは俺たち村の連中は翼人たちといがみ合って自分たちだけで翼人たちに立ち向かうところだったんですわ。何せ領主さまに何度も翼人退治の願いを出してもナシのつぶてにされて来たので」
「でも、この様子は？」
「へぃ、見ての通り村の連中と翼人たちとは取りあえず和解する事になったんで。その証といってなんですが今日、俺の弟のヨシアと向こうの翼人のアイーシャって娘との結婚式があ

るんで、それで皆こうして準備しているんだ」
そう言われて見ると忙しそうに動く村人たちはどこか陽気な雰囲気の中で作業していた。
「和解？」
「ああ、まだ皆が皆、翼人どもを完全に信用したわけじゃないが。村に立ち寄った仮面の男の計らいで、取りあえずは共にやって行こうと言う事に落ち着いたってわけよ」
「仮面の男について詳しく教えて」
タバサは、興味深げに聞いた。

サムと呼ばれた男はタバサに説明した。数日前に鉄仮面を被り、白い鎧を着込んだ衛士姿をした男が村を訪ねてきたこと。
その仮面の男は依頼主が明かせぬために、自分の身分を隠し、秘薬の触媒となる材料を求めてこの『黒い森』までやってきていた。仮面の男は周辺の木々にできる蜂の巣から）極少量しか採取できない特殊な蜜を探し求めていた、
しかし空高く伸びるライカ欅に出来るその蜂の巣はその仮面の男一人では手が出せなかった。
そこで仮面の男はライカ欅に住まう翼人たちを尋ねた。翼人たちは突然現れた人間の男を信用する事は出来ない、
とその場では男の頼みを断ったが、中々食い下がらないその男に代わりに交換条件をだした。
住みかにしているライカ欅に生える寄生植物の宿木によって木々が最近弱ってきている事で翼人たちは悩んでいた。
しかし数が少なく、大事な子育ての季節で忙しい翼人たちでは宿木の駆除にまで手が回らなかった。
そこで仮面の男がライカ欅に生える宿木を駆除してくれるのであれば、翼人たちがたまに採取している蜂の蜜を分けてくれると約束した。
そして仮面の男は再び村へやってきて、サムの弟のヨシアを含む

何人かを人手として雇い、翼人たちが住まうライカ欅の幹に生える宿木を取り払った。

取り除かれた宿木はその場でその仮面の男が村人から買い取った。わざわざそのようなものに金を出して買い取る事を雇われた村人たちは不思議に思ったが、聞けば何でも木々に寄生し生命力の強い宿木は秘薬の触媒として価値があるのだそうだ。

そうした些細な事から始まった事ではあったが、村人たちと翼人たちの双方で『互いに協力して得られるものがある』という事に気づきだした者たちがでてきた。

以前から翼人の娘の一人と交流があったヨシアの強い勧めもあって、

互いの種族の要望を話し、聞き合う場を持つために仮面の男を仲介人として仲を取り持ってもらった。

そこで村の者は作物や人手のいる労働力を翼人の者たちに提供する事になり、

代わりに翼人たちの方は空の上から街で売れそうな珍しい秘薬の触媒を探したり、村の連中を街まで運ぶ仕事をしてくれるという事で互いに協力していく事を決めた。

「と、それを機会に何でも以前から弟が密かに付き合っていた翼人の娘との結婚式を挙げてしまおう、とトントン拍子に決まったんでさ。

式が済んだら、翼人退治の依頼を取り下げようとお城に使いの者を出すつもりだったんですが、

その結果こうして騎士さまに無駄な足労かけさせちまって本当にすまねえ」

とサムは頭を下げた。

「その後、仮面の男は？」

「せっかく弟が出る式があるんだから、出席して欲しいと頼んだんですがね。
村の連中と翼人たちの間を取り持った後に何かこう黒い杖を取り出して、何か魔法みたいなのかけて、帰っていっちまったよ」
そして何かを思い立ったかのようにサムは続けた。
「そうだ、騎士さまもせっかくこんな所まで来て頂いたんだ、その仮面の男の代わりとは言ってなんですが、式に出席していただけねえですかい？―」
タバサは任務を遂行する必要がなくなったのであれば長居をするつもりはなかったので、断ろうと思っていたところ、
「―盛大なご馳走も用意してあるんで、食べていってくださいよ。それにお城の騎士の公認下で式が挙げられれば弟たちも喜びますと思うぜ」

『ご馳走』と言う言葉に耳をピクッと動かせたタバサは、シルフィードと交わした『村についたら食事をする』という約束を思い出し、
取りあえず形だけでも式に出席する事に決めた。

タバサは新郎新婦に城の騎士としてその仲を認めるというくだりを含めた簡潔な挨拶をした。
騎士の祝福を受けたヨシアとアイーシャの二人は大層喜んで感謝の言葉を述べた。それをタバサは聞きうけると、
早々にご馳走の席へシルフィードと共に挑んだ。
そうしてタバサとその使い魔は満足するまで用意された料理を食べ尽くしたので、
式の終了を待たずに周りに簡単な別れの挨拶をして出発した。

そうしてタバサはシルフィードに跨り、上空を飛んだ。
「おにくいっぱい食べれたのね。今回の任務はたくさんおにく食べ

るだけでとっても楽だったのね！
お姉さまも危険な目にあわずに済んで誰だかわからないけど仮面の男に感謝！感謝！
こういう任務ばっかりならシルフィも大歓迎なのね！結婚式も綺麗だったのね！・・・・・・」
と、魔法学院に戻ったら、こうしておしゃべりが出来ないシルフィードの口が静まる事を知らず、
タバサはうるさいと文句を言いながら本を読みつつ聞き流し、魔法学院への帰路についた。

第１１話　「稀なる客人」

トリステイン城下町の一角にあるチェルノボーグ監獄で、土くれのフーケは刑が決まる裁判の日を待っていた。

フーケはどんな極刑が待ち構えているのかぼんやりと粗末なベッドで考えていた。

「あれだけ、貴族どもをコケにしてやったんだ、縛り首が妥当かねぇ・・・・・・」

する事も無く、ただひたすら待つだけの身なので寝ようと思い、フーケは目をつむった。

しかしフーケはふと鉄格子の向こうに何かを感じた。嫌な気配がした！

フーケは目を開けると長身の黒マントを纏った人物が立っていた。顔は白い仮面で覆われて、マントから長い杖が突き出ていた。

「おや、こんな寂しい場所に客人なんて、珍しいわね」

フーケは仮面を被ったこの人物は口封じのために送られてきた刺客だろうと当たりをつけていた。

貴族から盗んだ物の中には裁判を通じて明るみにでたら、所要主にとってはまずい品が幾つかあった。

「あたいが何故ここに収容されたかおわかりになりますでしょうかね？見ての通り、どう足掻いてもあたいは極刑は免れない、だから裁判で何を盗んだかしゃべる気はさらさら無いさ。と言うわけで、あんたを送った依頼主の所にとっとと戻って伝えな、『あんた等から盗んだお宝は、全部あたいと一緒に土の底の地獄まで持っていってやる』てね」

黒マントの人物は口を開いた。年若く、力強い男の声だった。

「勘違いしてもらっては困る。話をしに来た『土くれ』よ、いや、それともマチルダ・オブ・サウスゴーダと呼んだ方がいいか？」

かつて捨てる事を強いられた貴族の名を口に出されたフーケは顔から血の気が一気に引いた。
「あ、あんた、一体何者？」
フーケの問いに、男は笑って言った。
「我々はハルケギニアの将来を憂い、我々の手でハルケギニアを一つにするために国境を越えて立ちあがった貴族の連盟さ」
「はん！その貴族連中がこんなコソ泥に一体何の用が？」
「我々は無能な王家を打ち倒し、そして、我々有能な貴族が政を行うために、優秀なメイジが一人でも多く欲しい。
我々の同士とならないかね？『土くれ』よ」
「で、あたいがそれを断ったら？」
「今聞いた事を、この場で土の底の地獄まで持っていって貰う」
フーケは笑った
「露骨に脅していくなんて、いやらしいったらありゃしないわね。その『我々』と呼んでいる連盟とやらはなんていうんだい？」
「味方になるのか？ならないのか？どっちなんだ？」
「これから旗を振ってやる組織の名前は、先に聞いておきたいだけさ」
男はポケットから鍵を取り出し、鉄格子についた錠前に差し込んで言った。
「レコン・キスタ」

――トリステイン魔法学院――

◆　◆　◆　◆

ルイズは再び港町の夢を見ていた。以前と同じく美しい街並みで

はあったが、物々しい兵士の姿をいたる所で見かけた。
見覚えのある道を歩く中、周りの風景が少し低くなっていた様に感じた。
夢の中での自宅に辿り着いたとき、以前は胸元付近の高さにあったドアノブが、今ではルイズのお腹の辺りまで下がっていた。
ノブを回して扉を開けると、そこには例の赤ローブのエルフ女性が人の顔の紋章が施された黄金に輝く盾を携え、
金属製の棍を腰に下げた姿でルイズを迎えた。
『何姉さんいきなり家にいるわけ!?獣人との戦争が始まってから、しばらくは会えないって言ってたのに』
自分の口から発せられる声にルイズはどこか聞き覚えがあったのだが、まどろみの中でうまく思い出せないでいた。
『――――、元気にしていた?ここで三国首脳会議が近々行われるらしいから、その警護の事前視察として偵察隊を率いるわたしが派遣されたのよ』
『そうなんだ、じゃ、しばらく滞在するんだ?』
『そうね、街の防衛状況や兵力を把握する作業に数日はかかるわ。もっとも、細かい事はわたしと共に来た軍学者の第一人者と呼ばれている方が殆どやってくれるわ』
『それで、暇でする事無いから、うちに遊びに来たって訳?』
『何よ、つれないわね。以前パールで話した時、『戦うためのナイトの術を学びたい』って言っていたから、お姉さん忙しい時間から暇を見繕って教えてあげようと来たのに』
そういってエルフの女性はプイッと顔を背けて拗ねてしまった。
『ごめん、そういうつもりじゃなかったんだ。お願いだから教えて欲しいんだけど。ねえさ・・・じゃなくて、お姉さま』
「お姉さま」と呼ばれ機嫌を治したのか、エルフの女性はフフン♪と嬉しそうに鼻を鳴らした。
『そうね、――――には特別にナイトの秘伝を教えてあげるわ』
そう言ってエルフの女性は苗が鉢入れ取り出し、ルイズに手渡し

た。
『何これ？植木鉢？』
『そうよ、それには花の種が植えられているわ』
ルイズは怪訝そうに手に持った鉢をじっと見つめた。
『これとナイトになるのに何が関係あるわけ？』
エルフの女性は誇らしげに胸を張って、人差し指をチッチッチと振った。
『たった数日間、剣や盾振り回したって教えられる事はたかが知れているわ。それよりもっと重要な『騎士の心得』がそれを育てる事によって学べるわ』
『花なんて育てたって、獣人どもには対抗できないじゃないか』
『わかってないわね。いいわ、お姉さんが一つ話をしてあげる。といってもこの花の種をくれた人達の事だけどね―』
そうしてエルフの女性は戦場で会った一組の男女の話をした。
とある王族の生まれであると言う少女とその従者として付き従う遍歴騎士の男。
『その王族出であると言う子は何でも少し前までは花屋の看板娘をやっていたらしいわ。その子は『何か助けられる事は無いか』と今でも前線に参加しているわ』
『兵士でもない、元花屋の人なのに？』
『ええ、その戦場に咲く花の様な可憐な存在のお陰で何人もの兵士達は戦う勇気と希望与えられた。
でもそれは彼女一人で出来る事ではないわ』
『・・・もしかしてその彼女を守っている騎士もいるから？』
『その通りよ。花は咲き誇る事によって初めて周りに色々な感動や力を与えてくれるわ。でも花と言うのはそれまでは凄く脆い存在でもあるの、誰かが守ってあげなければどんな花を咲かせるか、それを知る前に枯れてしまうわ。そしてその守る存在と言うのが『ナイト』と言うわけ』
エルフの女性はルイズの肩をぽんと叩いた。

『しっかり者のあなたは誰かに守られる『花』と言うより、それを守る『ナイト』に近い性質も持っているとお姉さんは思うわ。本当ならあなたが守りたいと思う者を探す事が一番早いんだけど、流石にあなたの年にはちょっと早いから・・・』

『まさか、それで』

『そう！だから代わりにこの花を育ててみなさい。騎士の心得に色々通じるものがあるはずよ』

『・・・・・何か適当にそれらしい事言ってごまかしてない？』

『不満に思うのなら早くあなたが本当に守るべき『花』を見つけることね。でも、それはただの花だと思って侮らない方がいいわ。その種をくれた子によると、花を咲かせるのがとても大変な＜夢幻花＞だそうよ』

『花なんて育てた事ないんだけど・・・』

『フフン・・・・・♪お姉さんは抜かりなく世話の仕方はその子から聞いているわ。まずは――』

そうしてルイズは大人しくエルフの女性から事細やかに夢幻花を育てるコツを教えてもらった。

『――と言ったところかしら。じゃ、お姉さんとの約束よ？『花』が咲くまで必ず守り通す、って』

そうしてエルフの女性がにこりと笑いかけると、その顔と共にルイズが見ていた風景は白く塗りつぶされた。

◆　◆　◆　◆

――ィ――――

―お―ィ――

「おいィ!?いい加減起きろといってるサル!」

ブロントはベッドで寝ているルイズの毛布を剥ぎ取った。

「う・・・えぁ・・・あ、おはよ、ブロント・・・」

ルイズは寝ぼけ眼をしぱしぱとした。

「寝坊したのは確定的に明らか。今から用意しても時既に時間切れ」

「え”・・・今・・・何時よ?」

「九時を過ぎたとこだが」

ルイズはガバッとベッドから跳ね起きた。

「何で起こしてくれないのよ!」

「おう、お嬢ちゃんよ、相棒はちゃんと時間通りに起こしたぜ。けどよ、お嬢ちゃんは『うん、わかった。そうするよ』って答えていたから後は自分で起きるもんだと思って相棒と先に厨房に寄っていたぜ」

デルフリンガーが鍔を鳴らしてルイズの声を真似て裏声をだしながら説明する。

「・・・・・わたし、そんな事を言った覚えないわよ」

「寝坊対策とかすこし頭を使えばどうでもなる問題を考えもせずに人に頼り切るからこういう結果になる」

ブロントはため息を吐く。

「・・・何よ・・・まあ、とにかくもう過ぎてしまった時間の事はしょうがないわ。午後の授業は出るから準備を・・・何それ?」

ブロントは先程から手にもった紙袋から何かを取り出しては口に入れてボリボリと食べていた。

「アーミービスケットを知らないのかよ?」

「あーみービスケット?何が入っているの?」

「小麦粉とライ麦粉にセサミを混ぜて、それにヨーグルトとこの前採って余った蜂蜜を練りこんだ。それをバターで――」

「へぇー、色々入って結構おいしそうじゃない」

と、ルイズは紙袋から一つビスケットを摘んで口にいれた。
ポリポリ・・・
「――水分が完全に枯渇的に無くなるまで硬く焼いたものなんだが」
ルイズは頬をすぼめて「けふっ」っと咽た。一方ブロントは平気な顔でボリボリと食べている。
「けほっ、けほっ、よくこんなパサパサなもの食べられるわね、口の中が一瞬でカラカラよ」
「軍用食だから大してうまくはないんだが。うまいから食べるんじゃない、こうして無性に食べたくなって食べてしまうのがアーミービスケット」
ボリボリ・・・
「確かに・・・あまり、おいしくはないわ」
ポリポリ・・・
「おいィ?そう言ってなに二枚目食べているわけ?」
ボリボリ・・・
「な・・・なんとなくよ!さっきのは味がよくわからなかったから。まだ沢山あるのならちょっとぐらいはいいじゃない」
ポリポリ・・・
ボリボリ・・・
ポリポリ・・・
ボリボリ・・・
「もう一枚頂戴。思ってたより味は無いんだけれど、ちょっとこれは癖になるかも・・・」
ポリポリ・・・
「俺は九枚でいい」
ボリボリ・・・
ポリポリ・・・
ボリボリ・・・
ポリポリ・・・
ボリボリ・・・

「ヴァリエール・・・何暢気に栗鼠の真似をしているのよ」
いつの間にかキュルケがルイズの部屋の入り口に立っており、呆れた様子でルイズを見ていた。
「ぶっ！げほっ！げほっ！ツ、ツ、ツェルプストー！？」
「授業をサボって、宿敵ヴァリエールが何しているかと思って来て見てみたら、ブロントさんとイチャイチャしてただなんて。あんたも中々やるわね」
「けほん！イチャ・・・そんなんじゃないわよ！そ、そ、そ、そういうツェルプストーは今授業に出てないでここで何しているのよ？」
「あら、本日の授業は中止になったわ。何でも我がゲルマニア国への訪問を終えた姫殿下が今日この魔法学院に寄ってくるそうよ」
「ええ！？姫殿下が？」
「品評会の時はフーケ騒ぎで色々慌しかったから、改めてのご挨拶じゃないの？とにかく歓迎の式典があるから生徒達は正装して参加との事よ」
ルイズは口の中のビスケットを慌てて飲み込むと急いで服を着替え始めた。
「こうしていられないわ！ブロント手伝って！水場まで行くわよ！」
ルイズは制服に着替え終えると、ブロントを連れて部屋を飛び出した。
「やれやれ、殿方を前にしているというのに、ヴァリエールのはしたない様子ったら、まだまだ子供ね。女としてはあたしの圧勝かしら？」
キュルケはやれやれと両手を広げて肩をすくめた。そして何気無くテーブルに残された紙袋から、ビスケットを一枚手に取った。
「ふーん、こんなビスケットに夢中になっちゃって・・・・・・」
ポリポリ・・・
「・・・んっ、・・・・こ、これは・・・ちょっと・・・！」
キュルケは思わず頬をすぼめて「けふっ」っと咽た。

正午前。
聖獣ユニコーンと水晶の杖が組み合わさった紋章が描かれた王女の馬車が魔法学院の門に到着すると、
馬車の前には紅毛氈の絨毯が敷き詰められた。
「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな～～～～りぃ～～～！」
呼び出しの衛士の号令と共に整列していたルイズ含む生徒達は手に持った杖を一斉に掲げた。
まず最初に馬車から現れたのはマザリーニ枢機卿であった。今は亡き先帝の代わりにトリステインの政治を一手に引き受けていた彼は、
『鳥の骨』の様にガリガリにやせ細り、四十代とは思えぬような老け込み様だった。
王女の登場を期待していた生徒達は露骨に不満の意を表した。
しかし、マザリーニは意に介した風もなく、馬車の横に立つと、続いて降りてくる王女の手を取った。
生徒の間から歓声が舞い上がる。
先帝亡き後、年若く麗しいアンリエッタ王女は国民から絶大な人気を誇っていた。
ルイズと共に式典に参加していたブロントは何気なく王女一行を眺めていたが、
横目でふとルイズがはっとした顔になったのに気づき、ブロントはルイズの視線の先を追いかけた。
その先には鷲の頭と獅子の胴体を持った幻獣の姿があった。背中には貴族が跨っていた。
(ほう、ここはステーキか？それともそれに山の幸串焼きと獅子ケバブを合わせて更なる味の強化か？)
ブロントが頭の中で調理イメージを巡らせている中、ルイズは始

終、
幻獣の上に跨る見事な翅帽子を被った貴族の姿をぽーっと頬を赤らめながら、じっと見つめていた。

その日の夜・・・・・・

ブロントは夢幻花の鉢の世話をしながら、時々ルイズの様子を気にしていた。
式典の時からルイズの様子が少し変で、何かと落ち着きがなかった。
ブロントの呼びかけにも上の空で部屋をうろうろ歩き出したかと思うと、今度はベッドに座り込み枕を抱いてぼんやりしていた。
「おいぃ？何ソワソワしてるわけ？」
ブロントはルイズの目の前で手を振った。
「え？え？ああ、な、何ブロント？」
ルイズはハッと気を取り戻すと同時に、ドアがノックされた。
「こんな時間。誰かしら」
ノックは規則正しく、初めに長く二回、それから短く三回叩かれた。
ルイズはすくっとベッドから立ち上がり、ドアを開いた。
そこには真っ黒な頭巾をすっぽりと深く被った人物がいた。
部屋の外を伺う様に首を回したあと、そそくさと部屋に入ってきて、素早くドアを閉めた。
「・・・・・あなたは―」
ルイズが続ける前に、頭巾を被った人物は、人差し指を口元に立てて、
羽織ってるマントの隙間から杖を取り出すと、短くルーンを呟いて軽く振った。
光の粉の様な物が部屋中に舞う。

「＜ディティクト・マジック＞？」
ルイズが思わず尋ねた。頭巾の人物は頷く。
「どこに耳が、目が光っているかわかりませんからね」
頭巾の人物は若い少女の声をしていた。
探知魔法で何も無いことを確かめると、少女は頭巾をとった。
現れたのは、何とアンリエッタ王女であった。
「姫殿下！」
ルイズは慌てて膝をつく。ブロントもルイズのその様子を見て、続けて膝をつく。
アンリエッタは涼しげな、心地よい声で言った。
「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

第１２話　「いつか見た夢」

ルイズの部屋に現れたアンリエッタ王女は、感極まった表情を浮かべて、膝をついたルイズを抱きしめた。
「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」
「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へ、お越しになられるなんて・・・」
ルイズはかしこまった声で言った。
「ああ！ルイズ！ルイズ・フランソワーズ！そんな堅苦しい行儀はやめてちょうだい！あなたとわたくしはおともだち！おともだちじゃないの！」
「もったいないお言葉でございます。姫殿下」
ルイズは緊張し畏まった口調で言った。
「やめて！ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をしてよってくる宮廷貴族達もいないのですよ！もう、わたくしには心を許せるおともだちはいないわ。昔馴染みの懐かしいルイズ・フランソワーズ、あなたにまで、そんなよそよそしい態度を取られたら、わたくし死んでしまうわ！」
「姫殿下・・・」
ルイズは顔を持ち上げた。
「幼い頃、いっしょになって宮廷の中庭で蝶を追いかけたじゃないの！泥だらけになって」
「・・・・・ええ、お目下を汚してしまって、侍従のラ・ポルトさまに叱られました」
「他にも――」
ルイズと王女は互いに昔の懐かしい思い出を語り合い始めた。
「ほう王女とフレンドなのか」
ルイズが顔を上げたので、ブロントも顔を上げルイズに尋ねた。
「姫さまがご幼少のみぎり、恐れ多くもお遊び相手を務めさせて頂

いたのよ」
　そこでアンリエッタは精悍な顔付きをしたブロントに気づいた。
「あら、ごめんなさい。もしかして、お邪魔だったかしら」
「お邪魔？どうして？」
「ああ、ルイズ・フランソワーズ。あなたが、こんな素敵な彼を恋人にしていたなんて、わたくしの事のように嬉しいわ。いやだわ。わたくしったら、つい懐かしさにかまけて、とんだ粗相をいたしてしまったみたいね」
「こ、こ、恋人ぉ！？いえ、そ、その、ち、違います姫さま！あれはただの使い魔です！・・・そう、ただの使い魔です・・・」
　ルイズは首をぶんぶん振って、アンリエッタの言葉を否定した。
「使い魔？ですが品評会で踊りをみせて頂いたあなたの使い魔は、この方とは・・・」
　ブロントは鎧を大きく鳴らしながらステップを踏んで、決めのポーズとり、その踊りで王女の疑問に答えてみせた。

――千の言葉より残酷な俺という説得力

「えっ、・・・・・ええっ！？まさか、本当に彼が！？」
　ルイズは黙ってアンリエッタの問いに頷いた。
　アンリエッタは、目の前の凛々しい姿の男が、使い魔の品評会にて逞しい肢体を露わにして踊ってみせた者であった事を知り、驚きを隠せなかった。
　そしてアンリエッタはブロントの事をまじまじと見つめる。
「あの心に響く踊りを見せたのが彼だったなんて・・・ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変わっていて、わたくしを驚かせてばかりいましたけれど、相変わらずね」
「この使い魔が勝手にやった事で、別にわたしがやらせたんじゃありません」
「あの時のゴーレム騒ぎがなければ品評会の優勝者は間違いなくあ

なたの使い魔だったわ、ルイズ。あの舞と演奏は王宮内でも評判になって、再び見てみたい、と言っている方々が多数おりますわ。ふふ、わたくしもその内の一人ですけど」

「姫さま、もしかしてその事を伝えるために？」

途端、アンリエッタは憂鬱な顔をして深い溜め息をついて、ベッドに腰掛けた。

「ああ、毎日がその様な愉快な事だらけだったらどんなに良い事か・・・でも・・・・・いえ、なんでもないわ。ごめんなさいね・・・・・あなたに話せる様な事じゃないのに、わたくしってば」

「姫さま、どうなさったんですか？あんなに明るかった姫さまが、そんな風に溜め息をつくという事は、何か悩みがおありなのでしょう？」

「唯一心を許せるおともだちを危険に送り込もうと思っていた自分が恥ずかしいわ、この事は忘れてちょうだい。ルイズ」

「いけません！昔は何でも話し合ったじゃございませんか！わたしをおともだちと呼んでくださったのは姫さまです。そのおともだちに、悩みを話せないのですか？」

ルイズにそう言われ、アンリエッタは嬉しそうに微笑んだ。

「わたくしをおともだちと呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とても嬉しいわ」

アンリエッタは決心したように頷くと、ルイズに悩みを打ち明けた。

トリステイン王国と共に長い歴史を持つアルビオン王国が今現在レコン・キスタを名乗る貴族派達による反乱がおきている事。

そしてそのレコン・キスタとはハルケギニア統一を目指しているため、現在圧倒的不利な立場にいるアルビオン王室が倒れたら、次にトリステインに侵攻してくるであろう事。

それに対抗するためにトリステインはゲルマニアと同盟を結ぶ事を選び、そのためにアンリエッタ王女がゲルマニア皇室に嫁ぐ事に

なっていた事。
しかし、王女は以前、アルビオン王家のウェールズ皇太子に一通の手紙を送っていた。
その手紙にはゲルマニア側に知られれば婚姻を破棄されてしまうことは必須な事が書かれており、
トリステインとゲルマニアの同盟を望まないアルビオン貴族派の反乱軍の手にその手紙が渡ってしまえば、
すぐにでもゲルマニアの皇室に送り届けられるであろうという事。

「では、姫さま、わたしに頼みたい事というのは・・・・・・」
「無理よ！無理よルイズ！わたくしったら、何てことでしょう！貴族と王党派が争いを繰り広げているアルビオンに赴くなんて危険なこと、頼めるわけがありませんわ！」
「何をおっしゃいます！たとえ地獄の釜の中だろうが、竜のアギトの中だろうが、姫さまの御為とあらば、何処なりと向かいますわ！」
ルイズは膝をついて恭しく頭を下げた。
「このわたくしの力になってくれるというの？ルイズ・フランソワーズ！懐かしいおともだち！」
ルイズはアンリエッタの手を握り、熱した口調でそう言うと、アンリエッタはボロボロと泣き始めた。
「もちろんですわ！姫さま！このルイズ、いつまでも姫さまのおともだちであり、紛う事なき理解者でございます！永久に誓った忠誠を、忘れる事などありましょうか！」
「ああ！忠誠。これが誠の友情と忠誠です！感激しました。わたくし、あなたの忠誠を一生忘れません！ルイズ・フランソワーズ！」

ルイズとアンリエッタが互いの手を握り合って、目に涙を浮かべて感動している間、
デルフリンガーがブロントに囁いた。
「おい、相棒。扉の向こうにさっきから誰かいるぜ」

ブロントはすかさずデルフリンガーを抜き放ち、部屋のドアへと投げ刺した。
デルフリンガーはゴスッと音を立て、刃の根元までドアに刺さり、反対側に突き出た部分で聞き耳立てていた人物を出迎えた。
「よう！こんな時間にどーした気障っぽいにいちゃんよ？そんなとこで立ってると、部屋を出る奴にぶつかって危ねえぞ？用があるならちゃんとはいれや」
部屋のドアがキィと音を立てて開いた。
なんとそこには以前ブロントと決闘したギーシュ・ド・グラモンが立っていた。
ギーシュは固まった表情でデルフリンガーを凝視しながら、ドアノブにかけた手がぶるぶる震えていた。
「ギーシュ！あんた！立ち聞きしていたの？今の話を！」
「はは・・・いやね、薔薇のように見目麗しい姫さまのあとをつけてきてみればこんな所へ・・・・・・それでドアの鍵穴からまるで盗賊のように様子を伺えば・・・・・・そこの剣に出迎えられたと・・・」
ブロントが歩み寄り、ドアに刺さったデルフリンガーを引き抜いた。
「ドアの向こうで隠れていれば見破れないとでも思った浅はかさは愚かしい。またボコボコにされたいらしいな、知っていると思うが手加減できないし最悪の場合病室にまた行くことになる」
そう言ってブロントはギーシュの胸倉を掴む。
「ちょ・・・ちょっと待ちたまえ！ブロント・・・さん！」
ギーシュはブロントの手を振り解き、アンリエッタの前に素早く滑り込み、膝をつける。
「姫殿下！その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけますよう」
「グラモン？あの、グラモン元帥の？」
「息子でございます。姫殿下」

ギーシュは立ち上がり、恭しく一礼した。
「あなたも、わたくしの力になってくれるというの？」
「任務の一員に加えてくださるなら、これはもう、望外の幸せにございます」
熱っぽい口調でギーシュはそう言った後、誰にも聞こえぬ小声で呟いた。
（と言うより、加えてもらわないと今ここでホトゥケの刑にあってしまう！）
「ありがとう。お父様も立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるようね。ではお願いしますわ。ギーシュさん」
デルフリンガーが愉快そうにケタケタと鍔を鳴らした。
「よかったな、にいちゃん。もし一員に入れて貰えなかったら、今頃相棒の手によって俺の錆びの仲間入りしてたな！」
ブロントが、ポンポンとギーシュの肩に手を乗せた。
途端、ギーシュの額から今まで我慢していた汗がぶわっと流れ出す。
そんなやり取りには目もくれず、ルイズは真剣な声で言った。
「では、明日の朝、アルビオンに向かって出発するといたします」
「旅は危険に満ちています。アルビオンの貴族達は、あなたがたの目的を知ったら、ありとあらゆる手を使って妨害をするでしょう」
アンリエッタは机に座ると、ルイズの羽ペンと羊皮紙を使って、さらさらと手紙をしたためた。
アンリエッタは、じっと自分が書いた手紙を見つめて、顔を赤らめると、
決心したようにうなずき、末尾に一行付け加えた。それから小さい声で呟く。
「始祖ブリミルよ・・・・・・。この自分勝手な姫をお許しください。でも、国を憂いても、わたくしはやはり、この一文を書かざる

をえないのです・・・・・・・自分の気持ちに、嘘をつくことはできないのです・・・・・・」

密書だというのに、まるで恋文をしたためたようなアンリエッタの表情だった。

ルイズは何も言わず、じっとそんなアンリエッタを見つめるばかり。

アンリエッタは書いた手紙を巻き、杖を振る。すると、手紙に封蝋がなされ、花押が押された。

「ウェールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡してください。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう」

それからアンリエッタは、右手の薬指から指輪を引き抜くと、ルイズに手渡した。

「母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。お金が心配なら、売り払って旅の資金にあててください」

ルイズは深々と頭を下げた。

そしてアンリエッタはブロントの手を取った。

「頼もしい使い魔さん」

「それほどでもない」

「わたくしの大事なおともだちを、大切な人を、これからもよろしくお願いしますね」

朝もやの中、

ルイズとブロントとギーシュは馬に鞍をつけ、出発の準備をしていると、

ギーシュは困ったように言った。

「お願いがあるんだが・・・ぼくの使い魔をつれていきたいんだ」

「使い魔？あのジャイアントモールを？」

「おいで、ヴェルダンデ」

ギーシュは足で地面を叩くと、モコモコと地面が盛り上がり、小

さなクマほどもある巨大モグラが顔を出した。
ギーシュはすさっ！と膝をつくと、そのモグラを抱きしめた。
「ヴェルダンデ！ああ、ぼくの可愛いヴェルダンデ！」
「これからアルビオンに行くのよ。地面を掘って進むジャイアントモールを連れて行けないわよ」
ルイズは困ったように言うと、ギーシュは地面に膝ついた。
「お別れなんて、つらい、つらすぎるよ・・・ヴェルダンデ・・・」
その時、巨大モグラが鼻をひくつかせた。ルイズの前でピクピク鼻を動かした後、比べる様に次はブロントの前でくんかくんか、と鼻を鳴らし、ブロントに擦り寄る。
「おいィ？何盾を嗅ぎ回っているわけ？」
巨大モグラはブロントに抱きつき、モグモグと嬉しそうにブロントの盾に鼻を擦り寄せた。
ミスリル鉱とダーク鉱を鋳造し合わせた合金に、アダマンチウムの板で表面を補強し、
黄金と白金で「生命力」を表す紋様が施されたブロントのケーニヒシールドは、
貴金属や宝石を好むジャイアントモールのヴェルダンデにとっては、
その甘美なる金属の匂いの魅力に抵抗する術はなかった。
「ヴェルダンデは貴重な金属の香りが好きだからね。どうやらその盾はかなりいい素材を使っているみたいだね」
ギーシュは腕を組んで眺めていた。
「おい、やめろ馬鹿。あんまりしつこいとバラバラに引き裂くぞ」
ブロントはヴェルダンデと取っ組み合いになり、ブロントは巨大モグラの両脇を腕で挟み込むと、
そのまま巨大モグラを持ち上げ、投げ飛ばした。
巨大モグラが飛んで行った先にいた人影にぶつかると思った瞬間、
一陣の風が舞い上がり、
モグラをまたあらぬ方向へと吹き飛ばされた。

「誰だッ！ぼくのヴェルダンデになにをするんだ！」
朝もやの中から、一人の長身の貴族が現れた。羽帽子を被ったグリフォンに跨っていたあの貴族だった。
「僕は敵じゃない。姫殿下より、きみたちに同行する事を命じられてね。そこにいるルイズが僕の婚約者であると姫殿下に伝えたら、是非ともきみたちに同行するようにと僕が指名されたというワケだ」
長身の貴族は、羽帽子を取ると一礼した。
「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ。モグラの事はすまない。突然飛んできてぶつかりそうになったので、咄嗟に吹き飛ばしてしまった」
「ワルド様！？」
ルイズが思わず叫んだ。
「久しぶりだな！ルイズ！僕のルイズ！」
ワルドは人懐っこい笑みを浮かべると、ルイズに駆け寄り、抱え上げた。
「お久しぶりでございます」
ルイズは頬を染めて、ワルドに抱きかかえられている。
「相変わらず軽いなきみは！まるで羽のようだね！」
「・・・・・お恥ずかしいですわ」
「彼らを紹介してくれたまえ」
ワルドはルイズを地面に下ろすと、再び羽帽子を目深に被った。
「あ、あの・・・・・ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のブロントです」
ルイズは交互に指差していった。
「きみがルイズの使い魔かい？人とは思わなかったが、なかなか頼もしそうじゃないか。ぼくの婚約者がお世話になっているよ」
ワルドが握手を求める手を差し出した。
「何いきなり話かけて来てるわけ？」
ブロントは腕を組んだ姿勢のまま、ワルドをじっと見つめるだけで、握手に応じる気配がない。

「ハハッ、使い魔君には早速嫌われてしまったようだ。ルイズの婚約者としてその使い魔とも仲良くやって行きたいのだがね」
「汚い本能的になにかきたないと感じてしまっている」
ワルドの何かがブロントを不愉快にさせていた。ブロントの気持ちに共鳴するかの様に、腰に差したデルフリンガーまでもがカタカタと震えている。
「会ったばかりだというのに、えらく酷評だね。この旅を通じてその感覚が単なる誤解である事と理解していただいて欲しいね」
ワルドは差し出した手を引っ込めると、口笛を吹いた。
すると、朝もやの中からグリフォンが現れた。
ワルドはひらりとグリフォンに跨ると、ルイズに手招きした。
「おいで、ルイズ」
ルイズはちょっと躊躇う様にして俯いて、しばらくモジモジしていたが、ワルドに抱きかかえられ、グリフォンに跨った。
ワルドは手綱を握り、杖を掲げて叫んだ。
「では諸君！出撃だ！」
グリフォンが駆け出し、ブロントとギーシュも馬に跨り、後に続いた。

魔法学院を出発してからもう既に半日ほど、一行はラ・ロシェールの港町に向かい疾駆していた。
途中、ブロント達は駅で二回、馬を交換しながら何とかワルドのグリフォンの後を追いかけていたが、ワルドのグリフォンは疲れを見せずに走り続ける。
その間、ワルドに抱き寄せられるようにグリフォンに跨っていたルイズはふと気が緩み、
心地よいグリフォンの揺れでうつらうつらとワルドの腕の中で寝入ってしまった。

◆　◆　◆　◆

夢の中でルイズは幼き頃の姿になっており、トリステイン魔法学院から、馬で三日ほどの距離にある、
生まれ故郷のラ・ヴァリエールの領地にある屋敷の中庭を逃げ回っていた。
『ルイズ、ルイズ、どこに行ったの？ルイズ！まだお説教は終わっていませんよ！』
そう言って騒ぎながらルイズの事を探し回るのは、母であった。
ルイズは母に見つからないように、身を隠しながら、彼女自身が『秘密の場所』と呼んでいる、中庭の池に向かう。
あまり人が寄り付かないそこは、ルイズが唯一安心できる場所だった。
中池には小船が一艘浮いていた。舟遊びを楽しむための小船であったが、二人の姉達は成長し、魔法の勉強で忙しく、
父も母も舟遊びには興味がなく、中庭の池とその小船はルイズ以外には忘れ去られていた。
なので、ルイズは叱られると、決まってこの中庭の池に浮かぶ小船の中に逃げ込むのであった。
ルイズは小船の中に忍び込み、用意してあった毛布に潜り込むと、中庭にかかる霧の中から、一人のマントを羽織った立派な貴族が現れた。
『泣いているのかい？ルイズ』
つばの広い、羽根帽子を深く被り、顔が見えなかったが、彼が誰だか、ルイズはすぐわかった。
十年程若い姿をしているが、ワルド子爵だ。
晩餐会をよく共にした憧れの子爵の姿を見て、父と彼の間で交わ

された約束の事を思い出し、ルイズはほんのりと胸を熱くした。
『子爵さま、いらしてたの？』
幼いルイズは慌てて顔を隠した。みっともないところを憧れの人に見られてしまったので、恥ずかしかった。
『今日はきみのお父上に呼ばれたのさ。あのお話のことでね』
『まあ！いけないひとですわ。子爵様は・・・』
『ルイズ。ぼくの小さなルイズ。きみはぼくのことが嫌いかい？』
『いえ、そんなことはありませんわ。でも・・・。わたし、まだ小さいし、よくわかりませんわ』
ルイズははにかんで言った。帽子の下の顔が、にっこりと笑った。そして手をそっと差し伸べてくる。
『子爵様・・・』
「ミ・レィディ。手を貸してあげよう。ほら、つかまって。もうじき晩餐会が始まるよ」
『でも・・・』
「また怒られたんだね？安心しなさい。ぼくからお父上にとりなしてあげよう」
ルイズは頷いて、立ち上がり、その手を握ろうとした。
その時、風が吹いて貴族の帽子が飛んだ。
『あ』
現れた人物の姿を見て、ルイズは当惑の声をあげた。
見覚えが無いエルフの少年の姿だった。
いつのまにか辺りの風景もガラっと変わっており、ルイズはそのエルフの少年に抱きかかえられ、エルフの少年は港町を駆けていた。
美しかった街並みも、今ではいたるところに火がついており、あちこちから煙がもうもうと上がっていた。
獣のような恐ろしいうめき声や悲鳴がいたるところから響いていた。
そして、街の通りには人の死体の様なものが転がっていたが、ルイズはそれらをよく見る事が怖くて、目をそむけた。

ルイズは動こうにも、体がまるで根が張ったかのようびくとも動かせず、エルフの少年に抱えられるままであった。
『約束したんだ・・・姉さんと・・・』
少年が呟き、ルイズはその声に聞き覚えがあった。
(亜人の港街でのわたしの声!?)
エルフの少年は、ルイズを抱きかかえたまま、街の一角の物陰へと滑り込んだ。
『こいつが、咲き開くまで、必ず守り通すって約束したんだ!』
ルイズは、その少年に守られるように抱きしめられたまま、何もできずにいた。
(もしかして・・・この子・・・っ?)
その時、遠くでうねる様な衝撃音がした。
ルイズは音がした方向に目をやると、白い閃光が球体となり、急速に大きく広がっていく。
『――――っ!』
ルイズは「逃げて!」と叫ぼうとしたが、口が塞がれているのかうまく声がだせない。
『――――っっ!』
閃光がもう数十メイルというところまで肥大していた。
ルイズは全身の力を振り絞って叫んだ。

『ブロントーーーーーー!!!』

ルイズの叫びが上がった瞬間、少年の周りに無数の花びらが包む様に舞い上がった。
舞い散る花びら一枚一枚には、様々な人物の顔や風景が鏡のように写りこんでいた。
その中にはルイズが夢で見たエルフの女性の姿が映りこんだ花びらが何枚かあった。
エルフの少年は抱きしめているルイズの事をじっと見つめると、

微笑んだ。
『よかった・・・咲いたんだ・・・』
そして、二人は白い閃光に飲み込まれた。
辺りに舞う花びらが一枚、また一枚と閃光によりかき消される。
懐かしいと思った顔も、美しいと思った風景も、楽しいと思った記憶も、
閃光は一つ一つ飲み込んでいき、無情に消し去っていく。
遂に、周りの風景が完全に白く塗りつぶされて、少年姿のブロントだけが残されても、
ルイズはしきりに叫んだ。
『ブロント！ブロントーーーー！！！』

何も無いその世界で、
ルイズの声だけが少年の、ブロントの耳に届いていた・・・

◆　◆　◆　◆

「ルイズ！大丈夫かい？」
ワルドに呼びかけ、肩を揺らされ、ルイズはハッと目が覚めた。
「ワルド！？ごめんなさい、わたしったら任務中なのに眠りこけてしまって」
ルイズはあたふたと慌てた。先ほどグリフォンの上で雑談交わすうちに、
昔の丁寧な口調でしゃべっていたルイズだったが、ワルドの要望により普段の口調に戻っていた。
「可愛い婚約者の寝顔が見れたのだ、いいってことさ。疲れてしまったのかい？僕のルイズ。でも、ラ・ロシェールまで止まらずに行きたいんだ」

「ええ、わたしの事は気にしなくていいわ。少し気が緩んでしまっただけよ」
ルイズは恥ずかしさのあまり顔を赤くして俯く。
「寝言できみは使い魔君の名前を何度も呟いていたが、もしかして彼はきみの恋人かい？」
ワルドは笑いながら言った。
「こ、恋人なんかじゃないわ。ただの使い魔よ」
「そうか、ならよかった。婚約者に恋人がいるなんて聞いたら、ショックで死んでしまうからね」
「お、親が決めたことじゃない」
「おや？ルイズ！僕の小さなルイズ！きみは僕のことが嫌いになったのかい？」
ワルドはおどけた口調で言う。
「嫌いなわけないじゃない」
幼い頃、親同士が決めた『婚約』の意味はその頃のルイズにはよくわからなかった。
ただ憧れの人とずっと一緒にいられる事だと教えてもらって、なんとなく嬉しかった。
「よかった。じゃあ。好きなんだね？」
ワルドは、手綱を握った手で、ルイズの肩を抱いた。
『好きなのか』と問われてルイズは答えに詰まった。
ワルドは確かに憧れの人ではあった、しかしここ数年会わずにいた相手を思い出の中の記憶だけで決めるのもどうかと思った。
今でもワルドに対して好感は持っていたが、それがほんとうに好きなのかどうかまだよくわからない。
ルイズは答えを出せないまま、後ろで馬に跨るブロントの姿をじっとみつめていた。

第１３話　「心の壁」

ブロントとギーシュはワルドのグリフォンから数百メイル程も遅れながら、馬を交換しつつ何とか追いかけていた。
「半日以上走りっぱなしだと言うのに、まったく速度が落ちないなんて魔法衛士隊の連中は化け物だな」
長駆けで夜も更けりギーシュはへばって馬の首に上半身を預けている。
それに付け加え、ギーシュがもっとも恐れているブロントと共に半ば強制的に行動させられているので、精神的にも参っていた。
ギーシュは何とか場の空気を和まそうと会話をしても、単調な答えしか返ってこないので、気まずい雰囲気に困っていた。
一方、ブロントは毅然と片手で手綱を握り、平気な顔をしている。
「そ、それにしても、ブ、ブロント・・・さん、は随分と乗馬は慣れているようだね・・・きみの体力には脱帽するよ」
「それほどでもない」
「・・・えと、他には・・・そうだな、君は従軍経験はあるのかい？」
「俺は傭兵をやったり、過去にも部隊に従軍していたんだが？」
「へ、へぇー。どうりで君は強い訳だ。も、もしかして『メイジ殺し』だったりするのかい？」
「？」
「ほら、あれだよ。魔法も使わずメイジを殺す術を持っている者たち」
「黄金の鉄の塊で出来ている俺が布装備のジョブに遅れを取るはずがない」
「はは・・・君なら実際にやりかねない気がしてきたよ・・・」
ギーシュから乾いた笑いがでる。
「・・・」

「・・・」
（変な事聞くんじゃなかった・・・）
とギーシュが頭を抱え後悔している中、
鎧をガチャっと鳴らして、ブロントの方からギーシュに語りかけた。
「おまえ戦闘では素人だな」
「うっ、・・・珍しく話しかけてきたと思ったら、痛い所付いてくるな。そうさ、まだ実戦経験はない。強いて言えば君との決闘ぐらいなものだ」
「あのゴレんムの使い方ではせいぜい雑魚敵を倒していけるだけ。あんな恥知らずにも囲んで殴るだけで格上に勝てるわけがない」
「ぐっ、きさっ・・・」
ギーシュは反論をしたかったが、できなかった。
なぜなら薄々自分の弱みに気が付いていたからだ。
自分よりクラスが高いラインメイジ以上が相手であれば、質より量で勝負しているギーシュのゴーレムではライン・スペルの炎や風一つで簡単に葬られてしまう事を。
ギーシュのゴーレム一体一体の純粋な力はトライアングル・クラスのフーケのゴーレムと比べれば何十分の一すらもなかった。
しかし、ギーシュは魔法の扱いに関してはかなり器用な方ではあった。
ゴーレムを同時に幾つも出す事は上位メイジでも中々できることではない。
並のメイジであれば精々二、三体のゴーレムや偏在を操作する事が限界なのに対して、
まだ最下級のドットクラスのメイジであるギーシュは最大七体ほどのゴーレムを自由自在に操る事ができた。
しかし、ギーシュの浮気性な人間性を反映したのか、唱える魔法一つ一つに力を集中させる事がとても苦手だった。
そのため、初見では人の目を惹ける小技は色々持ってはいたが、

それぞれに『深み』がなく、格が上の相手には通用しないものばかりだ。
ギーシュがブロントに決闘を挑んだのも、魔法が使えぬ自分より弱い『平民』ならば組み易し、と思ったからこそ。

要するには、ギーシュは器用貧乏であった。
改めてそれを認識してギーシュは益々気が落ち込み続ける。
「お前それで良いのか？」
「僕だって貴族だ、多くの薔薇を守るために戦いたいさ」
「薔薇？」
「そうさ、貴族たるもの、敵に背中を見せず、か弱き花達が咲くのを守ってやるものさ。何だ？おかしいか？笑いたければ笑えばいい」
ギーシュのその言葉にブロントは何か思い当たる気がしたが、何であるかははっきりと思い浮かばない。
「見事な心構えだと関心するがどこもおかしくない」
「だが、平民の君にすら負けるぼくでは・・・」
「教えてやってもいい」
「え？」
ギーシュはきょとんとする。
「別に俺はジョブにこだわらないから経験は豊富。お前のゴレんムにその経験が備われば最強に近いと言える」
「もしかして、戦場を経験している君が、ぼくに戦い方を教えてくれるというのかい？」
ブロントはガチャと鎧を鳴らして黙って頷く。
「メイジすら倒せる君の戦闘術なら、実に頼もしいよ。ぼくに足りない経験が補えるのであれば是非頼みたい！」
「ならば早速『盾』を装備したゴレんムを作るんだな」
ブロントは唐突にデルフリンガーを抜き放ち、盾を構えて馬から飛び降りる。
「え？た、盾？」

そのとき、目的地を目前にして峡谷を駆け抜けていた二人の馬を目掛けて、不意に崖の上から松明が何本も投げ込まれた。
戦の訓練を受けていない馬が炎に驚き、前足を上げながら急停止をして、ギーシュは馬から振り落とされてしまった。
「ぼやっとすんな、にいちゃん！奇襲だ！」
ブロントに抜き放たれたデルフリンガーがギーシュに活を入れた。
ギーシュは慌てて懐から造花の杖を取り出し、ブロントが持つような盾と剣を持ったワルキューレを生成した。
そこに矢の雨が降り注ぐ。ブロントは難なく迫り来る矢を盾で叩き落とすが、
体型が細いワルキューレで身を守っていたギーシュは迫り来る矢の全てをワルキューレだけでは受けきれなかった。
そこにブロントが横から素早くデルフリンガーで矢を切り払う。
「今のが当たらなくてよかったな当たっていたら死んでるぞ。死にたくないなら早く盾に向いたゴレんムを作り直すべき」
ギーシュはブロントに頷くと、杖を振り、眼前のワルキューレを基に『盾役』に向いた青銅のゴーレムを作り直した。
機動性を捨てて、ワルキューレよりも装甲を厚くし、各関節部の隙間を必要最低限まで青銅で詰め、
体型もギーシュを丸々隠すほどまでに大きくした。
ブロントを意識したその新しい青銅のゴーレムの姿は『ワルキューレ』と呼ぶより、『パラディン』と呼ぶに相応しい重厚で頑強そうな姿であった。
「ようし！二の矢が来るぞ！気張れよにいちゃん！」
デルフリンガーがギーシュに向かって叫ぶ。
「『パラディン』！ぼくを庇え！」
ギーシュはそう叫び杖を振る。
今度はブロントの手を借りず、ギーシュは自分のゴーレムだけで飛び来る矢を打ち払った。
「パーティでは盾役がいなければ始まらないのは一般的に常識。盾

がいないパーティに未来はにい」
「パーティ？」
ギーシュはパラディンの影に隠れたままブロントに聞く。
「パーティとは六人がそれぞれ別の役割を担って戦う事の意味」
「それは君が従軍していた軍の小隊編成方法かい？興味深いね」
「それほどでもない」
ブロントは崖の上を見上げたが、今度は矢が射られる気配が無い。
その時、ばっさばっさと、上空から羽音が聞こえた。
崖の上から男たちの悲鳴が聞こえてくる。
どうやら頭上に現れたものに恐れおののいているのか、男たちは夜空に向けて矢を放ち始めていた。
しかし、その矢は風の魔法で逸らされ、次に小型の竜巻が舞い起こり、男たちを崖の上から吹き飛ばす。
「子爵が気づいてくれたのか？」
ギーシュは落ちてきた男たちの手から自分のゴーレムを使いブロントと共に武器を取り上げながら聞いた。
「いや・・・」
ブロントが空を指差すと、月をバックにブロントに見覚えがある幻獣が姿を見せた。
なんとタバサの風竜のシルフィードであった。
「間に合ったみたいね。ブロントさん」
キュルケが風竜からぴょんと飛び降りて、髪をかきあげてみせる。
そこに漸くブロント達が遅れている事に気が付いたのか、先行していたワルドとルイズがグリフォンに跨りやってきた。
「二人が遅れているようだからと僕のルイズが気づいてくれたから戻ってみたが、まさか夜盗に襲われていたとはね、二人共無事か？」
ワルドはそう言って、ブロントとギーシュの無事な姿を確認するとふむ、と頷く。
「ツェルプストー！？ここまで何しにきたのよ？」
ルイズはグリフォンから飛び降りて、キュルケにつかつかと歩み

寄り怒鳴った。
「何、ってあんたがブロントさんを連れて馬に乗ってどこかに出かけようとしていたもんだから、タバサをたたき起こして後をつけただけよ」
キュルケは風竜の上で本を読んでいるタバサを指差した。
「ツェルプストー。あのねえ、これはお忍びなのよ？」
「あっそう、そんな事あたしには関係ないわ。それよりブロントさん見直してくれた？襲った連中はこの通り、捕まえたんだから」
キュルケは落下の衝撃で未だに悶絶し、倒れている男たちを指差した。ギーシュが近づいて男たちに尋問を始めた。
「捕まえたのはタバサなのは確定的に明らか」
ブロントは腕を組んだまま素っ気無く答えた。
「あら、やっぱりわかった？でもあたしがタバサを起こして駆けつけなければタバサの魔法で一網打尽にする事はできなかったわ」
ブロントは擦り寄ってくるキュルケを適当にあしらうと、ギーシュが尋問にあたっていた男たちへと近寄った。
ギーシュが相手にしている一人の男がふて腐れた声で答えていた。
「へっ、俺たちぁここらを通る金持ちそうな貴族を狙ったただの物取りだ・・・あん？」
男はじろじろとブロントの姿を見つめた。
「おい、その白鎧！？もしかして最近噂になっている冒険者のブロントって野郎か？畜生、聞いてねえぜ！何が貴族のガキ共だけだ、あの仮面の野郎―」
その時、ワルドは一瞬にして杖を振り、＜エアーカッター＞の真空の刃で男の首を刎ね飛ばした。
ルイズは思わず悲鳴をあげた。
「危なかったな、その男は話に君達の注意を逸らし、武器に手を伸ばしていた」
ワルドはいたって落ち着いた様子でそういうと、手馴れた調子で杖をまた腰にさした。

「し、子爵、何も殺す事は・・・」
「ギーシュ君と言ったかね?そんな甘い考えじゃ、戦場ではすぐに死ぬぞ。それより先を急ごう。こいつらはただの物取りだ、捨て置こう」
そう言ってワルドは震えるルイズを抱きかかえグリフォンに乗せる。
「すまなかったね、僕のルイズ、怖がらせてしまって。早くこの事は忘れた方がいい」
そしてワルドはひらりとグリフォンに跨り、
「今日はラ・ロシェールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに渡ろう」
とそう一行に告げた。
一行がラ・ロシェールの街灯りへと向かう中ブロントは残された死体を見て、それからグリフォンに跨るワルドの背中をじっと見つめて呟いた。
「汚いな・・・・・・」

ラ・ロシェールで一番上等な宿、『女神の杵』に泊まることにした一行は、一階の酒場で、くつろいでいた。
ブロントは宿の者に頼んで、リンゴの果汁、蜂蜜、ミルクを混ぜたとても甘いアップル・オレを作ってもらい、それを皆で飲んでいた。
疲れた体には蜂蜜の甘ったるさが心地よく染み亘り、
リンゴの甘酸っぱさが溜まった疲労をじわじわと取り除く爽快感があった。
「船に乗ると言ってたが、ここは山の中の様なんだが?」
「遠くから来たブロントさんは知らないのか。アルビオンは浮遊大陸だから『船』じゃなくてぼくたちがこれから乗るのは風石で空を

飛ぶ『フネ』に乗るんだ」
　ギーシュはそう答えると、コップに注がれたアップル・オレをごくごくと喉を大きく鳴らして飲み干し、給仕にお代わりを頼む。
　そこに『桟橋』へ乗船の交渉に行っていたワルドとルイズが帰ってきた。
　ワルドは席につくと、用意されたアップル・オレに手をつけず、給仕にワインを注文し、溜め息を一つ吐いた後、困ったように言った。
「アルビオンに渡るフネは明後日にならないと、出ないそうだ」
　ルイズはブロントに手渡されたオレの入ったコップを受け取ると。
『ありがと』と言ってコクンコクンと飲みだした。
「あたしはアルビオンに行った事無いからわかんないけど、どうして明日はフネが出ないの？」
　アップル・オレをちびちびと飲むキュルケの方を向いて、ワルドが答えた。
「明日は月が重なる『スヴェル』の月夜だ。その翌日の朝、アルビオンが最もラ・ロシェールに近づく、だからわざわざ一日二日急いで、貴重な風石を無駄にする奇特な船長はいないってさ」
　タバサは壁際に寄りかかり床に座り、アップル・オレが入ったコップに時折口を付けたりたりしながら本を読んでいた。
　酒場で四半刻ほどゆったりと一息をついた所で、ワルドは立ち上がり、鍵束をジャラジャラと取り出し、
「さて、じゃあ今日はもう寝よう。部屋は取った。キュルケとタバサは相部屋だ。そして、ブロントとギーシュが相部屋」
　と言って、キュルケとブロントそれぞれに鍵を投げ渡した。
「そして僕とルイズは同室だ」
「へぇ、魔法衛士の方はトリステインの貴族のわりには随分と積極的なのね」
　キュルケがからかうような口調で言ってみせる。
「婚約者だからな。当然だろう？」

「なあに？ヴァリエール、あんたの婚約者だったの？あんたにしちゃ意外な相手ね」
ルイズははっとして、ワルドの方を見る。
「そんな、ダメよ！まだ、わたしたち結婚しているわけじゃないじゃない！」
ワルドは首を振って、ルイズを見つめた。
「大事な話があるんだ。二人きりで話したい」
そう言ってワルドは先にルイズを部屋に連れて先に部屋に入る。
「ルイズ」
ブロントは階段を上って行くルイズを呼び止め、自分の懐にあるリンクパールをトントンと指で叩いて見せた。
「あ、忘れてたわ。気づいてくれてありがと、ブロント」
ルイズは首からリンクパールを外して、それをポケットに仕舞ってから、ワルドの後を追った。

「素敵なお方だけど・・・ヴァリエールはやっぱり男を見る目がないのかしら。あんな冷たい目をする男じゃ、あたしの情熱も燃え上がらないわ。ま、別にどうでもいいけど。タバサ、早くあたし達も部屋に行って寝ましょう」
キュルケは鍵輪を指にはめてクルクル回し、本を読みながら器用に歩くタバサを連れて行った。

「今日はくたびれたなあ。ブロントさん、ぼく達も早く寝よう」
ギーシュは大きく欠伸をし、部屋の鍵を出すよう、ブロントに催促する。
「寝る？何勘違いしてるんだ。俺はこれからお前にパーティ戦の事を叩き込むんだが、お前はどこにも逃げられないプレッシャーを背負う事になった」
「え？まさか、もう今晩から始めるのかい？」
「俺が知っている事を全部覚えてもらう羽目になる。一日でも時間

が惜しいだろ」
「お？相棒、もうすっかりにいちゃんのメンター（師匠）になったてか？おもしれ！なら俺だって色々教えたら！武器の使い方の事ならまかせな」
デルフリンガーが楽しそうに鍔を鳴らす。
「は、早く寝たいのに・・・」
ギーシュはがっくりと項垂れ、ブロントに部屋まで引き摺られた。
そして一晩中、戦い方の基本の一部を教え込まれる事になった。

一方、ワルドとルイズの部屋
貴族相手の宿の一番上等な部屋だけあって、かなり立派なつくりであった。
誰の趣味なのか、ベッドは天蓋付きの大きなものだったし、高そうなレースの飾りがついていた。
テーブルに座ると、ワルドは先ほどの飲み掛けのワインを杯についだ。それを飲み干す。
「君も腰掛けて、一杯やらないか？ルイズ」
ルイズはテーブルについた。
「ワインは・・・いらないわ」
ルイズはちょっと俯いて、ポケットの上から何気なくリンクパールを軽く押さえた。
「あまり気が晴れてないようだね。心配なのかい？無事にアルビオンのウェールズ皇太子から、姫殿下の手紙を取り戻せるのかどうか」
「そうね。心配だわ・・・」
「大丈夫だよ。きっとうまくいく。なにせ、僕がついているんだから」
「そうね、あなたがいれば、きっと大丈夫よね。それに、ブロントもいるし。で、大事な話しって？」
ワルドは眉を少し細めた。

「ブロント、きみの使い魔か・・・ルイズ、きみは何であの伝説の使い魔『ガンダールヴ』が召喚できたか考えた事あるかい？」
「ブロントの使い魔のルーンが『ガンダールヴ』だって知っていたの？」
ルイズはブロントが『ガンダールヴ』であるとワルドに言ってなかったので首を傾げる。
「ん？ああ、学院の者からだったかな？彼が始祖ブリミルが用いたと言う、伝説の使い魔『ガンダールヴ』のルーンが刻まれていると聞いたよ」
「そう・・・」
「誰もが持てる使い魔じゃない事は確かだ。他人にはない特別な力をきみが持っている証拠だ。きみは偉大なメイジになるだろう。そう、始祖ブリミルのように、歴史に名を残すような、素晴らしいメイジになるに違いない。僕はそう予感している」
ワルドは熱っぽい口調で、ルイズをじっと見つめた。
「この任務が終わったら、僕と結婚しよう」
「え・・・・・？」
いきなりな事にルイズは困惑した。
「僕は魔法衛士隊の隊長で終わるつもりはない。いずれは、国を・・・いや、このハルケギニアを動かすような貴族になりたいと思っている」
「で、でも・・・」
「確かに、ずっとほったらかしだった事は謝るよ。婚約者だなんて、言えた義理じゃない事もわかってる。でもルイズ、僕にはきみが必要なんだ」
「ワルド・・・」
ルイズは悩んだ。昔憧れた人が今目の前でルイズにプロポーズをしている。
しかし、このワルドは本当にルイズが知っている昔のワルドなのだろうか？

久しぶりに再会してからというものの、ルイズはワルドとの間には見えない隔たりが存在するかの様に感じ、
じっと見つめてくるワルドの目は、ルイズの事ではなく、その先にあるものを見据える遠い目をしている様な気がした。
もしブロントがこの場にいたら、どうしたらいいか教えてくれるだろうか？
受けるべきなのか？それとも・・・
「あの、その、わたしまだ、あなたに釣り合う様な立派なメイジじゃないし・・・もっともっと修行して・・・」
ルイズは俯いて、続けた。
「あのねワルド。小さい頃からわたし思っていたの。いつか、皆に認めてもらいたいって。わたしにしか出来ない事を立派に成し遂げて見せて、父上と母上に誉めてもらうんだって」
ルイズは頭を上げて、ワルドを見つめた。
「まだ、わたし、それができていない」
「・・・きみの心の中には、誰かが住み始めたみたいだね」
「そんなことないの！そんなこと・・・」
ルイズは慌てて否定した。
「いいさ、僕にはわかる。わかった。取り消そう。今、返事をくれとは急かさないよ。でも、この旅が終わったら、きみの気持ちは、僕に傾かざるえないはずさ」
ルイズは頷いた。
「それじゃあ、もう寝ようか。疲れただろう」
ワルドはルイズに近づいて、唇を合わせようとした。
ルイズの体が一瞬、こわばる。それから、すっとワルドを押し戻した。
「ルイズ？」
「ごめん、でも、なんか、その・・・」
ルイズはもじもじとした。ワルドは苦笑いを浮かべて、首を振った。

「急がないよ、僕は」
そう言って、ワルドは部屋の明かりを消して寝床にはいり眠りについた。
ルイズも自分のベッドに横になると、心の中で自分に疑問を投げかけた。
昔からずっと憧れていて、ワルドはこんなにも優しく、凛々しいのに、
この心の中で感じる違和感は何なんだろう・・・
結婚してくれと言われて、嬉しくないわけじゃないのに、
それを受ける事を怖がっている自分がいるのはなぜなんだろう・・・
・

翌日、ブロントが目を覚ますと、部屋の扉がノックされた。
ギーシュは夜遅くまでブロントのパーティ戦論を聞かされて、何をされても起きないぞと言わんばかりにグースカ寝ていた。
ブロントがドアを開けるとそこには羽帽子をかぶったワルドが、ブロントを見上げていた。
ワルドは、ブロントより頭一個分、背が低かった。
「おはよう、使い魔くん」
特に深い理由はないが、いけ好かないワルドに起こされ、ブロントはむっとした。
「たしかに起こすのは勝手だが、それなりの起こし方があるでしょう?こんな朝早くに起こされて俺の寿命がストレスでマッハなんだが・・・」
ブロントがそう言うと、ワルドは苦笑いした。
「きみは伝説の使い魔『ガンダールヴ』なんだろう?」
「俺がどうやってガンダルブだって証拠だよ」
ワルドは誤魔化すように、首をかしげて言った。
「・・・その、あれだ。ルイズが随分ときみを頼りにしているみた

いなので、昨日グリフォンの上で、ルイズに聞いたが、何でも伝説の使い魔『ガンダールヴ』だそうだね」
「言っとくけど俺はブロントであってガんダルブじゃないから。あまりしつこいとバラバラに引き裂くぞ」
ワルドはにやりとした。
「ならば丁度良い。僕は歴史とツワモノに興味があってね。その『ガンダールヴ』がどのぐらいの力があるものだか、知りたいんだ。ちょっと手合わせを願いたい」
「手合わせ？」
「つまり、これさ」
ワルドは腰に差した細剣の様な形をした杖を引き抜いた。
「互いにかなぐり捨てンのか？」
「そのとおり。純粋に互いの技を比べようじゃないか」
「俺はそれでいいんだが、どこでやるんだ？」
「この宿は昔、アルビオンからの侵攻に備えるための砦だったんだよ。中庭に錬兵所があるんだ、そこでやろう」

ブロントとワルドはかつて貴族達がよく決闘をしたと言われる錬兵所で、二十歩ほど離れて向かい合っていた。
錬兵所は、今ではただの物置き場となっている。そこら中に樽や空き箱が積まれている。
ブロントは左手の盾をしまい、右手でデルフリンガーの柄を握った。
「相棒、盾はつかわねえのかよ？」
「盾を持っていない奴に合わせてフェアで行くのが大人の醍醐味」
そういってブロントはデルフリンガーの刃を返して握りなおす。
ワルドは腰から、杖を引き抜いた。フェンシングの構えのように、それを前方に突き出す。
「俺は手加減できないし、最悪の場合病院に行くことになる」
ブロントがそう言うと、ワルドは薄く笑った。

「かまわぬ、全力でかかってこい、『ガンダールヴ』」
ブロントが一足飛びに飛んで、斬りかかった。
ワルドは杖で、ブロントの剣を受け止めたが、予想以上の衝撃でワルドは体勢を崩す。
「何て馬鹿力だ。まるでオーク鬼の膂力だな」
ワルドは笑ってみせるが、その額に一筋の汗が流れる。
魔法衛士隊の黒いマントを翻らせて、ワルドは飛び退り、構えを整えて、ブロントに素早く突いてきた。
ブロントはデルフリンガーでワルドの突きを一つ一つ丁寧に逸らし、受け流し、そのまま流れを押し返して反撃にでる。
ワルドは辛うじて杖で剣撃を受け止めるが、ブロントの重い剣撃に腕が耐え切れなくなってきていた。
ワルドは再び攻撃に転じようとするが、ブロントは各攻撃と同時に、見事な体捌きを披露し、杖が振り抜けぬ位置を取っていた。
「ルーンの力だけじゃないな。平民のくせに、まさかきみ自身が相当戦い慣れているとはな！」
その時、ブロントはデルフリンガーを大きく振りかぶり、打ち下ろして、ワルドの構えを大きく崩した。
「本当につよいやつは強さを口で説明したりはしないからな」
ブロントはデルフリンガーを肩の位置で溜めて、大きく息を吸った。
「フラットんブレード！」
ブロントはデルフリンガーの腹でワルドの横腹を＜フラットブレード＞で強打した。
「がっ！！」
ワルドは肺の中の空気を全て吐き出してしまうと、そのまま壁に持たれかかった。
息を吸うことに精一杯で、体が言う事を利かない。
その時、物陰からルイズが飛び出して来た。
「ワルド！中庭に来いって言うから、来てみれば、一体何している

の！？」
「呼んであった介添え人が、ようやく来たようだな。何、彼の実力を、ちょっと試したくなってね」
「もう、そんなバカなことをやめて。今は、そんな事をしている場合じゃないでしょう？」
「そうだね。でも貴族というヤツはやっかいでね。強いか弱いか、それが気になるともう、どうにもならなくなるのさ」
ルイズはブロントの方を見た。
「やめなさい。これは、命令よ？」
ブロントは頷き、ルイズに言われデルフリンガーの切っ先を下ろした。
「ふぅ、では介添え人も揃った事だし、ここから本番と行こうじゃないか。まさか先程ので勝ったと思わないでくれよ？」
ルイズの介入によってじっくりと呼吸を整える事ができたワルドは、再び杖を構える。
「もう勝負ついてるから」
そう言ってブロントは首を横に振る。
「きみも良く知っているはずだ、戦場なら勝負が始まればどちらかが倒れるまでは終わらないってね！」
ワルドは有無を言わさず突きを繰り出す。ブロントは仕方なくそれらの突きを受け流した。
「デル・イル・ソル・ラ・ウィンデ・・・」
閃光の様な突きを何度も繰り出しながら、ワルドは低く呟いている。
「おぁ？相棒！こいつ、魔法使うつもりだぜ！」
デルフリンガーが叫んだ。
ブロントは咄嗟に杖を警戒して、バックステッポで距離を取った時・・・
ボンッ！空気が撥ねた。
＜エアーハンマー＞の不可視な空気の槌がブロントの横腹に激し

く叩きつけられると、そのままブロントは十メイル以上も吹き飛ばされ、積み上げた樽に激突した。
ガラガラと樽が崩れ落ちる。
「勝負あったな、どうやら先に倒れたのはきみの方だ」
ブロントは樽に埋もれたのか中々立ち上がってこないので、ルイズは心配した様子でブロントに近づく。
「わかったろうルイズ。メイジじゃない彼ではきみを守る事はできない」
ワルドが、しんみりした声で言った。
「・・・だって魔法使わない者が、魔法衛士隊隊長の魔法にかなわなくて当たり前じゃないの！」
「そうだね。でも、アルビオンに行っても敵を選ぶつもりかい？メイジに襲われたとき、きみはこう言うつもりかい？わたしたちは魔法が使えないから、杖を収めてくださいって」
「そ、それは・・・」
ルイズは黙ってしまった。それから、樽に埋もれたままのブロントをじっと見つめる。
ブロントを助けてやろうとしたら、ワルドに促された。
「行こう、ルイズ。彼なら大丈夫さ」
ワルドはルイズの腕を掴んだ。
「でも・・・・・」
心配するルイズに答えるようにブロントが樽から手を突き出して『俺は大丈夫だ』とばかりに振ってみせる。
「ほらね、行こう」
ルイズは、躊躇うように唇をかんだが、ワルドに引っ張られて去っていった。
中庭から二人の気配が消えた事を確認すると、ブロントは樽から跳ね起きた。
ブロントは＜エアーハンマー＞で吹き飛ばされた時、耳にかかっていたプリズムパウダーまでもが落ちたので、それを隠すために樽

に埋もれたままでいた。
デルフリンガーが呟いた。
「何かすっきりしねえ勝負だったな・・・」
ブロントは無言でカバンからプリズム・パウダーの壜を取り出すと、それを耳に塗りなおしていた。
「あの感じだと、あいつは相当な魔法の使い手だな。スクウェアクラスかもしらんね。普通に戦ったって強いはずなんだがよ・・・」
プリズム・パウダーが使い切られた壜がブロントの手の中でピキッと音を立てる。
ブロントが歯噛みしながら小さく呟く。
「・・・・・きたない」

第１４話　「夜に隠れて」

ブロントとワルドが手合わせをしたその日の夜・・・・・・
ブロントは一人、部屋のベランダで重なり合う月を眺めていた。
一階の酒場ではギーシュ達が酒を飲んで騒ぎまくっている。
明日はいよいよアルビオンに渡る日だということで、大いに盛り上がっているらしい。
キュルケが誘いにきたが、一つとなった月を眺めていたい、と言ってブロントは断った。
ブロントが夜空を見上げると、赤い月が白い月の後ろに隠れ、一つだけになった月が白く輝いている。
冒険者であるブロントにとって、白く輝く満月の時は特別な事が起きるというジンクスがあった。
もっとも、毎夜満ちた月が二つも浮かぶハルケギニアでは、そのありがたみも薄かったが、
赤き月を守るように威風堂々と輝く白き月に、何か親近感が湧いていたのかもしれない。
そんな事を思いながらぼんやりと月を眺めていると、後ろから声をかけられた。
「ブロント」
振り向くと、ルイズが立っていた。
「朝の怪我、大丈夫？」
「それほどでもない。軽くぶつけただけなんだが」
「その、ごめん。わたしが勝負の途中でブロントに止めるように命令したから・・・」
「俺はあんな事を気にするような底の浅い人間ではない」
「・・・そう」
ルイズはブロントを真似て、ベランダの縁に寄りかかって一緒に月を眺めた。

「・・・ねぇ、そ、その・・・」
ルイズは何か言い難そうで、言葉に詰まった。
ブロントは何も言わず、しばしの沈黙が続いた。
「・・・ワルドに結婚申し込まれちゃったんだけど・・・」
「婚約者がそうするのは至極当然」
「うん・・・そうだよね。わたしどうしたらいいと思う？受けたほうがいいかな？」
ブロントは鎧をガチャリを鳴らしてルイズに体を向ける。
「お前それで良いのか？」
「・・・よくわからないわ。ブロントはワルドの事どう思う？」
「奴は少し汚いが、それはお前の気を惹くために必死な証拠。だが会ったばかりの俺が言う事じゃにい」
「そっか・・・ワルドの事は昔から憧れていたし、強いし、わたしよりもずっと凄いメイジだわ。そんな人がわたしみたいな『ゼロ』でも必要だと言ってくれている、でも・・・」
「お前は今の自分の殻をやぶり新しい一歩を踏み出すのが恐いのか？」
「そうかもしれない・・・結婚してしまうと、今わたしの側にいる人達がいなくなってしまいそうで、怖いわ。自分が知らない所へと足を踏み入れるって、こんなにも不安になるものなのかしら。冒険者っていつもこんな不安に立ち向かっているなんて、凄いね」
「それほどでもない」
ブロントは強がるでもなく、さも当たり前な口調で言う。
「あんたのその精神の強さにはちょっと憧れるわ。・・・ねえ、ブロント。もしも、これはあくまで、もしもの事だからね。もしもわたしがワルドと結婚しても、ブロントはわたしの側からいなくなったりしない？」
ブロントは目の前のルイズの事を見つめ、しっかりとした口調で言う。
「俺は真のナイトなんだが、ただ使い魔だから仕方なく守っている

んじゃない。守りたいと思って守ってしまう者がナイト。この俺がお前の側を離れる事を知らない」

「ありがと、ブロント」

ルイズはブロントの力強い言葉を聞いて、何かとても安心した。

ルイズは皆がいる酒場へと歩き出そうとしていた。

その時・・・・・。

「おいィ！」

ブロントが叫んだ。ルイズは振り向いた。

先程まで輝いていた月が巨大な何かに隠れて見えない。

月明かりをバックに、巨大な影の輪郭が動いた。ルイズは目をこらしてよく見ると、

その巨大な影は、岩で出来たゴーレムだった。

そのゴーレムの肩に、長い髪をたなびかせた人物が座っていた。

「フーケ！？」

ルイズが怒鳴った。肩に座った人物が、嬉しそうな声で言った。

「感激だねえ、覚えててくれたのかい。いい雰囲気の所を邪魔しちまったようだね」

「あんた、牢屋に入っていたんじゃなかったの！」

「そこも静かでいい所だったんだけど、おせっかいな人がいてね。素敵なバカンスに招待してくれたお友達に会いたいだろうって、出してくれたのさ」

フーケは茶化した。暗くて良く見えなかったが、フーケの隣に黒マントを着た貴族が立っている。

その貴族がフーケを脱獄させたのだろうか？

白い仮面を被っているので、顔がわからないが、男のようだった。

「真っ向正面からってのは、あたいの趣味じゃないけど。そういう注文だから仕方ないさ！」

フーケの巨大ゴーレムの拳がうなり、ベランダの手すりに打ち下

ろした。
岩でできたゴーレムは、硬い一枚岩から削りだした手すりを難なく破壊する。
「ここらは硬い良い岩しかないからね。この前みたいな軟らかい土のゴーレムで相手できなくて、本当に残念よ！」
フーケがたっぷりと皮肉って見せる。ゴーレムの第二の拳が振り下ろされるよりも早く、ブロントはルイズを抱きかかえると、駆け出した。
部屋を抜け、一階へと階段を駆け下りた。

下りた先の一階も、修羅場だった。玄関から現れた傭兵の一隊が酒場で飲んでいたギーシュ達を襲ったらしい。
ギーシュ達はテーブルを横に立てて、それを盾にして、ギーシュ、キュルケ、タバサにワルドは魔法で応戦しているが、ラ・ロシェール中の傭兵が集まっているのか多勢に無勢で手に負えないようだ。
傭兵達もメイジとの戦いに慣れているのか、暗闇を背にして魔法の射程の外から矢を射かけてきた。
時間がかかる強めの魔法を唱えようと立ち上がろうものなら、矢の餌食となるだろう。
ブロントはテーブルを盾にしたギーシュ達の下に、ルイズを抱えたまま、駆け寄って滑り込む。
「あら、ブロントさん。気が変わって騒ぎに参加しに来てくれたのかしら？でも、残念ながらお酒はテーブルと一緒にひっくり返しちゃってもうないわよ。文句があったら無粋なやつらに言ってね」
キュルケはブロントの姿を見て安心したのか、冗談の一つをも言ってみせた。
「それにしても参ったね」
ワルドの言葉にキュルケが頷く。
「この前の連中は、ただの物盗りじゃなかったわね」

「捕まった筈のフーケがいるって事は、アルビオンの貴族派が関与している可能性が高いな」
吹きさらしの先にはフーケのゴーレムの足が見えていた。
キュルケは杖を弄りながら呟いた。
「・・・やつらはちびちびとこちらの精神力を消耗させて、魔法が使えなくなったら突撃してくるつもりね、さて、どうしたものかしら」
ワルドが手を挙げ一行の注目を集める。
「いいか諸君、このような任務は、半数が目的地にたどり着けば、成功とされる」
こんな時でも優雅に本をひろげていたタバサが本を閉じて、ワルドの方を向いた。
自分と、キュルケと、ギーシュを杖で指して「囮」と呟いた。
それからタバサは、ワルドとルイズとブロントを指して「桟橋へ」と呟いた。
「いつ行動に出る？」
ワルドがタバサに尋ねた。
「今すぐ」
とタバサは呟いた。
「聞いてのとおりだ。裏口に回るぞ」
「え？え？ええ！」
ルイズが驚いた声をあげた。
「今から彼女達が敵をひきつける。せいぜい派手に暴れて、目立ってもらう。その隙に、僕らは裏口から出て桟橋に向かう。以上だ」
ルイズはブロントの顔を見た。ブロントは何も言わずに頷く。
「わかったわ。ツェルプストー、こんな所つまらない所で死ぬんじゃないわよ」
「あんたもね、ヴァリエール。そのアルビオンの用事とやらを済ませたら今度こそあの時の決着をつけさせてもらうわ。さ、早く行きなさいな」

キュルケはパシッっとルイズの背中を叩いて行くようにと促す。
「うむむ、ここは何を出すべきなのか。『矛役』で一気にたたみかけるか。いや、ゴーレムが持たないか？どうなのかな」
ギーシュはブロントに教えてもらった事をあれやこれやと思い出して、どうするべきか悩んで、緊張で手が震えていた。
それに去り際のブロントが気づき、足を止めてギーシュに言葉をかける。
「ここは攻撃を二人に任せてしまうのがパーティリーダーの醍醐味。お前ははしっこから目立つ『戦士』でも出すんだな」
「・・・つまり囮役である僕達が動くための更に囮になるゴーレムを作れ、て事かい？」
ブロントは鎧をガチャと鳴らしながら頷き、カバンから壜を取り出すとそれをギーシュに渡した。
「これをおごってやろう」
「な、なんだいこれは？」
壜には危険物を示すものなのか、赤い異国の文字の注意書きが書かれていた。
ギーシュは蓋の上から嗅いで見ると、文字通りにきな臭かった。
「こ、これはまさか！」
ブロントはポンポンとギーシュの肩を叩いて、にやりとして見せた。
「汚い『忍者』にぶち込んで使うのが一般的に常識」
ブロントはそういい残すと、ルイズの後を追った。
矢がひゅんひゅんと飛んできたが、ブロントがそれらを全部盾で叩き落とした。
酒場から厨房に出て、ルイズ達が通用口にたどり着くと、酒場の方から耳を劈くような派手な爆発音が聞こえてきた。
「うまく、目立ってくれているようだな」
ワルドは出口のドアに身を寄せ、外の様子を探った。
「誰もいないようだ。よし、桟橋はこっちだ」

ワルドが先頭をゆく。ルイズが続き、ブロントがしんがりを受け持った。
そうして三人はラ・ロシェールの街へと躍り出た。

裏口の方へルイズ達が向かった事を確かめると、ギーシュはキュルケを呼び止めた。
「僕がゴーレムでやつらの注意を惹いて、魔法を詠唱するための隙を作る」
ギーシュはテーブルの影で造花の杖を振ってゴーレムを生成した。手には目立つ肉厚な刃を持つ大きな斧、
体の要所には厚い装甲が、だが敏捷性を損なわれぬよう、間接部は剥き出しの帯鎧姿をしたゴーレムを三体だ。
「ねえ、ギーシュ。ゴーレムで囮はいい考えだけど、流石にあの数を一気に蹴散らすにはあたしの炎だけじゃ追いつかないわよ。油か何かでまとめて燃やせればいいのだけど」
キュルケの言葉に何か閃いたのか、タバサがギーシュの袖を引っ張る。
「なんだね？」
「薔薇」
ギーシュが持った造花の杖を指差し、それを振る仕草をタバサはしてみせた。
「花びら。たくさん」
「花びら？」
タバサはポツリとギーシュに命じた。
「錬金」
「ああ、なるほど、そういうことか！」
ギーシュは造花の薔薇を振ると、大量の赤い薔薇の花びらが宙を舞い、それを生成したゴーレムに纏わせた。

ゴーレムの鎧に赤いアクセントがついて、まさに＜ウォリアー＞と呼ぶに相応しい姿になった。
「では、行くぞ！」
テーブルの影から巨大な斧を持ったウォリアーの三体が飛び出る。
それぞれが傭兵達に向かって駆けながら、派手に斧を振り回して、辺りに赤い花びらを散らす。
傭兵達も突然、朱色染まるゴーレムが三体も登場した事にたじろぎながらも、矢で応戦する。
柔らかい青銅に、鋼鉄の鏃が突き刺さるたびに、まるで血が噴出するかの如く花びらが傭兵達に舞い落ちる。
針鼠のように無数の矢が刺さったウォリアー達は、よろめきながらも、己の姿を誇示するかの様に斧を振り回し続ける。
「ギーシュ、それ位で十分よ」
「よし」
ギーシュが杖を振るって＜錬金＞をかけると、酒場の玄関に散らばった花びらが一斉にぬらっとした油に変化した。キュルケが続けざま杖を構える。
「舞台の飾りつけが出来上がったところで、主演女優の出番よ！」
キュルケは色気たっぷりの仕草で呪文を詠唱し、花が敷き詰められた場所に向かって、杖を振る。
キュルケの魔法で油が引火して、『女神の杵』亭の入り口辺りでギーシュのウォリアーを飲み込むように一気に炎が燃え盛る。
そこへタバサが魔法で風を起こし、立ち上る炎が油にまみれた傭兵達へと燃え移る。
そして炎に巻かれた傭兵達はのた打ち回り、体についた炎を消そうと大騒ぎになった。
巨大ゴーレムの肩の上、フーケは舌打ちをした。
隣に立った仮面の貴族にフーケは呟いた。
「金で集まった程度の連中は互いに連携がとれなくて使えないねえ。

騒いでいるだけじゃ、下手に炎を広げちまうってのにさ」
「あれでよい」
「あれじゃあ、あいつらをやっつけることなんかできないじゃないさ。それともあんたは人が焼けるところを見る趣味でもあるのかい？」
「さあな、炎も悪くは無いかもしれないな」
マントの男は笑ってみせる。
それを聞いてフーケは顔をしかめる。
「とにかく、傭兵どもが奴らを倒さずとも、かまわぬ。奴らを分散させできれば、もう傭兵どもは用済みだ。むしろここで数が減った方が払う金貨が少なく済んで良いだろう？」
「・・・盗人だったあたいが言える口じゃないけどさ、あんた、やり方汚いよ」
「綺麗事でだけで大儀が成せるものなら見てみたいものだね」
仮面の男が耳を澄ますようにして立ち上がると、フーケに告げた。
「よし、俺はラ・ヴァリエールの娘を追う」
「あたいはどうすんのさ」
フーケは呆れた声で言った。
「好きにしろ。残った連中は煮ようが焼こうが、お前の勝手だ。合流は例の酒場で」
男はひらりとゴーレムの肩から飛び降りると、暗闇に消えた。
「何が『合流は例の酒場で』だ、一銭にもならないというのに、いけ好かない貴族連中に付き合う程、あたいも酔狂じゃないさ」
フーケは苦々しげに呟いた。
「適当にあしらったら、何かうまい方法見つけてずらかるとするかね」
下で男達の悲鳴があがる。炎にあぶりだされた傭兵達がゴーレムの足元で転げまわる。
赤々と燃える炎と夜に響き渡る悲鳴がフーケを苛立たせる。
「ええいもう！ったく、頼りにならない連中ね！」

フーケは地面の岩を＜錬金＞で土にすると、それをゴーレムで掴み、炎が点いてのた打ち回る傭兵達に土を投げ、被せた。
フーケは下に向かって怒鳴った。
「潰されたくなきゃ、どいてな！」
ゴーレムがずしん！と地響きを立てて、入り口に近づく。
拳を振り上げて、入り口にそれを叩きつけた。

酒場の中からキュルケとタバサは炎を操り、傭兵達を外へと追い出していた。
「見た？わかった？あたし達の炎の威力を！火傷したくなかったらおうちにお帰りなさいよね！おっほっほ！」
キュルケは勝ち誇って、笑い声を上げた。
「君は実に楽しそうだね、まだフーケのゴーレムがいるって言うのに」
ギーシュはテーブルの影から立ち上がった時、
轟音と共に、建物の入り口がなくなった。
「あっちゃあ、前の時もきつかったのに、今度は岩のゴーレムだなんてね」
キュルケは舌をペロッと突き出す。
「なんだい、あの白い使い魔はいないのかい？あの時の礼が返せないなんて残念ね。まああんた達で我慢してやるさ、かかってきな！」
フーケは巨大ゴーレムの腕を振らせ、宿の入り口の残骸をベキベキと音を立てながら薙ぎ払う。
「どうする？岩でできていて何か前よりも頑丈そうだけど」
キュルケはタバサの方を見た。
タバサは、両手を広げると、首を振った。
「スペル・チェインが無いと無理」
そう呟いて、タバサはギーシュの方を見た。
「え？僕かい？そう言われても、昨日教えられたもので、ぼくらでできる連携なんてあったかなあ」

その時ギーシュは手に持っていた壜の事を思い出した。
「待てよ、これを使えば・・・ふむ、二人とも、聞いてくれ」
ギーシュはキュルケとタバサに連携の手順を簡潔に伝えた。

「あたしはそれぐらいの魔法を唱える力はまだ残っているけど、一番動いてもらう事になるタバサはどうかしら、行ける？」
タバサはこくりと頷く。
「そ、じゃ、ギーシュ合図頼んだわよ」
「わかっているさ！」
ギーシュは杖を振り、新たに三体のゴーレムを生成する。
先程の『ウォリアー』型とは違い、片刃の短い短剣を二刀とも逆手に持ち、動き易さを考慮に入れ、非常に軽装な姿をしていた。
敢えて酸化させたのか、青銅の表面は暗く黒ずんでいて、まるで闇に溶け込む暗殺者のようだった。
「『ニンジャ』と言って、汚れ仕事をする者達がブロントさんの国ではいるらしいが。とにかく、こいつにこの物騒なものを持って貰うとするよ」
ギーシュは生成した『ニンジャ』の一体にブロントから渡された壜を埋め込んだ。
「よし！いくぞ！」
ギーシュが号令をかけると、三体のニンジャは時間差をおいて一体ずつフーケのゴーレムへと向かって行く。
それと同時にキュルケが牽制用の小さな炎の玉をフーケ向けてばら撒く。
タバサはすでに杖を構えていて、呪文を唱えていた。
「ラグーズ・ウォータル・デル・ウィンデ」
タバサは氷の粒を帯びた竜巻の魔法＜アイス・ストーム＞を巨大ゴーレムの足に纏わりつかせ、じわじわと岩の表面を凍らせていく。
フーケはキュルケの炎の玉を払いながら、闇に紛れて巨大ゴーレムに飛び移ろうと跳ね回るギーシュのニンジャに目を光らせた。

「へえ、氷でゴーレムの足を鈍らせ、炎であたいの注意を逸らし、その間ゴーレムで本体を直接狙うだなんて。学院のお子ちゃまにしちゃいい作戦を思いついたものね」

経験の乏しい子供のメイジ達だとばかり思っていたフーケは素直に感心する。

「だけど、トライアングルの土メイジにとっちゃ、ゴーレムの位置なんて目を隠したって判るもんさ！」

フーケは自分のゴーレムの右腕に取り付いたニンジャを左の拳で叩き潰し、

背中に飛び移ろうとしたもう一体のニンジャを錬金でただの土に変える。

「後はこの足元の一体を踏み潰せば、あんたらのせっかく考えた作戦も詰んじまうね」

フーケは巨大ゴーレムの足を上げよう、と思ったが、がくんと揺れ巨大ゴーレムがバランスを崩す。

フーケの予想以上にタバサの＜アイス・ストーム＞の冷気が強く、巨大ゴーレムの右足の稼働部はもうすでにガチガチに凍りつき、『硬化』していた。

「キュルケ！今だ！僕のゴーレムを！」

「行くわよ！」

ギーシュの合図を受けて、キュルケが残る最後の一体のニンジャに向けて炎の玉を放つ。

巨大ゴーレムの凍りついた足から数メイル離れた位置でキュルケの炎を受けたニンジャは燃え盛るも一瞬、仕込まれた「発火薬」に引火し、眩い閃光に包まれる。

スガーーン！

耳を劈く音を立ててぶつかりあう青銅の破片が飛び散り、爆音を辺りに轟かせ、周りの空気をびりびりと震わせ、『振動』させる。

「何てもの仕込ませてるんだい！おっとと・・・」

突然の爆音に耳を痛めたせいでふらついたとフーケは思っていた。

しかし、巨大ゴーレムの肩にしっかり掴まっても、フーケの視界が下がってゆく。
なんと、フーケの岩でできたゴーレムの両足が崩れていた。
冷気で固められ硬化したゴーレムの足が、震える音の振動によって波紋状にひびが入り、バキバキと音を立てながら、『分解』していた。
「ちっ、なんて見事な連携だい・・・・・・」
フーケは舌打ち、苦々しく呟く。
巨大ゴーレムの上半身を何とか動かし、倒れぬように両腕で体を支える。
「風を！」
ギーシュの合図を基にタバサは杖を振る。
放たれた風の刃＜エアー・カッター＞が凍りつき、分解してゆくゴーレムの足を掠めるように駆け抜けた。
＜エアーカッター＞に伴う風により、凍りついた部分が冷やされ、分解の速度を更に加速させた。
そして、勢いを失わず、風の刃が巨大ゴーレムの胴体へと食い込み、『切断』により切れ目をいれる。
「キュルケ！最後に決めてくれよ！」
「ええ！フィナーレはあたしで飾らせてもらうわ！」
キュルケはすでに詠唱を済ませたトライアングルクラスの炎のスペルを杖を振って放つ。
灼熱の業火球がフーケとそのゴーレムを襲う。
「やれやれ、ガキだと思ってあたいが舐めすぎていたようね。ま、ここまで素敵な演出をしてくれたんだ、この『フーケ』、ここで潔く幕を閉じるとするさ」
フーケはため息を吐き、杖を握る。
そして、そのままキュルケの炎に包まれる。
巨大ゴーレムの胴体についた『切断』の切れ目にも容赦なく炎が流れ込み、内側と外側から熱せられた岩肌のゴーレムは燃え盛る炎

の中、赤くドロドロに『溶解』していく。
「これで流石にあの盗賊のフーケも終わりね」
キュルケはゴーレムと共に燃え盛る人影を少し寂しそうに見つめて呟いた。
「あのフーケに勝ったて言うのに、何か浮かないようだね？」
ギーシュが不思議そうに尋ねる。
「盛り上がる舞台も終わってしまえば寂しいものよ。それに戦での人の死と言うものは知ってはいるつもりだけど、やっぱり慣れるものじゃないわ」
「そうだな、それはぼくも同感だ。それよりこの場から離れてどっかに潜んで休もう」
「ええ、気持ちとしては早くブロントさん達を追いたいけど、あたしはもう灯りをつけるための精神力すら残って無いわ。タバサはどう？」
タバサは首を横に振る。三人共に魔法を消耗しきったらしい。
「流石に迷惑をかけたこの宿に泊まるわけにはいかないわよね。あーあ、安宿のベッドで寝るなんて肌が荒れて困るわ」
三人は燃え盛るゴーレムを後にし、騒ぎが届いてない宿を探しに夜更けのラ・ロシェールへと躍り出た。

その頃、ルイズ達は桟橋へと走った。とある建物の間の階段にワルドは駆け込むと、そこを上り始めた。
長い階段を上ると、丘の上に出た。現れた光景を見てブロントは一種の既視感を覚えた。
そこには巨大な大樹が聳え立っていた。
ヴァナ・ディールのウィンダス連邦国を象徴する星の大樹のように、
丘の上に立つ建造物を飲み込むように根を張り、夜空の彼方までその頂上は伸びていた。

そして四方八方に伸ばしている枝にブロントが良く知る飛行船の様な形状をしたものが幾つかぶら下がっている。
先を行くワルドが大樹の根元へと駆け寄ると、中はブロントが知る星の大樹のように人が通るほどの空洞が設けられていた。
中には無数の階段が設けられていて、それぞれが大樹の枝一本一本へと繋がっている様だった。
ワルドが目当ての階段を見つけると、一行は駆け上った。
そして途中の踊り場で、何者かが上から舞い降りた。
白い仮面を被った男が不敵な笑みを浮かべながらルイズとブロントの間に立ちはだかる。
ブロントは仮面の男に言葉を発せさせる間も無くデルフリンガーを抜き放つが、仮面の男は剣の間合いの外へと身を翻して距離を取る。
「ルイズ！こっちへ！」
先頭に位置していたワルドが杖を構え、ルイズを呼び寄せる。
ブロントは階段を小飛びに駆け上がり、距離を詰めるが、仮面の男は＜フライ＞の魔法を使ってそれよりも早くブロントから一定の距離を保つ。
仮面の男が階段の不安定な手すりに器用に立つと、杖を振った。
その瞬間、辺りの空気が冷え始め、男の頭上には小さな雲ができあがっていた。
「相棒！やばい、紫電の雲（ライトニング・クラウド）だ！」
デルフリンガーが叫ぶと同時にブロントは反射的に盾を構えた。
ばつん！と閃光を光らせ、男の頭上から眩い数条の雷光がブロントを目掛けてほとばしる。
金属製の盾が襲い来る稲妻を引き寄せ、バチバチと音を立てる。
しかし、電撃の勢いは止まらず、そのままブロントの左手へと流れ込む。
「おいぃイイイ！？」
左腕に電流が走り、ブロントの腕が痺れ、盾とデルフフリンガー

を落としてしまう。
帯電した盾がバリバリと音を立てながら分解し始め、元の金属ごとにバラバラに階段下へと音を響かせながら転がっていく。
「いい加減にしろよてめーぶっ殺すぞ！」
普段寛大なブロントが鬼の様な形相になって吼える。
仮面の男は軽く笑うと、落ちたデルフリンガーに向けて風の魔法を放ち、ブロントから遠ざける。
仮面の男はブロントが剣を拾いに行くとばかり思っていたが、その予想を裏切り、ブロントは男に跳び寄り、素手で仮面の男の襟を右手で掴む。
「おい・・・盾が壊れたんだわ・・・修理代払ってもらおうか？」
掴まれた男は慌てた様子も見せず、また新たに呪文を詠唱し始めた。
「ヨミヨミですよ？お前の作戦は」
とスキだらけの相手にブロントは電撃がまだほとばしる雷属性の左を男に叩き込む、
「ギガトンパンチ！！」
ブロントの左手が男のアゴを捕らえ、砕く。
だが、打ち込んだはずの拳が突き抜けるような手ごたえを残して、仮面の男は煙のように消し飛んだ。
「おでれーた！＜ライトニング・クラウド＞だけじゃなく、分身を作り出す＜偏在＞まで使う『風』系統のメイジかよ！どっちも高度な魔法だぜ、こいつはとんでもねぇ使い手に狙われたもんだな！」
階段の端っこに転がるデルフリンガーが叫ぶ。
「ブロント！」
「大丈夫かい、使い魔くん？」
ルイズとワルドが階段の上から駆け寄る。
ブロントは左手からパチパチと火花を放つ左手でデルフリンガーを拾い上げる。
「お、おい、相棒！ちょっと待った、俺に触る―お、何だこりゃ？

まさか今ので雷をその左手のルーンに宿らせたのか？おめ、魔法拳だなんて随分とおもしろそうな事してんな」

ワルドがブロントの様子を不思議そうに確かめる。

「しかし、＜ライトニング・クラウド＞は、本来なら、命を奪うほどの呪文だぞ・・・盾だけですむなんて、よくわからんが、『ガンダールヴ』のルーンにはそんな力もあるのか」

ブロントは黙って唇をぎりっと噛みながら、階段下に散らばった盾の金属片を拾い集める。

「こいつあ見事に分解されちまったな。あーあ、いい盾だったのによ。だから相棒、前に言っただろ、金はかかるけど＜固定化＞の魔法をかけてもらっとけってー」

ブロントはデルフリンガーを鞘に納め黙らせた。

散らばった盾の破片をカバンの仕舞うと、ブロントはぼそりと呟いた。

「恥知らずな風使いががいた・・・」

左手をグッっと握り締めるとバチッと火花を放つ。

「さあ、先を急ごう！先程のが＜偏在＞であればまたいつ襲ってくるかわからないからな」

ワルドはルイズの手を握り、階段を駆け上っていく。

三人が一本の枝の先にたどり着くと、そこには一艘のフネが停泊していた。

突然ワルド達が現れたことに、甲板で寝転んでいた船員が起き上がった。

「な、なんでぇ？おめえら？」

「船長を呼べ」

ワルドは、すらりと杖を引き抜いた。

「き、貴族！ちょ、ちょっと待ってな」

船員がすっ飛んで船長を呼びにいった。

しばらくして、船長であると示す帽子を被った初老の男を連れ戻

ってくる。
「こんな夜更けになんの御用ですかい？」
「アルビオンへ、今すぐ出航してもらう」
「そいつは無茶だ、アルビオンがここラ・ロシェールに最も近づくのは明日の朝だ。今出航したって積み込んである風石が足りませんや！今出航しても地面に墜落するだけさ」
「風石が足りぬ分は、僕が魔法で補う。僕は『風』のスクウェアだ」
船長はしばらく船員と顔を見合わせた。それからワルドの方を向いて頷く。
「ならば結構ですが、こっちも寝ていた所を起こされてまだ寝ぼけているんでね。こう、黄金に光るものを見せて貰えば野郎どももしゃっきりと目が覚めると思うんだが・・・」
船長はこすずるそうな笑顔を浮かべて、指を摘んで摺り寄せて見せる。
「いいだろう、積荷の運賃と同額を出そう」
商談が成立したので、船長は矢継ぎ早に命令を下した。
「ようし！野郎ども！出航だ！もやいを放て！」
船長の怒号に反応して、長年この船長の下で熟練された船員達は飛び起き、瞬く間の内にフネを繋ぎ止めていたもやい綱を解き放ち、帆を張る。
大樹の枝から解き放たれたフネは一瞬空中に沈んだが、
風石の力により宙に浮かぶ。帆と舷側に付けられた羽が風を受けると、徐々にフネはアルビオンに向けて前進する。

ワルド達がアルビオンに向けてフネを出航させた頃、
『女神の杵』亭前の焼け焦げた土の中から数十メイル離れた街の物影で、
地面がぼこりと盛り上がり、そこから煤塗れた人物が地面から這

い出る。
「ぺっ、ぺっ。これじゃあ『土くれ』じゃなくて『土まみれ』のフーケかね」
キュルケの炎が当たる瞬間、素早く地面に錬金をかけ、掘り起こしたフーケは咄嗟に地面の中に逃げていた。
錬金で掘り返した土を使い炎の熱を防ぎつつ、じっと地面の中から土伝いに外の様子を伺い、キュルケ達が離れた事を確認して地面を錬金で掘り進み、出てきた。
「いくら土のメイジだからって、土竜の真似をする事になるなんてね」
フーケは顔についた土汚れや煤をローブの袖で拭き取っていた。
「だけど、これでめでたくお尋ね者の盗賊フーケは死んだって事にできるんだ。連中には多少感謝しなくちゃね。あの薄気味悪いレコン・キスタとやらも流石に死んだメイジには用は無いだろうさね」
フーケは一人でそう呟き、苦笑いする。
「さて、適当に『土くれのフーケ』が死んだって噂を広めたら、久しぶりにここアルビオンのあの子の所にでも帰ってやるかね」
バサッと煤で汚れたローブをその場に脱ぎ捨てると、フーケは自慢の緑の髪をかきあげて、闇夜の中へと消えていった。

第15話　「スヴェルの空に向かう船」

ルイズ達が乗り込んだフネは双月の重なる夜空に向けて航行していた。
先程三人が息を切らすまで駆け巡ったラ・ロシェールの明かりが、闇夜に吸い込まれて行く様に遠ざかっていた。
甲板の上でブロントは篭手を外して自分の左手を興味深げに眺めていた。
それをルイズは心配そうに見つめる。
「ねえブロント、傷は大丈夫？」
ルイズが近寄り、ブロントの左手に手を伸ばした。
「触らない方がいい」
ブロントは咄嗟にルイズの手を右手で撥ね除けた。
「な、何よ！心配してあげてるのに！」
自分の使い魔が意外な行動を取ったので、ルイズは頭にくるよりか、内心驚いていた。
「落ち着けって。相棒は別に悪気があった訳じゃねーんだ。実際、今の相棒の左手を迂闊に触らない方がいいぜ」
デルフリンガーはカタカタと鍔を鳴らす。
ルイズはいまいち飲み込めていない様子で首を傾げた。
「ま、見せた方が早いだろな。相棒、ちょっとやってみせろよ」
ブロントはカバンから金貨を一枚取り出すとそれを左手に乗せた。
「こっからよく見とけよ？」
ブロントは鍔を鳴らすデルフリンガーを右手で引き抜いた。
武器を手に持ったことで、ブロントの左手のルーンが反応して光を放つ。
その時、ブロントの左手の金貨がパチン！と音を立てて小さな電流が迸る。
そしてバチバチ！と火花を放つと同時に金貨が真っ二つに割れた。

「と、まあなんだ?使い魔のルーンに雷属性も付いちまった、てとこか?」
ブロントはデルフリンガーを鞘におさめると、手のルーンが消えると共に、
左手から流れ出す雷も収まった。
「何で金貨が割れちゃったの?」
「相棒の雷はさっき打たれた魔法のものよりは弱いんだが、持ったものを分解しちまう。<固定化>の魔法がかかっているものか、俺みたいに『伝説』の域に入る武具じゃないと耐えられねだろな」
ブロントは解説をよく得意気に語るデルフリンガーに任せると、黙って篭手を付け直した。
「それにしてもよ、その雷に耐えられる相棒の篭手はすごいもんだぜ。俺を作った奴みたいにきっとすげえ名工が作ったんだな」
「それほどでもない」
「おい・・・相棒そこは謙虚に行くところじゃないぜ。それじゃまるで俺が―」
デルフリンガーが言葉を言い切る前にブロントが鞘に押し込める。
そんなやり取りをしている二人に船長と話していたワルドが寄ってくる。
「明日の昼過ぎには、スカボローの港に到着するそうだ。それと、船長の話では、ニューカッスル付近に陣を配置した王軍は攻囲されて苦戦中のようだ」
ルイズがはっとした顔になった。
「ウェールズ皇太子は?」
「わからない、まだ死んだと言う噂は聞いてないが」
「とすると、ニューキャッスルの王党派に何とかして接触しないといけないかしら」
「そうだな。反乱軍の包囲を抜けての陣中突破しかあるまいな。まあ、反乱軍も公然とトリステインの貴族に手出しはできんだろう。夜の闇には気をつけないといけないがな」

ルイズは緊張した顔で頷いた。
「そういえば、ワルド。あなたのグリフォンは？」
ワルドは微笑み、口笛を吹くと、フネの下からグリフォンの羽音が聞こえてきた。
そのまま甲板に着陸して、船員達を驚かせた。
そして捕食者の様な目をしたブロントに三回見つめられて、ワルドのグリフォンは背筋に何か冷たいものをひしひしと感じていた。
「おい、どうした？あまり暴れるな」
ワルドはソワソワと動き回る自分のグリフォンを押さえ付けた。
ブロントは舷側に祈る様な形座りこんで、目を深く閉じる。
そこへルイズがやって来て、隣に座る。
「今のうちに休んでおくわ、着いたら起こして」
そう言って、ルイズはすーすーと寝てしまった。

慌しい船員達の声と眩しい光で、ブロントは目を開けて立ち上がる。ブロントに寄りかかって眠っていたルイズが「うあ」と言って倒れる。
「アルビオンが見えたぞ！」
鐘楼の上に立った見張りの船員が、大声を上げた。
「おいィ！？」
ブロントは上を見上げると息をのんで、驚いた。
上空の雲の切れ間から、黒々と大陸が覗いていた。
ブロントはヴァナ・ディールで、上空に浮かぶ人工島のトゥー・リアを訪れた事はあったが、
ヴァナ・ディールのクォン大陸とミンダルシア大陸の両大陸を合わせた程の大きさを誇る浮遊大陸は見た事がなかった。
「あれが浮遊大陸アルビオンよ」
ルイズはぶつけた頭をさすりながらブロントに言った。
「ああやって、空中を浮遊して、主に大洋の上をさ迷っているわ。でも、こうして月に何度か、ハルケギニアの上にやってくる。大き

さはトリステインの国土ほどもあるわ。大陸の下半分がいつも白い雲で覆われているから通称『白の国』とも」

その時、鐘楼に上った見張りの船員が、大声をあげた。

「右舷上方の雲中より、フネが接近します！」

ブロントは言われた方を向いた。舷側に開いた穴から大砲が突き出ている黒くタールで塗られたフネが一隻近づいてくる。

ルイズは眉をひそめる。

「いやだわ。反乱勢・・・、貴族派の軍艦かしら」

後甲板で、風の魔法でフネを支えるワルドと並んで操船の指揮をとっていた船長は、船員に怒鳴る。

「おい！あれは一体どこのフネだ！？」

そこへ副長が駆け寄ってきて、青ざめた顔で船長に告げる。

「あの船は旗を掲げておりません！」

船長の顔も、みるみるうちに青ざめる。

「空賊か！」

「間違いありません！内乱の混乱に乗じて、活動が活発になっていると聞き及びますから」

「逃げろ！取り舵いっぱい！」

船長はフネを大きく傾けて、空賊から遠ざけようとした。しかし、機動力に勝る空賊の黒船がぴったりと併走し、脅しの一発を、ルイズ達が乗り込んだフネの針路めがけて放った。

放たれた砲弾はフネの前面擦れ擦れを通り過ぎると、そのまま雲の彼方へ消えていく。

黒船のマストに、停船を求める旗信号があがる。

船長は助けを求めるように、隣に立ったワルドを見つめる。

「魔法はこのフネを浮かべるために打ち止めだよ。あのフネに従うんだな」

船長は苦虫を噛み潰したような顔をして命令した。

「裏帆を打て。停船だ」

ルイズ達が乗るフネの横にぴったりと幅を寄せた空賊のフネの舷側には弓や銃を持った男達が並び、こちらに狙いを定めた。
鉤のついたロープが放たれ、ルイズ達の乗ったフネの舷縁に引っかかる。
手に斧や曲刀などの得物を持った屈強な男達がロープを伝ってやってくる。
ブロントはルイズの前に立ちはだかり、剣に手をかけた状態でじっとその場を見守っていた。
乗り込んできた水兵達だけが相手ならブロント難なく打ちのめせる自信はブロントにあったが、逃げ場の無い上空で何門もの大砲に狙われていては迂闊に手を出す事はできなかった。
それに先程襲ってきた仮面のメイジがいるかもしれない。
それらを相手にしながらルイズを守り通す事は少しばかり難しそうだった。
「ブロント・・・」
ブロントの背中に寄り添うルイズが不安そうに呟く。

乗り込んできた空賊達の中に、派手な格好の空賊が一人いた。
元は白かったらしいが、汗と油で汚れて真っ黒になったシャツの胸をはだけ、
そこから日焼けした胸が覗いている。
ぼさぼさの長い黒髪は、赤い布で乱雑にまとめられ、顔中に無精ひげが生えている。
その左目には黒い眼帯が巻いてあった。
その堂々たる風貌や、周りの空賊の態度から察するにその男が空賊の頭らしい。
「船長はどこでえ」
荒々しい仕草と口調で、辺りを見回す。
「わたしだが」

震えながら、それでも乗組員と乗客の命を預かる船長は己の責務を全うするため手をあげる。
頭はどすどすと船長に歩みより、その頬にぴたぴたと抜いた曲刀で叩く。
「フネの名前と、積荷は？」
「トリステインの『マリー・ガラント』号。積荷は硫黄だ」
空賊たちの間から歓声があがると、頭はにやっと笑い、船長の帽子を取り上げ、自分が被った。
「フネごと全部買った！料金はてめえらの命だ！」
船長が屈辱で震える。それから頭は、甲板に佇むメイジのマントを羽織ったルイズとワルドに気づいた。
「おや、貴族の客まで乗せているのか」
ルイズに近づいた所、二メイルはある白い甲冑をきた大柄の男が間に割り入った。
「こりゃあまた立派な従者だな。だが、もったいないな。お前のかわいい主人には高い身代金がつきそうだが、お前じゃ払うって奴もいねえだろ。どうだ、おれのフネで働かねえか？もっとも向こう五年は甲板磨きだがな！」
空賊の男達は下卑た笑い声をあげた。
ブロントは鼻で笑うと手のひらを広げて首を振った。
「はっ！こいつは驚いた。こんな状況だってのに肝が据わってるぜ。ま、仲間になりたくねえって言うのなら無理にはいわねえさ。せいぜいお前の主人ともに買い取ってくれる殊勝な奴が現れる事を祈っておくんだな！」
頭は大声で笑った。そしてルイズ達を指差して言った。
「てめえら。こいつらも運びな。身代金がたんまり貰えるだろうぜ」
空賊のフネに捕らえられたルイズ達は、船倉に閉じ込められた。
ブロントはデルフリンガーを取り上げられ、ワルドとルイズは杖を取り上げられた。

杖がなくては簡単な魔法すら唱えられないので、鍵をかけられただけでワルドとルイズは手足が出なくなってしまった。
もっとも、ブロントなら扉を素手で打ち壊せるのかもしれないが、その先逃げ道の無い空を浮かぶ空賊のフネの中で暴れても仕方がなかったので、
ブロントは陸地に着くまでは大人しくしているつもりらしい。
閉じ込められた船倉は弾薬庫として使われているのか、火薬樽やら束ねた火縄やら、酒樽に詰まった火打石が雑然と置かれている。
重そうな砲弾が、部屋の隅にうず高く積まれている。
ルイズは船倉の隅に腰掛けた時、ついふとした気の緩みからか、お腹をかわいく、くーと鳴らした。
「・・・ッ！いや、これは・・・その！」
ルイズがあたふたと慌てる。
「そういえば、ラ・ロシェールからろくに何も食べて無いな。贅沢は言わないが、連中が人質に食事をだすぐらいの常識を持ち合わせてくれている事を願いたいな」
ワルドも一晩中フネを魔法で支える事に精神力を使い果たし、空腹感を感じていた。
「こういう時の食事は塩漬けの干し肉を戻しただけの水に近いスープと相場は決まっているがね」
ワルドは苦笑いをする。
その二人の様子を見ていたブロントは、何か思いついたのか、船倉の酒樽から火打石を拾いあげて、一つ一つ手にとって見る。
ブロントは形が比較的均等で丸いものを見つけると、軽く指で擦って磨き
船倉の扉を叩いた。
「なんだ？」
扉の向こうから看守が尋ねてくる。
ワルドとルイズはじっとブロントの様子を黙って見つめている
「水と鍋を貸して欲しいのだが。あと火があれば『石のスープ』作

るんだが」
「腹が減ったんで石でも煮て食うってか？こいつはまた変わった貴族様を捕まえちまったようだな！心配すんな、そのうちスープの一杯でもでるだろうよ」
ガハハハと扉の向こうから看守の笑い声が響く。
「お前、水で煮るだけでうまいスープが作れるという石を知らないのかよ？」
「そんなマジックアイテム、聞いた事無いね」
「俺のいたロバん・アカイエの料理なんだが。その味を知らないなんて、勿体無い実にもったいないな」
「何！？ロバ・アル・カリイエからのマジックアイテムだと！？」
煮るだけでスープを作れるマジックアイテムと聞き、好奇心がむくむくと湧いたのか、看守が話しに食いついてくる。
「・・・・・今日の担当は飯がまずいウェッジの野郎だったけな。奴のスープ飲まされるぐらいなら・・・ちょっと待ってろ」
仲間に相談しに言ったのか、看守はその場を離れた。
「ブロント、一体？変な事するつもりじゃないでしょうね？」
ルイズが不安そうに尋ねる。
「俺はただスープを作りたいだけなんだが」
「そ、そう」
数分後、船倉の扉の前で複数の足音がばたばたとして、扉が開く。
そこには曲刀をぎらつかせた男達が立っていた。
バンダナを目深に被った痩せぎすの男がブロントを指差す。
「火薬が置かれているそこに火を持って来ることはできねえ。だからそこの男、そのマジックアイテムを持って俺らについてきな。変な真似したら切り刻んで空から投げ捨てるからな」
そうしてブロントは空賊の男達にフネの厨房まで連れて行かれる。
再び扉の鍵を閉められて船倉に残されたルイズとワルドは顔を見合わせる。
「君の使い魔、大丈夫かな」

「え、ええ。大丈夫よ・・・多分」
ルイズは胸に下げたリンクパールを指でさする。

フネの厨房は狭く、三、四人も入れば身動きが出来ないほどの大きさだった。
そこには小さな釜戸が設けられていて、換気用の小さな窓が取り付けられているが、
中は蒸すように暑い。
棚の上には大鍋やら皿が乱雑に積んである。
「おい、ウェッジ！連れてきたぜ、こいつに『石のスープ』とやら作らせな！」
痩せぎすの看守の男はブロントの背中をバンバンと叩くと、他の仲間とともに厨房の外でまった。
「煮るだけでスープが作れる石がそれか？見た目はただの石みてえだな。おもしれえ、この鍋に水を沸かせてあるからやってみな」
厨房の中で汗を流している太った男がブロントに大鍋の前の場所をゆずった。
ブロントは手にした火打石を大鍋にぼちゃんと落とすと、そのままぐつぐつと煮立てた。
ブロントはゆっくりと鍋をかき回して、水のスープを匙で掬ってみせる。
「そろそろいい頃なんだが。味を見るべき」
「おい、その石が毒かもしれねえだろ。てめえで味をみな」
そう言われてブロントは自分でそれを煤って味見してみせる。
「これで中々うまいんだが。少し塩を入れるともっと旨くなるのは確定的明らか」
「塩か？ああ、サン・マロンの輸送船からとったものがまだ確かここらに少しあったな・・・」
太った男が厨房の棚を漁ると、そこから岩塩の一欠けらを取り出

しブロントに渡した。
ブロントは岩塩を鍋に落とすと、ゆっくりとかき混ぜた。
「どうだ？　良くなったか？」
太った男は興味津々に鍋の中を覗き込む。
ブロントはまた匙で味を見ると、考え込むように首を傾げる。
「かなりマシになったが。隠し味が足りにい。オニオンかポポトが少しあればもっといいんだが・・・」
太った男は厨房の扉を開けて、痩せぎすの男に詰め寄った。
「おい、ビッグス。おめえたしか以前にオニオンの袋をくすねてたよな。そいつもってこい」
「おい、何でお前がそれ知っているんだよ。あれはお前が担当の日の不味い飯を我慢して食うために取っておいてあるんだぜ」
太った男は痩せぎすの男を指差した。
「いいから、とっととオニオンを数個もってこい、じゃなきゃお頭にお前が食いもんがめてたってバラすぞ。あとよ、隠し味に何かイモみてえなもんがあると味がよくなるらしい、誰かが持ってるだろうから探してこい」
痩せぎすの男は舌打ちしながらその場を離れると、オニオンを数個と他の仲間が隠し持っていたジャガイモを持ってきた。
『石のスープ』を作っていると聞いて興味を持った他の空賊も何人か厨房前に集まって扉を開いて覗いている。
「これらも入れて、どうだ？石のスープって一体どんな味なんだろうな・・・」
太った男はくんくんと嗅ぎながら鍋の中を覗く。
ブロントが匙でスープの味を見る。
「かなりいい出来なんだが。ガーリック一片とソーセージ数切れ手に入れたら高確率で一番最強のスープになる。小麦粉もあると最高なんだが・・・」
「そうか。おい、てめえらもただ見物してねえで探してこい」
そんな調子で船中から少しずつ集めた野菜、肉、香料が鍋の中で

ぐつぐつと煮えて、とても旨そうな匂いが漂ってきた。
厨房の前に人だかりが出来ていた。誰も行った事が無い、遠く東方のロバ・アル・カリイエからのマジックアイテムで作られたスープと聞いて、面白いものが見れると思い、互いに押し合いながら見物している。

「てめえら、何かこそこそしていると聞いてみれば、こんなとこで何やってんだ?」
「あっ!お、お頭!?」
何と空賊の頭は船員達が不振な動きをしていると副長から聞き、それを自ら確かめにきた。
事の発端となった痩せぎすの男をその場にいた空賊の仲間達がお頭の方へと押し出す。
痩せぎすの男は萎縮した態度で頭に説明する。
「いや、お頭。それがですね、先程捕まえたこの男がロバ・アル・カリイエからのマジックアイテムを持っていまして。何でもその石を煮るだけで旨いスープができるってんで。今日はウェッジが担当の日でしたから、どうせならと・・・」
「確かにあの臭いスープを飲むぐらいなら、マンティコアの小便のがまだマシに思えるな!」
男達は一斉に笑う。
厨房から木匙が飛んできて、痩せぎすの男の頭に当たる。男達は更にどっと笑う。
頭が厨房の中にはいってみると、そこには色々な具材が入った、確かに旨そうなスープぐつぐつと音を立てて煮えていた。
「こいつが、石を煮ただけでできた『石のスープ』ってか?確かにすげえマジックアイテムみたいだな。悪いが、その石はいただくぜ」
頭はにやりとして手をだしてブロントに催促する。その時周りの男達の目も鋭く変わり、各々が武器に手をかける。
「これはもう『石のスープ』じゃにいー」

ブロントは鍋から匙で石を掬いだして、厨房に転がっていた布巾で軽く石をふき取ると。
空賊の頭の手に石を置いた。
「―ただの『知恵のスープ』なんだが」
ブロントはとんとんと自分の頭を指で叩く。
頭は渡された石を確かめて見ると、それがただの火打石だとすぐわかった。
男達が船をこそこそと動き回っていた事を考え直してみれば、何が起こったのか、大体想像がついた。
「おい、てめえら、こいつにしてやられたな！皆が大事に取って置いて隠してたものをこんな方法で引っ張り出すなんざ、確かにこいつは『知恵のスープ』だな！」
頭は手に湿った火打石を持ったまま、愉快そうに笑った。
「気に入ったぜ！おい、ウェッジ、俺の部屋にこのスープを四人分用意しておきな。ビッグス、おめえは貴族の二人を俺の部屋に連れてこい」

船倉にいた二人は男達に空賊の船長室まで連れられた。
痩せぎすの男が船長室の扉を開くと、そこには豪華なディナーテーブルがあり、一番上座に頭が座って、その周りにガラの悪い空賊の連中がニヤニヤと笑っている。
そしてテーブルの向かいにブロントは何事もない、といった態度で座っている。
ルイズが思わず叫ぶ。
「ブロント！無事だったの？」
ブロントは何も言わずに頷く。
「ま、そこに座れ。取り合えず貴族らしくテーブルで飯は食わせてやるよ」
頭はそう促しながら大きな水晶がはめられた杖をいじっている、どうやらメイジらしかった。

ブロントの隣の席を見てみると、確かに皿に入ったスープらしいものがルイズとワルドのためにも用意されているのがわかった。
言われたままルイズとワルドはテーブルの席に付くが、二人とも食事には手を出さない。
「安心しな、それはそいつが作ったもんだ。質問は食いながらといこうじゃないか」
そういって頭がスープに口を付けると同時にブロントも口を付ける。
毒が入ってないとわかったルイズはそれを見て色々な具が入ってるスープに匙をつけた。
ごちゃごちゃにモノがはいってどの味が主役なのかはわからなかったが、
各具材が持つクセをうまく互いに消しあって、混ざり合った香料が肉や野菜の味を最大限に引き立てていた。
具の一つ一つが何かと食べながら考えるのも少し楽しかった。
入っている食材はどれもがほんの少量で、それ単体で食すには足りないが、
こうして一つのスープとなって見ると、どの食材も欠かすことが出来ない味となっていた。
乱雑な作りのように見えたが、実に隙が無い、完成された料理だった。
「こいつあ、うめえぜ。このフネにあるもんでこんなもんできるなんてよ。おい、お前本当に俺の仲間にならねえか？ウェッジの代わりに厨房勤めてくれるのなら文句言う奴はいねえぜ？」
ブロントは首を横に振る。
「だろうな。言ってみただけさ」
頭が笑うと、周りの男達も釣られて楽しそうに笑う。
「さてと、ここから本題だ。トリステインの貴族様方、名乗りな」
「大使としての扱いを要求するわ」
ルイズは匙を置くと、毅然とした態度で言った。

「大使?そういや、お前の従者が厨房で面白い事やっている間、俺の部下に聞かせたところ、王党派だとか言ったらしいな」
「ええ、言ったわ」
「何しに行くんだ?あいつらは明日にでも消えちまうぜ」
「あんたらに言う事じゃないわ」
頭は、歌うような楽しげな声でルイズに言った。
「貴族派につく気はないか?あいつらは、メイジを欲しがっている。たんまり礼金を弾んでくれるだろうさ。もちろん紹介した俺の懐にもな」
「死んでもイヤよ」
頭は顔を曇らせ、杖を握り締める。
ルイズが震えているのにブロントは気づき、そっと肩に手をやる。すると不思議とルイズの震えは止まり、キッと男の目を真っ直ぐに睨み返す。
「もう一度言う、貴族派につく気は無いか?」
ルイズは腕を腰に当て、胸を張って言った。
「くどいわ、その杖を振るのなら振ってみなさいよ。でもわたしとわたしの使い魔は首だけになってもあんたに噛み付いてやるわ」
頭は笑った、大声で笑った。
「トリステインの貴族は、気ばかり強くって、どうしようもないな。まあ、どこぞの国の恥知らずどもより、何百倍もマシだがね」
頭はナプキンで丁寧に口元を拭き、しゃんと背筋を伸ばして立ち上がった。
「失礼した。貴族に名乗らせるなら、こちらから名乗らなくてはな」
周りにいた空賊達もニヤニヤ笑いをおさめ、一斉に直立した。
頭はぼさぼさの黒髪をはいだ。なんとそれはカツラであった。
眼帯を取り外し、作り物のひげもべりべりとはがした。
そこに現れたのは、凛々しい金髪の若者であった。
「私はアルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令官・・・といっても、すでに本艦の『イーグル』号しか残っていない名ばかりの艦隊だが

ね。その肩書きよりもこちらを名乗った方がいいか」
若者は居住まいをただし、威風堂々名乗った。
「アルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」
ルイズは口をあんぐり開けた。
ブロントは相手が敵ではないとわかり一人堂々と食事に戻る。
ワルドは興味深そうに、皇太子を見つめた。
ウェールズは、にっこりと笑みを浮かべる。
「アルビオン王国へようこそ。大使殿。さて、御用の向きをうかがおうか」
あまりの事にルイズは口がきけなかった。ぼけっと。呆けたように立ち尽くす。
「その顔は、どうして空賊風情に身をやつしているのだ？といった顔だね。いや、金持ちの反乱軍には続々と補給物資が各方面から送り込まれる。敵の補給路を断つのは戦の基本。しかしながら、堂々と王軍の軍艦旗を掲げたのでは、あっという間に反乱軍のフネに囲まれてしまうだろう。ささやかながらの抵抗を行うにも、空賊を装うのも、いたしかたない」
ウェールズはイタズラっぽく笑って、言った。
「大使殿には、誠に失礼をした。この状況で外国に我々の味方をしてくれる王党派の貴族がいるなどとは、夢にも思わなくてね。きみたちを試すような真似をしてすまない」
目的の皇太子が目の前だというのに、心の準備が出来ていなかったルイズはぽかんと口を開くばかり。
「アンリエッタ姫殿下より、密書を言付かって参りました」
ワルドがルイズに代わる様に、頭を下げて言った。
「ふむ、姫殿下とな。きみは？」
「トリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵」
ワルドは続けてルイズ達を紹介した。
「そしてこちらが姫殿下より大使の大任をおおせつかったラ・ヴァリエール嬢とその使い魔・・・」

「ブロントだ」
ブロントは口を拭きながら立ち上がる。
「面白い人物だとは思っていたが、まさか君が使い魔だったとは驚いたな。時間が許す限り色々話を聞きたい所だが・・・おっとすまない、話がそれたな。して、その密書とやらは？」
ルイズは慌てて、『一番安全だろう』という事でブロントに預けてあった手紙をカバンから出してもらった。
その手紙を持ってルイズは恭しくウェールズに近づいたが、途中で立ち止まる。それから、ちょっと躊躇うように、聞いた。
「そ、その、失礼ですが、ほんとに皇太子さま？」
ウェールズは笑った。
「まあ、さっきまでの事を考えれば無理はない。こちらもきみたちを疑ったのだから、そちらも私を疑って当然だな。よろしい、証拠をお見せしよう」
ウェールズは、ルイズの指に光る、水のルビーを見つめていった。
自分の薬指に光る指輪を外すと、ルイズの水のルビーに近づけた。
二つの宝石は、共鳴しあい、虹色の光を振りまいた。
「この指輪は、アルビオン王家に伝わる、風のルビーだ。きみが嵌めているのは、アンリエッタが嵌めていた、水のルビーだ。そうだね？」
ルイズは頷いた。
「水と風は、虹を作る。王家の間にかかる虹さ」
「大変、失礼をば致しました」
ルイズは一礼して、手紙をウェールズに手渡す。
ウェールズは、愛しそうに手紙を見つめると、花押に接吻した。
それから慎重に封蝋をはがし、丸めた羊皮紙をひろげた。
真剣な顔で読んでいたが、そのうちに顔を上げた。
「姫は結婚するのか？あの、愛らしいアンリエッタが。私の可愛い・・・・・、従妹は」
ワルドは無言で頭を下げ、肯定の意を表した。

ウェールズは再び手紙に視線を落とす、最後の一行をまで読むと、微笑んだ。

「了解した。姫は、あの手紙を返して欲しいとこの私に告げている。何より大切な、姫から貰った手紙だが、姫の望みは私の望みだ。そのようにしよう」

ルイズの顔が輝いた。

「しかしながら、今、手元にはない。ニューカッスルの城にあるんだ。この空賊船に持ち込むわけにはいかぬのでね。多少、面倒だが、ニューカッスルまで足労願いたい」

第１６話　「誓いの連鎖」

ルイズ達を乗せた黒き軍艦『イーグル』号は、浮遊大陸アルビオンの空岸線に沿って、雲に隠れるようにして航海した。三時間ばかり進むと、大陸から突き出た岬が見えた。

岬の突端には、目的のニューキャッスルの城がそびえている。

しかし、『イーグル』号は真っ直ぐニューカッスルに向かわず、大陸の下側にもぐりこむような針路をとった。

『イーグル』号が大陸の影の一部となったとき、遠く離れた岬の突端の上から、ニューカッスルへと降下してくる巨大な軍艦をウェールズが指差した。

「叛徒どもの、艦だ」

全長は『イーグル』号の優に二倍はある。舷側からは無数の大砲が突き出て、その艦上には火竜に跨る竜騎兵が舞っている。

巨艦が空中に静止したかと思うと、ニューカッスルの城をめがけて並んだ砲門を一斉に開いた。

どこどこどっこーん、と、斉射の振動がルイズ達まで伝わってくる。

砲弾の雨が城に着弾し、城壁の一部を砕き、小さな火災を発生させた。

「かつての本国艦隊旗艦、『ロイヤル・ソヴリン』号だ。叛徒どもが手中に収めてからは、『レキシントン』と名前を変えている。あの艦の反乱から、すべてが始まった因縁の艦さ。我々のフネはあの化け物艦を相手にできるわけもないので、こうして雲中を通り、大陸の下に設けられた、我々しか知らない秘密の港を使ってニューカッスルに向かっているのだ」

『イーグル』号が大陸の下に潜り込むと、日が差しこまないので、辺りは真っ暗になった。

「大陸に座礁する危険があるからと、空を知らぬ無粋な叛徒どもは

大陸の下には絶対近寄ろうとしないが、なに、地形図と測量だけで航海する事は王立空軍の航海士にとっては造作もないことなのだが」

ウェールズの命令の下、暗闇の中でも『イーグル』号の水兵達はきびきびと動き、正確な位置で停船し、頭上にぽっかりと開いている穴に向かって、ゆるゆると上昇する。

『イーグル』号の航海士が乗り込んだ『マリー・ガラント』号が後に続く。

ワルドが頷いた。

「まるで空賊ですな。殿下」

「まさに空賊なのだよ。子爵」

艦はニューカッスル地下にある鍾乳洞に設けられた秘密の港に到着した。

鍾乳洞の岸壁の上に待ち構えていた大勢の港の者達が、『イーグル号』に向けて一斉にもやいの縄を投げた。

『イーグル』号の水兵たちは、要領よくそれを受け取ると艦にゆわいつけ、艦を岸壁へと引き寄せ入港をすませる。

ウェールズはルイズ達を促し、艦に取り付けられたタラップを降りた。

背の高い、年老いた老メイジが近寄ってきて、ウェールズの労をねぎらった。

「ほほ、これはまた、大した戦果ですな。殿下」

「喜べ、パリー。硫黄だ、硫黄！」

ウェールズがそう叫ぶと、集まった兵隊がうおぉーっと歓声をあげた。

「おお！硫黄ですと！火の秘薬ではござらぬか！これで我々の名誉も、守られれるというものですな！先の陛下よりお仕えして六十年・・・・・こんな嬉しい日はありませぬぞ、殿下反乱がおこってからは、苦渋を舐めっぱなしでありましたが、なに、これだけの硫黄があれば・・・・・」

にっこりとウェールズは笑った。
「王家の誇りと名誉を、叛徒どもに示しつつ、散ることができるだろう」
「栄光のある散り様を飾れますな！この老骨、武者震いがいたしますぞ！して、ご報告なのですが、叛徒どもは明日の正午に、攻城を開始するとの旨、伝えて参りました。まったく、殿下が間に合ってよかったですわい」
「してみると間一髪とはまさにこの事！戦に間に合わぬは、これ武人の恥だからな」
ウェールズとパリーと呼ばれた老メイジは二人して心底楽しそうに笑いあっている。
ルイズは二人の会話に、顔色を変えた。なぜ死ぬという事を、ここまで楽しそうに語れるのか？
「して、その方達は？」
老メイジが、ルイズ達を見て、ウェールズに尋ねる。
「トリステインからの大使殿だ。重要な用件で参られたのだ」
「これはこれは大使殿。殿下の侍従を仰せつかっております。パリーでございます。このような時ですが、遠路はるばる、ようこそこのアルビオン王国へいらっしゃった。大したもてなしは出来ませぬが、今夜はささやかな祝宴が催されます。是非とも出席くださいませ」

ルイズ達は、ウェールズに付き従い、城内の彼の居室へと向かった。
ウェールズの部屋は、粗末なベッドに、机と椅子が一組あるだけの、とても皇太子の部屋とは思えない質素な部屋であった。
ウェールズは机の引き出しを開けると、そこには宝石が散りばめられた小箱が入っている。
首からネックレスを外す。その先には小さい鍵がついていた。
ウェールズは小箱の鍵穴にそれを差し込み、箱を開けた。

蓋の内側には、アンリエッタの肖像が描かれている。
小箱の中には一通の羊皮紙を丸めた手紙が入っていた。
それが王女からのものであるらしい。
ウェールズはそれを取り出し、愛しそうに口づけた後、開いてゆっくりと読み返した。
そして、ウェールズは再びその手紙を丁寧に丸めると、ルイズに手渡した。
「これが姫から頂いた手紙だ。このとおり、確かに返却したぞ」
ルイズは深々と頭を下げると、その手紙を受け取った。
そして、その手紙をブロントに手渡す。
「ブロント、あんたのカバンの中が一番安全だから代わりにもっていて」
ブロントは手渡された手紙を厳重にカバンのだいじなものの所へと仕舞った。
ルイズは少し戸惑ったが、そのうちに決心したように口を開いた。
「あの、殿下・・・・・。先程、栄光ある散り様とおっしゃっていましたが、王軍に勝ち目はないのですか？」
ルイズは躊躇うように問うたが、ウェールズは至極あっさりと答える。
「ないよ。我が軍は三百。敵軍は五万。万に一つの可能性もありえない。我々にできることは、はてさて、勇敢な死に様を連中に見せる事だけだ」
「殿下の、討ち死になさる様も、その中には含まれるのですか？」
「当然だ。王族として、私は真っ先に死ぬつもりだよ」
ルイズは深々と頭を垂れて、ウェールズに一礼した。言いたい事があるのだ。
「殿下・・・、失礼をお許しください。恐れながら申しあげたい事がございます」
「なんなりと、申してみよ」
「この任務をわたくしに仰せ付けられた際の姫さまのご様子、尋常

ではございませんでした。そう、まるで、恋人を案じるような・・・。もしや、姫さまと、ウェールズ皇太子殿下は・・・」

ウェールズは微笑んだ。

「きみは、従妹のアンリエッタと、この私が恋仲であったと言いたいのかね？」

ルイズは頷いた。

「そう想像いたしました。そして、手紙の内容とやらは・・・」

「君の想像どおり、恋文だよ。始祖ブリミルの名に置いて、永久の愛を私に誓ったものだからね。その内容が白日の下にさらされたならば、まずい事になるだろうな。アンリエッタが重婚の罪を犯すことになる。そうだとわかればゲルマニアの皇室も婚約も取り消す事だろう。そして、同盟相成らず、トリステインは一国でここまで膨れ上がった恐るべき貴族派に立ち向かわなければなるまい」

「とにかく、姫さまは、殿下と恋仲であらせられたのですね？」

「・・・昔の話だ」

ルイズは熱っぽい口調で、ウェールズに言った。

「殿下、亡命なされませ！お願いでございます！わたし達とともにトリステインにいらしてくださいませ！」

ウェールズは首を振った。

「それはできんよ」

「殿下！これはわたくしの願いではございませぬ！姫さまの願いです！わたくしは幼き頃、恐れ多くも姫さまのお遊び相手を務めさせていただきました！わたくしは姫さまの気性はよく存じております！あの姫さまがご自分の愛した人を見捨てるはずがありません。姫さまは、たぶん手紙の末尾に亡命をお勧めになっているはずですわ！」

「・・・その様な事は一行も書かれていない」

「でも姫さまなら・・・！」

「仮に、もしそうだとして、私がトリステインに亡命をすれば、それこそ貴族派どもにトリステインを攻め入る格好の口実ができてし

まうだろう。アンリエッタも王女としてそれは望まぬはずだ。私達は王族だ。王家に生まれたものは国のために生き、その運命を国と共にする義務があるのも彼女は理解しているはずだ。自分の都合を、国の大事に優先させるわけがない」

ウェールズはルイズの肩を叩いた。

「殿下・・・」

「きみは、正直な女の子だな。ラ・ヴァリエール嬢。正直で、真っ直ぐで、いい目をしている。正直すぎて、大使は務まらないが・・・」

ウェールズはルイズに微笑んだ。魅力的な笑みだ。

「それ故にアンリエッタは、彼女の事を良く理解してくれているきみに、信頼を寄せているのだろう。今後も彼女の良き友人として、力になってあげてくれ」

ルイズは寂しそうに俯いた。

「さて、そろそろ祝宴の時間だ。きみたちは、我が王国が迎える最後の客だ。是非とも出席して欲しい」

ルイズ達は部屋の外にでた。ワルドは居残って、ウェールズに一礼した。

「まだ、何か御用がおありかな？子爵殿」

「恐れながら、殿下にお願いしたい議がございます」

「なんなりとうかがおう」

ワルドはウェールズに、自分の願いを語って聞かせた。

「なんともめでたい話ではないか。喜んでそのお役目を引き受けよう」

祝宴は城のホールで行われた。簡易な玉座が置かれ、そこに年老いたアルビオンの王、ジェームズ一世が腰掛け、祝宴に集まった臣下達を目を細めて見守っていた。

明日には滅びてしまうというのに、とても豪勢な祝宴が催されて

いた。
つい先日まで攻城を受けていたと思えぬほどに、誰もが奇麗に着飾り、
テーブルの上にはこの日のために、とって置かれた、様々なご馳走が並んでいる。
ブロント達は会場の隅に立って、華やかな祝宴を見つめていた。
死を目前にして、明るく振舞う王党派の者達を見ていて、ルイズはその事が理解できず、憂鬱になっていた。
そこへ水兵姿をした痩せぎすの男と太った男がブロント達の元へとやってきた。
「よう！また会ったな、ブロント！」
痩せぎすの男が太った男の頭をパシンとはたいた。
「『よう！』じゃないだろ、ウェッジ。今は空賊ではないのだから、口の聞き方考えろ。トリステインの大使殿達を前にしてアルビオンの恥になるつもりか？大使殿、この度は我々が失礼を・・・」
「うるせえ、ビッグス。今夜の祝宴は平民の俺たち水兵も招いての無礼講だろ？堅苦しい事は無しにしようぜ」
ブロントが頷く。
「俺はそのまま話し易い方でもいいんだが？」
ウェッジが嬉しそうにブロントの背中を叩く。
「ほらな？ビッグス、てめえも慣れねえくせに無理に畏まるなよ、ガラじゃねえぜ。貴族には貴族のやり方がある様に、俺達平民は平民のやり方で行けばいいんだよ」
「まあ、それもそうだな・・・お前は作る飯はまずいくせに、言う事だけはたまに良い事言うな」
「うるせえ、俺が作る飯は関係ねえだろ！」
ビッグスはワインを運んでいた給仕を呼び寄せると、
盆からワインの杯を取り、ルイズ達に配る。
「大使殿もそんな辛気臭い顔しないで、今夜楽しんでいってくれよ。向こうのテーブルにはなかなかお目にかかれない料理がたくさんあ

るからさ。あの蜂蜜を塗った鳥とか結構うまかったぜ」
ルイズは何とか愛想笑いをして見せるが、ワインの杯に口もつけず、そのまま顔を俯かせる。
「でも、今日食った料理で一番うまかったのは、あの『石のスープ』だな。貴族の凝った料理もいいが、俺はやっぱりフネの皆で作ったあの味が忘れられねえ、またいつか食いてえな。おおっと、ようやく我らの『お頭』が来たようだ」
ホールにウェールズが現れると、貴婦人の間から、歓声がとんだ。凛々しい若き皇太子はどこでも人気者のようだった。
彼は玉座に近づくと、父王に何か耳打ちをした。
ジェームズ一世は立ち上がろうとしたが、かなりの年であるらしく、よろけて倒れそうになった。
ウェールズがすかさず父王に寄り添うように立ち、体を支えた。
陛下がこほんと咳払いをすると、ホールの臣下達が一斉に直立した。
「諸君。忠勇なる臣下の諸君に告げる。いよいよ明日、このニューカッスルに立てこもった我ら王軍に反乱軍『レコン・キスタ』の総攻撃が行われる。この無能な王に、諸君らはよく従い、よく戦ってくれた。しかしながら、明日の戦いもう、戦いではない。おそらく一方的な虐殺となるであろう。朕は忠勇な諸君らが、傷つき、倒れるのを見るに忍びない。したがって、諸君らに暇を与える。明日の朝、『イーグル』号が女子供を乗せてここから離れる。諸君らも、この艦に乗り、この忌まわしき大陸を離れるが良い」
しかし、誰も返事をしない。一人の臣下が、大声で王に告げた。
「陛下！今宵、うまい酒の所為で、いささか耳が遠くなっております！『全軍前へ！全軍前へ！』、それ以外の命令が、耳に届きませぬ！」
集まった全員がその勇ましい言葉に頷いた。
「陛下！異国の言葉で命令されても、さっぱりなんのことやら！」
「耄碌するには早いですぞ！陛下！」

老王は、目頭をぬぐい、ばかものどもめ・・・、と短く呟くと、杖を掲げた。
「よかろう！しからば、この王に続くがよい！さて、諸君！今宵はよき日である！よく飲み、食べ、踊り、楽しもうではないか！」
王の言葉に、臣下達が一斉に祝杯を掲げ、アルビオン万歳！と叫ぶ。

会場の端でルイズ達と共にいたビッグスとウェッジも杯を掲げた後、
一気にワインをあおる。
「なあ、ウェッジ。お前はどうするんだ？陛下もああ言っているんだ、『イーグル』号に乗っていくのか？」
「別に料理番の俺がいなくたって、あのフネは動くだろ。ここで俺達アルビオン空軍兵の意地をみせねえでいつみせるんだ？俺はここアルビオンに残るぜ。ここで生まれ育ったんだ、死ぬ時もここだって決めてあるんだ」
「お前とはいつも言い争ってばかりいるが、結局考えている事は一緒だな」
「何だ、てめえもかよ。ま、空っぽの船倉で飛ぶフネに貨物番はいらねえのは確かだがな」
「なら俺とお前で、貴族派の連中に俺達アルビオン空軍兵の根性をみせつけてやろうじゃねえか」
貴族ですらない、ただの平民の兵士であるビッグスとウェッジの誇り高き覚悟を見せ付けられたルイズは、
これ以上この場の雰囲気に耐え切れず、外に出てしまった。
ワルドが棒立ちのまま、動かないのを見て、ブロントは見かねて声を掛けた。
「婚約者のお前は追いかけないのかよ？この辺の心配りがもてる秘訣」
ブロントに促され、ようやくワルドはルイズの後を追った。

ビッグスとウェッジは最後にブロントに向かってアルビオン万歳と叫び、去って行った。

一人祝宴に残ったブロントを見て、座の真ん中で歓談していたウェールズが近寄ってきた。

「やあ、使い魔のブロントだね。フネの中の時から思っていたが、きみは随分と色々な事を知っているようだね。まるで世界を見て回った事があるみたいに」

「それほどでもない」

ウェールズは屈託なく笑う。

「謙虚に隠さずとも、きみの凄さは分かるよ。たった一つの料理を通じて『イーグル』号のクルー達と打ち解けたんだ、それは並大抵の事じゃない証拠さ。きみのように皆の心をまとめる事ができたのであれば、この反乱も起きずに済んだのかもしれないな」

「俺は鍋に石をいれただけなんだが？」

「きっかけなどとは、そういう簡単な事から始まるものだ。だが、そんな簡単な事が中々思いつかないものなのかもしれんな」

二人して、ぼんやりと祝宴を眺めた。明日に死を控えた人たちを見て、ブロントはウェールズに語りかけた。

「お前らは馬鹿すぐる。死んでしまっては何も意味がないな」

「守るべきものがあるから、その為に死ぬ事は無意味ではなかろうよ」

「死んでそのまま骨になった後、誰がその守るべきものを守るんだ？残されたものを考えてない浅はかさは愚かしい」

ブロントがそう言うと、ウェールズは笑った。

「我らは確かに馬鹿なのかもしれんな。守るべきものが大きすぎて、基本的な事が見えていないのかもしれない。だが厄介な事に我らの愚かさは、死なないと治らない重い病みたいなものだ」

「お前それで良いのか？」

「このウェールズ・テューダは王家に生まれたのだ。私一人の我侭のために、我ら王家に従う皆を見捨てるわけには行かないよ。だが、

もし私がただ一人の人間であったのであれば、きみの様に一人の女性を守り、生き抜くのも悪くないと思っている」

「おいィ？そんな事俺に言っていいのか？」

「ふふ、我ながら臣下の者に聞かれたくない事を言っているな。きみと話していると不思議と心の内が曝け出てしまうようだ」

ウェールズは深い溜め息をついた。

「ここほんの数日の間で、私が長年信頼し、友人だと思っていた者達は軒並み貴族派に旗を変えていった。だが、今日会ったばかりのきみと話しているとまるで長年の知己と語り合っている感覚すら覚える。何とも皮肉だな。もっと昔にきみと出会っていれば、良き友になれたのかもしれないと思うと、悔やまれる」

「フレンドになるのは今からでも遅くにいのは確定的に明らか」

ブロントは右手をすっとウェールズに差し出す。

「『友』か。そうだな、友情の深さに時間は関係ないな。こうして最後に良き友人に出会えた事を、始祖ブリミルに感謝せねばいけないな」

ウェールズは差し出されたブロントの手を握ると、固く握手を交わした。

「さあ、友よ！夜は短い、今宵は語り明かそうでは無いか！友の武勇伝を是非聞かせてくれ！」

そうして、二人は宴の間、とりとめも無い事を語り合い、友好を深めていった。

その様子を遠く玉座から見守っていた老王は傍らにいたウェールズの侍従のパリーに語りかけた。

「パリーよ、朕が幼少の時から仕え、アルビオン王家を長く知る者はもはやそなただけになったな」

「今は殿下にお仕えしておりますが、陛下とはもう六十年以上の付き合いになりますでしょうか」

ジェームズ一世はパリーに手招きをする。

「・・・朕からそなたに最後に一つ頼み事がある」
パリーはジェームズ一世の耳元まで近寄る。
「陛下、何でございましょうか？」
「あの『イーグル』号に乗る者で、アルビオン王家をそなた程長年知る者はおらぬ。そして朕はここに集まる勇士達の事が語られる事もなく、忘れ去られてしまう事には耐え切れぬ」
「陛下・・・」
「パリーよ、ここに残りたいのだろうが、頼む、『イーグル』号に乗り、我らアルビオンの風が潰えぬよう、周りに伝え聞かせ、見届けてはくれまいか」
「陛下、これは王からの勅命ですかな？それならば、先程陛下から直々に暇を与えられたのですから、この老骨、その命を聞き届ける義務はありませんぞ？」
ジェームズ一世はパリーの手を握る。
「いや、六十数年共にしてきた友人としての頼みだ」
「・・・陛下は実に残酷な方ですな。それでは断れぬではないですか」
「すまぬな、パリー。我がアルビオン王家はそなたに世話になってばかりだ」
パリーは微笑む。
「では陛下、事が終わり、この老骨の体が朽ち果てた時は、長年溜まった恨み言を含めて後から陛下に報告に参りますぞ」
「それでよい。風の行方の良き報告、待って居るぞ」

祝宴が終わり、夜も更け、明日のために部屋に休みに行ったウェールズを見送った後、ブロントも割り当てられた部屋に向かうと、後ろから肩を叩かれた。
振り向くとワルドが立って、ブロントをじっと見つめている。
「きみに言って置かねばならぬ事がある」
ワルドは冷たい声で言った。

「お前そこにいたのか・・・」
「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げる」
「おいィ？何いきなり予定しているわけ？」
「是非とも、僕達の婚姻の媒酌を、あの勇敢な皇太子にお願いしたくなってね。皇太子も、快く引き受けてくれた。決戦の前に、僕達は式を挙げる。きみにも是非出席して貰いたいのだが」
ブロントは少し考え、そして黙って頷く。
「三人であれば私のグリフォンでも、滑空するだけなら、問題なく帰れるだろう」
伝える事だけを伝えるとワルドは自分の部屋に戻っていった。

ブロントは静かな廊下にガチャガチャと鎧を響かせて歩いていた。
廊下の途中に、窓が開いていて、月が見えた。月を見て、一人涙ぐんでいる少女がいた。
月明かりに照らされる桃色がかった髪、そして白い頬には涙が伝っていた。
ブロントが鳴らす鎧の音に気が付いたのか、ルイズは目頭をぬぐって、振り向いた。
だがブロントの顔を見ると、ルイズの顔は再びふにゃっと崩れた。
「・・・何いきなり泣いているわけ」
ブロントはその大きな手ですっぽりとルイズの小さな頭に乗せると、優しく撫でて慰める。
「どうして、どうして、ここの人たちは皆死を選ぶの？わけわかんない。貴族も、貴族で無い人も、誰も彼も、自分のことしか考えてない、お馬鹿さんでいっぱい。あの王子さまもそうよ。残される人たちのことなんて、どうでもいいんだわ」
ブロントはそうではない、と言い返そうと必死に頭を回転させたが言い返す言葉が出なかった。
ただ黙って泣きじゃくるルイズの頭を撫でた。
ルイズはブロントのサーコートに顔を押し当てて、ぎゅっと、ブ

ロントの体を抱きしめる。
「ブロント、わたしと約束して。何があっても自分から死ぬような事を選ばないって。あんたはわたしの使い魔なんだから、どんな事があっても生きてわたしを守ってもらうわよ」
「圧倒的な生命維持能力を保持するナイトは他の者を魅了するほど。誰も死なせず生きる事で充実した使い魔生活が認可される。おまえの唯一ぬにの盾をする事になった」
「・・・ありがとう、ブロント」

第17話　「貴き血流れて」

翌朝・・・。

ニューカッスルの外れにある礼拝堂で、ウェールズは皇太子の礼服に身を包み、始祖ブリミルの像の前に立ち、

ブロントは式の立会人としてただ一人、列席に座って新郎と新婦の登場を待っていた。

皆、戦の準備に忙しく、その二人以外、他に人間はいない。

ウェールズも、速やかに式を済ませた後は、自分も戦の準備に駆けつけるつもりであった。

礼拝堂の扉が開き、ルイズとワルドが現れた。

ルイズは浮かない顔で俯いて立っている。ルイズは戸惑っていた。

今朝方はやく、いきなりワルドに起こされ、ここまで連れてこられたのだ。

突然の事でルイズは心の準備も出来ていなかったが、ワルドはそんなルイズに、「ウェールズ皇太子と使い魔のブロントが既に式の準備をしている」と言ったので、ルイズは半ばワルドに流されるままに、礼拝堂までやってきた。

純白の新婦の冠とマントをワルドに成されるがまま、着飾られている間もルイズはワルドに反応も見せず、考えを巡らせていた。

今日死に逝く運命のアルビオンの皇太子も、自分の使い魔も、こうしてルイズのために式を用意してくれているのだ、

皆が望む事なのであれば、このままワルドと結婚すれば、皆認めてくれるのだろうか？『ゼロ』でなくなるのだろうか？

「では、式を始める」

皇太子の声が、ルイズの耳に届くが、頭の中をぐるぐる巡る考えが邪魔をして、何を言っているのか理解できていなかった。

「新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして妻とすることを誓いますか」

ワルドは重々しく頷いて、杖を握った左手を胸の前に置いた。

「誓います」

ウェールズはにこりと笑って頷き、ルイズに視線を移し、誓いの詔を読み上げる。

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして夫とすることを誓いますか」

ルイズは思った。

確かにワルドは長年憧れた相手であったし、嫌いじゃない。どちらかと言えば好きなのであろう。

二人の父が交わした、結婚の約束ならば、ルイズの両親もこの場にいれば喜ぶ事であろう。

周りのルイズを見る目も大きく変わる事だろう。

しかし、周りからの評価が変わっても、ルイズ自身はどうなのか？

“何か”すら成し遂げていない”ゼロ”のルイズのままではないのか？

今まで自分を見つめる目を気にしていたが、本当に自分が成したい事は何なのだろうか？

この思いを理解し、支えてくれる人は・・・

「新婦？」

ウェールズがこっちを見ている、ルイズは慌てて顔を上げた。

ルイズが上の空になっている間にも式は続いている。

ルイズは戸惑った。

どうすればいいんだろう？こんなときはどうすればいいんだろう？

ふと列席に目を向けると、ブロントはルイズの目をじっと見つめ

ていた事に気づいた。

「緊張しているのかい？仕方が無い。初めての時は、事がなんであれ、緊張するものだからね」

にっこりと笑って、ウェールズは続けた。

「まあ、これは簡単な儀礼にすぎぬが、儀礼にはそれをするだけの意味がある。では繰り返そう。汝はブリミルの名に・・・」

『この俺がお前の側を離れる事を知らない』

ルイズはラ・ロシェールでそう誓ってくれた使い魔の言葉を思い起こして、そして気づいた。

ルイズが選んだ道であれば、ブロントは何も文句も言わずついてくるだろう。

しかし、進むべき道まではブロントは決めてくれない、何故ならば、”ゼロ”から”何か”になるためには、ルイズ自身が自分で進むべき道を決めねばならぬからだ。

大きく深呼吸をして、ルイズは決心した。

「ごめんなさい、ワルド」

「ル、ルイズ？どうしたね、気分でも悪いのかい？日が悪いのなら改めて・・・」

「そうじゃないの。ごめんなさい。ワルド、まだ何も成し遂げていない今のわたしでは、あなたとは結婚できない」

いきなりの展開にウェールズは首を傾げた。

「新婦は、この結婚を望まぬのか？」

「そのとおりでございます。おニ方には、大変失礼をいたす事になりますが、わたくしはこの結婚を望みません」

ワルドの顔に、さっと朱がさした。ウェールズは困ったように、首をかしげ、残念そうにワルドに告げた。

「子爵、誠にお気の毒だが、花嫁が望まぬ式をこれ以上続けるわけにはいかぬ」

ワルドはルイズの手を取った。
「緊張しているだけだ。そうだろルイズ。きみが僕との結婚を拒むわけが無い」
「ごめんなさい。ワルド。昔は憧れていたわ。恋だったかも知れない。でも、今は違うわ。一人の男性としてのあなたをまだ良くも知らないのに、子供の頃の記憶だけを頼りに、いきなり結婚はできないわ」
するとワルドは、ルイズの肩を掴んだ。
その目はつり上がり、表情も氷のように冷たい。
熱っぽい口調でワルドは叫んだ。
「世界だルイズ！僕は世界を手に入れる！そのためにきみが必要なんだ！きみの能力が！きみの力が！」
豹変したワルドに怯えながら、ルイズは首を振った。
「わたしには、そんな力ないわ」
「きみには始祖ブリミルに劣らぬ才能が眠っているんだ！なぜそれに気づかない！世界をも手に入れる事ができる力を持っていることに！」
ルイズにあれ程優しかったワルドが、こんな顔をして叫ぶなんて、ルイズは夢にも思わなかった。ルイズは後ずさった。
「わたし、世界なんていらないわ！」

ルイズに対するワルドの剣幕を見かねたウェールズが、間に入って取り成そうとする。
「子爵、きみはフラれたのだ。いさぎよく・・・・・」
が、ワルドはその手を跳ね除ける。
「貴様は黙っておれ！」
ウェールズはワルドの言葉に驚き、顔をしかめて、立ち尽くした。
ワルドはルイズの手を握った。ワルドは優しそうに笑みを浮かべるが、その目は暗く、怪しく輝き、ルイズは背筋が凍るほどにとてつもなく嫌なものを感じた。

「さあ、ルイズ。考え直してくれ。きみの力を、僕に。そして世界を」

ルイズはワルドの手を振り解こうとするが、物凄い力で握られているため、振り解けない。

「そんな結婚、絶対死んでも嫌よ！あなたはわたしの事を愛しているんじゃない。やっと、わかったわ、何であなたのわたしを見る目が、どこか遠くを見つめる様な目だったのは。わたしを、その自分勝手な野望のための、道具としてしか見ていなかったからよ！ひどいわ。そんな理由で結婚しようなんて」

ルイズは手を振り解こうと必死に暴れる。

「ルイズ、きみの事は愛しているさ」

ワルドのその言葉は誰が聞いても判るほどに嘘で塗り固められていた。

列席から飛び出したブロントが、ワルドの手首を掴みかかろうとした瞬間、ワルドは咄嗟に手を離しルイズから飛び退った。

ブロントはワルドを睨み付ける。

「そこまでだなお前のような欲望丸出しなやつはもう誰も相手にしない。今回のアワレな姿を晒したお前が必死顔になってそんな事を言っても念仏状態。今後そんな事言ってもここの皆はもうお前の事を知っているので人工的に淘汰されるのが目に見えている」

「ブロント！」

ルイズはすかさず、ワルドから隠れるようにブロントの後ろにすがりつく。

それを見てワルドは、両手を広げて笑う。冷たい笑い声が礼拝堂に響く。

「なるほど、やはりその使い魔のせいか。僕の婚約者でありながら自分の使い魔に恋慕するとはな」

「そんなのじゃないわ！あなたと違って、ブロントはどんな事があっても、わたしを守ってくれると誓ってくれた、わたしの事を理解してくれている、信頼できる大事な使い魔よ！」

ワルドは不敵な笑みを浮かべながら、ルイズからゆっくりと後ずさる。
「ハハハ、まさか伝説の使い魔『ガンダールヴ』に、こんな事まで邪魔されるとはな。まあいい、こうなっては仕方が無い。ならば目的の一つは諦めよう」
「目的？」
ルイズは首を傾げた。
「そうだ。この旅における僕の目的は三つあった。その二つが達成できるだけでも、よしとしなければな」
「達成？二つ？どういうこと？」
ルイズは心の中で、真実であって欲しくないある想像が急激に膨れ上がる。
ワルドは小さく後ずさりながら、右手を掲げると、人差し指を立てた。
「まず一つはきみだ。ルイズ。きみを手に入れることだ。しかし、これは果たせないようだ」
「当たり前じゃないの！」
次にワルドは、中指を立てた。
「二つ目の目的は、そこの使い魔に待たせている、アンリエッタの手紙だ」
ルイズははっとした。
「ワルド、あなたは・・・」
「そして、三つ目・・・！」
いつの間にか距離を詰め寄られ、ワルドの『アンリエッタの手紙』という言葉で、すべてを察したウェールズが、杖を構えた。
しかし、ワルドはその二つ名『閃光』と呼ばれる所以に違わず、素早く杖を引き抜き、呪文の詠唱を完成させた。
ワルドは、風のように身を翻らせ、青白く光る杖をウェールズに向けて、突き出す。
「・・・貴様の命だ！ウェールズ！」

「おい、やめろ馬鹿！」
ブロントは右手の平をワルドに向けて、素早く神聖魔法を詠唱する。
「＜フラッシュ＞！！」
ブロントの右手から眩い光が、ワルドに向かって矢のように飛んで行き、その目に纏わりつく。
ワルドはぐっ、と呻き声をあげながら、眩まされた目で、そのままウェールズの胸を杖で貫いた。
「き、貴様・・・・・、レコン・・・」
ワルドが狙っていた心の臓をわずかに逸れ、肺を貫かれたウェールズの口から赤い鮮血が溢れでる。
ワルドはウェールズの胸から光る杖を引き抜くと、笛の音に似た、不吉な音を立てながらその胸から血とともに空気が噴出す。
ワルドは目を手で抑え、聞こえる音を頼りに杖をルイズ達の方向に向ける。
「『ガンダールヴ』め、余計な事を。下手に手を出さなければ、ウェールズも無駄に苦しまずにすんだものを」
呼吸を断たれたウェールズは苦しみにもがき、どくどくと血が胸と口から流れ出る。
「このワルドは早くも終了ですね」
ブロントは横飛びを混ぜながら一気にワルドに駆け寄ると、引き抜いたデルフリンガーで、ワルドを一刀の下に斬り捨てた。
しかし、引き裂かれたワルドは煙の様に手ごたえなく、霞となって消えた。
そしてブロントの背後にいたルイズが悲鳴をあげる。
「やはり、近寄らせると手ごわいようだな。さすがは伝説の使い魔『ガンダールヴ』と言ったところか」
ブロントは振り向くと、仮面を被ったマントの男がルイズの首に腕を巻きつかせて拘束していた。
そして礼拝堂の柱の影からワルドが三人飛び出し、ブロントから

一定の距離を離して取り囲む。
「お前・・・幻影使えるのはずるい」
ブロントは仮面の男を指差し、鎧をガシャと乱暴に鳴らす。
「ただの『幻影』ではない。風のユビキタス（偏在）だ。風は偏在する。風の吹くところ、何処となくさ迷い現れ、その距離は意思の力に比例する。貴様『ガンダールヴ』の力量を幾度となく計った所、一人で相手するのは少々骨が折れるのでね」
男は仮面を取り外すと、その下にはワルドの姿があった。
「仮面のメイジがあなただなんて、あなた、アルビオンの貴族派だったのね！ワルド！」
ルイズはワルドに締め付けられるようにその身を拘束されながらも、わななき、怒鳴った。
「そうとも。いかにも僕は、アルビオンの貴族派レコン・キスタの一員さ」
「どうして！トリステインの貴族であるあなたがどうして！？」
「我々は国境を越えて繋がった貴族の連盟さ。そして我々の手でハルケギニアは一つとなり、始祖ブリミル所縁の『聖地』をエルフどもの手から取り戻すのだ」
「何が、何があなたを変えたの？昔はそんな風じゃなかったわ・・・ワルド・・・一体何が・・・」
「全てを話せば長くなるから語らぬが、ある時から僕の胸の中で囁く、己の声に従ったからだ。今まで己の声を信ずるままに行動したお陰で、魔法衛士隊隊長という力まで手に入った。そして、このままいつか世界すらも手に入るだろう。だから、だから共に世界を手に入れようと言ったのだ！」
ブロントは剣の切っ先をルイズを掴んで離さないワルドに向けた。
「婚約者を裏切って人質にとるとか恥知らずな風使いがいた！汚いなさすがワルドきたない」
ブロントがぎりりっと歯を噛み締める。
「俺はこれでワルドきらいになったなあもりにもひきょう過ぎるで

しょう？ルイズの婚約者だから俺は中立の立場でみてきたけどやはりお前は汚いだけという事が判明した。ワルドはウソついてまでルイズの力を確保したいらしいがルイズに相手にされてない事くらいいい加減気づけよ。俺はお前よりも高みにいるからお前のイタズラにも笑顔だったがいい加減にしろよ」

ワルドはブロントの言葉を気にする風もなく、不敵に笑う。

「目的のためには、手段を選んでおれぬのでね。『ガンダールヴ』、そこまで言うのであれば、貴様の主人を離してもいいぞ。貴様が持っている手紙との交換でだ」

「だめよ！ブロント！姫さまの手紙を渡しちゃ！これは命令よ！」

ブロントは黙ったまま、しばらく何かを考えた。

そして、決心がついたのか、カバンから一枚の丸めた羊皮紙を取り出した。

「やはり使い魔なら主人の安否を優先するか！賢明な判断だな。よし、その手紙を床に置いて十歩下がれ。貴様の間合いはすでに把握している。十分間合いの外までであれば、ルイズを離してやる」

ブロントは言われたとおりに紙を床に置くと、ワルドをじっと睨み付けながら、じりじりと後ずさった。

ブロントが手紙から十分離れたのをみて、ワルドはルイズを手放し、手紙を拾った。

ワルドの束縛から解かれたルイズは一目散にブロントに向かって駆け出した。

懐に手紙を仕舞うと、ワルドは楽しそうに笑い、杖をルイズに向けた。

「そんなに、使い魔の所に行きたいのなら、送ってやろう！」

風の魔法が飛ぶ。＜ウィンド・ブレイク＞。ルイズを紙切れの様に吹き飛ばした。

「おいィ！？」

ブロントは咄嗟に強化魔法の＜プロテス＞を唱えルイズを光の壁で包んだ。

光の壁で多少衝撃は和らげたとは言え、ルイズは強く壁に叩きつけられ、うめき声をあげた。そしてその目から涙が零れる。

「貴様、剣技以外にも何かあるな。コモンマジックの＜ライト＞ではなく、光そのものを操る何かがあるようだな。もしや先住魔法か？それともマジックアイテムか？どちらにせよ、剣に頼るぐらいだ、くだらぬ小細工しか使えないようだな」

「・・・マジふざけんなよ」

ワルドがブロントに向けて杖を構えると、他の三体の偏在のワルド達もブロントに杖を向ける。

「言う事を聞かなくなった小鳥は、首を捻るしかないだろう？なぁ、そうだろ、ガンダールヴ」

その瞬間、ブロントの中で何かが弾けた。

その手はぶるぶると震え、両の目には憤怒の炎が燃え上がる。

礼拝堂中にその音が響くと思われるぐらいに心臓が鼓動し、

全身の血が一気に毛の先にまで流れんばかりに頭に昇る。

デルフリンガーを強く握った左手がバチバチと激しく電撃を迸る。

「お前らは一級使い魔のおれの足元にも及ばない貧弱一般人。その一般人どもが一級使い魔のおれに対してナメタ真似をすることでおれの怒りが有頂天になった。この怒りはしばらくおさまる事を知らない！」

「ほざけ！伝説といえども、所詮ただの使い魔だ！その思い上がりと共に、貴様の伝説もここで終わらせてやる！こい、ガンダールヴ！」

ワルドとその偏在達が同時に呪文を唱え、＜ウィンド・ブレイク＞を四重に重ねた魔法の豪風がブロントを襲う。

礼拝堂を吹き抜ける突風が甲冑を着たブロントを軽々と吹き飛ばした。

壁にぶち当たり、石造りの壁がバラバラと砕ける。

「どうした、ガンダールヴ？剣の間合いの外ではこの一般人に手も

足もでないか?貴様の怒りとやらはそんなものか?」
ニタニタと残忍な笑みを浮かべながら、遠巻きにワルドが嘲笑する。
その時、デルフリンガーが叫んだ。
「この心の震え・・・懐かしい感じがすると思ったら!思い出したぜ!」
「うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り」
「いいから聞け!俺は昔、おめに握られてたぜ、ガンダールヴにな。あれから何年だ?五百年は経つか?懐かしいなあ」
ブロントは体勢を低くして、ワルドの偏在に突進するが、ワルドは一定の距離よりブロントが詰め寄るのを許さず、風の魔法で吹き飛ばす。
「幾つもの店を点々と渡り、こうしてガンダールヴが現れるのを待つこと五百年、長かったぜ!そうとわかりゃ、こんな格好している場合じゃねえな!」
叫ぶなり、デルフリンガーの刀身が光り出す。
ブロントの『光』の小細工を警戒していたワルドは、身を翻らせて距離をとり、
三体の偏在に任せ、ブロントをめがけて追い討ちの突風を送った。
「無駄だ!そんな目眩ましはもう通用せんよ!その剣もまとめてへし折ってやろう!」
ワルドが叫んだ。
また吹き飛ばされると思い、ブロントは身構えた。
だが次の瞬間、偏在が繰り出した風がデルフリンガーの刀身に吸い込まれる。
そして、デルフリンガーは濡れた刃の如く、鋭く、光り輝いた。
「デルフん、お前・・・」
「相棒!これが俺の本来の姿さ!すっかり忘れてたぜ!前の相棒に銅貨一枚で売られちまって、他の奴に買われる位なら、ってテメエの体を変えたんだった!何かの冗談で、またすぐ引き取りに来ると

思って待ってたら、五百年経っちまったがよ！」
「確実にナイトは本来のデルフんを手に入れたら高確率で一番最強になる」
「おうよ！奴にそれを見せてやれ！」
ブロントは鋭く研ぎ澄まされた片刃のデルフリンガーの姿を見て、ヴァナ・ディールの東の国から伝来する凄まじい切れ味を誇る『刀』を連想した。
その刀を扱う、東方の武術を極めた『侍』を、ブロントは一時経験していた事があった。
昔封印したその時の経験が、左手のルーンからブロントの頭に流れ込んでくる。
ブロントはデルフリンガーを持ち直すと、切っ先を突き出して、星眼に構える。
頭の先まで煮えたぎるワルドに対する怒りを、静かに刀身に投影し、
高鳴る心の荒波を抑え、一点の曇りも無い、明鏡止水の境地に立った。
そして、目を閉じる。
「血迷ったか！戦いの場で目を瞑るなど！」
ワルドはブロントの隙を見逃さず、＜エアー・カッター＞を飛ばす。
しかし、ブロントは構えを崩さず、心の眼で見切ると、すっと体を少しだけ横に反らせ、髪一本程の距離をあけてワルドの風の刃を避ける。
そして、かっと目を見開くと、塞き止めた怒りが激流となり、ブロントの左手から激しい電撃がデルフリンガーに流れ込む。
「いいぞ、相棒！っしゃあ！きたきたきたきた！みなぎってきたぜ！伝説の使い魔の突き技！」
心の震えを三倍程までに蓄積したブロントはまるで稲妻となってワルドの偏在に突進した。

蒼く迸る雷撃をデルフリンガーに纏わせ、ワルドが反応すらできる間も与えずに、偏在一体の腹を貫く―

『＜雷之太刀・轟天＞！』

偏在がうめき声も立てずに消滅する。

「き、貴様・・・・・！」

ワルドはすかさず数閃もの＜エアー・カッター＞をブロントに向けて唱える

「恥知らずなくだらねえ魔法は全部、俺が吸い込んでやるぜ！この『ガンダールヴ』の右・・・もとい左腕、デルフリンガーさまがな！」

ブロントはデルフリンガーを横薙ぎに振るって、ワルドの魔法をデルフリンガーで吸い込ませて、そのまま頭上高く振りかぶる。

「相棒！こいつに返してやれ！」

デルフリンガーが眩く光り、唐竹割りに振り下ろされて、切っ先から真空の刃が地走る。

『＜風之太刀・回天＞！！』

ワルドの偏在は唖然とした表情で、綺麗な縦一文字に引き裂かれる。

「くそっ！これほどの俊敏さを隠しもっていたとは！だが、何も貴様にあわせ、地に着いている必要はない！空こそが『風』の領域だ」

ワルドは残る一体の偏在に＜レビテーション＞をかけ、駆ける地がない空中からブロントを攻撃すれば、素早い動きを取れないと算段した。

が、それは間違いであった。

ブロントは、ぐぐっとしゃがみ込むと、床を蹴り、空高く飛ぶ偏在に向けて、光の羽根の様な軌跡を残しながら跳躍する。

デルフリンガーを偏在の股から切り上げ、返す刃で続けざまに二の太刀を肩口から浴びせた。

『＜唯一無二之太刀・有頂天＞！！！』

最後の偏在が雲散霧消となって散る。

ワルドは言葉も発せずにたじろぐ。

「おっととグーの音も出ないくらいに凹ませてしまった感。お前調子ぶっこき過ぎてた結果だよ？」
「クソ・・・この、『閃光』がよもや後れを取るとは・・・このまま貴様を討ち果たすのは難しいようだな」
「怒りのパワーの力が全快になったからおまえもう謝っても遅い」
ワルドが不気味ににやりとする。
「ならば、せめて貴様の主人に一太刀浴びせてやる！」
ワルドはその二つ名の如く素早さで、杖を抜き放ち、倒れているルイズに向け、呪文を詠唱する。
しかし、ワルドの『閃光』よりも一瞬早く、ブロントは魔法の詠唱を完成させ、ワルドの胸に目掛けて神速の光球を叩き込む。
「生半可なナイトでは扱えない＜ホーリー＞！」
光球がワルドにぶつかり、弾けると、ワルドの胸が服ごと焼け爛れる。
「く、ぐぉお・・・！」
「ヨミヨミですよ？お前の作戦は。恥知らずは死ねマジ死ね」
ワルドはシューシューと音をたてる胸を抑え、よろめきながら後ずさって、口笛を吹く。
するとワルドのグリフォンが礼拝堂の窓を打ち破って飛び入ってくる。
「おのれガンダールヴ。どうやら伝説の力を見くびっていたようだ。だが、当初の目的の二つは果たせたのだ、私がここで命を賭してまで貴様と戦う必要は無い。どのみちここは、今にも我がレコン・キスタの大群が押し寄せる。私が手を下さずとも貴様等はここで果てる運命よ！」
ワルドはグリフォンの背に身を預けると、グリフォンが羽ばたく。
その時、遠くで何かが爆発する音がした。
「どうやら城の方は片付いたようだな。流石の伝説も三百を蹂躙する軍に対して、どれほど相手になれるかが見れないのは残念だが、ガンダールヴ！貴様はここで愚かな主人ともども灰になるがいい！」

焼けた胸の痛みに顔を歪めながら、ワルドは飛び去った。
ブロントは飛び去るワルドの後を追いかける素振りも見せず、礼拝堂に倒れている二人の状態を確認した。
ルイズは所々、服が破け、擦り傷ができていたが、気絶しているだけで大事はなかったようだ。
しかし、血の海の中にいたウェールズは、呼吸も心臓の鼓動も止まり、顔も薄青紫色をした、絶望的な状態であった。
だが、その虚ろな目には、吹けば消えてしまいそうな程小さいものだが、命の灯火がまだ辛うじて残っていた。
そのとき、ルイズが横たわった隣の地面が盛り上がったと思ったら、ギーシュの巨大モグラが顔を出した。
ギーシュの使い魔はルイズを見つけると、モグモグと嬉しそうにルイズの手をまさぐった。
穴からギーシュが顔をだした
「ヴェルダンデ！一体どこまでお前は穴を掘るつもり・・・ってきみたち、ここにいたのかね！」
ブロントは何も言わず、ウェールズの前で祈る様な姿勢で膝をついている。
巨大モグラは、フガフガとルイズの指に光る『水のルビー』に鼻を押し付けている。
ギーシュはそれを見て、うんうんと頷く。
「なるほど、僕の可愛いヴェルダンデは貴重な宝石の香りも大好きだからね。その匂いを追ってここまで掘ったんだね。あれ？ブロントさん、盾はどうしたんだい？」
「お前はここに五万の軍勢がくるのに話したりする余裕があるのか？」
「え・・・ご、五万だって！？」
ブロントは立ち上がると、ルイズをまさぐる巨大モグラを押しのけて、ルイズを抱え上げて、ギーシュに預ける。
「ルイズを連れてここを早く去るべき」

ギーシュはルイズを背負い、ふと床に倒れているウェールズに目をやった。
「彼は・・・誰だい？何かその・・・死んでいるみたいなんだけど・・・」
「・・・俺のフレンドだ。とにかく早く行かないと後悔する事になる」
「わ、わかった。キュルケ！タバサ！聞いたかい？すぐにも逃げるよ！」
ギーシュのすぐ下にキュルケとタバサもいるのか、穴から「えー？折角アルビオンにきたばっかりなのに？」というキュルケの声がした。
ギーシュは倒れているウェールズの側に佇むブロントを見て気になった。
「おーい、ブロントさんも早く！」
ブロントは「後からいく」と素っ気無く答えたので、ギーシュはそそくさと穴に潜った。

礼拝堂に一人残ったブロントは両手の平を天に向け、気を集中し、呪文を唱えた。
アルタナの女神に祈り、その祝福を願い、慈悲を乞いた。
焦る気持ちを抑え、呪文を間違えぬよう、ゆっくりと、正確に魔法を詠唱する。
長々と魔法を唱えるブロントの全身から光が生じ、それは右手に集まる。
ブロントは全ての魔力をその手に集めると、それを虫の息のウェールズに向ける。
「・・・＜レイズ＞・・・ッ！」
光の塊はブロントの手を離れ、ウェールズに降り注ぐ。
すると、ウェールズの胸の傷がみるみると塞がり、その顔の血色も良くなってゆく。

魔法の光がウェールズの体をふわりと持ち上げ、その足に立たせると、光は消えていった。
「がはっ、がはっ！」
息を吹き返したウェールズはよろめき、膝をつくと咳き込み、肺に溜まっていた血を吐き出した。
「ごほごほ、友よ、君がここにいると言う事は、私は・・・生きているのか？それとも、君もあの逆賊に討たれたのか？」
「黄金の鉄の塊で出来ているナイトが布装備のワルドに遅れをとるはずは無い」
「ふっ、そうだな。流石だな、我が友」
風のメイジであるウェールズは聞き耳を立てると、遠くから王党派を打ち破った貴族派の軍勢が迫ってくる音を聞き取った。
「そうか、我々はすでに負け、終わっていたのか・・・」
衰弱しきったウェールズは思わず床に崩れ落ち、大の字になって天井を見上げる。
「友よ、最後に君に会えてよかったよ。だが、早く逃げるといい。間も無く叛徒どもがこの礼拝堂にやってくるだろう。このアルビオン皇太子、ウェールズ・テューダはここで最後を飾らせてもらう」
「・・・何も聞こえないな。俺の耳にはウェールズの声が届いてこないようだが」
ウェールズ怪訝そうな顔をして、首を上げ、ブロントを見る。
ブロントはウェールズを掴み上げ、その腕を自分の肩にまわす。
「友よ、離してくれ。王家の血が流れる私はここで王国とともに果てなければいけない責務があるのだ」
「ウェールズはすでに死んでいるんだが？」
「だが、私は現にこうして・・・！」
「ウェールズ・テューダは汚いワルドに殺されてここにはただ一人ウェントゥスだけが残った」
「ウェン・・・トゥス？」
ブロントはにこりと微笑む。

「ちなみにこの話は実際にあった内容で俺の言葉でいうと『風』という意味」
ウェールズは戸惑った様子でブロントに聞く。
「この私が・・・ウェントゥスだと？」
ブロントは頷く。
「お前がただ一人の人間で、俺のフレンドのウェントゥスなのは確定的に明らか」
「だが・・・しかし・・・私は」
ウェールズは悩んで、俯く。
「『ただ一人の人間なら一人の女性を守り生き抜くのも悪くないと』と言ったの覚えていないのかよ？完全に論破して終了したのでこの話しは終了」
ブロントは強引にウェールズを引き摺られながら、ウェールズははっとした顔になった。
「まいったな、友の言葉はめちゃくちゃだ。だが、なぜかな、とても魅力的な言葉に聞こえるよ」
ウェールズはふぅとため息をついた。
ふと脳裏にアンリエッタ王女の笑顔が思い浮かんだのだ。
今まで気が付かなかったが、なぜかその笑顔が、自分が守ろうとしていた王家の誇りより何倍にも大事なものであると思えた。
ウェールズは決心したような面持ちで顔を上げ、
先程まで自分が倒れていた血に染まる床を見つめた。
「よかろう、私に流れる王家の血はここに全て流れ出た。これよりはただ一人の風のメイジ、そしてブロントの親友、ウェントゥスだ」
その言葉を聞いて、ブロントは頷き、カバンから何かを取り出した。
橙色のレンズがはめ込まれた防塵眼鏡を、ウェントゥスにかける。
「これは・・・？」
「お前の顔は死んだウェールズとまれによく同じ顔になったりする」
「そうか、そんなにアルビオン皇太子と似ているか！それは困った

ものだな」
二人は楽しそうに笑うと、礼拝堂の外が何やら賑やかになる。
王党派を破った貴族派の一部隊が礼拝堂を取り囲んでいた。
「友よ！奴らが来たぞ！」
礼拝堂の扉が音を立てて打ち破られ、貴族派の兵士やメイジ達が飛び込んできた。

その頃、ルイズ達はギーシュの使い魔が掘った穴を伝い、大陸の真下でキュルケ達がアルビオンまで乗ってきたシルフィードとともにブロントがくるのを待っていた。
「ちょっと、本当に大丈夫なの？ブロントさん全然こないわよ」
タバサの使い魔シルフィードに跨ったキュルケは「五万の軍勢がやってくる」とギーシュから聞いてあせっていた。
「わからない。もしかするとぼくたちのために足止めになっているのかもしれない・・・」
ルイズはギーシュに運ばれている途中、意識を取り戻し、自分の足で立っていた。
何も声が聞こえてこないリンクパールをその手に握り締めて伝ってきた穴を見つめていた。
何度かパールに呼びかけたが、返事が返ってこない。
聞き耳を立てて警戒していたタバサがぽつりと呟く。
「来た」
「ブロントさん来たの？」
タバサは首を横に振る。
「違う、兵隊」
確かに耳を澄ますと、穴の奥から「ここに穴が開いてるぞ！」「この先に逃げたかもしれない、確かめろ」といった兵士達の怒号が聞こえてくる。
「ヴァリエール！早くシルフィードに乗りなさい！ここで犬死なんて洒落にならないわよ！」

キュルケは叫んだ。
ルイズは首を振る。
「そのまま！もう少し待って！」
「もう待てないわよ！」
穴の中からする貴族派の兵士達の声が次第に大きくなる。
今にも穴から兵士が飛び出てきそうなぐらいに、無数の足音が響き渡る。
「ヴァリエール！」
ルイズはブロントの事が気になっていた。命を捨てるような事をしないと約束してもらったばかりなのだ。それをこんな所で破るはずが無い。
必ずブロントは生きてやってくると、ルイズは信じていた。
穴からがらっと石が転げ落ちる。
「奴ら来たわよ！」
キュルケが杖を穴に向けて構える。

「遅れてすまにい」
どこからともなくブロントの声がすると思ったら、何もない空間からブロントと肩を貸した誰かが姿を現した。
ブロントは自分とウェントゥスにかけたプリズムパウダーを手で払っていた。
「ブロント！それに・・・そのお方はウェ・・・」
ブロントの肩にもたれかかる様に死んだはずの皇太子が、何やら色眼鏡をかけてそこに立っている。
ブロントは咄嗟にルイズの口を手で塞ぐ。
「俺のフレンドのウェントゥスなんだが？」
「でも、だって、ウェー・・・」
「誰かに似ているようだが、私はウェントゥスだ」
ブロントとウェントゥスは顔を見合わせて笑う。
「あんた達、話しは後にして、急いでここから離れるわよ！」

キュルケが叫ぶと、ルイズ達は急いでシルフィードに乗った。
「いいわよ、タバサ！」
六人を背中に乗せ、その口に巨大モグラを咥えたシルフィードが苦しそうに悲鳴を上げた。
「食べちゃダメ、トリステインまで頑張って」
タバサは自分の風竜にそう囁き、頭を撫でる。
シルフィードがアルビオンから飛び立つと、穴から続々と兵士達が流れ出る。
飛び去るルイズ達に向かって、何か罵声の様な言葉を飛ばし、矢を放つが、そのどちらも届かない距離へとルイズ達は遠ざかっていった。

風竜に乗り、アルビオンから吹きすさぶ風がルイズの頬に当たる。
後ろを振り返ると、アルビオン大陸が徐々に小さくなっていく。
思い起こせばアルビオンに一晩しか過ごしていないが、もう何月も滞在したような気持ちだった。
数々の命や思いが今まさにあの浮遊大陸で踏みにじられ、散り、消えていった。
あそこに残していたものは、ただの幻影となって人々から忘れ去られてしまうのだろうか？
そう思うと、ルイズに何か寂しい気持ちが沸き起こった。
しかし、風竜に乗る自分の使い魔と仲間達の姿を見て、このままどんな場所にも、どんな困難にも、立ち向かえそうな勇気が湧いた。
そうして安心したルイズは、ブロントに寄りかかるようにして、意識を手放して、眠った。

第１８話　「風の行方は」

瓦礫の山となったニューカッスル城は惨状を呈していた。
度重なる砲撃で城壁は見る影もなく、魔法で黒こげに焼かれた死体が、見るも無残に転がっている。
王軍を打ち破った『レコン・キスタ』は、名実ともに反乱軍からアルビオンの新政府となった。
駆逐した三百の王軍に対して、レコン・キスタの損害は四千。
岬の突端に位置する城は、一方向からしか攻め込めず、レコン・キスタの軍勢は強引にもそこから攻め、密集したところを魔法と大砲を食らい、大損害を受けたのである。
しかし、数で勝るレコン・キスタは、水の様に兵を流し込むと、物量に任せ王軍のメイジ達を押しつぶした。
王軍の歴戦のメイジも城に残った数十程度の護衛兵だけでは、アリの様に群がるレコン・キスタの兵を捌ききれず、名も無き兵士達の刃によって散っていった。
夕焼けが瓦解した隙間から差し込む城内では、王軍のメイジなのか、その護衛についた兵なのか判別がつかないほどに切り刻まれ、貫かれ、血で服が真っ赤に染まった死体が、貴族平民と関係なく、折り重なるようにして倒れていた。
そしてそれらの死体を無体にもひっくり返しては、財宝探しに勤しんでいる『レコン・キスタ』の兵士達が装飾品や武器を見つけては歓声をあげている。

その光景を見つめながら、ワルドは醜く焼かれた胸を、水のメイジに秘薬を使っての治療をさせていた。
「これは酷くやられましたな、子爵殿。傷としてはもう問題ないはずなのですが、この痕は残るでしょうな。力及ばず、すまない」
かまわぬ、と言ってワルドは立ち上がり、服がはだけ、何かの紋

様の如く醜く爛れ、腫れた痕が残った胸を隠すようにマントを深く羽織った。

その時、遠くからワルドに声が掛けられた。

快活な、澄んだ声だった。

「おお、子爵！ワルド君！無事かね？君が怪我をしたと聞いて心配しておったよ！」

やってきた男は、年のころ三十代半ば。丸い球帽をかぶり、聖職者のような緑色のローブとマントを身に着けている。

しかし、物腰は軽く、軍人のようであった。高い鷲鼻に、理知的な色をたたえた碧眼。

帽子の裾からカールした金髪が覗いている。

「こ、これは、オリヴァー・クロムウェル総司令官！」

水のメイジが畏まって、地面に膝をつく。

ワルドも続けて膝をつき頭を垂れながら、水のメイジに忠告する。

「きみ、閣下はすでにただの総司令官ではないぞ。今ではアルビオンの・・・」

「子爵の言うとおり、皇帝だ」

「これは大変な失礼を致しました！」

クロムウェルは無邪気に笑うと水のメイジの肩に手を置いた。

「気にするな。本日なったばかりで余自身もまだ慣れておらぬ。それに、元は一介の司教に過ぎぬ余が、君達の貴族議会の投票により『レコン・キスタ』の総司令官に任じられたのだ。総司令官と言うだけでも十分身に余るというもの。だが、君達の期待を背負うからには微力を尽くさねばならぬのでな、その為に一定の権威が必要なのだよ。わかるね？」

水のメイジは、ははぁと頭を垂れる。

「追々慣れてゆけば良い。ああ、それときみ、子爵と話があるので少し外して貰ってもいいかね？治療はもう済んだのであろう？」

水のメイジは深く頭を下げ、一礼すると、そそくさとその場を離れ、他の負傷者の手当てにまわった。

「先程から浮かない顔をしているようだが。寡兵相手に我々が甚大なる被害を被った事が気になるのかね？」
「いえ、そのような事は・・・」
「まだ君には見せていなかったね、我々『レコン・キスタ』が電光石火の如く攻め入りつつも、同胞の数を五万程まで増やす事を可能にした、始祖ブリミルが余に授けた力を」
力、と聞いてワルドは冷静を装いながらも、眉をピクリと動かした。
「余はこの通り、四大系統のいずれの魔法も使えぬ。しかし、代わりに零番目の失われし、真実、根源、万物の祖となる系統・・・」
「・・・もしや、『虚無』ですか？」
うむ、と答えるとクロムウェルは腰から杖を抜き出した。それで城内に散らばる惨たらしい死体の山を指した。
「ワルド君、きみも見覚えがあるであろう、この躯となったアルビオンの猛将達を。彼らは自分達より十倍以上もの損害を我々に与えた驚異的な存在だ。そして、だからこそ余はそんな勇猛な彼らとは良き友人となりたいと思っている。人は死を迎えれば、互いにあるわだかまりは消えるのだから。きみはそれに異存あるかね？」
ワルドはクロムウェルが何を言っているのかを疑問に思いつつも、首を横に振った。
「閣下の決定に、異論があるはずもありません」
クロムウェルは小さく魔法を詠唱した。ワルドが今まで聞いた事が無い、まるででたらめを並べているような不思議な呪文だった。
詠唱が完成すると、クロムウェルは杖を振るって、左手の指輪をきらりと光らせた。
すると、兵士達に身包みを剥がされていた、血みどろのメイジの死体が一人、また一人とむくりと起き上がった。
奇異を目の当たりにした兵士達は驚き、蜘蛛の子を散らすように城内からとんずらする。
ワルドも他の同胞からクロムウェルの噂は聞いていたが、驚きを

隠せなかった。
蘇った王軍の貴族や兵士達は土気色していた肌もたちまち血色を取り戻し、
腕や脚が千切れた者も時間を巻き戻すが如く、肢体がずるずるとくっつき、身を起こす。
着ているボロボロの服とは裏腹に、生気漲る王軍の者達は先程まで死んでいた事がまるでで嘘のようであった。
「おはよう、諸君」
クロムウェルが微笑みながら語りかける。
蘇った王軍の者達は整列する。
そしてその中から生前、隊長を務めていたと思わしき、衣服を剥がされ上半身を露にした貴族が一歩前にでる。
「ご機嫌麗しゅう、大司教殿」
「いやいや、今では皇帝なのだ。親愛なる諸君」
「これは失礼した。一同、閣下に敬礼！」
城内から集まった三百弱ほどの王軍の勇が、一斉にして宿敵であったクロムェルに敬礼をする。
クロムウェルはうんうんと頷く。
「勇猛なきみたちを余の親衛隊に取り入れたいと思うのだが、如何かね？」
「喜んで、この命は元より閣下のもの」
王軍の者達の兵士も貴族も膝をつくと、クロムウェルに臣下の礼を取った。
「どうだね、子爵、素晴らしいだろう？この通り虚無は生命を操る系統なのだ。しかし、あの頑固な国王には困ったものだ、どこに隠しもっていたのかわからぬが、炎の秘薬で自決して、城の西側もろとも、毛一本も残さず消し飛んでしまっていたよ。王家の者が我々の同胞となれば、我々の大儀を大きく世に知らしめる事ができたと言うのに」
その時、伝令の兵士がクロムウェルの下へ駆けつけ、何かを耳打

ちした。
その報を聞いて、クロムウェルの顔が一瞬だけしかめる。
「ふむ、そうか。残念な事にどうやら親子して、頑なに我々と分かち合える事を拒みたいようだな」
「閣下？」
「きみに要請され、礼拝堂を襲撃した兵士達の報によると、ウェールズの遺体は残っていなかったそうだ」
ワルドはガバッと顔を上げる。
「ば、馬鹿な！私は確かにウェールズの肺を貫きました。あの状態で生きているわけが！あれだけの血を吐いたのでは水のスクウェアクラスでさえ助ける事は不可能なはず！」
クロムウェルは手をかざして、ワルドを諫める。
「まあ、落ち着きたまえ子爵。報告によると、礼拝堂に抜け道の様な穴ができていたそうだ。大方、外部からの救出隊が亡骸だけでも、と皇太子を回収したのであろう」
ワルドは地面に膝をつき、頭を垂れた。
「閣下、他の連れを仕留め切れなかった、私のミスです。申し訳ありません。なんなりと罰をお与えください」
クロムウェルは、にかっと人懐こそうな笑みを浮かべて、ワルドの肩を叩いた。
「何を言うか！子爵！きみは一人で敵軍の実質最高司令官を討ち取って見せたのだ！彼が戦場に立っていたのであれば、被害はもっと甚大であっただろう。何、彼の躯が残っていなかったのは残念だが、そうするようにきみに伝えてなかった余にも落ち度はある」
クロムウェルは何かを思い出し、辺りを見回した。
「ところで、子爵。きみに勧誘するように勧めていた『土くれ』ことミス・サウスゴーダの姿が無いようなのだが、彼女はどうしたかね？」
「それが、任務の途中で別行動を取ったラ・ロシェールで数名のメイジを相手に討ち取られたと、その場を目撃した傭兵達から聞き及

んでいます」
「そうか、それは惜しい事をしたな。きみのように単独で任務を遂行できるメイジが少ないのでね。余が諳んじているハルケギニア全ての貴族の中でも、『土くれ』とまで名を広めた盗賊の彼女なら、と思ったのだが・・・ああ、肝心な用件を聞くのを忘れて話が大きく逸れてしまったな。子爵、件の手紙は手に入ったのかね？アンリエッタがウェールズにしたためたと言う、恋文は・・・・・。トリステインとゲルマニアの婚姻を阻むための切り札は？」
ワルドは立ち上がり、破けた服の懐から丸まった羊皮紙を取り出す。
「この通り、手紙を手に入れ、幸いな事に焼かれずに済みました」
「おお！素晴らしい！子爵、早速余に見せてくれたまえ！」
手紙を手渡すと、ワルドは再び膝をついた。
クロムウェルは紙を広げ、手紙を見つめながら「うーん」と唸る。
「子爵、きみはもうこれを読んだかね？」
「いえ、ですが内容の方は、それを手にしたときのウェールズの反応から、概ねの予想はついております。そこには永遠の愛を誓ったものが書かれているはずです」
「そうか、余は僧籍に身を置いている故、恋愛というものには疎いが、昨今の若者達は恋人に面妖な手紙を送るようになったものだね」
クロムウェルは皮肉を込めた口調で言うと、手紙をワルドに見せた。
「こ、これは！？一体？何が書かれて・・・？」
ワルドは目を疑った。見せられた羊皮紙には、今まで見たことも無いルーン文字の様な模様が描かれていた。所々の文字の色が綺麗に抜けるように掠れてはいたが、どう見ても恋人にしたためた恋文には見えなかった。
「手に入れたきみがわからぬのであれば、余にわかるわけがなかろう。子爵、きみはとても優秀なメイジだが、少し詰めが甘い所があるようだ」

「閣下。手紙を手に入れる際に中身の確認を怠った私のミスです。トリステインとゲルマニアの同盟を阻止する材料を得られず、申し訳ありません」

「あまり気にするな、子爵。確かにトリステインとゲルマニアの同盟阻止は余の願うところだが、同盟を結ばれてしまっても実はかまわないのだよ。どのみちトリステインは裸だ。幾らでもやり様はある。それよりも大事な事がある。なんだかわかるかね？」

「閣下の深いお考えは、凡人の私にははかりかねます」

クロムウェルはかっと目を見開き、腕を大きく広げて、膝をつく三百弱の王軍とワルドの前で演説を始めた。

「『結束』だ！揺るぐ事の無い鉄の『結束』だ！ハルケギニアは我々、選ばれた貴族達によって国境を越え、敵味方と言う拘りを捨て、『結束』するのだ！そして、聖地をあの忌まわしきエルフどもから取り返す！『結束』するためには、何よりも信用が第一だ。だから余は子爵、きみを信用する。些細な失敗など許そう」

クロムウェルは手で合図し、王軍の者達を立ち上がらせた。

「その『結束』に加わった彼らも無残な格好をさせたままではいけないのでな。ワルド君、これで余は失礼するよ」

クロムウェルは歩き出すと、そのあとを王軍の者達が足を揃えて歩いていく。

ワルドは膝をついたまま、クロムウェルが十分離れたのを見て、強く握り締めた拳で地面を叩いた。

「おのれ、ガンダールヴ・・・！」

焼かれた胸のジクジクと鈍い痛みにワルドは手で胸を抑え、悪態をついた。

その頃、ルイズ達はシルフィードに乗ってトリステイン上空を飛んでいた。

六人それぞれがシルフィードの背びれを背もたれにして寄りかかって跨る。

衰弱していたウェントゥスも本調子では無いとは言え、シルフィードの背で少し休んだので元気を取り戻していた。
先程まで穿つ、開けられていた胸の傷も、指でなぞらなければ判らぬほどに綺麗に塞がっていた。
杖を握り、簡単な魔法を使えるぐらいに回復している事を確認すると、ウェントゥスはブロントに声をかけた。
「友よ、まだあの手紙をもっているか？」
うたた寝していたルイズも、トリステイン上空に差し掛かった辺りから起きていた。
「ごめんなさい、ウェー・・・ウェントゥス。あの手紙は・・・」
「ここに持っているんだが？」
そう言ってブロントはカバンから一枚の丸めた羊皮紙を取り出して見せた。
「え・・・、でもわたしのためにワルドと手紙を交換したんじゃ・・・？」
「確認を怠ったワルドはアワレにも目的を果たせずに呪符デジョンの使いカスを持っていく事となった。きっと鬼の首取ったように思っていたワルドはいまごろ深い悲しみに包まれている」
「そうだったんだ、わたしてっきりブロントが手紙を渡してしまったのだと思ってた」
「自慢するわけじゃないけど俺はルイズから特に信頼されている使い魔。なので手紙を渡すなという命令を忠実に守っただけなんだが？」
ウェントゥスがにやりとする。
「さすがは我が友、機転が利くな」
「それほどもでない」
ウェントゥスはむくりと身を起こした。
「すまない、その手紙を少しの間だけ貸してくれないか？あと出来れば何か書くものを」
ブロントは手紙を手渡し、カバンから奇妙な指の様な形をしたペ

ンを取り出した。
「ありがとう。・・・それにしてもこれまた凄い形のペンだな。まるで悪魔の指をかたどったみたいだ。ふむ、インクの色が赤いのは少し気になるが、この際贅沢は言えないだろう・・・む、勝手に動いて少し書きづらいな」
　ウェントゥスがデーモンの指ペンと格闘しながらアンリエッタ王女からの手紙に何か一文を書き足すと、それを再び丸めて指ペンとともにブロント返した。
「では、私はこの辺で失礼するよ」
「せめて姫さまに一目でも、会ってゆけばよろしいのに」
　ルイズはすがるような目で訴える。それに対してウェントゥスは橙色のレンズの向こうから真剣な眼差しでルイズを見つめていった。
「私が王宮を訪れれば、私に似ているとされる誰かだと騒ぐ者がでるだろう。王宮に潜む裏切り者はワルドだけとは限らない。トリステイン、そしてアンリエッタ王女のためにも私が王宮を訪ねるわけには行かないさ」
「ならば、夜にどこか人目のつかぬところで、待ち合わせるように取り計らって・・・」
　ウェントゥスは微笑み、首を横に振る。
「色々心配してくれて、嬉しいよ。だけどね、アンはきみと似て、同じ様に正直で、真っ直ぐな、いい目を持っている。私と会った事を彼女が誰にも話さずとも、宮廷にいる者達にとってはその嘘をつけない目が全てを語ってしまうだろう」
「そんな・・・わたし姫さまになんて言えば・・・」
「『ウェールズは死してもなお、風と共に君を見守っている』そう伝えてくれればいい」
　ルイズは暗い顔をして、俯く。
　代わりにブロントが口を挟む。
「俺が言ってやってもいいんだが？」
「そうだな、自分の友人に恋人の死を伝えるなどと、女の子にはつ

らい事を頼む所だったな」
　ルイズは決心して、顔を上げた。
「いいえ、わたしが姫さまにそう伝えるわ。何でも使い魔に任せっぱなしにするわけにはいかないわ」
　ウェントゥスはにっこりと微笑む。
「そうか、すまないな。きみときみの使い魔には迷惑をかける。それと、この指輪もアンに渡してくれ。王家のモノがいつの間にか私の指に紛れ込んでしまったようだ」
　そう言って、ウェントゥスは指から風のルビーを外すと、それをルイズに手渡した。
「私はこれから、私なりにトリステイン王宮に蔓延る『レコン・キスタ』の存在を調査しつつ、どこかの街で身を潜めるとするよ。何か分かり次第、私の使い魔で知らせるよ。では、友よ、あとはまかせたぞ」
　ウェントゥスはブロントと腕をがしっと交差させると、口笛を高く鳴らし、＜フライ＞の魔法をかけてシルフィードから飛び降りた。
　ウェントゥスがゆっくりと落ちていく途中、遠くから漆黒の羽根を羽ばたかせる大鷲がキーッと鳴きながらウェントゥスに飛びよる。
　ウェントゥスは腕を掲げると、黒鷲はそれを掴み、遠くに見える街灯りへの方角へと引っ張っていった。
「あら、ブロントさんのご友人帰っちゃったの？中々のイイ男だったから、もっとお近づきになりたかったのに。せっかく手伝ったというのに、どんな任務かも教えてくれないし、アルビオンも見る暇なかったし、おまけにあの子爵が裏切り者だって言うし。今回の旅は徒労ばっかりね」
　キュルケが不満を漏らす。
「もうすぐつく」
　タバサがぽつりとキュルケに呟いた。
「あら、よかったわ。あの穴を潜り抜けてもう土だらけだから早く

洗い流したいわ」

シルフィードがトリステイン王宮上空に差し掛かったとき、マンティコアに騎乗した魔法衛士隊の隊員達がシルフィードに目掛けて一斉に飛び上がる。

王宮の警護にあたっていたマンティコア隊の隊員達はしきりに、ここは現在飛行禁止であることを大声で告げたが、タバサはそれを無視してシルフィードを王宮の中庭へと着陸させた。

一行はマンティコア隊の面々に囲まれると一斉にレイピアのような形状をした杖を向けられた。

ごつい体にいかめしい髭面の隊長が、中庭に降り立った怪しい侵入者達に大声を発する。

「今現在、王宮の上空は飛行禁止だ！ふれを知らんのか？」

ルイズは竜の上から軽やかに飛び降りて、毅然とした声で名乗った。

「わたしはラ・ヴァリエール公爵が三女、ルイズ・フランソワーズです。怪しいものじゃありません。姫殿下に取り次ぎ願いたいわ」

隊長は口ひげを捻って少女を見つめた。

「ラ・ヴァリエール公爵さまの三女とな」

「いかにも」

ルイズは胸を張って隊長の目をまっすぐ見つめた。

「なるほど、見れば目元が母君にそっくりだ。して、要件を伺おうか？」

「それは言えません。密命なのです」

「それでは殿下に取り次ぐ事はいかぬ。要件も尋ねずに取り次いだ日にはこちらの首が飛ぶからな」

困った声で、隊長が言った。

その時、風竜の背中から竪琴の熱情的な律動が鳴り響いた。

デンデデッデデレ♪

デンデデッデデレ♪

顔を覆う白い鉄仮面を被り、白い甲冑を着た一人の男が竜から飛び降りた。
仮面の男がステップを踏み、隊長を指差し、ポーズを決める。

――王宮という劇場に舞い降りた聖騎士

男は一言も発していないのに、マンティコア隊隊長とその隊員達の心にその言葉が響いた。
「おお、品評会で素晴らしい踊りと演奏を演じた、例の使い魔か！」
男がボロン、と竪琴を鳴らして身を翻すと、鎧をガチャリと鳴らす。

――この鎧がヤバ過ぎる牙を程よく包んでくれる

呆然としていたルイズはハッと気を取り直すと続けた。
「え、ええ！姫殿下により王宮の方でまた見たい、と仰せつかっていたので」
隊長は口ひげを撫でながら頷いた。
「成る程、王宮の皆を驚かせようと、それ故『密命』か。あいや、配慮足りず、すまなかった。しかし、隣国アルビオンが『レコン・キスタ』に制圧され、近いうちにこのトリステインにも侵攻してくるとの事で、多少厳重な警護体勢をこちらもとっていたのだ、許されよ。今、殿下に取り次ごう」
隊長の隊員の一人に事の要件を取り次ぐように命令して送ると、しばらくして隊員が戻って隊長に殿下の返事を伝える。

「姫殿下は貴殿らの来訪をお待ちしていたようだ。使い魔とその主人は殿下の部屋に、他の者達は用意する別室で休んで良いとの事だ。私が部屋まで案内しよう」
　一行はマンティコア隊の隊長の案内で、キュルケとタバサ、そしてギーシュは謁見待合室に残し、ルイズとブロントをアンリエッタの部屋の前まで連れて来られた。
「それでは私はこれにて。件の『密命』が周りに知れてしまう事が心配なら、皆の興を削ぐなどという、無粋な真似をするような口の軽い者は我らマンティコア隊におらぬよ。もっとも、その事ならラ・ヴァリエール嬢の方が身をもって知っているかな？」
　そう軽く冗談を言って、髭面の隊長は会釈して持ち場に戻った。
　ルイズは隊長の言っている事に見覚えがなく、不思議に思いつつも、アンリエッタの部屋のドアを叩いた。
　規則正しく、初めに長く二回、それから短く三回。
　ノックに反応して、すぐにドアが開かれ、出迎えたアンリエッタがルイズに抱きつく。
「ルイズ！」
　アンリエッタの姿を見て、ルイズも思わず顔がほころぶ。
「姫さま！」
　二人は部屋の入り口で、ひっしと抱き合った。
「ああ、無事に帰ってきたのね。うれしいわ。ルイズ、ルイズ・フランソワーズ・・・」
「姫さま・・・」
　ルイズはぐっと強くアンリエッタを抱きしめた。
「件の手紙は、無事、わたしの使い魔が持っています」
　アンリエッタは大きく頷いて、ルイズの手をかたく握り締めた。
「やはり、あなたはわたくしの一番のおともだちですわ」
「もったいなきお言葉です。姫さま」
「・・・とにかく、わたくしの部屋の中でお話しましょう。どこに聞き耳を立てている者がいるかわかりませんから」

アンリエッタはルイズとブロントを自室にいれ、ドアを閉めると、そこでルイズは事の次第を説明した。

道中キュルケ達と合流したこと。

ラ・ロシェールで『土くれ』のフーケに襲われたこと。

アルビオンに向かう船に乗ったら、ウェールズ皇太子が率いる空賊に襲われたこと。

そのウェールズ皇太子に亡命を勧めたが、断られた事。

そして、ワルドと結婚式を挙げる事となり、式の最中ワルドが豹変した事。

ワルドが皇太子から預かった手紙を奪おうとして、更にウェールズ皇太子の胸をワルドが貫いたこと・・・。

それを聞いて、アンリエッタは悲観にくれた。

「あの子爵が裏切り者だったなんて・・・。そんな、まさか、魔法衛士隊に裏切り者がいるなんて・・・」

アンリエッタはかつて自分がウェールズにしたためた手紙を握り締めながら、はらはらと涙をこぼした。

「姫さま・・・」

ルイズが、そっとアンリエッタの手を握った。

「わたくしが、ウェールズ様のお命を奪ったようなものだわ。裏切り者を、使者に選ぶなんて、わたくしは何と言う事を・・・」

ルイズは親友の涙を見て、真実を打ち明けたかったが、ぐっとその衝動を抑え込み、唇を強く噛み締めた。

「あの方は、わたくしの手紙をきちんと最後まで読んでくれたのかしら？ねえ、ルイズ」

ルイズは頷いた。

「はい、姫さま。ウェールズ皇太子は、姫殿下の手紙をお読みになりました」

「ならば、ウェールズ様はわたくしの下に亡命をする事を選ぶより、名誉を選んだのですね」

アンリエッタは寂しげに首を振った。
「では、やはり・・・皇太子に亡命をお勧めになったのですね？」
悲しげに手紙を握り締めたまま、アンリエッタは頷いた。
「ええ、死んで欲しくなかったんだもの。愛していたのよ、わたくし」
ルイズは泣き崩れるアンリエッタに握り締められ、くしゃくしゃになっている手紙を見つめた。
「姫さま、確かその手紙に新しく何か書きしたためられているはずです」
アンリエッタは手紙を開くと、ウェールズの筆跡で、一文新しく残されていた。

『伝えたかった誓約の言葉を、君に伝える前に去ってしまう事を許してくれ。どうか、泣かずに、強く生きて欲しい。君の幸せを、私はいつまでも祈っているよ』
―ウェールズ・テューダ

「ああ、ウェールズ様・・・ウェールズ様・・・！」
アンリエッタの目からこぼれる大粒の涙が、手紙の文字にポタポタと落ちると、赤い文字が涙と混じり、まるで血の様に滲み広がる。
「姫さま・・・。わたしがもっと強くウェールズ皇太子を説得していれば」
アンリエッタは涙を拭き、申し訳なさそうに呟くルイズの手を取って、努めて明るい声をだして言った。
「いいのよ、ルイズ。貴女は立派にお役目通り、手紙を取り戻してきたのです。わたくしの婚姻を妨げ、我が国とゲルマニアの同盟を阻止せんとする暗躍は未然に塞がれたのです。アルビオンも簡単に攻めてくるわけにはいかなくなったでしょう。危機は去ったのですよ、ルイズ・フランソワーズ」
ルイズはアンリエッタに貰った水のルビーを指から外し、アンリ

エッタに差し出した。
「姫さま、これ、お返しします」
アンリエッタは首を振った。
「それは貴女が持っていなさいな。せめてものお礼です」
「こんな高価な品を頂くわけにはいきませんわ」
「忠誠には、報いるところがなければなりません。いいから、とっておきなさいな」
ルイズは頷くと、指輪を指に嵌めなおした。
「それと、姫さま。これを姫さまに渡すようにと、預かっています」
ルイズはポケットからウェントゥスに渡された風のルビーを取り出し、アンリエッタに手渡した。
「これは、風のルビーではありませんか。ウェールズ皇太子から、預かってきたのですか」
ルイズは神妙な面持ちで、託されていた言葉をアンリエッタに伝えた。
「『ウェールズは死してもなお、風と共に君を見守っている』、その指輪を託してくれた方が、姫さまにそう伝えて欲しいと」
アンリエッタは愛しそうに指輪を指で撫でた。
そして、アンリエッタが風のルビーを指の通すと、ウェールズが嵌めていたものなので、ゆるゆるだった。
だが、アンリエッタが小さく呪文を唱えると、指輪がその細い薬指にぴたりとおさまるように窄まった。
そして、アンリエッタは再びルイズを抱きしめた。
「ありがとう、ルイズ。そして、その使い魔さんも」
アンリエッタの笑みは寂しく、悲しげであったが、その言葉にはどこか力強さが感じ取られた。
「その方の言葉を信じて、わたくしは強く生きてみようと思います」
アンリエッタの部屋を後にしたルイズとブロントは、誰もいない王宮の廊下で立ち止まった。

「姫さまはとっても強い方だわ。わたしは近しい人がいなくなったら、と考えるだけでもとっても不安になるのに」
ぽたりと床に涙が落ちる
「なのに、わたしったら、『おともだち』と呼んでくれる姫さまを騙してしまったわ。もうおともだちと名乗る資格はわたしには無いわ」
今まで我慢していた涙が一気にルイズの目から流れ出る。
その涙を人に見られまい、とルイズはブロントに顔を埋める。
「・・・ちょっとわずかに言い方が誤用だっただけで嘘はいっていないんだが」
「それでも、あんなに姫さまを傷つけてしまった。なのに姫さまは、最後に笑ってみせたのよ」
それ以上ブロントは何も言えず、黙って胸をルイズに貸した。
学院へと戻る前に、そうしてルイズはしばらく声を殺して泣いた。

ルイズ達が魔法学院に帰還してから三日後に、正式にトリステイン王国王女アンリエッタと帝政ゲルマニア皇帝、アルブレヒト三世との婚姻が発表された。
式は一ヶ月後に行われるはこびとなり、それに先立ち軍事同盟が締結される事となった。
同盟の締結式はゲルマニアの首府、ヴィンドボナで行われ、トリステインからは宰相のマザリーニ枢機卿が出席し、条約文に署名した。
同盟締結式の翌日、アルビオンの新政府樹立の公布が為され、アルビオン帝国初代皇帝、クロムウェルはすぐに特使をトリステインとゲルマニアに派遣し、不可侵条約の締結を打診した。
未だ軍備が整わぬトリステインとゲルマニア両国にとって、この申し出を断る理由もなく、これを受けた。
こうして、ハルケギニアに表面上は平和が訪れ、空に浮かぶアルビオンの幻影に恐怖する日々にひとまず終わりを告げた。

外伝・タバサと仮面　「吸血鬼護身術」

ガリア王国某所、
遠くに湖が見える立派な屋敷で、年老いた屋敷の老僕と鉄仮面を被った男が応接間で何か会話をしていた。
白髪混じりの、整った執事服を着た、年老いた老僕が恭しく仮面の男に礼をする。
「態々お呼び立てして申し訳ございません。でも、こうして来て頂いたと言う事は、無事連絡が届いたようでございますね」
男は白い鉄仮面の奥からくぐもった声で語る。
「冒険者ならクエストの依頼をたまたま受ける事が結構あるらしい」
「屋敷の使用人が獣に襲われていた所を、偶然居合わせて助けて頂いた恩人に、何度も遠路遥々足を運んで頂いて申し訳ないと思っております。しかし、あなた様しか頼める者がいないのです。恥ずかしながら、魔法も使えぬ私共の様なただの使用人には、腕の立つメイジを雇う財も人脈も持ち合わせておらぬので・・・」
長々と会話を始めた老僕に、仮面の男が口を挟む。
「このままじゃ日が暮れるまでお前の話しを聞く羽目になる。無駄話をする時間が惜しいだろ」
「これは失礼致しました。年を取るとどうも前置きが長くなってしまいまして」
老僕はおほんと、咳をし、気を取り直すと、複数枚の巻かれた紙を仮面の男に差し出した。
「まずは、前回依頼しましたエギンハイム村の件、報酬をお受け取りください。お約束しておりました、ガリア西部の火竜山脈方面の地図でございます。三千リーグにも渡る広大な地域なため、本来十二枚に分けられている地図なのですが、人の足も踏み入らぬ先西端が描かれた三枚はそれらを求める需要も少なく、今新たに描き下ろしているとの事で、まだ用意できておりません」

「九枚で良い」
仮面の男は地図を受け取ると、それぞれ一枚ずつ広げて確認した。
「一般の地図師が描いたものなので、載っていない経路も多数あると思います。流石に軍用の正確な地図は高価で、私共にも手が出せないものでして・・・申し訳ありません」
仮面の男は黙って地図一通り眺めると、それを再び丸めて、だいじそうにカバンにしまった。
「見事な仕事だと関心はするがどこもおかしくはない。いままで火山への行き方が神秘のベールに隠されてきたがついにそのカーテンが開かれる」
老僕は、安心したようにほっと息を吐く。
「ご満足頂いた様で何よりです。して、本題の今回の依頼に入ってもよろしいでしょうか？以前お渡ししたガリア王都リュティス周辺地図は今お持ちでしょうか？」
仮面の男は頷き、カバンから別の地図を取り出すと、それを応接間のテーブルの上に広げた。
老僕は胸のポケットから眼鏡を取り出し、それを掛ける。
「今回私共が小宮殿（プチ・トロワ）から得ました情報によりますと、王都から五百リーグほど南東に下ったサビエラ村に出没するようになった、吸血鬼の問題に、北花壇警護騎士を一名派遣するつもりとの事でございます」
老僕はペンにインクをつけると、地図に村の位置を示す印をつけた。
「相手が人間に扮する吸血鬼となれば、探し出すのは容易ではないでしょう。すでに王宮が送った騎士が一名犠牲になっていると聞きます。エギンハイムの時の様に騎士が到着するまでに問題を解決、とは言いません。その派遣される騎士に危険が及ばないか、影ながら助けてあげるだけで十分でございます」
老僕は眼鏡を外し、それを胸のポケットに仕舞った。
仮面の男は地図の印の位置と、そこにたどり着くまでの経路を入

念に確認した後、老僕に聞いた。
「その村には何か採れるものはにいのか？」
「サビエラの村自体は特筆すべき特徴のない小さな寒村ですが、東の海を越えればサハラが位置するその半島一帯では、東方より吹く海風に乗って様々な植物の種子が飛んでくるとか。そのため、村周辺では普段見かけない珍しい薬草などが群生している、と聞き及んでおります」
「俺は今回表向きそれを採りに行く事になったのでいいのか？お？」
「それであれば不自然に思われないでしょう。実際、サビエラの村にはたびたび薬草師が訪れるそうです」
老僕は仮面の男に向き直り、深々と頭を下げた。
「やり難い注文である事は重々承知でございます。ですが、派遣される騎士の任務に私共が勝手に手助けを送っていると言う事を、その騎士、ましてや宮殿の方に悟られてはまずい立場に居られるのです。前回同様、その仮面で身元を隠した上で、『偶然』を装って欲しい。こちらで用意できる報酬と言えばガリア各地の情報と地図ぐらいだけですが、どうか引き受けて頂けませぬか？」
「あきらめが鬼なっているようだが安心していいぞ。冒険者としてもちろんその情報と地図を手に入れる手はず。そのクエストを引き受けることになった」
老僕の顔がぱっと明るくなる。
「おお、ありがとうございます。次回訪れる時までに、山脈の地図残り三枚は用意致しましょう。その他に、ガリア東部のサハラ国境付近の地図も入手できるかもしれません」
仮面の男はそれでかまわない、と答えると、広げてあった地図をカバンに仕舞った。
「じゃ闇系の仕事が今からあるからこれで」
「宜しく頼みました。どうか、ご無事で」

それから数週間後、

北花壇警護騎士として吸血鬼掃討の任務を受けたタバサは、サビエラ村へと向かっていた。

「お姉さま、お姉さま！今度の相手の吸血鬼はとても危険な相手ですわ！太陽の光に弱い点を除けば、人間と見分けがつかないし、先住魔法は使うし！おまけに血を吸った人間を一人、手足のように操ることだってできるんだから！きゅいきゅい！恐い！」

角を生やし、顔に似合わぬ可愛い声で、風韻竜のシルフィードはぶるぶる震えながら、背中に乗せたタバサに語りかけていた。

タバサは黙って、『ハルケギニアの多種多様な吸血鬼について』と表紙書かれた本を読んでいる。

「いくらお姉さまでも危険なのね！吸血鬼は恐ろしいほどに冷酷で、邪悪な存在なのに！それをお姉さま一人だけで向かわせるなんて、イザベラ王女はとても意地悪なのね！きゅい！お姉さまの従妹だというのに！」

タバサは杖を握ると、シルフィードの頭をぽかぽかと叩いた。

「痛い痛い！ごめんなさいなのね。この事言わない約束だったの、忘れてたのね」

「ここに降りて」

村から離れた場所にシルフィードが着陸すると、タバサは続けて命令した。

「化けて」

シルフィードはぶんぶんと頭を左右に振った。

「いやいや！どうして！」

「化けて」

「ううう・・・あとでいっぱいお肉たくさん貰うんだから！わかった？」

タバサは頷いた。

シルフィードは背中からタバサを降ろすと、呪文を唱えた。

「我をまといし風よ。我の姿を変えよ」

メイジが使う杖を用いての系統魔法と違い、口語に近い呪文の杖

を必要としない＜先住魔法＞である。
　シルフィードは＜変化＞の魔法で風の渦を纏うと、その大きな体は掻き消え、変わりに二十歳ほどの若い女性の姿に代わった。
「う～～やっぱりこの体嫌い。ぐらぐらして歩きにくいのね！きゅい！」
　全裸のまま、シルフィードは人間の姿に体を慣らすように動き回っている間、タバサは大きな革の鞄から衣装を取り出し、それをシルフィードに渡す。
「なにこれ？」
「服」
「いや！動きづらくなる布なんて体につけたくない！きゅい！」
「人間は服を着る」
　淡々と言われ、服を押し付けられたシルフィードは渋々服を身に着けた。
「う～～ごわごわするの～」
　タバサは続けて自分の杖を渡し、マントを脱ぐとそれをシルフィードの肩にかけた。
「へ？どういうおつもり？」
　マントを脱ぎ、ただの少女の姿になったタバサが答える。
「あなた騎士。わたし従者」

　そうして村に現れた騎士とその従者は、村長の家へと通された。
「ようこそいらっしゃいました。騎士様」
　白い髪に髭の、人のよさそうな村長が深々とシルフィードに頭を下げる。
　それから顔をあげ、じっとシルフィードの顔を見つめる。
「ん？何かついてるの？」
　そばに控えたタバサが、ぼそっとつぶやいた。
「名前」
「あ！そうだったのね！えーと、ガリア花壇騎士、シルフィード！

＜風＞の使い手なの！」
村長はきょとんとした。
「シルフィード？ああ、そうか！世を忍ぶ仮のお名前ですな！風の妖精シルフィードとは、ご趣味のいいあだ名ですな」
そう言って深く、一礼をした。
シルフィードは満足そうに頷いた。
「では村長さん、事件を詳しく説明して欲しいの」
村長は説明を始めた。
「もう二ヶ月程前になりますかの、すでに六人ばかりが犠牲になりましたのじゃ。その中には前回派遣された騎士様も含まれておりますでの。二人ほど犠牲者が出た後は、夜を出歩く村人はいなくなったんじゃが、それでもあの忌々しい吸血鬼はこっそりと家に忍び込み、血を吸うんですじゃ」
興味深く聞いているシルフィードは、根が臆病なためか、顔を青くする。
「吸血鬼はご存知の通り、太陽の光に弱いため、日中、外を出歩くことができませんでな。おそらく昼間は、森の奥深くに潜んで居るのでしょう。だから森に出かける村人もいなくなってしまいました」
「恐い！」
「ですが奇妙なことに、ここ一週間は吸血鬼の被害がぱたりと止まっておるのでの」
タバサは、話しを聞いてぶるぶる震えるシルフィードを村長から見えない位置で軽く抓る。
「いたい！え、えーと。最近何かおかしな事とかあった？」
「そう言われますと、一週間前と言えば、あの仮面の男が村にやってきた頃じゃったの。吸血鬼が現れるようになってからというもの、村を出てゆく者はおっても、やってくる者は珍しいので良く覚えております。その仮面の男が現れてからというもの、今の所は誰も吸われていませんな」
タバサは、『仮面の男』と聞いて目を細めて、ぽつりと呟いた。

「仮面の男？」
「ん？ええ、何でもこの村周辺に生える珍しい薬草を集めに来た流れの薬草師だとかで。日中でも顔を覆う鉄仮面を被り、薬草狩りにと危険な森へとでかけているらしいので、彼が吸血鬼だとか、はたまた血を吸われ、吸血鬼が操るという屍人鬼（グール）だとかと、何人かの村人は怪しんでおりますが」
シルフィードはタバサに目をやると、タバサが頷き返したので、村長に聞いた。
「その仮面の男は今どこにいるの？そいつから話しを聞いてみるのね」
「確か同業のよしみ、と言う事で村の薬草師レオンさんの所に今も世話になっておるはずじゃ」
そのとき・・・シルフィードはドアの隙間から小さな女の子が顔を覗かせている事に気が付いた。
五歳ぐらいの、人形のように可愛い美しい金髪の少女である。
「まあ可愛い！」
シルフィードは突然素っ頓狂な声をあげた。
少女はびくん、と身をすくめた。
「おいでおいで！」
シルフィードに呼ばれて、少女は困ったように村長を見上げる。
「お入りエルザ。騎士さまにご挨拶なさい」
少女は怯えた表情で入ってきて、硬い仕草で一礼した。
可愛い女の子が大好きなシルフィードが、思い切り抱きついた。
「なんて可愛いの！食べちゃいたいぐらい！きゅいきゅい！」
エルザはついに泣き出してしまって、部屋を飛び出して行く。
「ありゃん。そんなにわたしが恐いの？今は綺麗なはずなのに。きゅい！」
「失礼をお詫びします。でも、堪忍してやってください・・・あの子はメイジが恐いのですじゃ」
「どうして？」

シルフィードは無邪気に問うた。
「その・・・エルザはメイジに両親を殺されておりますのじゃ」
「両親？村長さんの娘じゃないの？」
「エルザはわしの本当の子ではないのですじゃ。一年ほど前、寺院の前に捨てられおったのです。聞けば両親はメイジに殺されて、ここまで逃げてきたとのことでの。早くに子を亡くし、つれあいも死んでしまったわしには、家族がおらんでな。引き取って育てる事にしたんですじゃ」
シルフィードは申し訳なさそうな顔をした。
「そうだったの。そう知らずに恐がらせてしまってごめんなのね」
「わしはまだあの子の笑った顔を見たことがないのですじゃ。体も弱くて、なかなか外で遊ばせてやる事もできん。一度でいいからあの子の笑顔が見てみたいものじゃのう」
シルフィードは思わずタバサを見つめてしまった。
シルフィードの主人も同じく笑顔を忘れてしまった女の子だったからだ。
冷徹に任務を遂行しいるタバサが笑顔を取り戻すのはいつのことだろうか、と想像するとシルフィードは切なくなった。
「とにかく、よろしくお願いしますですじゃ、騎士様。レオンさんに話しを聞きに行くのであれば、彼の家は森側の村の外れにありますので」

タバサとシルフィードは、調査を開始した。
まず手始めに、ここ最近ふらりとやってきた仮面の男の事を調べるべく、村の薬草師レオンの家を訪れた。
「これはこれは、騎士様！このような所に一体どのようなご用件ですかな？」
家の中は壁一面様々な草が詰められた壜をずらっと並んでおり、出迎えた男は先程まで薬の調合をしていたのか、乳鉢に何かが擦り潰されていた。

「あなたが薬草師のレオンさんね？」
「ええ、如何にも、村の薬草師をさせていただいているレオンです」
レオンと名乗った歳三十半ば程の男は片手にすりこ木を持ったまま、恭しくシルフィードに頭を下げた。
タバサが並べてある薬草を一つ一つ観察している所、シルフィードはレオンに聞いた。
「仮面の男がここに寝泊りしていると聞いたのね！」
「ああ、あいつですか。確かにうちの空き部屋を一つ貸してやっていますね」
「ちょっと調べたい事があるのね！早く呼んでくるのね」
レオンはちょっと困った顔をした。
「弱りましたね、あいつはいつ寝ているかも分からない程、昼も夜も良く薬草狩りに森の方へと出かけてましてね。今も騎士様が村に訪れた頃と時同じく、入れ違う様にして薬草採りに行ってしまいまして」
シルフィードは子供みたいに大振りな仕草をして、がっかりした顔を見せた。
「何か怪しいのね！きっとわたし達から逃げるために出かけたのね」
「ああ、ひょっとして吸血鬼騒ぎの調査ですか？確かにあの仮面被ってるから、誰だって怪しむよなあ。でも、俺からしてみれば、あいつが吸血鬼な訳が無いと思っておりますが」
「何でそう思うのね！どう見ても怪しいのね！」
レオンは頭をぽりぽりと掻いた。そしてタバサが興味深そうに眺めている並んだ草の入った壜を指差す。
「ここに並んである薬草がありますでしょう？」
「それがどうかしたのね？」
シルフィードが首を傾げる。
「これら全部、あいつが採ってきた物ですよ。ここ数日で」
「ええっ！？こんなに？」
「吸血鬼騒ぎが起きてからというもの、俺も含めて森には誰も近寄

れなくてね。薬草もなくなり、村の病人用の薬が調合できなくて困っていたところ、彼はふらりと村にやってきてね。うちにある薬草が少なくなって困ってると、聞くやいなや、物凄い量の薬草を森から採ってきれくれたんですよ。人の血を吸って生きる吸血鬼が、人を治すための薬草に詳しいでしょうか？」

「でもでも！吸血鬼だからこそ、森に行くのも恐くないのかもしれないじゃないの！きゅい！」

レオンはふむ、と口元を手で抑えながら考え込んだ。

「確かにそういう見方もできますね。数日一緒に過ごした俺だから言える事なのかもしれないですが、理屈じゃなくて何となくわかるんですよ、あいつが吸血鬼じゃないって。何より・・・」

「何より・・・？」

「あいつの作る飯は旨い。俺でも知らなかった薬草の使い方で肉を旨く焼く方法とかを知っていた。あんな旨い飯の作り方を知っている吸血鬼は、血なんて吸う必要はないじゃないですか。もし、わたしが屍人鬼かとお疑いなら調べていってください」

話しを聞いていたタバサがシルフィードに頷くと、シルフィードはレオンの体を調べた。

吸血鬼が屍人鬼を作る時は、その操る人の血を吸わなければならない。

そのため、血を吸われた痕を探せば屍人鬼かどうか識別できるのである。

服を脱いだレオンは体のどこにも血を吸うための牙の痕はなかった。

調べ終わったレオンは再び服を着ると、シルフィードに言った。

「吸血鬼を探している場合、俺ならまずは数ヶ月前にやってきたよそ者の占い師の親子が怪しいと思うね。息子のアレキサンドルはぬぼーとして何考えているかわからないし、母親のマゼンタ婆さんだって村に来てから、一度も外にでてない。仮面の奴だってよそ者だが、吸血鬼と騒がれた後にのこのこと現れる吸血鬼がいるもんか」

シルフィードはどうする？と聞きたそうな顔でタバサを見たが、タバサもただ首を横に振るばかりだった。
「わかったのね、仮面の奴が帰ったら、村長さんの家に来るように言って欲しいのね」
「わかりました、あいつがいつ戻るかは分かりませんが、帰ってきたらそちらに向かわせます」

そうして、タバサとシルフィードは各家に回って調べては、どの村人もだれそれが怪しいと言い、結局は皆互いの事を疑っているというのが分かっただけだった。
何人かの村人の体を調べた所、血を吸われた様な痕を残した者が何人かいたが、田舎の村なので山蛭や虫に食われた痕も混じっていて、あまり参考にならなかった。
「お姉さま、これからどうするおつもり？何か皆が怪しく思えてきたのね。もしかしてもう吸血鬼はいなくて、お互いを疑っているだけなのかも」
タバサはシルフィードを指差し、呟いた。
「囮」
「もしかしてそのために、こんな格好させたの？」
タバサはこくりと頷く。そしてシルフィードに二言三言つぶやいた。
シルフィードはしばらく唖然としていたが、にっこりと笑って大きく頷いた。
「いいのね？容赦しないわよ、きゅい！」
「かまわない」
シルフィードは村中に聞こえるぐらい、大声で怒鳴った。
「この！ほんとにお前は使えない従者だこと！」
その叫びに、村人が何事かと集まってきた。
「今、お前はこの杖を蹴飛ばしたね？間違って足があたったなんて言い訳は聞かないのね！始祖ブリミルと魔法と貴族に対して敬意が

足りてない証拠なのね！」
シルフィードは杖でぺしぺしとタバサの頭を叩いて。
タバサは従順に頭を下げた。
「すみません」
「わかったら、今日はわたしが寝た後、敬意を込めてしっかりと杖を朝まで磨くのよ！」
「はい」
タバサは何度も頭を下げている。
騎士と従者のやり取りを村人は心配そうに見つめている。小さな村なのですぐにその事は村中に広まるだろう。

やがて日も暮れ、タバサとシルフィードは村長の家で休んでいた。
タバサは与えられた部屋で腰掛けていると、部屋のドアが開いた。
開いた隙間から顔を覗かせたのはエルザだった。
「ここにいたんだ」
「何？」
「夕ご飯できたから、おねえちゃんを呼んで来てって言われたの」
「そう、わかった」
タバサがそう返事しても、エルザは動かず、タバサの目をじっと見つめている。
「おねえちゃん、人形みたい」
「どうして？」
「あんまりしゃべらないし、笑ったりしないし。騎士様に怒られても何か平気そうで、ぜんぜん表情かわらないんだもの」
タバサは無邪気なエルザの目を見つめ返した。
その瞳には人形のように表情が無い自分の姿が映っていた。
「ねえ、おねえちゃんのパパとママはなにをしているの？」
タバサは少し沈黙して、考えてから答えた。
「パパはいない。ママはいる」
「そう。わたしのパパとママはね、メイジにころされたの。わたし

が見てる前で、まるで虫けらみたいに・・・だからわたしはメイジはきらい。おねえちゃんのパパはどうして死んじゃったの？」

タバサは小さく呟いた。

「殺された」

「魔法で？」

タバサは首を振った。

「魔法じゃない」

「じゃあママはどうしてるの？」

「寝たっきり」

タバサは、父を謀殺した者達の罠から自分を庇って毒を代わりにあおった母の姿を脳裏に浮かべた。

解毒方法が分からない心までも操作する強力毒によって、タバサの母はそれ以来心の時間が止まっている。

今も部屋の中で母はタバサの事を守り続けている。

だから自分は、その部屋の外で母を守らなければならない。

父の仇に頭を下げ続けても、その娘の靴を舐めてでも・・・

「へんな事聞いてごめんね、おねえちゃん。行こ？」

村長の屋敷の食卓に向かうと、既にシルフィードがご満悦そうに肉を頬張っていた。

「このお肉とってもおいしいのね！外側が香ばしくカリカリで、中がじゅわじゅわなのね！きゅい！」

「レオンさんの所の仮面の方が差し入れてくれた野兎を、同じく頂いた香草で焼いたものなんですじゃ。その時に聞いたのですが、何でも表面が黒くなるまで網で焼くのがコツらしいのでの」

シルフィードは後ろからじっと見つめるタバサの視線もまったく意に介せず、きゅいきゅいと歓声をあげて、もぐもぐと野兎のグリルを口に詰め込んでいる。

「彼はいつきたの？」

タバサは村長に聞いた。

「騎士様が村中聞きまわっている間に、やってきて、何でもわたし

の家に来るように言われていたとかで。でも野兎と香草の袋を置いて『ちゃんと来てやったぞ』と言ってすぐ帰っていきましたな」

「そう」

シルフィードが口いっぱいに詰め込んだ肉をごっくんと飲み込む。

「こんなおいしくお肉を調理するやり方しってる人なら吸血鬼じゃないのね！焼かれた香草の甘くスパイシーな香りがとっても兎のお肉と合うのね！るーるー♪」

シルフィードは歌いながら今度は一緒につけられたサラダを食べ始めた。

一口含んで、ぶほっ！と吐き出す。

「わぁ、なにこれ！苦い！きゅいきゅい！」

村長が慌てて説明する。

「失礼致しました。村の名物で、ムラサキヨモギといっての、凄く苦いのですが、体に良くての。この味はよそから来た者にはきついというのを失念しておりましたですじゃ」

「苦いのやだ！もっとお肉が食べたい！」

シルフィードは自分の分の野兎を平らげてしまって、残されたのが苦いサラダなので文句を言い始めた。

タバサはすくっと立ち上がると、自分の分の野兎のグリルをシルフィードの前に置いて、代わりにサラダを入った皿を取り上げる。

シルフィードが出されたグリルを平らげるのと同じぐらいの速さで、タバサもそのサラダをぺろんと平らげてしまった。

「サラダの方ならまだおかわりありますが、もってこさせようかの？」

タバサはこくりと頷き皿を給仕に渡す。

今度山盛りに盛られたムラサキヨモギのサラダもまたぺろんと平らげてしまった。

「よくそんなに苦いの食べれるのね・・・」

シルフィードはもくもくと三皿目のサラダを食べるタバサの姿を見て呆れた顔で呟く。

タバサの横に座っているエルザがぽつりと呟く。
「ねえおねえちゃん、野菜も生きているんだよね」
タバサは口にサラダを含んだまま頷いた。
「焼いた兎も、生きていたんだよね？」
「うん」
「でもそれら全部ころして食べるんだよね。どうしてそんなことするの？」
「生きるため」
エルザはきょとんとした声で聞く。
「吸血鬼も同じじゃないの？吸血鬼がにんげんの血を吸うのだって生きるためじゃないの？」
タバサは口に含んだサラダを飲み込むと、いつもの淡々として口調で答えた。
「そう」
「だったら、なんで邪悪だなんて言うの？やってる事は同じなのに・・・ねえ、なんでにんげんはよくって、吸血鬼はいけないの？どうして？」
タバサは問い返した。
「なんでわたしに聞くの？」
「おねえちゃんなら、答えてくれそうな気がしたから」
「どうして」
「よくわからない。けど、おねえちゃんの目がどこか冷たいからかな。雪が降る夜の風みたいに冷たい風を感じるの。とても冷たいけれど、本当のことしか言わないような気がしたから」
タバサはじっとエルザを見つめた。
おいしい野兎をたっぷりと堪能し、食べ終わったシルフィードが、つぶやいた。
「さて、おなかいっぱいになって眠くなったから寝るのね。昼間言いつけたとおりにしっかりと磨くのね。何かあったらすぐにわたしに手渡すのね」

シルフィードは昼間打ち合わせた囮作戦の『杖を持たないメイジ』を誇示するかのようにタバサに向けて言った後、二階の自分に用意された部屋に戻っていった。
村に吸血鬼がまだ潜んでいるのであれば、メイジがそばに杖も置かずに寝てしまったのを見過ごすはずが無いだろう。
そうやって吸血鬼をおびき出すのがタバサの作戦であった。
シルフィードのそばに杖がない事を見せ付けるためにも、タバサは一階で杖を磨くつもりであった。
「おねえちゃん、どこに行くの？」
「一階」
「わたしも行っていい？」
タバサはちょっと考えた後、頷いた。
タバサとエルザが一階に降りようとしたその時、外からなにやら男が言い争うような声がした。
カッ、と窓から眩しい光が差し込んだと思うと、
腹まで響く、獣を縊り殺した断末魔の様な不快な雄たけびが鳴り響く。
タバサは咄嗟に杖を構えて外に飛び出した。
シルフィードの部屋の窓の真下あたりに人影が立っており、タバサの姿を見るや否や、その人影は物凄い早さでとんずらして走り去っていった。
タバサがその人物を追いかけようとしたところ、それよりももっと異様な光景を目の当たりにし、足を止めた。
昼間、薬草師の家の次に訪ねた占い師親子の息子アレキサンドルの姿があった。
といっても昼間見たときの大柄な、愚鈍そうな男の印象ではなく、大きく見開かれた眼が獣のように血走っており、口からはするどく尖った牙を覗かせていた。
だが、アレキサンドルは屋敷の壁に寄りかかるようにぴくりとも動かず、しゅーしゅーと音を立てて服の隙間から煙が漏れていた。

「デル・ウィンデ」
タバサが短く呪文を唱え、動かないアレキサンドルに向けて風を送ると、アレキサンドルはがらがらと音を立てて崩れていった。胸から下がすでに何者かによって骨にされていたのだ。
騒ぎを聞き駆けつけてきた村人達が、その光景を見て口々に叫んだ。
「やっぱりあのアレキサンドルが屍人鬼だったのか！あいつらが怪しいと思っていたんだ！」
「となると吸血鬼はあの婆か！」
そこにシルフィードが大慌てでやってきた。
「お姉さま！大変！村のみんなが！」
小さい村なので噂が伝わるのは早く、タバサとシルフィードが駆けつけたときには、占い師の家はもうもうたる炎に包まれていた。
アレキサンドルが屍人鬼とわかって、怒った村人達が火を放ったのである。
「燃えちまえ吸血鬼！」
「何が占い師だ！俺達を騙しやがって！」
タバサは魔法を詠唱し、氷の竜巻を作るとそれで火を消した。
「何をするんだ！」
「証拠が無い」
「息子が屍人鬼だったのが何よりもの証拠だろう！枯れ枝の様に細い婆さん・・・だから大人じゃ入り込めねえような煙突から忍び込んでこれたのか、盲点だったぜ」
タバサが止めるまでもなく、すでにあばら家の中は燃え尽きていた。
老婆のものであったろうと思えた焼け痕を見つけて、村人達は歓声をあげた。
「ざまあみやがれ！吸血鬼は消し炭だ！」
それを見て、村人達は安心した顔で去り始めた。使えない騎士様だよ、とか、あの小さい方がメイジさまだったのか、俺達まで騙し

ていったいどういうつもりだと文句の声が聞こえてくる。
そこへ、エルザを連れた村長がやってきて、タバサにぺこりと頭を下げた。
「ご苦労様でした、騎士様。村人達の非礼をお詫びします。彼らも家族をなくして気が立っているのですよ。ゆるしてやってくださいですじゃ。何はともあれ、解決してよかったですじゃ」
村長の陰からエルザがじっとタバサを見つめ、その手に握った杖をにらんだ。

それから部屋に戻り、シルフィードは気を張り続けて、ようやく終わって安心したのかぐっすりと眠っている。
タバサはその横で荷物を纏めていたところ、部屋の扉がノックされた。
タバサが立ち上がって、扉を開くとそこにはエルザが立っていた。
エルザはベッドの横に置かれた綺麗にまとまった鞄やら荷物に気づき、尋ねた。
「もう、いっちゃうの？」
「夜明けに出発する」
「そうなんだ・・・ねえおねえちゃん、行っちゃう前におねえちゃんに見せたいものがあるの！ちょっとだけだから、いいでしょ？」
「見せたいもの？」
「うん！おねえちゃんの大好物、せっかくだからお土産にもっていってよ」
タバサは少し考えこんで、頷いた。
タバサがエルザの後をついていこうとしたとき、エルザが握られた杖を見て怯えた表情を浮かべた。
その顔に気づいたタバサが、ベッドで寝ているシルフィードの傍らに杖を立てかけた。
「ありがとう」
エルザは安心した顔になって言った。

「こっちなの」
月明かりの夜道をエルザに案内されながらタバサは後についていった。
「こっちこっち！」
森に通じる道を指差して、エルザがつぶやく。
そこを辿って、森の中にはいり、開けた場所にでるとあたり一面にムラサキヨモギが生える群生地があった。
「すごいでしょ！こんなにたくさん生えてるの！ほら！ほらほら！」
月明かりの下、楽しそうな声でエルザがはしゃいだ。
「おねえちゃん、この村の人もあまり食べようとしない苦い草、おいしいって食べていたよね！だからいっぱい摘んで！」
タバサは両手いっぱいにムラサキヨモギを摘み取ると、背後から抱きついたエルザが耳元で囁いた。
「ねえおねえちゃん、ムラサキヨモギの悲鳴が聞こえない？痛い、痛いよって」
背筋にぞくりと冷たいものを感じたタバサは咄嗟にムラサキヨモギを放り出し、エルザの腕から跳ね除けた。
振り返ると、無邪気そうなエルザがじっと見つめてくる、雪振る夜の冷たい風の様な目で。
タバサは、駆け出した。
エルザは呪文を口にする。
「枝よ、伸びし森の枝よ、彼女の腕を掴みたまえ」
走るタバサを、するすると伸びた枝が掴む。
手足と腰を伸びた木の枝にしっかりと掴まれたタバサは身動きが取れなくなった。
「おねえちゃんはとても冷たい目するのに、優しいね。わたしが恐がるから杖を置いてきてくれたんでしょう？でも杖を持っている従者は今頃わたしのおうちですやすやおねんね。残念だったね」
エルザはゆっくりと近づくと、口から綺麗にならんだ二本の牙を

覗かせる。
「吸血鬼」
タバサは呟いた。
「そうだよ、吸血鬼はわたし。煙突から忍び込んで、女の子達の血を吸っていたの。でも一週間ほど前からぎらぎらに光る奇妙な人がやってきて、忍び込もうとした家の先々で待ち伏せされて手が出せないで吸えないでいたから、今はぺこぺこなんだけどね」
エルザは手をタバサの方へと伸ばすと、ぴくりとも身動きができないタバサの頬を撫でた。
「わたしの両親は本当にメイジに殺されたわ。わたしの目の前で・・・何もよくわからない頃から気づいたら一人でとぼとぼ旅を続けてたの。もう三十年ぐらいたったかな？血を吸ってでしか生きられないわたしは、色々な村を回って生きてきたわ。村で怪しまれないための事を覚えるまでは、メイジに追いかけられたりと死にそうな目にも沢山あってきた。でも仕方ないよね、誰も教えてくれる人がいないんだもの。自分でやり方見つけていくしかないでしょ？」
タバサはじっと無表情のままエルザを見つめている。
「わたし、そんなわけでメイジは大嫌い。でも、おねえちゃんの事は好きだよ。こないだ来た間抜けな威張りんぼのメイジと違って、おねえちゃんはなかなか尻尾を見せないで、頭がいいもの。それに、その冷たい目。おねえちゃんはどこかわたしに似ているなーと思っちゃった」
「わたしは吸血鬼じゃない。人間」
エルザは無邪気に笑った。きらりとその牙を月の光を反射しながら。
「知っている？吸血鬼は血を吸った人を一人まで屍人鬼として操れるの。前の屍人鬼が焼かれちゃった今なら、おねえちゃんを屍人鬼できるよ。今までは血を吸うための道具だったけれど、おねえちゃんの事は気に入っているから、ずっとお友達でいてくれる屍人鬼になってくれるよね？そうしたらわたしの事もっとわかってくれると

思うんだ」
エルザは指を振り上げると、タバサを掴む枝がうなり、着ている服を破り去った。
それを見てエルザが愛しそうに手でタバサの肌に触れる。
「なんて肌が綺麗なの？まるで雪みたい・・・。知っている？血が全部なくなると、もっと白くなるんだよ？でも、残念ながら今回は全部吸い尽くすわけにはいかないね」
そういってエルザは懐から何か木の根の様なものを取り出した。
「屍人鬼を作るために、これが必要だと言う事をここ最近になって知ったの。パパが持っていたものは、さっきあの大きな人と一緒に焼かれちゃったけど、ママが持っていたこの反魂樹の根を、血を吸っているときにおねえちゃんに埋め込めば、おねえちゃんは死なずに、素敵な屍人鬼になれるんだよ」
エルザの手の中の木の根が月光りに反応して淡く光る。
「ねえ、おねえちゃん、もう一度質問するわ。おねえちゃんがムラサキヨモギを摘むのと、わたしが人の血をすうのと、どう違うの」
タバサは無言でエルザを睨み付けた。
「そんな目で見ないで。お友達になる前に、最後に教えて？」
「どこも違わない」
エルザの顔が輝いた。
「そうだよね！本当の事言ってくれるから、わたしおねえちゃんがすき。だから血を吸ってあげる。これからずっと一緒にお友達だよ・・・」
少女は牙をタバサの首筋へと運んだ。その瞬間――――
「だけどこのムラサキヨモんギをなめると痛い目に会う事になるから注意すべき。このまま血を吸っても手遅れになるのではままるな」
背後からくぐもった男の声がした。
「だ、誰！？」

エルザが思わず振り返ると、緑色の野外作業服を身に纏い、右手に草刈鎌を携え、白い鉄仮面を被った男が月光りを背にして立っていた。腰には大剣がぶら下げられていた。

仮面の男はぐっと、草刈鎌をエルザに突き出すと、名乗り上げた。

「ブ、・・・仮面ヴぁーん！」

「そう、おにいちゃんだったんだね、一週間ぐらい前に来てわたしの邪魔していたのは。わたしの屍人鬼を焼いたのも、おにいちゃんだったんだ」

仮面の男は枝につかまれ動けないタバサをじっと見つめて、頷いた。

「今回たまたま薬草を刈りにきただけなんだが。俺はああヒーローは本当に偶然常に近くを通りかかるもんだなと納得した」

エルザはすかさず呪文を口にした。

「枝よ！」

森の枝が地を走り、仮面の男へと伸びる、が仮面の男は手に持った鎌を左手に持ち替えると、その左手が眩く光り輝いた。

男は舞うように身を翻して、飛び掛る枝を避けた。

そして華麗なステップで立ち回り、枝を一本一本ただの草刈鎌で刈り取ってゆく。

――こいよ、何処までもクレバーに引き裂いてやる

男の一足一手が、そう語りかけてくるようだった。

思わずエルザとタバサはその舞に見とれていた。

はっと我に返ったエルザがつぶやいた。

「う、嘘・・・先住の魔法が斬られるなんて・・・」

――現実と書いてノンフィクションと読むのがスタンダード

「おい！相棒！そんなんじゃなく俺を使ってくれよ！」

どこからとも無く、悲痛な声がした。
仮面の男は鎌を投げ捨てると、腰の大剣を引き抜いた。
月の光りにあたって、刀身が美しく輝く。
みりっ、と音を立ててその剣をエルザの方へと構える。
「デルフんスウィフトでバラバラに引き裂いてやろうか?」
一足飛びに仮面の男が迫り来て、エルザは対応できず、目を瞑ってしまった。
「きゃっ!」
ざぐっ!ざしゅ!千切れ飛ぶような音が、ムラサキヨモギが生い茂る森の中で響いた。
「あ、あれ?」
エルザは目を開けると、どこも斬られてはいなかった。
男はタバサを掴んでいた枝を、一呼吸でバラバラに引き裂いていた。
エルザはたじろいだ、束縛していたタバサも自由を取り戻し、屍人鬼さえも焼き尽くす術を持っている得体の知れないこの男には敵うわけが無いと心で感じ取った。
「お願い、殺さないで。わたしは悪くない。血を吸わなきゃ、生きていけないだけ。人間だって獣や家畜を殺して肉を食べる。どこも違わないんでしょ?おねえちゃんもそう言ったよね?」
エルザは懇願した。
仮面の男は返事として、剣をそのまま振り上げた。
ざんっ!
地面に剣を突き立てると、片手でエルザの小さい体を持ち上げて、空いてるもう片方の手を振り上げた。
ばしーん!ばしーん!
「痛い!痛い!」
仮面の男は何とエルザの尻をたたき始めた。タバサはそれを唖然と見つめている。
ばしーん!ばしーん!

乾いた音が鳴り響く。
「ごめんなさい！ごべんなざい！わるがっだ！わだじがわるがった！」
エルザは大粒の涙をぽろぽろ流して、誰に向けたものかもわからず、ひたすらに謝った。
仮面の男はエルザを降ろしてやると、叱咤した。
「言葉よりも暴力が先に出る事もたまにある、俺が冷静なうちにいい加減お前のバカみたいにヒットした頭を冷やせ！」
「ごめんなざい”！ごめんなさい！」
エルザは齢三十年以上生きた吸血鬼とは思えぬような、本当に子供の様にひっくひっくと泣いて謝った。
それを見つめていたタバサが口を開いた。
「なぜ、倒さないの？吸血鬼は人間の敵」
仮面の男は剣を地面から引き抜いて、鞘を収めると、タバサに向いてつぶやいた。
「何か吸血鬼が悪とか言ってる奴はバカとしか思えないであわれになる。ちょっとわずかに生き方が誤用だっただけで揚げ足取りかよ・・・お前には心を広くすることが必要不可欠」
泣きじゃくるエルザに仮面の男は歩み寄ると、その頭を優しく撫でた。
「命は助けてやる俺は優しいからな。だからお前はちゃんとお手本を見つけて正しい生き方を学ぶべき」
予想外の事を言われて、エルザは仮面の男を見上げる。
「ひぐっ・・・学ぶ？」
「お前学校にいってべんきょうすろ」
「でも、にんげんの血を吸うんだよ？そんなわたしがどうやって？」
「人間の血しか飲めないとそれだけで満足してると思うとアワレで仕方が無い。俺なら本当の血を見せてやれるのは確定的に明らか」
そう仮面の男は言ってエルザの手を握ってどこかへ連れて行こうとするのを、タバサは呼び止める。

「どうしてそこまでする？」
仮面の男は立ち止まり、答える。
「普通に血の通った人間なら、親を早くに亡くす絶望がどれほどのものかわかると思うんだが。特にこいつの場合は、そこらの一般にいる人間じゃない誰にも理解されない自分だけ特別な種族。想像を絶する悲しみが俺を襲った」
その言葉を聞いて、タバサは黙って立ち尽くす。森の奥へと消えていく長身の男と、その男に手を預け連れ立っていく見た目五歳ほどの吸血鬼の背を見つめながら。
程なくして、帰ってこない主人危険を察知したのか、シルフィードが竜の姿で上空をタバサを探し回るように飛び交った。

朝日から逃げるように、西へと飛ぶ帰り道・・・。
「お姉さま！ダメじゃないの！」
タバサはシルフィードが着ていた大人の女性の服を破けた自分の服の代わりに着ていた。
自分よりも二周り以上も大きいその服はぶかぶかとしていたが、それも気にしない様子で、シルフィードの声を無視して本を読みふけっていた。
背に主人を乗せたシルフィードがぷりぷりと怒った。
「もう！お肉の人が助けてくれたからよかったようなものの。もし、偶然そこにいなかったらどうなってたの？わたし、ひからびたお姉さま、ましてや屍人鬼になった姿なんて見るのまっぴらだからね！」
そんな風にシルフィードが怒っても、タバサはどこ吹く風、ただゆっくりと本のページをめくる。
「でも、とにかくお姉さまが無事でよかったのね！もう心配でシルフィ寿命がびゅんびゅんいったのね！とにかくお城ついたら、いっぱい食べる！お肉いっぱい食べる！るる！るーるる♪」
半ばヤケクソのような調子で歌いながら、シルフィードは飛んだ。
歌い始めた風韻竜の背の上、タバサはポケットをまさぐると、ム

ラサキヨモギの葉が何枚か残っていた。
しばらくそれを見つめた後、タバサはその一枚を口にした。
ほんの一枚だけど、それはいままでタバサが口にしたもの中で特別に苦い味に感じられた。
タバサは顔色を変えずに、そのムラサキヨモギを噛み続けた。

第１９話　「なにゆえにその子は」

オスマン氏は王宮から届けられた一冊の本を見つめながら、髭をひねった。

触っただけで破れてしまいそうな古びた革の装丁がなされた表紙を慎重にめくると、色あせた羊皮紙のページが茶色くくすんでいる。

「これがトリステイン王家に伝わる、『始祖の祈祷書』か…」

六千年前、始祖ブリミルが神に祈りを捧げた際に読み上げた呪文が記されていると、伝承には残っているが、オスマン氏が三百ページぐらいのその本のどこをめくっても、何も書かれていない真っ白なページばかりだった。

「まがい物にしても、文字の一つも書かれていないとは奇妙なことじゃの」

ハルケギニア各地に一冊しかないはずの『始祖の祈祷書』が多数存在する。

金持ちの貴族、寺院の司祭、各国の王室、いずれもが自分の『始祖の祈祷書』こそが本物だと主張している。

オスマン氏も各地で偽物の『始祖の祈祷書』幾つかを見たことがあった。

どれもがルーン文字をびっしりと書き記されて、祈祷書の体裁を整えていたが、トリステイン王室から送られたものは真贋の主張を放棄したかの如く、文字の一つも書き記されていないものであった。

オスマン氏は胡散臭げに本をじっと見つめていると、ノックの音がした。

空白なページが続く祈祷書をぱたんと閉じると、オスマン氏は来室を促した。

「鍵はかかっておらぬ。入ってきなさい」

扉が開くと、桃色がかった髪に、大粒の鳶色の瞳の少女が入ってきた。

ルイズであった。
「わたくしをお呼びと聞いたものですから…」
ルイズは言った。
オスマン氏は両手を大きく広げて立ち上がり、この小さな来訪者を歓迎した。
そして改めてアンリエッタから承った任務を終えたルイズの労を労った。
「おお、ミス・ヴァリエール。もうあれから数週間は経つが、いつも通りの学院生活のリズムは取り戻せたかの？何があったかアンリエッタ王女から報告は受けておるよ。思い返すだけで、つらい事も沢山あったようじゃの。だがしかし、おぬし達の活躍で同盟が無事締結され、トリステインの危機はさったのじゃ」
優しい声でオスマン氏は言った。
「そして、来月にはゲルマニアで、無事王女と、ゲルマニア皇帝との結婚式が執り行われることが決定した、おぬし達のおかげじゃ。胸を張りなさい」
それを聞いて、ルイズは少し悲しくなった。親友のアンリエッタは、政治上の理由で好きでもない皇帝と結婚するのだ。
しかもアンリエッタが愛を誓った相手が本当は生きている事を知っているのに、ルイズはその事を黙っていなければならないと思いだすと、胸が締め付けられるような気がした。
オスマン氏は、しばらくじっと黙ってルイズを見つめていたが、思い出したように手に持った『始祖の祈祷書』をルイズに差し出した。
「これは？」
「始祖の祈祷書じゃ。トリステイン王室の伝統で、王族の結婚式の際には貴族より選ばれし巫女を用意せねばならんのじゃ。選ばれた巫女は、この始祖の祈祷書を手に、式の詔を詠みあげる習わしになっておる。そして姫は、その巫女に、ミス・ヴァリエール、そなたを指名したのじゃ」
「姫さまが？」

「その通りじゃ。そして巫女は式の前より、この祈祷書を肌身離さず持ち歩き、詠み上げる詔を考えねばならぬ」
「えええ！？わたしが考えるんですか！」
「そうじゃ。残念ながらその祈祷書自体は参考になる部分がまったく無いがの」
そう言われてルイズは始祖の祈祷書のページを何枚かめくってみると、一字も書かれていない事に気がついた。
「これでどうやって詔を考えればいいのです？」
「ふむ、過去に詠みあげられた詔をまとめ上げたものを後ほど用意するのでの、それを参考にするといいじゃろう。草案が完成すれば、宮廷の連中が推敲するじゃろうが……色々面倒だろうが、伝統とはそういうものじゃ。だがな、姫はミス・ヴァリエール、そなたを式の巫女にと指名したのじゃ。これは大変に名誉なことじゃぞ」
アンリエッタはルイズを信頼して、自分を式の巫女役に選んでくれたのだ。
でも自分はアンリエッタの事を騙している。
そんな自分にアンリエッタの信頼を受ける資格があるのだろうか？
ルイズは静かに思い悩んだ。
この式、そして同盟の締結を守るためにルイズは自分の親友を騙したのだ。
今更自分だけ関与しない、と言って逃げるのはそれこそ卑怯者の何者でもない。
自分には最後まで見届ける義務がある、そう決心したルイズはきっと顔をあげた。
「わかりました。謹んで拝命いたします」
オスマン氏は目を細めて、ルイズを見つめた。
「快く引き受けてくれるか。よかったよかった。姫も喜ぶじゃろうて」
そのとき、またノックの音がした。
ルイズの他に来客を期待していなかったオスマン氏は首を傾げた。

以前は秘書がこのような来客の管理をしていたが、ミス・ロングビルがいなくなってから何かと不便で、早く新しい秘書を雇わなければ、とオスマン氏は思いながらドアの向こうの客人に来室を促した。

「用事は済んだのでの、入ってよいぞ」

ドアが開くと、白い甲冑を着た銀髪の長身の男が入ってきた。

ブロントであった。

「ブロント！あんた、今回はマジックアイテムを使わないで歩いて帰るとか……」

ルイズは数週間ぶりにふらっと帰ってきた自分の使い魔に軽い小言でも言おうかと思った時に、ふとブロントの陰にローブを被った子供がいる事に気がついた。

ローブに隠れていて、良く顔は見えなかったが、歳は五、六ぐらいに見えた。

周りに怯えているのか、それともブロントに懐いているのか、そのローブの子はべったりとブロントにくっついて、ブロントの後ろから部屋のルイズとオスマン氏をちらちらと覗いている。

「何よその子は」

ルイズの問いに対して、ブロントは涼しげ顔をして答えた。

「拾っただけなんだが」

「何それ、まあいいわ。今回の依頼はどんなものだったかは後ほど部屋で聞かせて。わたしは先に戻ってちょっと調べ物しているわ」

ルイズが部屋でてドアを閉めるのを見届けると、ブロントはそのままオスマン氏のところへと向かった。

「主人を迎えに来た、というわけではなさそうじゃの。このわしに何か用かの？」

オスマン氏は髭をひねりながら、ブロントをじっと見つめた後、背後に隠れるローブの子に目をやった。

「はじめましてかの、ミスタ・ブロントのお知り合いかね？」

ローブの子はオスマン氏が持つ杖見つめると、ローブの子はすぐにブロントの後ろに隠れた。

「俺は前に何か困った事があったら頼って良いと聞いたんだが……」
「ふむ、確かにそう言ったの。察するに、その子の事に関する頼みごとかの？」
ブロントは後ろに隠れたローブの子の肩を掴んで、自分の前にぐいっと持ち上げて置いた。
「こいつはエルザって言うんだが俺をお手本にする事になったので学校に行く事となった」
オスマン氏は顔をしかめて髭をさすりながらローブの子を見つめた。
「ふーむ。ちと要領得ないが、つまりその子をこの学院に住まわして欲しいということかね？」
その時、エルザと紹介された子は被っていたフードをばっと外した。
金髪が映えるとても可愛らしい女の子であった。
エルザは目に涙浮かべながらブロントに向かって訴えた。
「ちょっと、おにいちゃん！ここはどこもかしこもメイジだらけじゃない。こんな所じゃ落ち着いて暮らせないよ！」
「何か、メイジを酷く嫌っているようじゃが、何かあったのかの？無理に学院に住まわせずとも、親御さんの元へ……」
ブロントはエルザの頭に手を置くと、オスマン氏に語った。
ブロントが引き取ったこの子は両親がメイジに殺されて、身寄りがなかった事。
ある村で暮らしていたが、物事を教えてもらう前に親を早くに亡くしたエルザは村にいられなくなる事をしてしまった事。
間違った道を辿りそうになっていたところ、ブロントと出会い、人と共に暮らすための正しい見本をナイトとして見せてあげるとエルザに約束した事。
オスマン氏は髭を摩りながら、始終真剣な目でブロントの言葉を聞いた。
「魔法が使えるからと言っても皆が皆、立派とは限らないのは耳が

痛い事じゃの……ふむ、恩人の頼みとあらば、その子の一人や二人、学院に住まわせる事には何も異存はないぞ。魔法学院故、メイジがたくさんいるのはその子にとってはつらいじゃろうが、メイジとは酷い輩ばかりでないと、いつか理解してもらえるようになるといいの」

エルザはブロントの手をぐいぐいと下に引っ張って、ブロントの頭を下げさせると、何かを耳打ちした。

ブロントは頷くと、オスマン氏に伝えた。

「こいつは食べられるものが限られているので別に用意して貰うのが必要不可欠」

「ほう、どんなものじゃ？」

「俺達が来る道中で試したもので獣の血はいける。鳥もいけなくもないが、やはり鳥の血よりもやはり獣人の血だな。人間の血じゃなくても食っていけると今回のでそれがよくわかったよ」

オスマン氏は髭を弄る手をぴたりと止めて。目を丸くした。

「……ちょっとまってくれんかの。その血をどうするんじゃ」

ブロントはさらに付け加えた。

「それと日が差さない部屋も用意して欲しいんだが……」

オスマン氏は時が止まったように固まった。

「ほら、やっぱりだめだよおにいちゃん。わたしは自分で何とかやっていくから。人の血を吸わないでも生きていけるとわかったし、別にここじゃなくても……」

エルザはローブを深く被ると、そのまま部屋をでようとした。

そこをオスマン氏は引き留めた。

「ああ、ちょっと待ちたまえ。なるほど、そういう事か、ミスタ・ブロントの困った頼み事とは。確かにその子はちょっとだけ特別みたいじゃの」

オスマン氏は杖を軽く振ると、窓のカーテンが閉まり、弱く差し込む夕日を遮った。

ブロントとエルザが見つめる中、オスマン氏は杖を置くと、机か

ら水タバコを取り出し、一服吸った。
「わしはどうやら、亜人と縁がある人生らしいのう」
オスマン氏は煙をほくほくと吐きながら真剣な面持ちで何か考え込むと、何か良い案が思いついたのか、ぽんと自分の手を叩いて言った。
「よし、血に関しては鳥獣のものでよければ、秘薬や魔法の触媒に使うと言えば簡単に用意できるじゃろ。そして部屋に関してこの学院に実はそれにぴったりの所があるんじゃが。そこは生徒にはもちろんの事、一般の教師達にも知られていない少し特別な場所での。そこで、ものは相談なんじゃが、エルザといったかな、本は読む方かね？」
エルザは突然振られた質問に戸惑いつつも、答えた。
「うん、わたしはあまり外に出る方じゃないし、一人でいる事が多かったから、一通りの本は読んでいるよ」
「そうかそうか。おぬしが人を傷つけないと誓えるのなら、この学院に住むと言うのは何も問題は無いんじゃが、何も目的も無く住むのもどうかと思ってな」
オスマン氏は声をひそめた。
「実はこの魔法学院の地下奥深くに書物庫があってな、トリスティン王国建国以来から全ての記録や書物が収められているカビ臭いところでの、今回はそこから過去の詔を書きまとめたものを探して来なければいけないところなのじゃが、何せ年を取ると長い階段を昇り降りて、薄暗い地下で書物を探すのは一苦労での。だれかそこを管理する者を一人置きたいと思っておったところなのじゃが、地下深くに一人寂しく居ても良いと言ってくれる殊勝な者はいなくての」
エルザはきょとんとした顔でオスマン氏を見つめる。
「……で、お前さんはそこの司書になる気はあるのかの？いやならやめてもいいんじゃぞ。別に他の仕事がないわけじゃなかろうて」
「そんな大事な書物を、わたしなんかにまかせちゃっていいの？」
「確かに地下書物庫には王国にとって都合の悪い記録とかもあるの。

だがおぬしならそれらを漏らしては困る勢力とは何も関係が無いから、下手な貴族に頼むよりよっぽど信頼がおけるわい。ずっとそこに籠ってろとは言わん、たまに上に来て皆に顔だしたりするといい」

エルザはまだ少し疑り深く、オスマン氏に聞く。

「わたしが吸血鬼だというのはもうわかっているよね？それをおにいちゃんが頼んだからってだけで信用しちゃっていいの？怖くないの？」

オスマン氏は水タバコをふかしながら言った。

「その実態があまり知られてない吸血鬼が怖くない、と言ったら嘘になるが、このままここを去られてもおぬしと言う存在が消えてしまうわけじゃないのでの。わしの目が届かぬ所で問題になってしまうよりも、御し易いこの学院内に留まって貰った方が、問題が起きても対処しやすいと判断したまでじゃ。なに、似たような者がすでにこの学院におるし、そやつはうまくやっておる。貴族の馬鹿息子をブン殴ったりした程度の問題しか起こしとらん」

オスマン氏は何か含めたような顔をしてブロントの事を見つめた。

ブロントはわざとらしく顔をそむけ、エルザに聞いた。

「……という事らしいのだが引き受ける事になったのか？」

「メイジだらけと言うのはちょっと気になるけど、本読むのも嫌いじゃないし、怪しまれず血が手に入ると言うのなら、結構住みやすいかも。それに何かあったらおにいちゃんもいるでしょ？うん、地下書物庫の司書になってもいいかも」

オスマン氏は目を細めて、優しく微笑んだ。

「決まりじゃな。ミスタ・ブロント、主人に報告を済ませた後、ミス・エルザを学院内を案内してまわると良いじゃろう、生徒達の目が少なくなる夜になったらまたここに連れてきなさい、その時に書物庫に案内してあげよう」

その日の夜、エルザの案内を終えたブロントはヴェストリ広場のはしっこに大鍋を置いて、何か用意していた。

学院に戻る途中、襲ってきた魔物やらトカゲや獣から採取した様々な血を、マルトー親父から貰ってきた鍋に入れてかき混ぜていた。山蛭をつぶして集めた唾液が入っているため、異なる血を混ぜ合わせても凝固せず、滑らかな深紅の血汁が鼻歌を歌うブロントの手によって大鍋でくるくると渦を巻いていた。

水のクリスタルの力で合成すれば簡単に済む話なのだが、あまり多く持ち合わせていないブロントはクリスタルの使用を控えて従来の方法を試していた。なんとなくかき混ぜてはいるけど、人が飲むものではないので、味の見ようもなく半分ぐらいは適当にやっていた。鍋の近くの壁に立てかけたデルフリンガーがブロントに話かける。

「なあ相棒。なんでそこまでしてあの吸血っ子に肩入れしてんだ？人と亜人が相成れようなんて無理な話だぜ」

ブロントはデルフリンガーをじっと見つめた。

「相棒、その冷たい視線はやめてくれ、昔あった嫌な事思いだしそうだ」

「お前幼い時には親がいない奴の気持ち考えたことありますか？」

デルフリンガーはカチカチと鍔を鳴らした。

「親言われても、俺は剣だし。俺を作った奴なんか良く覚えてねえよ。てか相棒は親を早く亡くしたのか？」

ブロントは黙って鍋をかき回した。

「そこの所は覚えていない。昔の記憶を忘れてしまうのは稀に良くあるらしい」

「そういや相棒は、昔の記憶すっ飛んでるんだっけな。そこんとこは俺と似ているのかもな」

デルフリンガーは笑うようにカタカタと鳴る。

「それほどでもない」

「それほどもあるって、何せ俺の相棒だからな。それより、誰か来たみてえだぜ」

「おいィ？誰だ？」

月明かりに照らされて人影は突然声をかけられてびくっとした。

「わたしです、シエスタです」
食堂で働くメイドのシエスタだった。
「ブロントさん、旅から戻ってここにいると聞いたものですから」
「何か用かな？」
「あの、その！とても珍しい食材が手に入ったので、長旅でお疲れかもしれないブロントさんに御馳走しようと思って作ってきた飲み物をもってきました。二人分あるのでご一緒にいかがですか？」
シエスタは二つある液体がはいった革の水筒の一つをブロントに手渡した。
「バンパイアジュースと言ってわたしの故郷の村に伝わるちょっと変わった元気がでる飲み物なんです。トマトとリンゴを絞った汁にクックベリー潰したものいれて、そこにある秘密の材料を入れた……」
「カメの血か？」
驚かそうと思っていたシエスタが逆に驚かされた。
「あれ？知っていたんですか？あー、もしかしてブロントさんが今作っているのって……」
「吸血鬼の飲み物」
シエスタは少しつまらなそうな顔をした。
「いつも何か新しいレシピを厨房に持ち込んで皆を驚かせてくれるから、わたしもブロントさんも知らないような物、と思ってもってきたけど。やっぱり料理のレシピに関してはブロントさんにかなわないなあ」
「それほどでもない」
「いえ、ブロントさんはやっぱり凄いですよ。魔法なんて無くても強いし、マルトーさんも感心するような料理を沢山知っているし。皆に好かれる人気者だし。ブロントさんを見ているとなんかこう憧れちゃいます！貴族じゃなくても貴族よりもすごい事をこなせてしまうなんて、人は見た目や生まれだけで判断できないんだな、って感心しました」

ブロントが困った顔をして、頭をかいてると、背後から子供の声がした。
「あー！おにいちゃんここにいた！わたしの方は用事終わったよ」
学院に隠された書物庫の場所をオスマン氏に教えてもらったエルザは暇になったのでブロントを探しにここまでやってきたのだ。
「わあ！いい匂い！これおにいちゃんが作ったの？」
夜なのでフードを外して、月明かりの中その綺麗な金髪をキラキラと光らせている。
エルザはブロントがかき混ぜる鍋の中を覗いて、人指し指を中に漬けるとそれをペロッと舐めて見せた。
シエスタはブロントとエルザの顔を見比べて聞いた。
「おにいちゃん、ってもしかしてブロントさんの妹さん？」
「ああ、違う違う。わたしが勝手にそう呼んでいるだけ」
「そうなんだ、わたしこの学院で働かせてもらっているシエスタ、よろしくね」
「うん、よろしく。わたしエルザ。やっとメイジじゃない人に会えて良かった」
ブロントはカバンから空の小瓶を取り出すとそこに鍋から血汁を掬って入れて、エルザに渡した。
「あっ、ありがと、おにいちゃん」
エルザは受け取った血汁をこくこくと飲むと、口に紅を付けたように濡らした。
「ちょっとダマができてるけど、喉越しさわやかで香りがとってもいいね！ところでおにいちゃん達は何を飲んでいるの？」
シエスタはにこっと笑った。
「わたしが作った、ブロントさんと同じバンパイアジュースよ」
まさか純粋に血を混ぜ合わせただけのものを、ブロントが作っていると思ってもいないシエスタは勘違いしたままだった。
「そう？シーちゃんが作ったそれもちょっと飲んでみてもいい？」
「シーちゃん？」

「うん、ここの学院はおねえちゃんやおにいちゃんがいっぱいいるから皆それで呼んでいるとわけわからなくなるかな、と思って。シエスタだからシーちゃん」

「うふふ、そういう風に呼ばれたのは初めてかな。でも嫌いじゃないかな。わたしが口を付けたので良ければエルザちゃんどうぞ」

シエスタは自分が持っていた水筒をエルザに手渡した。

エルザは一口シエスタが作ったバンパイアジュースを飲んでみた。

「ふーん、これが人も吸血鬼も飲めるバンパイアジュースか。ちょっと酸っぱくて、血の味が薄く感じる。でも、嫌いな味じゃないかも。これなら吸血鬼でもなんとか飲めるかも」

「まるでエルザちゃんは吸血鬼みたいだね」

エルザははっとした顔になって水筒をシエスタに返した。

ブロントは何も言わず、黙々と用意した空の入れ物に次々と血汁を詰めていた。

「ねえ、シーちゃん。もしわたしが本当に吸血鬼だったらどうする？」

シエスタは不思議そうな顔をしてエルザを見つめた。

「うーん。昔のわたしだったら怖がって逃げているかなあ？でもブロントさんに会ってからはそこの所の考えが変わってきたかも。貴族や平民とだけでは人はくくれないわ。平民でも貴族でも良い人と悪い人いるし。だから吸血鬼ってだけでは何とも言えないかも。わたしはエルザちゃんの事は何も知らないから、エルザちゃんの人となりが分からないと悪い吸血鬼なのか、それともブロントさんみたいに凄い事を見せてくれる素敵な吸血鬼なのかはわからないわ。でも今話してみたところ、エルザちゃんは良い子だと思ってるよ」

エルザは一瞬思慮深げな面持ちをした後、すぐに明るさを顔に取り戻した。

「わたしはそんなに良い子じゃないよ。でも、なんかシーちゃんとだったら仲良くなれる気がするな、わたし」

シエスタは嬉しそうに笑顔になる。

「そうだ！」
シエスタは胸の前で、手を合わせて叫んだ。
「じゃあ、エルザちゃんが良い子かどうか判断するためにも、わたし達お友達になりましょう！」
シエスタがエルザの小さい手を両手で取ると、握りしめた。
エルザは突然、そして初めての事に戸惑いを隠せなかった。
「改めてよろしくね！エッちゃん！」
自分からは周りの人間にあだ名をつける事は昔からあったが、自分自身あだ名をつけて貰ったエルザはなんか照れくさかった。
だけど心のどこかにジワジワと心地良い気持ちが顔をだした。

その様子を微笑ましく眺めながら、ブロントが黙々と二ダース目の血汁を空瓶に詰めた夜だった。

第２０話　「夢追い旅」

休日の虚無の曜日、
ルイズは自室で一生懸命に『始祖の祈祷書』の白紙のページとにらめっこをして、姫の式に相応しい詔を考えていた。
しかし、何も書かれていない本を読んでもまったく参考にならず、一文も思いつかないでいた。
「こんなもので、一体皆どうやって詔なんて思いつくのかしら」
過去何百年と続いたこの伝統ならばこそ、この祈祷書のどこかに書き記した者がいたかもしれない、と思いルイズは全ページをくまなく探してみた事もあったが、印どころか染みすらもなかった。
うー、と小さく唸りながらルイズが悩んでいると、ドアのノックの音がした。
「開いているわ」
ドアがガチャリと音を立てて開くと、気障ったらしい格好をしたギーシュがいた。
「やあ、ルイズ。ブロントさんがどこか知らないかね？新しく作ったゴーレムの＜レンジャー＞型を彼に見てもらいたくてね……」
ルイズは一つ溜息を吐くと、白紙の祈祷書を閉じ、胸に下げたパールを通じてブロントと何かを会話した。
「アウストリの広場で待っている、ってよ」
「そうか！アウストリか。分かった、助かったよ」
ギーシュはブロントの居場所を聞き出すと、そのままそそくさと広場へと向かって行った。
「もう、ドアぐらい閉めて行きなさいよ……」
ルイズは椅子から立ち上がり、ギーシュが開けっ放しにしたドアを閉めた。
また落ち着いて始祖の祈祷書を眺めようと椅子に座った時、またノックの音がした。

「もう、今度は誰？開いてるわよ」
扉が開くと、今度はメイドのシエスタが訪ねてきた。
ブロントが連れてきたエルザと言う子と最近仲良くしている子らしいとルイズはブロントから聞いていた。
「あ、ミス・ヴァリエール。突然お邪魔してすみません。ブロントさんを探しているのですが、どこにいらっしゃるのかわからないでしょうか？ちょっと料理のレシピの事について意見を頂きたくて……」
ルイズはやれやれ、と首を振ると素っ気なく答えた。
「今ならアウストリ広場にいるわ」
「広場の方ですね！ありがとうございます。読書中の所、失礼いたしました！」
シエスタはぺこりとルイズに頭を下げて、去って行った。
「まったく、どいつもこいつも……開けたら閉めて行きなさいよ」
ルイズはめんどくさげにまた立ち上がり、部屋のドアを閉めると、今度こそ邪魔されまい、とドアの鍵をかけた。
再び椅子に座り、ルイズが祈祷書を開くと、またまたノックの音がした。
（今度は誰よ！もう！虚無の曜日だと言うのに忙しいわね）
ルイズは居留守を決め込み、ノックの音を無視して本を見つめ続けて考え込んだ。
ノックがやむと、今度はドアノブがガチャガチャと回され、鍵がかけられたドアがガクガクと乱暴に震える。
（ノックして返事が無いのなら、勝手に入ろうとするな！鍵がかかっているんだから諦めなさいよ！）
ルイズが心の中でそう叫んだとき、扉の鍵がカチリ、と音を立てて外れた。
バーンとドアを開け広げた先にはキュルケが立っていた。
「やっほー！ブロントさんいる？って、なんだヴァリエール、やっぱりあんたいたんじゃない。ノックが聞こえたのなら返事ぐらいし

なさいよ。このあたしに居留守使うなんて、良い根性しているわ」
キュルケは飄々とした態度で、部屋を見渡してブロントの姿を探している。
一方ルイズはわなわなと震えていた。
「ちょっと！ツェルプスト―！何勝手に＜アンロック＞の魔法を使っているのよ！学院内で＜アンロック＞を使うのは禁止されているはずでしょ！あんたまさかわたしが居ない時もこうして勝手にはいってきているわけ？」
「やあね、ブロントさんに会うためか、あんたをからかうためじゃなかったら、こんな飾りっけの無い部屋にあたしがやってくるわけないでしょ。ドアの鍵も何かのはずみで外れたんじゃなくて？おほほほほ」
キュルケは笑って誤魔化した。
ルイズは祈祷書を閉じると、不機嫌そうに声を荒げた。
「それで、今回は一体どっちの用事よ」
「残念ながらあんたをからかいに来たんじゃないわ。ブロントさんに少し頼みたい用事があるのだけど、彼は今どこにいるのかしら？」
「ブロントなら今アウストリ……ってツェルプスト―、あんたが一体ブロントに何の用事があるっていうのよ」
「アウストリ広場ね？そう、ありがと。じゃあまたね！ヴァリエール」
聞きたい事を聞き出せたキュルケは、満足気な顔で手をひらひらと振ると、＜フライ＞の魔法を使って部屋の窓から飛び降りた。
「ちょっと！ツェルプスト―！待ちなさいよ！あんたがブロントに用事なんてろくな事じゃないでしょ！」
ルイズはキュルケを追いかけよう窓に乗り出したが、＜フライ＞の魔法も使えないルイズが窓から飛び降りるには少し高すぎた。
肌身離さず持ち歩かなければいけない始祖の祈祷書を手に取ると、ルイズは部屋を飛び出してアウストリ広場へ向かって駆け出した。

一方そのころアウストリ広場、
平日の昼休み時なら生徒達などで賑わうのだが、休日になると広場も人気も寂しい場所となる。
広場にはブロント、ギーシュと数体の弓を携えたゴーレムの姿があった。
広場の一角にある木の枝から、板で作った的がぶら下がっており、矢が数本ほど的に刺さっていた。
「そいつが弓矢の適正距離って奴だ！近すぎず、離れすぎず。よく覚えておけよ！」
壁に立てかけられたデルフリンガーが、生き生きとギーシュに武器の扱いに関する意見をだしていた。
「でも、実際の戦闘でこの距離を維持するのは難しい問題だね」
ギーシュはうーんと考え込んだ。
そこに一部始終を見ていたブロントがやってきた。
「そこで敵をひきつけ抑え込む盾役の存在が必要不可欠」
「それだと仲間に矢を当ててしまう危険性があるじゃないか」
「それほどでもない」
「いや、そう簡単に言ってもだね……」
「相棒、ちょっとやってみせてやんな。にいちゃん、相棒の弓に軽くでいいから＜固定化＞をかけてやってくれ」
ブロントがどこからともなく自分の弓のローゼンボーゲンを取り出すとそれをギーシュに手渡した。
「僕はドットクラスだから、あまり長くは持つ＜固定化＞はできないよ」
ギーシュは造花の杖を振って、ブロントの弓に＜固定化＞の魔法をかけた。
弓は淡く光ったと思うと、次第に光が消え去り、また何ともないただの弓の姿に戻った。
「これで少しぐらい電撃にも耐えられるはずだよ。それにしても、その左手で武器を持つと、魔法がかかっていない武器を持つと壊れ

るだなんて。不便というか、何かこう冷たい感じがするというか」
ギーシュは弓をブロントに返し、数本の矢を渡した。
「よし、じゃあ、にいちゃん！的の前に敵をひきつける盾役だと思って一体ゴーレムを立たせな！」
ギーシュはデルフリンガーに言われたように、＜パラディン＞のゴーレムを生成すると、それを的の前に立ちはだかるように立たせた。
「こんな感じでいいのかい？的がまったく見えなくなってしまうが」
疑問に思うギーシュをよそに、ブロントは弓を横に倒した独特の構えで矢をゴーレムと的に向けた。
そこにデルフリンガーがギーシュに向けて解説をし始める。
「別に相棒の構えなんてしなくてもいいけどよ、あんな感じに的を狙ってだな……」
「的が見えないんじゃ、当たる訳ないじゃないか」
ブロントはさほど狙いを済ませた感じも見せず矢を射ると、いとも簡単に、立たせたゴーレムの向こうにある的にスコーンと矢を当てた。
「な？簡単だろ？」
さも当たり前な風に語るデルフリンガーにギーシュはつっこむ。
「できるか！」
「そうか？相棒は特に弓がうまいってわけじゃねえし、あいつのいた所じゃ仲間に当てないで矢を射るなんて初心者でもできるって言っていたぜ」
「いや普通できないから、そんな事」
「にいちゃんも修業が足りねえなあ」
デルフリンガーがカタカタと鍔をならして笑う。
「なんだと、剣のきみに何がわかる！」
「剣だからこそわかるんだよ。にいちゃんも外見ばっかり気にしてないで、中身もちったあ鍛えな」
「剣のくせに減らぬ口だな！」

ギーシュはデルフリンガーと口論し始めた。

その時、ブロントを探していたシエスタが広場にやってきた。

「あ！ブロントさん！探しましたよ」

ブロントは弓を下げて、どこかにしまい込んだ。

「何か用かな？」

「ええ！実はですね、エッちゃんになにかおいしい物を作ろうと思いまして、この前エッちゃんに何が好きか聞いたらなんか『真っ赤な物』が好きだと言っていたんですよ」

「ほう」

「それで私の村に伝わる名物料理の一つで、真っ赤なマリナーラソースを使う船乗り風ピザでも作ろうかと思いまして。それでそのソースを作ってエッちゃんに見せたのですけど……うまく作れなかったのか、エッちゃんがちょっと嫌そうな顔をしていたので……」

シエスタは自分で作った真っ赤なソースが入った瓶をブロントに見せてみた。

ブロントは少し考えて、なぜエルザが嫌がったかの理由すぐに思い浮かんだ。

「にんにくがいけないのが確定的に明らか」

「ええ！？エッちゃんってにんにくがダメなんですか？そうですか、そうなるとマリナーラは作れないなあ。あれはにんにくが決め手だから……」

シエスタはソースの瓶を手に持ったままがっくりとうなだれた。

ギーシュとデルフリンガーが何か言い争い、ブロントとシエスタが料理のレシピ談義をしていると、キュルケがタバサを連れて広場にやってきた。

「あらま、皆さんお揃いで。でも人手を集める手間が省けて丁度良かったわ」

キュルケは手に持った何枚もの羊皮紙のたばをブロントに手渡した。

「ほう地図か」
「聞いたわよ、ブロントさん。あなたって冒険者なんですってね。危険を承知で未開の地を冒険する男、ああ！あたしそういう困難に立ち向かっていく男の人に弱いの」
デルフリンガーを鞘に押し込めて、ようやく黙らせる事ができたギーシュがキュルケに問いかける。
「それとこの地図は何か関係あるのかね？」
「見ればわかると思うけど。それ全部、宝の地図よ。それで宝探しとかに詳しそうなブロントさんを誘いに来たわけ」
宝、と聞いてブロントの眉がぴくりと動く。
ギーシュは胡散臭げに地図を何枚か見比べる。
「なあキュルケ、言っては何だが。これらの地図、とても胡散臭いんだけど」
「そりゃ魔法屋、露天商、雑貨屋、情報屋……色々回ってかき集めたものですもの。ほとんどが外れかもしれないけど、中には本物が混じっているかもしれないじゃない」
うむむ、とギーシュは顎に手をやって唸る。
地図の何枚かは危険なモンスターや凶暴な亜人が生息する場所を示している。
「なんかとっても危険な場所の地図もあるみたいなんだけど」
「簡単に取れる場所に宝なんて残っているわけないでしょ。危険な場所だからこそ本物があるかもしれないじゃない。それに、あんたには丁度いいんじゃない？そのゴーレムを使って経験積みたいんじゃなくて？」
経験、と聞いてブロントの眉がぴくぴくと動いた。
そこに話を聞いていたシエスタが会話に入ってきた。
「その宝探しはどの辺を探すのでしょうか？」
「場所？そうね、ここにある地図はトリステイン西部のものが殆どかしら」
それを聞いてシエスタはぽんと手を叩いてある案を切り出した。

「ちょうどわたしの故郷の村が西の方にあるんですよ！もしよろしかったらわたしの村にも寄ってください！田舎の村ですけど、色々と名物料理がある事でちょっと知られているんですよ。わたしも一緒に連れて行ってくれるのであれば、色々御馳走もできると思います！」

料理、と聞いてブロントは眉をぴくぴくと動かした。

キュルケは溜め息を吐いた。

「ダメよ。あんた平民でしょ？平民なんか連れて行ったら足手まといになるわ」

「バカにしないでください！わ、わたしこう見えても……料理ができるんです！」

キュルケとギーシュがずっこけた。

「そりゃきみ……」

「料理ができてもねえ……」

キュルケとギーシュの反応を見てブロントが口を開いた。

「おいィ？お前らは馬鹿すぐる。良い食事が冒険者にとって重要なのは火を見るよりも明らかなのは確か。食事を馬鹿にする奴はそのまま骨になる」

ブロントの言葉にシエスタが続く。

「そ、そうですよ！食事は大事ですよ？宝探しって、野宿したりするんでしょう？保存食料だけじゃ、物足りないに決まってます。わたしがいれば、どこでもおいしいお料理が提供できますわ」

冒険のプロからそう言われたのであってはキュルケもぐぅの音もでなかった。

それに、キュルケもギーシュも貴族だったので、まずい食事には耐えられない。

「仕方ないわね。でもあなたお仕事あるんでしょう？勝手に休めるの？」

「コック長に『ブロントさんのお手伝いをする』って言えば、いつでもお暇はいただけますわ」

「わかったわ、勝手にしなさい。とにかくブロントさんが乗り気になってくれるのであれば誰がついてこようがいいわ」
キュルケは頷くと、一同を見まわした。
「さて、そうと決まったら早速出発よ！」
キュルケの言葉にタバサは頷くと、口笛を吹いてシルフィードを呼んだ。
しかし、空からシルフィードがやって来るより先に、広場の向こうからある人物が走ってきた。
「待ちなさあああい！」
ルイズが本を片手に物凄い速さで駆け寄って来る。
それを見てキュルケは自分の額を手でぴしゃりと叩く。
「あっちゃあ。ヴァリエールが来る前に出発したかったけど、無理みたいね」
「はあ、はあ、主人の……はあ、はあ、わたしを差し置いて、勝手に使い魔を、連れだそうと、はあ、はあ、してるんじゃないわよ、ツェルプスト―、はあ、はあ」
息を切らせたルイズは数回深呼吸をして息を落ち着かせてから続ける。
「わたしも、ついて行くわよその宝探しに。あの、その、自分の使い魔がどんな風に仕事をしているのか、ご主人様のわたしが知っておく義務があるから」
キュルケは鼻で笑った。
「ヴァリエールのものであるブロントさんを、ツェルプスト―であるあたしが奪い取ろうとしているんじゃないかって心配だからでしょ？」
「そんなんじゃないわ！使い魔の主人として……」
「まあ、いいわ。ヴァリエールの目の前から奪い取る、と言うのもあたしらツェルプスト―家のやり方らしくて一興だわ」
「やっぱり！そういう魂胆だったのね！」
そう言い争い続けながら、賑やかな一同はやってきたシルフィー

ドに乗ると、そのまま宝探しへの旅へと飛び立った。

一同は数々の胡散臭い地図を頼りに、トリステイン各地を回った。怪物が蔓延る洞穴の中、獰猛な獣がうろつく深き森、怪鳥が飛び交う岩場。

どこも宝が潜んでいそうな曰くつきの場所ではあったが、どこも必ず『危険』はあっても、肝心の宝はすでに取られた後であるか、精々銅貨数枚程度のものでしかなかった。

一同が最後に向かった地図の場所はその中でも特に危険とされた場所だった。

数十年前に打ち捨てられ、廃墟となったとある開拓村の寺院である。

ルイズ、キュルケ、ギーシュ、タバサの四人はその寺院から身を隠すように木の陰に隠れていた。

まもなく、ブロントがその寺院が打ち捨てられた理由を連れだしてくる手はずだった。

「――ここに十匹いるんだが――」

リンクパールを通じて、寺院の中に忍び込んだブロントが中の様子をルイズに伝える。

ルイズはそれを聞いて、静かに他の皆に指で合図して数を伝える。

皆が静かに頷くと、寺院の方から豚の鳴き声のような咆哮があがる。

廃墟の扉を蹴り破ってブロントが飛び出し、一同の横を走り抜ける。

その後には十匹ほどの、身の丈は二メイルもある、でっぷりと太り、醜い顔をした、二本足で歩く豚のようなオーク鬼がブロントを

追いかけていた。
オーク鬼一匹は人間の戦士五人に匹敵する力を持っていると言われている。
そして何よりも性質が悪いのは、このオーク鬼は人間の子供を好んで食べるため、こうして開拓村などの小さい村を襲って住み着くのだ。
ふごふごと鼻息荒くブロントを追いかけるオーク鬼達は横に通り過ぎたルイズ達に気づかず、そのまま森の中へとおびき寄せられる。
全てのオーク鬼が身を潜める四人の横を通り過ぎたあと、ギーシュが生成して木の上に潜めて置いた＜レンジャー＞のゴーレムで後列を走るオーク鬼に射かける。
オーク鬼の厚い皮と脂肪が鎧となって、ゴーレムの矢が刺さっても致命傷とはならなかった。
しかし、オーク鬼の注意を引くには十分で、ルイズ達が事前に打ち合わせ通りに四匹程のオーク鬼を引き抜く事に成功した。
「ぷぎぃいいい！」
オーク鬼の四人は怒りの咆哮をあげながら、ルイズ達に向かった。
まず先にタバサが二つの系統を絡み合わせた『水』、『風』、『風』のトライアングルスペル、＜ウィンディ・アイシクル＞を唱え、水を風で冷やし、作り上げた無数の氷柱の矢を迫りくるオーク鬼の二匹を串刺しにした。
ギーシュのゴーレムが放った矢と違い、その比でもない威力にて二匹のオーク鬼は一瞬にして絶命した。
四人がメイジだと言う事に気付いた残りの二匹は、鈍重そうな体に似合わず、敏捷な動きで木々の間を縫いながらルイズ達に迫った。
キュルケは慌てず騒がず、『炎』、『炎』、炎の二乗＜フレイムボール＞を放つ。
狙われたオークは木の幹を盾に炎の塊から身を隠す。
しかし炎の塊は意思を持ったかのように、木を避けて回り込むと、咆哮をあげる口の中に飛び込み、一瞬で頭を燃やし尽くした。

残る一匹は氷や炎を巧みに使うタバサとキュルケから遠のき、弱そうに見えるルイズとギーシュの方へと棍棒を振りながら襲いかかった。

そのとき、オーク鬼の前を阻むように、ふらりと陽炎が立ったかと思うと、青銅の巨漢なゴーレムが姿を現した。

オーク鬼と謙遜が無いほどに重量感があり、武器も持たず、まるで己が肉体こそ、最強の武器であり、盾である、と誇示するような姿をしたゴーレムであった。

ギーシュのゴーレムが体ごと、真正面からオーク鬼にぶつかると、物凄い衝撃音を響きわたらせ、オーク鬼の動きを抑え込むようにがっぷり四つを組んだ。

「あまり長くは持たない！ルイズ、やってくれたまえ！」

ギーシュがルイズにそう叫ぶと、ルイズは慎重に杖を引き抜き、ミリミリと音を立ててぶつかり合う金属と肉の塊に向けて狙い澄ましてルーンを唱える。

途端、ゴーレムごとオーク鬼は爆発し、金属片が辺りに舞い散らせながら、四匹目のオーク鬼も息絶える。

「使ってみるまではまさかと思ったけど意外といけたもんだね！ええと、なんて言ったけ＜リュキシ＞？いやそれは槍の方だな。＜リィキシ＞だったかな？ブロントさんも実際見た事は無いジョブだと言っていたから、うまく行くかは不安だったけど」

ギーシュは興奮して鼻息荒く語った。

「まだ気を抜く時じゃないわよギーシュ。ヴァリエール、ブロントさんに伝えて、引き抜いた分は終わったから残りを連れて来てって」

「あんたに言われなくてもわかっているわよ」

ルイズはリンクパールを通じてブロントに報告した。

「こっちの分は終わったから残り連れて来て」

「――一匹連れて行く――」

リンクパールから返ってきた言葉にルイズは耳を疑った。
一匹？確か十匹いて、今ここでわたし達が倒したのは四匹。
と言う事はブロントを追いかけているのは六匹。
それが一匹とはどういう事か？
ルイズが使い魔の言った言葉の意味を考えていると、森の奥からきぃきぃ、と弱弱しい豚の鳴き声が鳴った。
茂みの奥からはぼろぼろの姿になったオーク鬼が一匹だけ飛び出し、ルイズ達に一瞥もくれず逃げている様子だった。
その後を両手でデルフリンガーを構えるブロントが追いかけていた。
寺院を出る時とうってかわって、オーク鬼とブロントの立場が逆転していた。
オーク鬼が寺院の中へと逃げ込むと、ブロントも続いて寺院に突入した。
「ズタズタに引き裂いてやろうか！」
ドスの利いたブロントの声が寺院から響き渡ったかと思うと、ぎぃーー！と甲高いオーク鬼の断末魔がルイズ達の耳にもしっかり届いた。
しばらくの間辺り一面が静寂に包まれると、デルフリンガーを鞘に収めたブロントが涼しげな顔をして寺院から歩いてでてきた。
ルイズ達はお互いに顔を見合わせた。ブロントに聞きたい事もあったが、この雰囲気の中で切り出しにくかった事なので、誰か他にやって貰いたいと目で互いに懇願した。
タバサはもとより無関心だったので、本を取り出して読み始めている。
ギーシュはこういう役目は使い魔の主人だろう、とルイズに目を向けたが、ルイズはそのままギーシュににらみ返した。
ギーシュに一票、ルイズに一票。
どちらかを決める最後の一票のキュルケに目を向けると、キュルケはギーシュに目を向けていた。

仕方なく、ギーシュが渋々ブロントに皆の疑問を代表して聞いた。
「や、やあ……ブロントさん。他のオーク鬼はどうしたのかな？きみを追いかけていたのが六匹だと思ったんだけど」
ギーシュが強張った顔でブロントに尋ねる。
「練習相手にもならなかった」
「え？」
デルフリンガーが勝手に口をはさむ。
「全部俺様と相棒で倒しちまったってことさ」
「いやー……それは大変だったね。ところで、その、全ての災厄から守って来ると言う秘宝の＜ブリーシンガメル＞はあったのかね？」
ブロントはカバンから真鍮製の安物のネックレスを取り出すと、それをギーシュに投げ渡した。
「指にはめてぶん殴れば多分奥歯が揺れるくらいの威力はあるはず」
「幾ら安物でもそういう使い方するものじゃないと思うけど」
最後こそは、と思ったこの宝の地図も外れに終わったと知り、キュルケ達はつまらなそうな顔をした。

そのとき、物陰で震えていたシエスタが駆け寄ってきた。
「すごい！すごいです！あの凶暴のオーク鬼達が一瞬で！ブロントさんすごいですっ！」
「それほどでもない。俺が知っているオークと比べればここのは人工的に淘汰されるのが目に見えている」
「ブロントさんがいた所のオーク鬼は違うんですか？」
ルイズ達は全員この会話に耳を傾けた。
ブロントがいた国の話の方が、銅貨四枚が良い所の首飾りよりも何倍も興味をそそる話題だった。
ブロントは掻い摘んでヴァナ・ディールのオークの事を説明した。
ただ群れるオーク鬼と違って、帝国を築き、強大な軍まで持っている事。
そして数少ないがオークの中には魔法を使える者がいる事。これ

に関して皆がとても驚いた。
　更に意外な事に、魔法が使えるメイジはオーク社会の中では腕力の劣る恥ずべき存在として、とても地位が低いというハルケギニアで言う所の貴族と平民の立場が逆転している事。
　そんなオークがとある王国の城壁のすぐ傍に砦を築き上げて、城の外をねり歩き、虎視眈々と王国を攻め落とす機会を待っている事。
　そんな状況でも、昔の大戦の頃と比べれば、至って平和な時代であるという事。
　一通りブロントの話を聞いていた一同は、ルイズも含めて驚きを隠す事ができなかった。
「ブロントさんってどこか違う、と思っていたけれど。もうあたし達と住む世界が違うんじゃないかしら。修羅場をただの日常だと言える人なんてそうそういないわよ」
　何気ないキュルケの一言にルイズはぎくり、とした。
「メイジのオーク鬼だなんて、考えたくもないね。しかも魔法を補ってもあり余る腕力だなんて」
　そんな化け物を日々相手にしていたブロントに殴られても、まだこうして生きている事にギーシュは改めて始祖ブリミルに心の中で感謝した。
「結局宝探しはただの討伐の旅になったわね。こうして終わってみるとどっと疲れてきたわ」
　事の発端人のキュルケがぼやいた。
　シエスタが手を叩いて皆の注目を集めた。
「じゃ皆さん、この後はわたしの村に行きましょうよ！ラ・ロシェールの向こうにある広い海に面したタルブ村と言う小さな漁村ですけど、疲れを癒すのには良い場所ですよ！」
「そういう話だったけね。料理はいいけど他に何か見て回る名物とかは無いの？田舎の村で退屈するだけなんて嫌よ」
「ええと？そうです、美しい海があります！」
「海ね、そんな幾らでもあるものじゃなくて、こう村のありがたい

お宝！と言った感じな物とかないの？そのタルブとかいう村に」
　ルイズがキュルケにつっかかる。
「呆れた。ツェルプストー、あんたこの期に及んでまだ宝探しするつもり？」
「あら、見るだけいいじゃない。それでもし手に入るようであればもっといいじゃない。良い宝も良い男も自分から進んで行かないと手に入らないわよ、ねえ？ヴァリエール」
　シエスタは言いにくそうに言った。
「その、ある事には、あります……その村のお宝……」
　キュルケが生き生きと目を輝かせる。
「ホント？それってどんな代物？」
「何百年も前から村の寺院に飾ってあるモノなんですが。『誓いの口』と言って、そのレリーフの口に手を入れて誓いを立てると、偽りの心を持っていた場合、手が抜けなくなる。と、まあどこにでもあるような子供騙しのモノですよ。村の結婚式とかに良く使われますけどね」
「へぇ、面白そうじゃない」
「でもわたしはちょっとその寺院は苦手なんですよね……」
「何？本当に手が抜けなくなった事があったの？」
　キュルケが面白がってからかう。
「いえ、そうではないんですが……あの寺院、でるんです」
「でるって、何が？」
「その……笑わないでくださいよ？」
「いいから、いいから、言ってみなさい。ここまで言われたら気になってしょうがないじゃない」
　キュルケが興味津々になってシエスタに聞く。
「子供の頃見たんです。幽霊がでるのを。血の様に赤いローブを着た女性の幽霊を」。
　突然タバサが凍りつく。精巧に作られた石像の如く、微動だにしない。

「ちょっとちょっと、面白そうじゃない！幽霊だなんて、一度会ってみたいと思っていたのよ……あらタバサ、どうしたの？」
キュルケは固まったタバサを揺らす。
「行かない」
タバサが珍しく口を開いた。
「あら？あらあら？もしかしてタバサって……」
「行かない」
タバサは簡潔に、しかし強く否定の意思を表した。
「へぇ、オーク鬼も恐れないあのタバサにも、怖いものがあったんだ」
ちょっと悪戯心に芽生えたキュルケがタバサに抱きついてウリウリとなじる。
「大丈夫よ、ちょっと見るだけだから。それに田舎の幽霊なんて大した事ないわよ。それに、実際に会えばそれほど怖くないものだとわかるかもしれないわよ？」
タバサはひたすら首を横に振る。
「わかった、わかった。寺院にはタバサは着いてこなくてもいいから。でも村まではあなたのシルフィード使わせて頂戴。ここからタルブ村まで歩いて行くなんてまっぴらだからね」
タバサはしばらく考え込むと、キュルケの妥協案を呑んだのか、口笛を吹いてシルフィードを呼んだ。
そうして、一行は風竜に乗り、シエスタの案内のもとタルブ村へと羽ばたいた。

第２１話　「時の輪の交わる処」

シルフィードに乗った一行は、やがて西日がきらきらと美しく光り輝く海を目にした。

「あそこです！あの白く、開かれた砂浜がある所がわたしの故郷、タルブの村です！」

シエスタはそう言うと、草原の緑と海原の青に挟まれた、一粒の真珠の様に白い砂浜を指差した。

大空から眺めるその神秘的な風景に、みんな息を呑んだ。

海に興味はないと言っていたキュルケも、この自然が織りなす宝石の様な景観を前にして、その考えを改めざるを得なかった。

シエスタは自分の村の説明を続ける。

「村自体は小さな所ですけれど、旅人達の間では『トリステインの真珠』なんて呼ばれて親しまれているんですよ。新鮮な海の幸が獲れるので、料理人や食通の人達も良く訪れますね」

キュルケはふと疑問に思った事を口に出す。

「こんな貿易にも最適な良い場所があるのに、港町をつくらず、村のままだなんて。タルブって最近できた村なの？」

「いえ、確か五百年ぐらい前からある村のはずですよ」

「ごっ！？それってあたしの祖国のゲルマニアよりも長い歴史を持つじゃない！だと言うのにずっと小さな村っておかしくない？ここの領主って一体誰よ、まったくトリステインの貴族は目が節穴じゃない？大きな財産がここにあると言うのに五百年も気づいていないだなんて」

キュルケは目線をルイズに移してそれとなく話しを振る。

「トリステインはどこぞのお金にがめつい成り上がり国家とは違うのよ。人の手を余計にいれたら、この自然の美しさも台無しになるわ。ここの領主様もその事を承知よ、きっと」

「確かにここは綺麗な所だとはあたしも認めるわ。でも、そんな綺

麗事ばっかり言っているからトリステインはみるみると国力を減らして弱まっているじゃない。見た目を気にするのもいいけど、実益も兼ねそろえなければいけないのが領主の勤めよ。そういう意味ではここの領主の仕事ぶりは怠慢もいい所だわ」

「長い歴史と伝統を持たない野蛮な国出身のツェルプスト―にはわからないかもしれないわね。五百年間も代々領地を受け継いでいくってだけでも大変な事なのよ」

ルイズとキュルケがお互いの国の統治方針をぶつけ合い始めた時、何か言いたそうにしていたシエスタがついに割り入った。

「あ、あの！実はタルブの村に領主様はいないのです！」

「えっ？」「えっ？」

ルイズとキュルケは意図せず、ぴったりと声を合わせてしまった。

「あ、いえ。いる事はいるのですが、実際の領主様はもういないと言うか……」

「どっちなのよ？」

「ええとですね、領地としてはあまり大きくありませんが、タルブ村を含むこのヴィルゴ領一帯は今でもタルブ村の初代村長の領地なんです」

「未だに初代村長の、って……普通それって受け継いでいくものじゃないの？ねえヴァリエール、トリステインでは変わった世襲方法でも行っているの？」

ルイズはキュルケの問いにただ首を横に振った。

シエスタが自分でわかる範囲で話を続けた。

「わたしもあまり詳しくは知らないのですが、何でもとある功績で領地を頂いた時、初代村長は当時の国王陛下直々に永久領主にして貰うように約束を取り付けて貰ったそうです。なんでも死んでも自分の領は守り続けると言う事で」

「初めて聞くわ、そんな話」

ルイズは怪訝な顔をする。トリステインに関する歴史は授業でも良く学ぶ題材であるし、自分でも一通り調べ上げた事もあった。

しかし、当時の国王からその様な特殊な約束を取り付けられる程影響力を持った人物がいた事どころか、『タルブ』という地名すらどの本にも書いてなかった。

「わたしの村の中だけに伝えられている話ですから、実際は本当の話かはわかりません。今は領主が不在の領地というだけで、村の税金はちゃんと自分達で王室に収めていますし、小さな村なので問題が起きても大体自分達だけで解決している、他の小さな村とあまり変わった所じゃないですよ。でもずっと村と言う規模を維持してきたおかげで、隣接する領主の目も惹かず、貴族間の利権争いにかかわらずに済んでいるらしいですが」

ルイズは手に持った『始祖の祈祷書』にふと目をやった。

傍から見れば合理的ではない事も、疑問に思わず律儀に『伝統』として続けて行くところはまさしく伝統を重んじるトリステイン王国らしいと言えばらしかった。

例えそれが空白の本を読みあげる事だろうが、五百年もの間領主が不在のままの領の存在を黙認する事だろうが。

その時、一同を背中に乗せたシルフィードが短くきゅいと鳴いた。

シルフィードが横から飛んでくる一羽の黒鷲の姿に気がついたのだ。

「ブロント、あれって確か……」

ブロントは黙って頷く。

黒鷲は大きくシルフィードの回りをぐるっと旋回すると、キーッと高く鳴きながら砂浜の方へと飛んで行った。

「何かしら?とにかく後を追ってあの砂浜に降りましょう、タバサお願い」

キュルケがそう言われ、タバサは頷き、シルフィードの首元を撫でながら砂浜に降り立つように命令した。

海風が心地よく吹く真っ白な砂浜は広く、大型なフネが何隻でもすっぽりと収まりそうなほどただひたすらに広かった。

漁具らしき網や、小船が点々と置かれている中、先ほどの黒鷲が

一行の来訪を出迎えるように砂の上に立ってシルフィードを見つめていた。
ルイズ達がシルフィードの背中から降りると、黒鷲は羽根を広げ、よちよちとその二本足でブロントに歩み寄った。
「クァッ！」
黒鷲なりのあいさつなのか、短くそう鳴くと、羽根を閉じてルイズ達一人一人に向けて頭を垂れる。
そこに、橙色の防塵眼鏡をかけた、金髪の青年がやってきた。
ウェントゥスだった。
トリステイン上空でルイズ達と別れた時着ていた王族用の服装とは違い、地味に濃い青一色で統一されていた厚手の布を織りこんだガンビスンを着ていた。
腰にさした杖は剣の様に鞘に納められ、見た目上では軽装の傭兵か、道中の自衛のために剣を持ち歩く旅人と言った風貌だ。
「やあ、使い魔を通じて何者達かが竜に乗ってこの村にやって来ているのは知っていたが、まさかここで友よ、君に会うとは思っていなかった。君達も奴等の足取りを追ってこの村までやってきたのかい？」
「ウェー…！じゃなくてウェントゥス様！」
意外な人物を意外な場所で出会ったルイズが真っ先に驚いた。
「ねえヴァリエール、確かこの方ってアルビオンでの任務の時の人よね？その人が何でシエスタの故郷にいるわけ？」
ウェントゥスは屈託のない笑顔をキュルケに見せる。
「アルビオン脱出の際に世話になったね。あの時君達に礼を言えずにすまなかった。それと君達の使い魔にもね」
ウェントゥスは自分の使い魔の黒鷲がした様に一人一人に向かって礼を言った。
風竜のシルフィードにも礼を言うと、シルフィードが嬉しそうにきゅいきゅいと鳴いた。
「わたし達はこのメイドのシエスタの里帰りのついでに来たのです

が、ウェントゥス様はどうしてこちらに？」
「ふむ、そうか、その様子だと任務のためにこのタルブ村に来たという事ではなさそうだな。なに、私も物見遊山でふらりとここにやってきた海風の様なものさ」
ウェントゥスは冗談っぽく言って見せる。
「と、誤魔化したいところだが、ヴァリエール嬢とその仲間達には教えてもいいだろう。何か分かり次第伝えると言う約束でもあるしな。そこにいるメイドの彼女の故郷がここだというのなら、彼女にも知っておいてもらって問題はないだろう。まずこれを見てほしい」
ウェントゥスは真剣な顔をすると、懐から皺だらけになった紙を取り出して、それを一同に見せた。
何やら傭兵の募集をかけるための張り紙の様であった。
ルイズ達が見た所別段おかしな事は書かれてはいない、どこの酒場にも張ってあるようなものであった。
「良くある傭兵を集めるための張り紙ね、別段おかしな所はないわ」
軍人の家系のキュルケやギーシュから見てもそうだった。
そこでウェントゥスは同じものを更に数枚ほど懐から取り出す。
「これ自体は別に何でもない傭兵の募集だが、問題はこれが今トリステイン各地の酒場に張られていると言う事さ」
「アルビオンに備えて軍備を固めているんじゃないの？うちのゲルマニアでも今は正規兵、傭兵問わず、もしもの事に備えて兵を集めていると聞いているわ」
「軍の大部分が貴族のメイジが占めるトリステインでは少し不自然な事さ。出自も身分も分からない、金で動く傭兵を雇用するとはトリステインらしくないのだよ。その手口はどちらかと言えば今空のアルビオンにいる奴等と似ているのでね」
ルイズははっとした顔になった。
「まさか、レコン・キスタ！？」
ウェントゥスはうむ、と頷く。
「私もそう思って、こうして傭兵紛いに身をやつして、トリステイ

ン各地に集められた傭兵団を渡り歩いて調査していたのだが、そこで募集官が必ずと言っていい程口にする地名が『タルブ』だったのだよ。詳しい目的まではわからず仕舞いだったが、王国が軍備を整えるために集める場所としてはおかしいと思ってね、とは言え奴等が本格的にトリステイン内部から攻略しようと言う規模にしては、酒場で集めた傭兵達程度では些か少なすぎる」

「それでタルブを調査して何かわかったんですか？」

ルイズの後ろでシエスタも真剣な顔で聞いている。

「いや、至ってのどかな村だよ。海が美しく、海鮮料理が絶品で、私の様な流れ者でも優しく持て成してくれる村人がいるだけで、軍事的に攻略する理由はないだろうな。地理的に言えば海に面したこの広い砂浜がここだけ特有の物であるぐらいか。ええと、シエスタ君だったかな？せっかくの里帰り早々に物騒な話をしてすまなかったね」

「いえ……でもわたし達で備えておける事はないでしょうか？」

自分の故郷が何やらきな臭い事に巻き込まれるのではないかと心配したシエスタが思わず聞いた。

「一応その『もしも』の場合を想定した心構えはして置くと良いと思う。人は予期せぬ驚きに対しては対処が遅れ、案外簡単に崩れ落ちるからね。それとなくこの事を村の皆に、村の者である君から伝えてくれるといいだろう。よそ者である私がふれまわるのではいらぬ混乱を与えるだけだろう」

「ええ、わかりました。でもそんな事が起きないといいですね」

「なに、単に私の杞憂で終わるだろうさ。不可侵条約が結ばれたばかりの時に奴等もそこまで愚かな真似をしないだろうし。一応この事は私の方から匿名でトリステイン高等法院のリッシュモンに伝えておくさ。政治家として長年トリステインに仕える彼なら、この傭兵の動向の意味が判断できるだろう。以前、王女もリッシュモンは信頼に足る人物と語っていたしな」

ウェントゥスは張り紙を重ねまとめると、それを再び懐にしまった。

先ほどまで強張っていた表情を緩めて、微笑む。
「私の方はそんなところだ、それより友よ、この子の里帰りの付き添いと言う割には、やや賑やかなようだな」
「それほどでもない」
ブロントはウェントゥスに皆で行った宝探しの事と、それが徒労に終わり最後にシエスタの故郷に遊びに来た事を説明した。そして村の寺院にある『誓いの口』をこれから見に行く所であったと。
「ほう、『誓いの口』か。私もここにタルブに来て数日いるが、その様なものがあったとはな。もし邪魔でなければ私も便乗させて貰うぞ」
そうして一行はウェントゥスを加えてタルブ村の外れにある寺院へと向かった。

砂浜と草原が交わる所にひっそりと建つ寺院はどこか見覚えがある造りであるとブロントは感じ取った。
ヴァナ・ディールのサンドリア王国にある大聖堂とは比べ物にならないほど小さいが、でも石造りの拵えがそっくりだった。
「タバサ、あんたやっぱり入って見てみない？中に幽霊なんて別にいなかったわよ」
先に寺院の中に入って見て回ったキュルケが寺院の外にいるタバサに声をかけた。
だがタバサは首を横に振って、自分の風竜と共に外で待っているとでも言いたげであった。
「おいィ？何いきなり掴んできてる訳？」
ルイズはブロントのサーコートの裾をちんまりと掴んでいた。
「そ、その、使い魔が迷子になったら困るじゃない」
心なしかルイズの声が震えている。
「ミ、ミス・ヴァリエール。こ、ここは迷子になるほど中は広くありませんよ」
シエスタも声が上ずっている。

「そういうシエスタも何いつの間にかブロントの腕に掴まっているのよ」
「だってわたしここ苦手なんですよ！一人では絶対に来ませんよ！？」
そうして恐る恐る寺院の中に入ると、外から見るよりは中は広く感じる造りであった。
とはいえ質素な石造りで、大した飾りも無く、古ぼけた数列の長椅子と簡素な祭壇があるだけだった。

「何もでてこないわね。あら、これが例の『誓いの口』かしら？」
寺院に真っ先に入ったキュルケが祭壇の壁に貼り付けられたもの見つけた。
質素な寺院とは逆に、繊細な細工が彫り込まれた金属製の楯であった。
普段から手入れが行き届いているのか、年月によってくすんでいる祭壇と違い、その黄金に輝く楯は磨かれたように差し込む光をテラテラと反射した。
青い宝珠が八つ埋め込まれ、楯の中心には目を見開き、口を開けた、人の顔の様なものが彫り込まれていた。
「結構立派なものじゃない、今に動き出しても不思議じゃないわね」
キュルケは何気なく壁に掛けられた『誓いの口』を指でなぞった。
試しにその『口』に指を入れてみたが、特に何も変化はなかった。
「まあ、所詮迷信よ……ね……？」
ふとキュルケは楯の『目』がキュルケの方を見つめている事に気がついた。
（……あれ？最初からこっち向いていたかしら？）
キュルケは突然背筋がぞくぞくとして、二、三歩程後ずさる。

「ツェルプストー！何勝手に弄っているのよ」
「別にいいじゃない、減るものじゃないんだから」

キュルケは再び楯に目をやると、その無機質な目は真っすぐ正面を見据えていた。
（気の性だったかしら？）
ルイズは寺院内を見回すとほっと息を吐いた。
「やっぱり幽霊なんていないじゃない。ま、別に怖かったわけじゃ…」
「あああああーー！！！」
突然デルフリンガーが叫んだため、ルイズとシエスタがびくっと飛び上がった。
ギーシュも驚いて長椅子に躓いて転んだ。
「てめ！こんな所にいやがったのか！
デルフリンガーは鍔を激しく鳴らして誰かに向かって怒鳴っている。
「俺様は質屋に流れたってのに、てめは…むぎゅ！」
ブロントがデルフリンガーを鞘に押し込んで黙らせる。
「な、何よいきなり……驚いたわ……」
気丈に振舞って見せるが、ルイズは心臓をバクバク言わせていた。
ブロントはそんなルイズをよそに、壁にかかった楯をしきりに眺め回している。
黄金に輝く楯に見とれたブロントは、思わずデルフリンガーを抑えていた手を緩めた。
「ぷはぁ！おい相棒！人が話してる時に黙らせるのをやめろ！ま、人じゃねえが……ってそうじゃねえ！もうちょっとで鍔を噛むと思ったぜ」
『五百年の時を経ても、そちは相変わらず騒々しいのう』
何処からともなく、寺院内に威厳にあふれた声が低く響く。
「やあねギーシュ、あんた声がかれているわよ」
「いやキュルケ、僕は何も言っていないよ」

ギーシュはすっ転んで蹴飛ばした長椅子を元の位置に戻していた。
「あんな口調でしゃべるのはあんたぐらいしかいないじゃない」
ウェントゥスがキュルケとギーシュの肩を叩いて、壁にかかった楯を指差す。
「どうやら意思を持った武具と言うのは、我が友の剣だけではないようだ」

デルフリンガーがいつにも増して興奮しているのか、鍔がガタガタ揺らしながら寺院の楯に向けて怒鳴る。
「へっ！てめは相変わらずお高く気取っているな！俺よりも若造のくせによ！なあ？イージス」
デルフリンガーに『イージス』と呼ばれると、楯に彫り込まれた顔が意思を持ったかの如く動き出し、表情を作った。
そして、意思を持って語るデルフリンガーと同じく、『イージス』も語りだした。
「時の差なぞ、容易く埋まるものだと言うのに。そちが作られてから今では六千年だかは知らぬが、それに未だこだわるとは、そちは相変わらず未熟じゃのう。まあよい、それより久しいのう、よくぞここまで辿り着いたブロントよ」
ルイズ達は一斉にブロントの事を見た。
ブロントも眉をひそめた。ヴァナ・ディールでは『神楯』と呼ばれる伝説の盾イージスの存在は聞き及んでいたが、それが何故ブロントの事を知っているのだろうか？
「俺はお前の事知らないのだが。何で俺の名前知っているわけ？」
「おお、そうであったな、今のそちでは私を覚えておらぬのも無理ない事。よかろう、今一度我が名をそちの記憶に刻もう。……苦しゅうない、近う近う……」
ブロントは寺院の壁にかかった楯に歩み寄る。
寺院に差し込む光の中、黄金に輝く神楯と白い騎士が絵になるほど神々しい状況に、ルイズ達一同は息を呑んだ。

「我が名はイージス。不朽にして不壊なる神楯じゃ。……私は、かつてのごとく人々を護るために掲げられることになろう。さて、そのためには継承の儀式が必要じゃな。ブロントよ、そちのルーンが刻まれた左手で私に触れよ。前の所有者に会わせてしんぜよう」

ブロントは左手の篭手を外し、恭しくイージスに触れる。

左手に刻まれたカンダールヴのルーンが眩く光り、それに呼応してイージスが白く輝く。

その光の中から、ある人物の姿が浮かび上がる。

その人物の姿を見て、ルイズが思わず「あっ」と声を漏らした。

ルイズが夢の中で出会った深紅のローブを着た女性であった。

そして夢の内容が現実のものであれば彼女は……。

「卿が新しいイージスの所有者であり、イージスのしもべという訳ね……」

ローブの女性の声は全てを包んで守ってくれそうな程優しく、聞く者に安らぎを与える。

ブロントに微笑むと、ローブの女性がブロントの顔へと手を差し伸ばす

「ふふ、見違えるようなその姿でもお姉さんにはすぐわかったわ。久しぶりねブロント。まさか五百年経ってから貴方に会えるとは思っていなかったわ。後でタブナジア侯国が囮として利用されて壊滅したと聞いて、貴方もその時亡くなったのと思って悲しんだのだから」

ブロントは二十年前記憶を無くした時、確かにヴァナ・ディールのタブナジア近郊にいたらしい事を知っていた。

もっともタブナジアと呼ばれた所は大爆発によって消し飛ばされており、自分自身なぜその跡地にいた事かも覚えていない。

「悪いが俺の記憶には何も無いな。俺は二十年前タブナジアにいたらしいんだが」

「なるほどね……ここハルケギニアの五百年は、貴方がいたヴァナ・ディールの二十年。ヴァナ・ディールで一年が過ぎると、ここでは

瞬く間に四半世紀も過ぎてしまうわけね。今まで確信は持てなかったけれど、時の流れまでもが違うとすると、ここはやっぱりヴァナ・ディールとは別世界のようね」

キュルケ、ギーシュ、シエスタは不思議そうな顔でお互い見合わせる。

ブロントが遥か遠く東方から来たと聞いていたが、時の流れが二十五倍もの差で流れる『別世界』と言われてもピンとこなかった。

その時、ルイズは自分が見た夢が本当の事かどうかを確かめるべく、ローブの女性に聞いた。

「あ、あの！もしかして貴女はわたしの使い魔ブロントのお姉さんなのでしょうか？」

女性の姿が揺らめくと、ルイズに優しく微笑みかけた。

「ふふん♪そうよ、如何にも私がブロントのお姉さん、そしてここタルブ村初代村長のセラーヌ・イ・ヴィルゴよ。弟は昔の事をすっかり忘れてしまってるようだけど、その主人のルイズちゃんが知っていてくれて助かるわ。やっぱり人の枕元に立ってみるものね」

セラーヌが悪戯っぽく笑って見せる。

「とすると、私が見た夢は本当にあった事なんでしょうか？」

「貴女が弟の夢の何を見たのか、私はわからない。でもあの香りにはあらゆる意味で人の心を繋ぎ合わせ、留める事ができるようね。それによって本来このイージスから離れられない私もあの部屋を訪れる事ができ、貴女は弟の記憶奥深くに眠る記憶を覗き見る事ができたのかもしれないわ」

「確かに本来使い魔とその主人は感覚を共有すると言われているわ」

自分でそう言って、ルイズはふと思った。

自分がブロントの記憶を夢として見ている時、ブロントもまたルイズの過去の記憶を見ているのかもしれない。

「ブロント。あんた……夢で何かわたしの事見ていないよね？」

ブロントはしばらく上を向いて考えて、答えた。

「それほどでもない」

「それほどでも、って見てるんじゃない！」
「お互い姉の夢をたまたま見てしまう事は結構良くある事らしい」
「お姉さまの！？どっちの方を見たのよ！」
ルイズが必死になってブロントに詰め寄りつつも、それを事もなく受け流すブロントを微笑ましくセラーヌは見つめている。
「ふふふ、貴方達を見ていると、五百年前に私がここハルケギニアに召喚された時の事を思い出すわ」
「ヴィルゴ様も、ブロントさんみたいに使い魔だったのですか？」
シエスタはセラーヌに敬う様に頭を下げている。
「そうよ、使い魔として召喚されたわ。私の主人もルイズちゃんみたいに意地っ張りで、ちょっと泣き虫で、何でも自分でやってしまうブロントと違って、出来の悪い弟みたいでかわいかったわ。でも、最後にあの子は皆があっと言う程、立派に咲き誇ったけれどね……ふふ、そう畏まらなくてもいいわよ、シエスタちゃん。『様』なんて呼ばれる程大した事はやっていないのだから。セラーヌさんでいいわ」
「いえ、そういうわけには……」
「ふふ、あのやんちゃだったシエスタちゃんも随分と落ち着いたわね。ちょっと前まで漁の網に悪戯したとかでお父様にここまで連れられて、もう悪さしないって誓いを立てられていたっけ」
「そ、そんな事までも見ていたのですか！？」
「もちろんよ。タブナジアの海の様に美しいこのタルブをずっと私が守って行くとあの子と約束したものね。子供がいなかった私にとって、このタルブの村の皆が私の子供みたいなものよ、皆の事はちゃんと知っているんだから」
セラーヌは得意げにふふん、と鼻を鳴らす。
「相変わらずお節介焼きのようだな、姉御」
デルフリンガーがカチカチと鍔を鳴らす。
「五百年経っても相変わらずその口は治って無い様ね、ええっと、誰だっけ」

セラーヌがやや冷ややかな態度を取る。
「ひっでえなあ姉御。俺だよ俺、姉御の相棒をやっていたデルフリンガーだよ」
「そうね、デルフだったわね。お節介焼きなのは私の勝手でしょ？何、それを馬鹿にする気？そうなら……」
「いや、ちょっと待って！そこまで言ってないだろ！姉御、落ち着けって！」
ブロントの手をあてられたイージスがやれやれ、といった表情をつくる。
「セラーヌ、そやつと遊んでおる程の暇はないぞ」
「あら、ごめんね、イージス。大事な継承の儀式の時に、再会の挨拶と別れを言っておきたいって無理を言ったのは私なのにね。もっと話したい事もあったけれど、儀式をすませましょうか」
セラーヌの優しそうな雰囲気が突如変わり、毅然とした態度を取った。
そして真剣な表情でもってブロントを見つめた。
「ブロント、卿は、卿を召喚せしその方の主人、そして多くの仲間に信頼をされているようね」
セラーヌは寺院に集まったルイズ、シエスタ、キュルケ、ギーシュ、ウェントゥスの一人一人を見渡した。
そしてちらりと寺院の入り口へと目をやった。異変を感じたタバサはキュルケ達の事が心配になったのか、恐る恐る中を覗いていた。
セラーヌはふっと笑みをこぼす。
「人は国難を迎えた時こそ、その友情の真価が問われるもの。ペルセウス様より預かりしこのイージスに選ばれた卿は、これからもその友情を大切にし、身を削り命にかえても仲間を護りぬくこと」
セラーヌが両手を差し出すと、イージスが壁から離れ、ブロントの手へと渡った。
「かつての、私がそうだったように、それがイージスを掲げる者、そして左手にそのルーンを宿いし者の宿命……」

セラーヌが左手を差し伸ばすと、イージスを持つブロントの左手に触れた。
触れられる感触は無いが、少しばかりブロントの左手が暖かく感じ、ルーンもそれに呼応して光る。
イージスが威厳を込めて口を開く。
「これで晴れて私はブロント、そちの楯じゃ。そちが仲間を護るのであれば、私はそれを阻まんとする敵の爪を折り、刃を避け、魔を防ぐ、揺るぎなき安全をそちに保障しようぞ。そちがどこに向かおうと私が必ず護る故……」
イージスの所有者がセラーヌからブロントへと変わった瞬間、ブロントの左手にズシリと重さが加わった。
その時、セラーヌの姿がうっすらと透けていった。
「そろそろ時間のようね。継承者がブロント貴方でよかったわ。今は記憶が無くても、こうして最後に会えたのだから。お姉さん安心したわ」
ブロントは少し考えこみ、言いにくそうに一言だけ口にした。
「姉さん……」
「ふふん♪そう呼ばれるのも久しぶりね。イージス、私が出来なかった分もしっかりブロントの面倒見てあげてね。それじゃあね、ブロント。ルイズちゃんを、皆を、しっかり守って行きなさいよ」
「うむ。セラーヌ、そちには長らく世話になったな。これからはゆるりと休むがよい。いずれまた弟に相まみえるその日まで」
イージスが放つ光が弱まり、セラーヌの深紅色のローブの色があせてゆき、姿が見えなくなってしまう。
ブロントは消えゆくセラーヌ他に何か言葉をかけたがったが、記憶を幾ら探っても出てこない自分にもどかしく感じつつも、何も言えなかった。
『どんな花を咲かせるのか、お姉さん楽しみにしているわ』

その言葉を最後に、セラーヌはルイズ達から消え去った。
「ブロントよ、そちもそう気負う事はない。そちの姿を一目拝めただけでもセラーヌは喜んでおったわ。記憶の有無など、この際大した事ではない。そちが健在であればいずれ取り戻すであろう事、セラーヌは承知じゃ」
静かな寺院にしんみりとした空気が流れる中、デルフリンガーが口を挟んだ。
「にしてもよ、イージスばっかり何かこう立派でずるいな。俺の時は継承の儀式も無く、百エキューで買われただけだぜ？お、そうだ！良い事考えた！相棒、俺達もここで継承の儀式を……うげっ！」
デルフリンガーはブロントの金槌の様に振り上げられた拳に強く叩かれて、おいそれと引っ張っても抜き出てこない程に鞘の奥深くに押し込められた。
それを見たイージスが溜め息を吐く。
「デルフや……そちはもう少し場をわきまえる術を学んだ方が良いのう……」
意思を持った武具同士の滑稽なやり取りを見ていて、ルイズ達はある程度明るさを取り戻す。
召喚される前のブロントを知るその姉にやっと会えたと思った矢先、別れが来てしまう。
時を越えてやっと会えた姉に、訳が分からぬ内に別れてしまう事を自分の二人の姉に当てはめると、ルイズは心が締め付けられそうだった。
ルイズはブロントを見た。
その顔は真剣で、決意を見せた表情だった。
新しく受け継がれたイージスをしっかりとその左手で握りしめていた。
「ブロント……」
ルイズは何か言葉をかけようとしたが、この場合なんて言えばいいのか思いつかなかった。

「……腹が減ったな。海鮮料理がでると聞いてこの村にやって来たんだが、それが楽しみで仕方がなかった」
ブロントは右手で優しくルイズの頭を撫でた。
自分が慰めようと思っていたら、逆に慰められてルイズは戸惑った。
「そ、そうね！ねえシエスタ、この村名物の料理ってど、どんなのかしら？」
思ったより自分の使い魔が落ち込んでいる様子ではなかったので、ルイズは安心した。
しかしブロントの言葉の端々がどこか無理している感じにも受け取れた。
「え、えーとですね。まずタルブ村を代表する料理と言えばタルブ村風サラダですね。人参、カブ、菜っ葉を細く刻んで、そこにその日獲れた魚や貝の身を色々織り交ぜて……あと、漁がうまくいった日にはキャビアもはいるんですよ！それにリンゴで作られた酢をかけて食べるんです。知ってます？これは実はとうもろこしを薄く伸ばして焼いた生地に挟んで『タコス』にもできるんですよ！これはぜひ皆さんに食べて頂きたいですわ。他にも……」
そうしてシエスタによるタルブ村の数々の料理の話を聞かされて、一行は腹を鳴らしながら寺院を去った。
村に着いた時、寺院の御神体が持ち出された事に一時騒然となったが、五百年もの間誰にも口を開く事無かったイージス本人が「構わぬ」と一言発した事により、村人達は納得せざるを得なかった。
村の掟が何であろうと、御神体自身がブロントに持ち出される事を望むのであればそうさせるしかなかった。それどころか村の老人の何人かは「ありがたい」、と言ってイージスを携えたブロントを拝んで行く始末となった。
その晩、予定よりも早いシエスタの帰郷、村の御神体の訪問、そしてルイズ達貴族の面々が一度にやって来た事により、シエスタの

家族は盛大なもてなしを振舞う事になった。
キュルケやギーシュが騒がしく盛り上げたその日の夕食の時、ルイズはブロントが漏らした言葉を聞き逃さなかった。
他の誰も聞き取れないほどの、誰に向けて放った訳でもない小さな呟きだったが、その言葉はルイズの印象に強く残った。
――『ただいま』

第２２話　「鎖と絆」

アルビオン空軍工廠の街ロサイスは、首都ロンディニウムの郊外に位置している。
フネの造船所や製鉄所が立ち並ぶロサイスは、元々は王立空軍の発令所でもあったが、今ではアルビオンを掌握したレコン・キスタの指令所となっている。
その赤レンガの大きな建物には、誇らしげにレコン・キスタの三色旗が翻っている。
そして、一際目立つのは、天を仰ぐばかりの巨艦であった。
全長二百メイルにも及ぶ元アルビオン空軍本国艦隊旗艦の『レキシントン』号は、これまた巨大な盤木にのせられ、改装工事が行われていた。
アルビオン皇帝のオリヴァー・クロムウェルは供のものを引き連れ、その工事の視察していた。
「なんとも大きく、頼もしい艦ではないか！このような艦を与えられたら、世界を自由にできるような、そんな気分にならんかね？艤装主任」
「…わが身には余りある光栄ですな」
気のない声でそう答えたのは、『レキシントン』の艤装主任に任じられた、サー・ヘンリー・ボーウッドであった。
彼は革命戦争の時、レコン・キスタ側の巡洋艦の艦長であった時の功績が認められ、『レキシントン』号の改装艤装主任を任される事になったのである。
そして、艤装主任はそのまま艦長へと就任するのが王立であった頃からのアルビオン空軍の伝統であった。
「見たまえ、あの新型大砲を！わたしの友人による設計でね、東方のロバ・アル・カリイエからやってきて、エルフから学んだ技術をもとに設計したこの長砲身の大砲は、なんと従来の戦列艦が装備す

るカノン砲のおおよそ一・五倍の射程距離を持つそうだ！」
興奮して語るクロムウェルに対してボーウッドはつまらなそうに頷く。
元々ボーウッドは心情的には、王党派であった。
しかし、軍人は政治に関与すべからずとの意思を強く持つ生粋の武人でもあったため、上官であった艦隊司令が反乱軍についたため、ボーウッドもまた仕方なくレコン・キスタ側として革命戦争に参加したのである。
軍人として、指揮系統の上位に存在するものの決定に黙って従っていたが、一個人としてクロムウェルは忌むべき王権の簒奪者としてしか見ていなかった。
「これで『ロイヤル・ソヴリン』号にかなう艦は、ハルケギニアのどこを探しても存在しないでしょうな」
ボーウッドは間違えた振りをして、艦の旧名を口にした。
クロムウェルはその皮肉に気付き微笑んだ。
「ミスタ・ボーウッド、アルビオンにはもう王権（ロイヤル・ソヴリン）は存在しないのだよ」
「そうでしたな。しかしながら、たかが結婚式の出席に新型の大砲をつんでいくとは、下品な示威行為と取られますぞ」
トリステイン王女とゲルマニア皇帝の結婚式に、国賓として初代神聖アルビオン皇帝兼貴族議会議長のクロムウェルや、神聖アルビオン共和国（アルビオンの新しい国名）の閣僚は出席する。
その際の御召艦が、このレキシントン号であった。
「ああ、きみにはこの『親善訪問』の概要を説明していなかったな」
「概要と言いますと？」
また自分の知らぬ所で決められた策略か、とボーウッドは頭が痛くなった。
クロムウェルは、そっとボーウッドに二言、三言耳打ちした。
ボーウッドは顔色を変えた。
目に見えて、青ざめて、軽蔑のまなざしでクロムウェルを見た。

「馬鹿な！そのような王道から大きく外れた行為など！」
「これも軍事行動の一環だ。ミスタ・ボーウッド、きみならその事が理解していただけると思っているのだがね」
ことももなげに、クロムウェルは呟いた。
「トリステインとは、不可侵条約を結んだばかりではありませんか！今まで自ら申し出た条約を破り捨てた国はどこにもない！このアルビオンが卑劣な条約破りの国として、ハルケギニア中に恥を振りまく事になりますぞ！」
激高したボーウッドが叫んだ。
「ミスタ・ボーウッド、それ以上の政治批判は許さぬ。これは議会で決定し、余が承認したものだ。余はきみが忠実なる軍人だとばかり思っていたが、いつからきみは政治家に転向したのかね？」
「しかし…」
「確かにいままでハルケギニアの歴史上に類を見ない事だろう。しかしだからこそ誰も成し得なかった事が達成できるとは思わないかね？ハルケギニアは我々レコン・キスタと言う旗の下一つにまとまるのだ。一時的な誹りなど、エルフどもの手より聖地を取り戻せば気にならんよ」
ボーウッドがクロムウェルに詰め寄った。
「条約破りがただの誹りですまされない！ハルケギニアが一つにまとまる前に、アルビオンは各国の敵とみなされるのは目に見えている！閣下は祖国を裏切るおつもりですか！」
クロムウェルの傍らに控えたワルドがボーウッドの喉元に杖を突きだして制した。
「艦長、改装作業にしては些か興奮しすぎのようだな」
ワルドはそう言うと帽子のつばを指で少しあげる。
「……ふん、国を裏切る事さえいとわぬ貴殿にはわからぬ事だな」
突きつけられた杖にも動じず、ボーウッドはワルドを睨み返す。
「大丈夫だ子爵、杖を下げたまえ。ミスタ・ボーウッド、きみは引き続き艤装作業を続けたまえ」

クロムウェルがそう促すと、ボーウッドは不服そうな顔をしながらも、艤装作業を確認するためにその場を去った。
「子爵、きみは竜騎兵隊隊長としてこのレキシントン号に乗りたまえ」
「目付け、というわけですか？」
「いや、そうではない。あの男はわかりやすいほどに頑固で融通がきかない人物ではあるが、それ故に裏切る事は絶対にしない。余は単純に、スクウェアメイジであるきみの能力を買っているだけだ、きみは飛竜に乗った事はあるかね？」
「いえ、ありませぬ。しかし、私が乗りこなせぬ幻獣はこのハルケギニアには存在しないと存じます」
「流石は子爵だ、何とも頼もしい。そうだ、子爵に会わせておきたい者がおってな。少し余の執務室まで来ていただけるかな？」
ワルドは恭しく頭を垂れる。
「是非とも」
そうしてワルドはクロムウェルに連れられて、レコン・キスタ司令所にあるクロムウェルの執務室へとやってきた。
予め執務室に通されていたのか、二十代半ばぐらいの女性がソファーでクロムウェル達が現れるのを待っていたようだ。
細く、身体にぴったりとした黒いコートを身にまとい、ワルドが知る限りでは見た事のない、奇妙なマントも着けず、杖も見当たらないので、メイジではないのだろうか？
「おお、ミス・シェフィールド待たせたね。我々の『支援者』は元気だったかね？」
シェフィールドと呼ばれた女性は立ち上がり、冷たい目でワルドを眺めまわし、顔を一瞬しかめた。
そして何事も無かったかの様にクロムウェルに向き直る。
「以前変わりなく。クロムウェル様によろしく伝えて欲しい、との事です。ところでそちらの方は？」

「おお、そうであった。彼はワルド子爵、ハルケギニアでも有数のスクウェアクラスのメイジであり、我々の頼もしい同志だ。ワルド君、彼女が例の新型大砲の設計をした余の有能な秘書、ミス・シェフィールドだ」

ワルドは帽子を取り、シェフィールドに一礼する。

「ほう、遠くロバ・アル・カイリエで、エルフの技術を学んだ技師と聞いていたものだから、もっと厳つい人物を想像したが…」

ワルドはシェフィールドをじっと見つめる。

何度も確認するように、特に額を隠すように伸びた彼女の艶やかな髪を眺め回す。

「私の顔になにか？」

「失礼、以前どこかで会った様な気がしてな……ニューカッスルだったかな？」

シェフィールドは首を振る。

「ニューカッスルの時、私はとある『支援者』の下へ使いにでていたのだから、卿にお会いするのは本日が初めてだと思います」

そうか、と言ってワルドは首を傾げる。

クロムウェルが軽く笑う。

「子爵はさぞかし女性にもてるのだろうな、会った数々の女性の中にミス・シェフィールドに似た方でもいたのではないかね？」

「いえ、そういう訳では…」

「ところでミス・シェフィールド、我等の『支援者』から何か良い知らせはあったかね？」

「ええ、『親善訪問』作戦が行われる地がタルブと知り、地の利を活かせる水空両用艦を二隻、とそれに付随する降下隊を二隊、閣下のために送っていただけるそうです。クロムウェル様の皇帝就任祝いも兼ねてだそうです」

クロムウェルは満面の笑みになる。

「おお、それは素晴らしい！これでこの作戦の成功も確実なものとなるな！確か両用艦と言えばガリア王国の技術だったな。すると『

支援者』はガリアの者かな？」
「クロムウェル様、例の約束をお忘れなきよう……」
シェフィールドが困った表情をする。
「おっと、すまない。『支援者』の素性は詮索しない、と言うのが約束であったな。しかし、我々と同じ志を持ちながら、名乗り上げる事ができない立場とは、難儀なものだな」
シェフィールドは視線でクロムウェルに合図して、そしてワルドの方へと視線を向ける。
クロムウェルはその様子を見て、シェフィールドの言いたい事を察した。
「ああ、すまぬ子爵。少し込み入った話をするのでな、少し席を外してくれるかね」
「御意」
ワルドは帽子を深く被り直し、一礼すると、クロムウェルの執務室を出た。
（あの女…確かに今まで会った事はない。だが、遠い昔どこかで見た事がある気がするこの感覚はなんだ？）
ワルドの胸に何か詰まるような不快感が広がり、咄嗟に手で胸を抑える。
執務室から離れた廊下で立ち止まると、ワルドは壁に寄りかかり、呼吸を整え、目を瞑り、耳を澄ます。
風メイジ特有の空気の流れを読む聴覚をもって、離れた執務室に聞き耳を立てる。
執務室のドアに直接耳を当てたかの如く、クロムウェルとシェフィールドの会話がはっきりと聞こえてくる。
『クロムウェル様、先ほどの者の心は支配されていない様に見受けられましたが』
『ワルド子爵の事かね？せっかくの数少ないスクウェアメイジを、余がその心を支配してしまってはもったいないだろう。自分で物を考えられぬ木偶は、蘇らせた死者どもだけで十分だ』

『強力なメイジであるからこそ、その扱いには用心する必要があります』

『余も無条件で子爵を信用しているわけではない。彼がなぜ、魔法衛士隊隊長と言う座を捨ててまで、余に忠誠を誓うのかがまだ見えてこない。ボーウッドと違い、子爵はいつ裏切ってもおかしくないだろう。しかし、その忠誠が本物であれば、彼以上に頼もしい味方はいない』

『それを見極めるために、敢えて泳がせていると？』

『その通りだよ、ミス・シェフィールド。今度の『親善訪問』では子爵をミスタ・ボーウッドの監視下に置くつもりだ。子爵とは対極な性格をしたミスタ・ボーウッドなら、子爵の思惑に対して敏感に感じ取る事ができるだろう』

瞼を閉じたまま、ワルドは静かに鼻で笑う。

（まさか、こちらが目付けを付けられるとはな。所詮クロムウェルの言う『信頼』とは人を利用するためのものか）

シェフィールドの事が気になり、聞き耳を立ててはみたが、なんて事はない、くだらない話しかないと思ったその時、

『もしそれで子爵が我々に害を成す者だとわかれば、ミス・シェフィールドより譲り受けたこの指輪で心を支配してしまえば良い』

ワルドの瞼はぴくりと動いた。

（指輪だと？）

『死者に偽りの生を与え、又人の心を操る事ができるそのマジックアイテムは、誰でも扱える代物。くれぐれも他の者に知られぬよう、お願いいたします』

『心配はいらぬよ、ミス・シェフィールド。未だに皆は余が虚無の担い手であると信じておる。まさか余がただの平民の司教であるとは夢にも思っておらんよ』

驚愕の事実を聞いてしまったワルドは執務室から遠く離れた廊下で目を見開いていた。

「ふっ……ははは！まさか『虚無』と呼んでいたものがただのマジ

ックアイテムとは。心にない信仰を説く司教が、まさか虚無を語るペテン師でもあったとは、とんだ皮肉だ！」

ワルドの顔に不気味な笑みが浮かぶ。

「しかし、人の心を支配できるマジックアイテムか。もしそれが本当であれば、『虚無』の力に匹敵する事は間違いない。いや、うまく使えば『虚無』の担い手ごと操る事もできるだろう。何としてでもその指輪を手に入れねばならぬな……それがあれば、今度こそルイズを……」

その頃トリステイン魔法学院、

「ブロント？今何か言った？」

タルブの村から学院に戻ったルイズは、自室で大量に積み重なった本がそびえ立つ机に向かっていた。

キュルケ達と共に無断で授業を数日間サボってしまったため、遅れてしまった分の課題を山盛り与えられていたのだ。

それに加え、エルザがまとめ上げたと思われる、過去数百年の間に使われた詔集が一番上に乗せられていた。

「おいィ？お前らは今俺が何か言ったのを聞こえたか？」

ブロントは油布で丁寧にイージスを拭き、手入れしていた。

「聞こえておらぬのう」

イージスは数百年振りに武具としての手入れ受けて、気持ちよさそうな顔をしている。

「何か言ったのか？てか、相棒、イージスばっかりじゃなくてさ。俺様もやってくれ。潮風が身体にべた付いて気持ち悪いったらありゃしねえ」

壁に立てかけられデルフリンガーがうるさく鍔を鳴らして、ブロントの気を惹こうとする。

「そう？気のせいかしら……あー、それにしてもこの量、気が滅入るわ。詔も考えないといけないし」

課題の筆休めに、詔集のページを何枚かぺらぺらと捲り、目を通す。

「火に対する感謝、水に対する感謝、と各四大系統に対する感謝の辞を、詩的な言葉で韻を踏みつつ詠みあげるなんて、困ったわ。詩的なんて言われてもわたし詩人じゃないもの」

ルイズがうー、と唸りながら頭を抱えている横でデルフリンガーが何やら騒がしく喚く。

「やい、てめ、イージス。姉御の時はてめえが先だったから身を引いてやったがよ、今度の相棒は俺様が先だぜ？先輩の俺様を差し置いてチョーシに乗っているんじゃねぇぜ！」

「そちは相変わらず器が小さいのう。何が先や、後やと悩んでおると、いらぬ錆が増えるだけだと言うのに。そもそもブロントの事はそちより先に知っておるわ」

「あ？それは相棒と組む前にちらっと会っただけの話だろ？俺が言っているのは、お互いに命を預けあい、幾多の戦場を駆け巡るため、『相棒』として組んでからの話だ！」

イージスは溜め息を吐くような表情を作る。

「愚かな。無知故に、その様な瑣末な事で優位に立とうとするそちの姿、いつ見ても哀れじゃのう。すでに勝負はついておるのに」

「ああ？誰が『哀れ』だって？おい！イージスちょっと表へ出ろ！相棒！俺を…」

デルフリンガーが言い終わる前に、ルイズが立ち上がりデルフリンガーを鞘に押し込めた。

「うるさいうるさい！ったく！気が散るじゃない！剣の癖にやかましいのよ！」

ルイズは鼻息荒くデルフリンガーを紐で縛りあげ、鞘に固定した。

「もう、こいつの声を聞いていたら、詩的も何もないわ。ブロント、そこの『詔集　第一巻』を取って頂戴」

「これか？」

磨き終わったイージスを自分のベッドの上に置くと、ブロントは

机の上からルイズが最近一番使っている本を取った。
「それは『始祖の祈祷書』、それじゃなくて、『詔集』と書いてある本よ」
ブロントは祈祷書を元の場所に戻すと、本の山を見つめた。
ルイズが次に良く広げている立派な装丁が施された本を取るとそれをルイズに差しだした。
「それは『不治の病と治癒のポーション』、ちゃんと題名書いてあるでしょ、ちゃんと見てから寄こしなさいよ」
ブロントは顔をしかめる。
「おまえもしかして文字が読めないと俺を馬鹿にしているんですか？」
「えっ？いや、馬鹿にしているわけじゃ…ってブロント、あんた字が読めないの？」
「俺がどうやって文盲だって証拠だよ言っとくけど俺は文盲じゃないから」
「そ、そこまで言ってないわよ」
不機嫌になり始めた自分の使い魔にルイズが狼狽する。
拗ねてしまったのか、ブロントは本を机に置いて、夢幻花の鉢植えの手入れを始めてしまった。
「そう言えば、ここはヴァナ・ディールとは違う言語体系だったのう。私もハルケギニアに初めて訪れた際は、暫し言葉に困ったわ。召喚されて数月も経たぬブロントではまだ字が読めぬのも無理ない故」
ベッドに置かれたイージスが天井を仰ぎながら、ルイズに語る。
「あれ？でも、ブロントは召喚された時からちゃんと話せていたわよ、ちょっと訛りが強いけど」
「セラーヌの時もそうであったが、召喚されし使い魔は、＜サモン・ゲート＞を潜り抜けた時、主人と問題無く意思の疎通を図れる様、言葉が通じる様になるそうじゃな。しかし、主人との会話にかかわらない文字の方までは＜サモン・ゲート＞の効力が及ばぬとは、都

合が良いのか悪いのか判らぬ魔法じゃのう」
「そうだったの……詔集から幾つか詠みあげて貰おうと思ったのに……」
イージスの隣に座ったルイズはちらりとブロントの方を見ると、背中をルイズに向けて甲斐甲斐しく夢幻花の世話をしていた。
が、時々手を止めてはルイズとイージスの会話に耳を傾けている様だった。
「私はタルブで幾度も婚礼を立ち会った故、多くの詔を諳んじておる。片田舎の漁村の物で構わぬのであらば、詠み上げてもよいぞ。王室のそれとは趣に差異はあるが、似たようなものじゃ」
「もしかして、その中に初代村長様のも入っているのかしら？」
「セラーヌのか？入っているも何も、婚礼において詔を詠み上げる風習を始めたのが他ならぬセラーヌじゃ。それを気にいった時の国王が少し形を変えてしきりに王室中に広めた様だがのう。しかし誰が先に成したかや本来の形式はどうである等とは些細な問題じゃ、肝心なのは頼まれた巫女が相手をどう想って詠み上げたかじゃ」
「相手をどう想った、か…うん、イージス。お願い、聞かせてくれるかしら、そのセラーヌ様の詔を」
「セラーヌと聞いて、どうやらへそ曲がりの使い魔も興味惹かれた様じゃの」
ルイズはそう言われて、ふと気付くとブロントがいつの間にかイージスを間に挟んで、隣に座っていた。
「それほどでもない」
イージスはにっこりと微笑む表情を浮かべる。
「相変わらずじゃな、ブロント。まあ良かろう。まずはセラーヌが初めてハルケギニアで詠み上げたものからじゃな。では、『この麗しき日に……』」
イージスが朗々と詔を詠み上げた。
ルイズはそれを聞きながら色々と想いを馳せる。
特に婚礼の巫女をルイズに態々指名したアンリエッタ王女の事を

強く思った。
ルイズにとって、アンリエッタはどれ程大切な存在なのか、そして今アンリエッタは何を思っているのだろうか。
「姫さま……」

その頃、トリステイン王国と、ガリア王国に挟まれた内陸部に位置する、ハルケギニア随一の名勝を誇るラグドリアン湖にて。
「何かおっしゃいましたか？アニエス」
緑鮮やかな森に囲まれた絵画の様に美しく澄んだ湖水に佇むのはアンリエッタ王女と、アニエスと呼ばれた女性だった。
「いえ、殿下。私は何も……」
短く切りそろえた鮮やかな金髪に、すっきりと簡素に整えた剣士風の出で立ちのアニエスは、恭しくアンリエッタに跪く。
「そうですか、わたくしの気のせいですわ。水精霊の囁きでも聞いたのでしょう」
ラグドリアンの湖は水の精霊が住まう場所として知られている。湖の底奥深くに水精霊たちは城と街をつくり、独自の文化と王国を築いている。
その姿を見たものは、その美しさに心をうたれ、どんな悪人でも心を入れ替えるという。
そんな水の精霊は誓約の精霊とも呼ばれ、その御許においてなされた誓約は、決して破られる事が無いと伝えられている。
アンリエッタはここでウェールズに永遠の愛を誓った。
「アニエス、無理を言って世話をかけますわ。わたくしの我儘に付き合わせてしまって」
「殿下、どうかお気になさらずに。しかしメイジの近衛でなく、ただの平民である私でよろしかったのでしょうか？」
アンリエッタは深い溜め息をつく。
「力あるメイジの貴族を信用する事ができない王女など、さぞかし

滑稽でしょう。魔法の使えぬあなたの様な平民を御す自信しかない無能な王女など」

「殿下、悪い御冗談はやめてください。このアニエス、殿下に拾われた大恩が胸中に溢れども、その様な事は……」

アンリエッタは軽く微笑む。

「ええ、わかっておりますわ、アニエス。ですが王宮にはそう思い、王権の簒奪を試みる貴族が多数暗躍しているのもまた事実。わたくしの魔法近衛隊の中にも潜んでいるのかもしれません」

アンリエッタが物哀しそうな表情をして、湖の前で屈みこみ、水面に映る自分の顔を覗きこむ。

「何よりも、わたくしの浅慮故、裏切り者にわたくしの大切な人の命を受け渡してしまったのですから……」

「殿下……」

アンリエッタは手で軽く水面を漉いて、そして立ち上がる。

「アニエス、これからわたくしがここで口にする事は一切忘れて欲しい」

「御意」

アンリエッタはドレスの裾をつまむと、水の中に入っていった。足首まで水につかると、アンリエッタは神妙な顔をして、高らかに宣言した。

(身勝手なわたくしをお許しくださいまし、ウェールズさま)

「トリステイン王国王女アンリエッタは水の精霊の御許で改めて誓約いたします。この身、例えゲルマニアに捧げる事になろうとも、この心は永久にウェールズさまを愛し続ける事を！」

湖の水面がそっとゆらぎ、再び静寂が湖を包む。

アニエスは驚きを隠せなかった。

この事が自分以外の誰かに知られれば、大変な事になるであろう。もっとも、発言力を持たぬ、ただの平民であるアニエスが口外した所で、何とかうやむやにできるとアンリエッタも見越した上でアニエスを護衛として連れてきたのだろう。

アンリエッタが湖からでてくる、ぽたぽたと水が靴から滴り落ちる。
「さあ、アニエス。王宮に戻りましょう。あまり長居しては王宮の皆が騒ぎだしますわ」
「殿下、早く馬車に戻り、着替えを。大事な御身体に障ります故」
アニエスはそう言って、頭を垂れる。
アンリエッタは湖を包む森の外れに停めてある馬車に乗り込む前に、最後に湖を一瞥した。
そして誰にも聞こえぬように小さく呟いた。
「あの時、何故貴方は愛を誓ってくださらなかったの？ウェールズさま……」

その頃タルブの砂浜、
「何か言ったかい？シエスタ君」
ウェントゥスはまるで瞑想しているかの如く、白い砂浜の真ん中で目を瞑っている。
背後から近寄ったシエスタだったが、振り向かずに誰であるかウェントゥスに言い当てられ、シエスタは一瞬驚いた。
「あ、いえ！その、ミスタ・ウェントゥス、お昼がまだのようでしたので。手軽に食べられる物お持ちしました」
「悪いね。私の様な根無し草に気を遣わせてしまって」
ウェントゥスは目を開き、立ち上がると、口笛を吹いた。
すると遥か上空から、使い魔の黒鷲が砂浜に舞い降りてきた。
「ミスタ・ウェントゥス、また使い魔を通して辺りを見回っていたのですか？」
「いかにも。この子は目が良いからね、傭兵どもの動きを監視するのに、大いに役立っているよ。ところでシエスタ君、『ミスタ』はよしてくれ、私は貴族ではないのだから」
ウェントゥスは懐から干した腸詰の様なものを取り出すと、それ

を使い魔の黒鷲に放り投げた。
黒鷲は軽く「クアッ」と鳴くと、それを嘴で器用に受け取り、飲み込む。
「ですが、メイジの方に失礼があっては……」
「ハハハ、つまらない魔法が使えるだけさ。勝手にこの村に邪魔しているこちらが本来気を遣わなければならぬのにな。呼び捨てで構わないよ」
「さすがに呼び捨てする訳にはいけませんわ。えーと、そのウェントゥス…さん？」
橙の色眼鏡を掛けているせいか、表情が読み取りにくいが、ウェントゥスがにこりと微笑む。
「ウェントゥスさんって、メイジにしては随分と変わっているんですね。立ち振舞いは貴族みたいな気品があるのに、その、あまり他の貴族みたいに威張り散らさないと言いますか」
「何、メイジとて平民と同じ人間さ。刺されれば同じ赤い血を流し、夜になれば眠り、年が経てば老いる。そして日が真上に昇れば……」
その時ウェントゥスの腹がぐぅと鳴る。
「腹が減るものさ」
シエスタは思わず笑ってしまった。つられてウェントゥスも笑う。
シエスタは持っていた紙の包みを開くと、それをウェントゥスに差し出す。
「サラダをタコスにしたものです、どうぞ召し上がってください」
「ああ助かるよ。どんな偉大なメイジでも、空腹に打ち勝てる魔法など唱えられないのだからね。その点で言えばきみの方がメイジよりずっと偉大と言えるかな？」
ウェントゥスはそう言って、包みからタコスを手で受け取り、かぶりつく。
焼いたトウモロコシの生地がパリリ、と小気味良い音を響かせる。
シャキシャキと立った細切れの野菜が零れそうになる。
ゴロゴロとした海の幸に絡むアップルビネガーの香りがまた食欲

をそそる。
　手づかみで豪快に食べるウェントゥスだが、やはりどこか気品が漂い、絵になるとシエスタは感じ取り、思わずその食べっぷりに見とれる。
「とてもおいしかったよ。やはりこの村の料理は絶品だな」
　すっかりタコスを平らげてしまったウェントゥスは満足そうな顔をする。
「気に入って頂けたようで、よかったですわ」
「さて、一休みもした所で、また少し見回りをするか」
　ウェントゥスは羽を休めていた黒鷲の頭を軽く撫でると、黒鷲は頷き、また大空へと飛び上がった。
　紙の包みを丁寧に折りたたんでいたシエスタがウェントゥスになんとなく聞いてみた。
「あれから何かわかりました？集められている傭兵たちが何をするか」
　ウェントゥスは突然、真剣な表情になる。
「いや、ここ数日は目立った動きは無いな。二千人程の傭兵どもが今ラ・ロシェールに留まっているようだが、何か事を起こす様子もない」
「王宮の方はこの事を御存じなのでしょうか？」
「匿名でだが、何度か知らせている。流石に今は知るべき者に知れているだろう。王宮の方も特に動きを見せていないから、危惧するような問題では無いのかもしれないな。だが用心する事には越したことがないな」
「……ウェントゥスさんはなぜそこまでして、この村の事を気にかけてくれるのですか？」
「ん？なぜ、と言われてもな……最初はとある私の大切な者の力になりたくて、成り行き上でここに辿りついてな。そして、偶然が重なるものなのか、ここが我が友に縁がある地と知り、少し興味を持ったと言うのもあるな」

「友、ってブロントさんの事ですか？」
「そうとも、我が友であり、もっとも憧れている人物さ。そして彼には返しても返しきれぬ恩がある。その彼の姉が治めたと言うこの地に何かがあっては、私は友に顔向けできんよ」
シエスタはそれを聞いて、なんだか自分の事みたいに嬉しくなった。
「やっぱりブロントさんって凄いですよね。わたしも何かあの人に憧れちゃいます。でもあの寺院でびっくりしました、まさかこの村の領主様の弟さんだっただなんて」
ウェントゥスは突如、思い出したかのように手を叩く。
「ああ、そうだシエスタ君。前から聞こうと思っていたのだが、あの寺院いざという時に、村の避難場所として使えそうかね？」
「ええ、大昔にそういう使い方もしていたそうですよ。頑丈な石造りなので、あの大きな扉を閉めてしまえば、下手な砦よりも安全だとか」
ウェントゥスは「ふむ」と答えると、その場に座り込み、目を瞑った。
使い魔と視界を共有し、トリステインを上空から見渡す。
そして空の遥か彼方に小さく浮かぶアルビオンを見つめて、小さく呟く。
「さて、どう動くか……レコン・キスタよ……」

第２３話　「いきなりトリステインの危機」

ゲルマニア皇帝、アルブレヒト三世と、トリステイン王女アンリエッタの結婚式はゲルマニアの首都ヴィンドボナで行われる運びであった。

式の日取りは三日後のニューイの月の一日に行われる。

そして本日、新生アルビオン政府の客を迎えるため、トリステイン艦隊がラ・ロシェール上空にて停泊していた。

昼の刻を過ぎた頃、空の彼方から『レキシントン』号率いるアルビオン艦隊が静々とラ・ロシェール上空へと降下してきた。

「『ロイヤルゾヴリン』号、いや、今は『レキシントン』号か。こうしてトリステインのフネとも並ぶと、流石アルビオン最大の艦といったところだな」

タルブの砂浜でウェントゥスは一人呟いた。

タルブの村に滞在してひと月近くになるウェントゥスは、この親善訪問の行く末を固唾呑んで見守っていた。

側に立つ黒鷲の使い魔の視界を借りて、ウェントゥスの目には各艦隊の様子が鮮明に映る。

「やはり、戦力差で言えば、トリステインだけでは圧倒的に不利だな」

ラ・ロシェール上空に並ぶ両国艦隊の性能、数、操舵の技術を見比べれば、その差は歴然だった。

空軍艦隊のみならず、地上軍でもトリステインはアルビオンのものより遥かに劣るだろう。

トリステイン王国の軍備は貴族を主軸としているため、流石にメイジの質と数ではハルケギニア随一の座は譲らないが、貴族連盟を通じて貴族メイジの数を増やしたレコン・キスタも負けてはいない。

「しかし、あと三日もすればトリステインとゲルマニアの軍事同盟

が確固たるものになる。そうすればあの叛徒どもも手がだせないだろう。そしてその時、アンは…」

ウェントゥスはその先を口に出さず、呑みこんだ。

トリステインが現状のアルビオンに対抗するためには、これが最善の策であると散々自分に言い聞かせていた。

しかし、アンリエッタの式の日が近づくにつれ、何ともいえぬ焦燥感にウェントゥスは悩まされていた。

その気持ちを察したのか、黒鷲が「クァ……」と寂しそうに鳴き、主人の腕をその嘴でつつく。

「ああ、大丈夫だ。ただのつまらない未練だ。わかっているさ、今の彼女を迫りくる敵から守ってやれるのはこの杖を握る手ではなく、ゲルマニアの兵力だ」

実際、帝政ゲルマニアの兵質はトリステインとは対極に、平民の兵士を数多く揃えている。

金を積めば誰でも貴族の地位を買う事ができると言ったハルケギニアでは異例な政治体制を取っているため、金払いの良い軍人を目指す平民も数多く、それがメイジの少ないゲルマニアの戦力を底上げしている。

メイジ主体のトリステインと兵士主体のゲルマニアが同盟を結べば、新生アルビオンが脅かす事は実質不可能であるのは歴然である。

（……ハルケギニア統一を謳うレコン・キスタが、このまま黙って指を加えて式を見過ごすはずはないとは思ったが、こうしておとなしく訪問に応じるからには、トリステインが軍事同盟を結んだ事で諦めたのか？）

その時、『レキシントン』号の大砲から火が噴き、煙が上がる。

実弾は込められていない、火薬を爆発させるだけの礼砲だ。

数秒の間をおいてから、鈍く、重い爆音が遠く離れたウェントゥスの耳にも届く。

ビリビリとした振動が肌で感じ取れる程だ。

（アルビオンの時とは違うカノン砲を載せているな。統一の野望を

諦めた所が、新型の大砲を引っ提げて親善訪問にやってくるものだろうか？）

いよいよきな臭くなってきた、と感じたウェントゥスは使い魔を促し、ラ・ロシェール上空へと飛ばした。

黒鷲の目を通じて、アルビオン艦隊を間近で見たウェントゥスは奇妙な点に気がついた。

新型の艦隊を揃えたアルビオン艦隊の最後尾に、使われなくなって久しい旧型艦『ホバート』号の姿があった。

（新型大砲を搭載して、威圧目的の砲艦外交であらば、なぜ時代遅れの『ホバート』号を連れてくる必要がある？）

黒鷲を艦隊の周りを旋回させて、『ホバート』号を注意深く観察すると、何やら乗組員の様子がおかしい。

『ホバート』号の乗組員達は退出用のボートに＜フライ＞の魔法をかけ、フネを乗り捨てている。

その時、トリステイン艦隊旗艦の『メルカトール』号が答砲を撃ち始める。

どん、どん、どん、と一定の間隔をおいて『メルカトール』号が空砲撃ち続けていると、突然『ホバート』号から火災が発生する。

『ホバート』号は見る間に高度が下がって行き、艦に炎が広まり、木っ端微塵に爆発した。

『ホバート』号は自分達で点けた火災で、あたかもトリステインの砲撃によって落とされたかの様に演出したのだ。

「馬鹿な！このような事で大義名分を得ようと言うのか、レコン・キスタは！」

ウェントゥスは驚愕する。

すでにこの事態を計画していたか、アルビオン艦隊の『レキシントン』号は既に込められた実弾にて、『メルカトール』号に向けて一斉射撃を行う。

辺りに響き渡る轟音と共に、『メルカトール』号に砲弾が着弾する。

マストが折れ、甲板に大穴が開く。砕け散った木片がバラバラと空に撒かれる。

ウェントゥスは眼下に目をやると、傭兵団の数隊が合流し始め、蟻の大群のように一斉にタルブへと向かっていた。

「ぬかった、傭兵どもの言う『タルブ』とはこの事だったのか！レキシントンの街を占領した様に、今度奴等はタルブを足がかりとするつもりか！」

大洋に面し、フネも直接出来るほどの広い砂浜を有するタルブは、侵略の増援を送り込むのに絶好の場所であった。

王国の防衛隊が守るラ・ロシェールの街と違い、小さな村しかないタルブであれば大した抵抗も受けないであろう事もレコン・キスタは考慮済みなのだろう。

「まずいな、あと数刻もすれば傭兵どもがここにやって来ると言うのに、この様子であれば王宮の方は何も対処していないのだろうな……」

ウェントゥスは口笛を吹き、使い魔を呼び戻すと同時に、タルブの村へと駆けだす。

「急がねば、時間が無い！」

トリステイン王宮に、国賓歓迎のためにラ・ロシェール上空に停泊していた旗艦『メルカトール』号を含むトリステイン艦隊が全滅したとの報がもたらされた。

時同じくして、アルビオン政府から宣戦布告文が王宮に届けられた。

『貴国ハ不可侵条約ヲ無視シ、理由モ無ク我艦ヲ攻撃シタ事ニ、神聖アルビオン共和国政府ハ憤慨ノ意ヲ表ス。自衛ノ為神聖アルビオン共和国政府ハ、トリステイン王国政府ニ対シ宣戦ヲ布告ス』

ゲルマニアへのアンリエッタの出発でおおわらわだった王宮は突然の事に騒然となった。

すぐさま大臣や将軍達が集められ会議が開かれた。

しかし、会議は紛糾するばかりで少しも進展しない。
口々にアルビオンに急使を送りトリステインの先制攻撃が誤解である事を正すべきであるとか、ゲルマニアに急使を派遣し軍事同盟に基づいて軍の派遣を要請すべきであるとか意見はでれども、結論までには達せず、悪戯に時間ばかりが流れてゆく。
会議室にアンリエッタの姿もあった。
これから馬車に乗り込み、式のためにゲルマニアに向かう所であったので、純白のウェディングドレスに身を包んでいる。
アンリエッタは忘れ去られた人形の様に、会議室の上座に茫然とした表情で会議の行く末を見守っている。
「我が方は礼砲を発射しただけだと言うではないか！偶然による事故であると言う事を早急にアルビオンに打診すべきだ！」
「そうだな、全面戦争へと発展する前に、アルビオンに特使を派遣し、双方の誤解が生んだ遺憾なる交戦であったと言う事を明らかにして置くべきだ」
現状の政務を取り仕切っているマザリーニ枢機卿も、このアルビオンに特使を送る案に頷き、賛同した。
その時、急報が入った。伝書フクロウによってもたらされた書簡を手にした伝令が会議室に飛び込んだ。
「急報です！アルビオン艦隊は降下して占領行動に入りました！」
「場所はどこだ？」
「ラ・ロシェール近郊のタルブの砂浜のようです！」
「なんだと！？よりによってあのタルブだと！？確か領主が不在の地であったな。これはやっかいだぞ」
伝令はまだ続ける。
「なお、身元不明の傭兵の数隊が同じくタルブへ向かっているとの事です！」
「傭兵団だと？王宮が傭兵を雇い集めていたとは聞いてないぞ。貴殿は知っておりましたか？」
隣に座る有力貴族に、話を振られた白髪の老獪そうな印象を与え

る貴族は首を振った。
「さて？このリッシュモン、その様な報告は今まで聞いておりませぬなあ……」

シエスタは幼い兄弟達を抱きしめ、寺院の天窓から空を不安げな表情で、炎の様に赤く染まる夕焼けの空を見つめていた。
先ほどウェントゥスの報を受けて、タルブ村の住人は寺院へ集められていた。
最初は突然の事に家から離れたがらない村人もいたが、アルビオン艦隊から飛来した火竜の騎士隊にドラゴンのブレスで村を焼かれ始めると、皆は異を唱えることなくウェントゥスの誘導に従い、寺院まで避難してきたのだ。
村人の何人かは以前イージスが飾られていた所に向かって祈っている。
中には村の御神体がいなくなったために村に不幸が訪れたと嘆く者もいた。
「何が起こっているの？お姉ちゃん」
幼い弟や妹達がシエスタにしがみつき訪ねる。
「大丈夫よ、すぐに怖い事は終わるわ」
シエスタは兄弟達を安心させようと言ったが、自分自身もぶるぶると震えていた。
ウェントゥスは村の全員が無事寺院に避難できた事を確認次第、寺院の扉を閉め、一人だけ外に出て何かをやっている様だった。
光を取り入れるための天窓しか無いため、中からは外の様子がまったく確認できないが、時折外から不気味な風を切る様な音が聞こえてくる。
ヒュー、ヒューと鋭く鳴る、その身も凍りそうな冷たい音が、シエスタ達の不安を煽る。

夕刻を過ぎても、王宮の会議室では未だに不毛な会議が続けられ

ている。
「やはりゲルマニアに軍の派遣を要請しよう！」
「竜騎士隊全騎をもって反撃してみては？」
「いや、攻撃したらそれこそアルビオンに全面戦争の口実を与えてしまう、ここはやはり特使を派遣すべきだ」
一向にまとまらない会議に、マザリーニも、結論を出しかねていた。
彼は未だに外交による解決を望んでいたが、どうも現状ではそれは難しいようだ。
怒号が飛び交う中、アンリエッタは薬指に嵌めた『風』のルビーを見つめた。
人形の様に黙って佇む自分の姿を今ウェールズが見ていたら彼はどう思うのだろうか？
優しい彼の事だ、アンリエッタを責める様な事は一言も言わないだろう。
軽い冗談の一つも言って、気を紛らわせようとしてくれるだろう。
アンリエッタが大好きだったあの屈託の無い笑顔を浮かべて「なに、心配ないさ。私にいい考えがある」とでも頼もしい事を言ってくれるに違いない。
しかし、彼はもういないのだ。
レコン・キスタの手によって彼はもういなくなってしまった。
「タルブの村、炎上中！なお身元不明の傭兵隊はアルビオンの占領行動に加わったようです！」
その急使の声で、アンリエッタの中に何かが弾けた。
（これ以上、あの者達の好き勝手にさせるものですか！）
アンリエッタは突如立ち上がる。
途端、会議室は静まり返り、一斉に視線は王女へと注がれた。
「姫殿下？」
「あなた方は恥ずかしくないのですか？国土が敵に侵されていると言うのに、同盟だの、特使だのと騒ぐ前にする事があるでしょう」

「しかし、姫殿下、我らは不可侵条約を結んでおったのだ、偶然の事故が生んだ誤解から発生した小競り合いですぞ」

「偶然の事故にしては随分と都合よく、アルビオンに味方する傭兵が集められる事ですわね。もとより条約を守るつもりもなかったのでしょう。時を稼ぎ、我々の虚を突くための口実に過ぎません。アルビオンは明確に戦争をする意思を持って、全てを行っていたのです」

「しかし、姫殿下……」

「我らは何のために王族、貴族と名乗っているのですか？このような危機の際に会議を開くためだとでも言うのですか？ですがこうしている間にも民の血は流され、大切なものを奪われていくのですよ。その力無き彼らを守るために我ら貴族の務めではありませぬか？」

誰も、言葉を返せなかった。

「あなた方は怖いのでしょう？大国アルビオンに反撃をくわえても勝ち目は薄い。そして敗戦後、反撃を率いた者として責任を取らされたくないと。ですが、そうしてアルビオンに恭順して生きながらえ、傷ついた民の前に立ち、尚も貴族と名乗るつもりですか？」

「姫殿下」

マザリーニがアンリエッタをたしなめるが、アンリエッタは言葉を続けた。

「よろしい、ならばわたくしが率いましょう。あなた方は好きなだけこの会議室で踊っていればよろしいですわ」

アンリエッタが会議室を飛び出した。

マザリーニや数名の貴族が王女を押しとどめようとした。

「なりませぬ！姫殿下！お輿入れ前の大事なお体ですぞ！」

「結婚一つで今ある危機を救う事ができますか？今この国を救える者がいるのであれば、連れてきなさい、わたくしは幾らだってその方と結婚してみせますわ！」

マザリーニを押しのけ、中庭にでたアンリエッタは叫んだ。

「わたくしの馬車を！近衛！参りなさい！」

聖獣ユニコーンが繋がれた王女の馬車が引かれてきた。
アンリエッタは馬車からユニコーンを一頭外し、自分のドレスの裾を縦に引き裂くと、ひらりとユニコーンの上に跨った。
「これより全軍の指揮をわたくしが執ります！各連隊を集めなさい！」
状況を知った魔法衛士隊の面々が集まり、一斉に敬礼する。
その様子をぼんやりと見つめていたマザリーニは、天を仰いだ。
彼もいずれアルビオンとは戦になる事は薄々感づいてはいた。
しかしまだ軍備が整わない今、小を切っても負ける戦をしたくはなかったのだ。
そのために時間を稼ぐべくマザリーニが傾注した外交努力も今となっては泡となり消えていた。
姫の言うとおり、今は会議室で騒ぐ時ではない。
国のため、民のためにすべき事があるのだ。
次々と幻獣に跨る魔法衛士がアンリエッタのあとを追って駆け出して行く中、一人の貴族がマザリーニに近づいて耳打ちした。
「枢機卿、特使の派遣の件ですが……」
マザリーニは被った球帽をその貴族の顔に叩きつけた。
「おのおの方！馬へ！姫殿下を一人行かせたとあっては、我ら末代までの恥ですぞ！」

その日の夜、トリステイン魔法学院にて。
明日の朝には、式に出席するために出発すると言うのに、ルイズは未だに詔を完成する事ができないでいた。
自分の詩心の無さを呪うルイズだったが、それ以上にアンリエッタの事を考えると素直に祝福する言葉が思い浮かばなかった。
自室で未だに白紙の『始祖の祈祷書』と睨めっこを続けているルイズを横目に、ブロントは昼間ギーシュのゴーレムの訓練で余った矢を集めて、一つに束ねているところであった。
未だに＜レンジャー＞の扱いが慣れないと言う事で、訓練に使う

ためギーシュは矢を張りきって生成したまでは良いが、百数本程の矢を＜錬金＞したところで精神力を使い果たし、倒れてしまい、訓練どころではなくなってしまったのだ。

そんな訓練の様子を見ていたモンモランシーは呆れて、「ギーシュとはもう別れたから」と何だかんだ言いながらも、ギーシュを部屋まで運び込み、甲斐甲斐しく世話をしているようだ。

矢を一束に纏め終え、鞄に仕舞った時、部屋の窓がコツコツと叩く音がする。

ルイズとブロントが窓に目をやると、大きな黒鷲が窓を嘴でしきりに突いている。

ブロントが窓を開くと、黒鷲は慌てふためくようにバサバサと翼を振りまきながら部屋に入るなり、「クァ！クァ！」と激しく鳴く。

黒鷲はすかさずブロントに飛びかかり、しきりに足の爪でブロントに突きだす。

「おい、やめろ馬鹿！」

「待って、ブロント。足に何か付いているわよ」

ウェントゥスの使い魔の足に、紙が釣り糸で括り付けてあった。

それにルイズが気づいた事を理解したのか、黒鷲はクイックイッと首で頷き、大人しく床に立ち止まり、紙が巻かれた足を差しだす。

ルイズは釣り糸を机にあったペーパーナイフで切り、くしゃくしゃになった紙を広げ、中身を読み上げた。

「えーっと、『タルブにアルビオン軍襲来。村人は寺院に匿い、これを死守す。恥を偲び、友の助力求む　―風より―』って、何ですって！？」

黒鷲は「クァ！」と返答すると、窓枠に飛び上がり、そこから学院の使い魔の宿舎へと滑空する。

「マジでふざけンなよ！」

部屋のドアをバタン！と音を立ててブロントがイージスとデルフリンガーを携えて駆け出す。

「あ、ちょっと！待ってよブロント！」

ルイズも『始祖の祈祷書』を手に取ると、ブロントのあとを追った。

ブロントが寮の塔を降りて外に出ると、先ほどの黒鷲がタバサの風竜シルフィードの頭に乗って、ブロント達を待っていた。

ウェントゥスの使い魔にすでに言い包められたのか、シルフィードはその場に屈み込み、きゅい、と鳴いて、ブロント達に乗るようにと頭で背中を差す。

「シルフィード、何をしているの？」

タバサだった。

キュルケが突然シルフィードを借りたいとしつこくタバサに頼みこんできたので、タバサは渋々シルフィードを呼んだが、いつまで経ってもやってこないので探しに来たのだ。

主人に気づかれないようにこっそりと抜け出して、ブロント達を送るだけのつもりであったシルフィードは慌てふためく。

タバサはシルフィードの角を掴み、建物の陰まで引っ張って行く。

「どういう事？」

「うー、今タルブの村が大変なのね！ブロントさんが行かないといけないのね！早く行かないと、おいしい丸ごとツナがもう食べられなくなってしまうと鷲さんが言っていたのね！」

シルフィードの頭の上に乗った黒鷲が「クァ！クァ！」と鳴く。

「きゅい、お姉さまも気にいっていたあのサラダも、皆全部燃えちゃって食べられなくなると言っているのね！」

タバサはしばらく考え込んで、答えた。

「……なら行っていい」

「本当！お姉さまありがとなのね！あらん、お姉さまはついてこないの？」

「眠い」

タバサは寝間着姿で、眠そうに目を擦っている。

寝ていた所をキュルケに突然叩き起こされたのである。

「じゃ行ってくるのね！すぐ戻ってくるね！きゅいきゅい！」

シルフィードはその巨体を揺らしながら、のしのしとブロント達の下へと歩いて行く。
韻竜の頭に乗った黒鷲が優雅に翼を開いて、タバサに向かって一礼をする。
ルイズとブロントを乗せたシルフィードが飛び立ち、西の空へと向かうのを見届けた。
寮の自分の部屋に戻ろうとしたタバサが飛び出てきたキュルケにぶつかる。
「きゃ、あ、タバサ！シルフィード見つかった？」
「貸した」
「ブロントさんとヴァリエールがこんな夜中に二人きりで出かけたのよ！早く追いかけ……って、ええ！？あんた、シルフィードをこのわたしにだって貸出したりした事無かったじゃない！？どうしたのよ」
キュルケはタバサの肩を掴み、ぐいぐいと揺らす。
タバサは首をかくんかくんと揺らしながらぼそっと呟く。
「貸し借り、これでゼロ」

第２４話［前編］　「追憶の風に抱かれて」

アルビオン艦隊旗艦『レキシントン』号の後甲板から、艦長のボーウッドは鋭い眼をもって、深夜の砂浜を見渡していた。
タルブ攻略が開始されて以来、ボーウッドは卑怯なだまし討ちであるこの作戦への批判も、人間らしい情も、政治的不満もすべて頭から吹っ飛び、ただ忠実なる軍人となっていた。
隣ではクロムウェルが満足気な表情を浮かべて、タルブの砂浜に展開するアルビオン軍の松明の灯りを眺める。
「どうだね、ミスタ・ボーウッド？降下隊は無事、傭兵隊と合流できたのかね？」
「はっ、閣下。先ほどの伝令によれば、砂浜に降り立った三千、それに集められし傭兵隊の一千、合わせての四千が陣を編成中との事です」
「うむ、予定通りだな。それに加え、『支援者』からの水陸両用艦の二隻も間もなく到着するだろう。余が聞いたところ、何でも有能なメイジ達を集めた部隊が乗っているそうだ。戦力として五百、いや……一千と見ていいだろう」
その時、伝書フクロウの伝令を携えた水兵が二人の前に駆け込んできた。
「偵察隊より伝令！申し上げます！ラ・ロシェール方面にトリステイン王国軍が部隊を展開。その数二千。敵隊の中にトリステイン王女アンリエッタの旗印を確認！また、王国軍は明朝の日の出とともにラ・ロシェールを出撃し、タルブにて我々を迎え撃つつもりである、との事です」
「無謀な、制空権を取られ、数でも劣るのに、敢えて野戦を望むとは」
ボーウッドは静かに呟いた。
「この『親善訪問』に、御多忙であろう王女殿下が直々に迎えに出

てくれるのだ、実に光栄な事ではないか。ミスタ・ボーウッド、くれぐれも王女殿下に粗相があってはならない。この『レキシントン』号で持て成す準備をしたまえ。確か、王族には二十一発の『礼砲』が習わしだったな？」

クロムウェルはにやりと不敵な笑みを浮かべる。

言葉に含まれた皮肉の意図を理解したボーウッドは直ちに水兵達に命令を下す。

「左砲実弾装填！夜明けまで半舷交代で待機！」

「左砲実弾装填、アイ・サー！」

ボーウッドは地平線の彼方を見つめ呟く。

「あと数刻で夜明けだな……トリステインの王権もそれまでか……」

ルイズとブロントを乗せたシルフィードは、黒鷲の先導の下、タルブ寺院近くの林に降り立った。

「以前と違って、夜は不気味ね……」

砂浜に灯るアルビオン軍のかがり火が薄らと見える以外、五歩先も見えない暗さだった。

先を歩く黒鷲の姿は闇夜に紛れてその姿が全く見えなくなってしまったが、鳴き声でルイズ達を誘導しているようだった。

シルフィードはきゅい～となんとも弱弱しく鳴き声を漏らし、オドオドとしている。

「図体に似合わず、あんた意外と臆病な風竜なのね」

と言いつつ、ルイズもブロントの腕にしがみ付いている。

「うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り」

「バレる、ってこんな所までアルビオンも展開しているわけないじゃ……もがっ！」

ブロントが咄嗟にルイズの口を塞ぐ。

「もっふぉ、ふろんふぉ、ふぉにふぃふぃふの」

「バレて援軍とか呼ばれて一巻の終わり」

そう静かに囁いた後、ブロントは林の奥を指差す。

松明だろうか、六つ程明かりが揺ら揺らと林の向こうで踊っている。
ルイズは耳を澄ますと、男達の喧騒が聞こえてくる。
『おい、襲撃されているぞ！』
『明かりを消せ！』
『何が田舎の寺院はお宝が眠っている、だ！メイジがいるなんて聞いてないぞ！』
『ぬぐぁ！』
風に吹かれ、木々がガサガサと激しく揺れる。
枝が弾けるような音とともに、明かりが一つ一つ消えてゆく。
やがて、林の中の明かりが全て消え、風も止み、辺りは静寂を取り戻す。
ルイズはブロントに口を塞がれたまま、じっと息を殺した。
シルフィードも茂みの中に頭を隠してふるふると震えていた、もっともその首から下は丸見えだったが。
闇の向こうからルイズ達に歩み寄って来る一つの足音があった。
パキ…パキン…ペキ…
枝を踏み折る乾いた音が次第に大きくなる。
ルイズは杖を抜くと、音が鳴る方向へと向ける。
ブロントもその手を腰のデルフリンガーにあてる。
足音はぴたりと止まる。
代わりにそこから「クァッ」と黒鷲の鳴き声が聞こえ、ばさばさと翼がはためいた。
「敵じゃない、私だ」
闇の向こうから語りかけた者が＜ライト＞の魔法を唱え、その杖の先に光を灯す。
ウェントゥスだった。
彼が着ていたガンビスンが泥だらけになっていた。

所々、茶色かかった赤い染みが付いていた、血だろうか？
「ウェントゥス様！お怪我は！？」
ウェントゥスは首を振った。
「大丈夫、そんな無茶はしてないよ。私が倒れてしまってはタルブの皆を守る者がいなくなってしまうからね。この服に付いているのは、一儲けを試みて本隊から外れ、寺院を狙ったはぐれ傭兵達のものだ」
ウェントゥスは手にした杖を鞘に収めた。
「良く来てくれた、友よ。この通り、私一人では一度に数名の傭兵を相手するのがやっとでね。あまり派手にやって寺院の存在がアルビオン本隊に知られてはまずいので、我ながら姑息な手段だが、夜襲をかけていたところだ」
「見事な仕事だと関心はするがどこもおかしくはない。他にはいにぃのか？」
「先程ので、寺院に興味を持った『信心深い』者たちは全て始末した筈。今確認して貰っている、鳥にしては夜目が利く方でね」
ウェントゥスが上を指差すと、上空から甲高い黒鷲の鳴き声が返ってきた。
「シエスタや、タルブ村の人達は無事なの？」
「ああ、みんな無事に寺院の中に避難している。流石ブロントの姉上が建てただけの事はあるな、並のメイジでは傷も付けられない程頑丈な寺院だよ」
イージス誇らしげな表情を作り、頷く。
「当然じゃの。セラーヌがこれを建てた際、護る事に置いて右に出る者のないこの神楯イージスがその設計に携わったのじゃ。祭礼の場としてより、むしろ砦と呼ぶに相応しいかものう」
デルフリンガーが鞘から少しだけ刃を覗かせる。
「おい、イージス。てめ、仮にもタルブの御神体様だろ。姉御の村が大変だって時に、てめえの自慢している場合か？」
イージスはしかめ面の様な表情を作る。

「わかっておる。まずは村を焼いて回った竜騎兵隊を何とかせねばならぬ。そやつら我が物顔で飛び回っておるうちは、王軍も手がだせぬわ」

ウェントゥスは頷く。

「あれは確かにやっかいだ。制空権を握られたままでは、地上の王軍は火竜のブレスの格好の餌食になるだろう。時折、王国も竜騎兵を送っているようだが、あの方法ではハルケギニア最強を誇るアルビオン竜騎兵隊を打ち破れるわけがない」

イージスはにやりとする。

「ほう、流石少数にて大軍を相手にしていた事がある者じゃのう。そう言うからには何か良い方法があるのじゃな？」

「……寡兵を以って大軍を制す、か。そうだな、こちらも風竜があれば手が無い事もないが……」

茂みに頭を隠して震えているシルフィードに一同の視線が集まる。

「きゅい！？」

じっと見つめられる熱い視線を感じたシルフィードが首をぶんぶんと横に振る。

イージスはワザとらしい程に悲しそうな表情を作る。

「乗り気ではないようじゃの。仕方ないのう、このままタルブの裏名物、『トゥーナのかぶと煮』が二度と食せぬ様になってしまうとは、至極残念じゃ」

シルフィードの目がキラリと光る。

「ピリリとジンジャーがきいた甘辛い秘伝のタレで、骨から肉が蕩け落ちる程までに煮込んだ丸ごとのトゥーナの頭。このレシピを守ろうと、我こそはと立ちあがる風竜はおらぬのか……私が口利きすれば村の者は喜んで作ってくれるだろうに」

「きゅい！きゅい！」

シルフィードは嬉々として自分の事を指差した。

「おお、勇気ある決断！そちの様に勇敢なる風竜が、名乗り上げた事に、私は感動を禁じえない！」

「きゅい！きゅい～！」
大げさに演技するイージスを見て、デルフリンガーがハバキを鳴らして笑う。
「へっ、イージス、口先で丸めこむなんてよ、前からてめのそういう狡賢い所が気に入らねえんだよ。大体よ武具なら……」
「デルフや、潮風に当たるとそちの輝く見事な刀身に良くないのう。しっかりと鞘に収まると良いぞ」
「お？そうか？そうだな、おい相棒、俺様をしっかりと鞘の中にしまってくれ、隙間から潮が入ってこねえようにがっちりとな！」
ブロントは言われたように、デルフリンガーを鞘にがっちり嵌め、更に留め金をしっかりと掛ける。
ウェントゥスが軽く笑う。
「ハハハ、さて。緊張がほぐれた所で、急ごうか。夜が逃げてしまう前に始めなくてはな。友よ、弓はどれ程扱える？」
ブロントは首を横に振りながらカバンから弓と矢筒を取り出す。
「俺は弓術はどちかというとまったく使えないのだが」
ブロントの背中に背負われたイージスが呟く。
「あまり謙遜するでない。その左手の紋様があれば、そちも一流の狩人以上に弓を使えるはずじゃ」
「それは頼もしいな。うむ、そうだな、これで行こう」
ウェントゥスは思いついた作戦の内容を皆に伝える。
ルイズが少し不満そうな顔をする。
「ウェントゥス様、それは、少し卑怯じゃないかしら？」
「さあな、私は貴族ではないからな。空賊流儀で言えば、不意打ちだまし討ちは基本でね」
ブロントは頷く。
「先に違法行為で仕掛けてきたのが奴等だろ。俺は今のところ我慢してるけどいつ怒るが爆発するかわからない」
「そ、それもそうね」
ルイズ達はシルフィードの背に跨る。

「よし、行くぞ。ええと、何といったかな……まあいい、飛び立て『イーグル』号よ！」

「きゅい！？きゅい！きゅい！」

『イーグル』号と呼ばれたシルフィードは何やら否定をするように両手をぶんぶんと振る。

「ハッハッハッ、気にいったか！よし、『イーグル』号、微速浮上」

「きゅい～……」

シルフィードは主人のタバサ以外に人語で語る事を固く禁じられており、名乗り上げ正す事もできなかったので『イーグル』号と呼ばれるのを受け入れるしかなかった。

後でたっぷりとツナの頭をお腹いっぱい食べさせて貰うんだから、と自分に言い聞かせてシルフィードは音を抑えてゆっくりと飛び立った。

タルブ上空。

ハルケギニア最強の竜騎兵隊と謳われるアルビオン竜騎兵は旗艦『レキシントン』号を中心として、タルブの上空を巡回していた。

その数およそ二十騎。

暗闇の空の中、竜騎兵隊は互いに＜ライト＞の魔法を用いて連絡を取り合っていた。

『日ノ出ト共ニ、トリステイン軍ハ総攻撃ヲ仕掛ケテクル。警戒ヲ怠ルナ』

杖の先の光りを点滅させる法則は軍によって違い、空の覇者たるアルビオン竜騎兵のそれは、他国軍に手の内を読まれぬ様にともっとも複雑を極めた暗号ですらあった。

南の空に、チカチカと光が瞬く。

『東ノ空ニ敵竜騎兵斥候ガ飛来。各騎散開シ、追跡セヨ』

『レキシントン』号の周りを旋回していた竜騎兵はその信号を次々と他の竜騎兵に伝え、『レキシントン号』を離れ散開する。

またチカチカと光が瞬く。

『敵艦隊ヲ上空ニ発見。上空カラノ奇襲ニ警戒セヨ』
一人の竜騎士が上空を見上げる、
（夜に乗じて艦隊を用いた奇襲？トリステインはまだ艦隊をもっていたのか？）
「クァッ」
鳥の鳴き声が耳の横を掠める。
その時、一陣の風が隊員の頬を撫で、鈍い振動がその竜騎士の体に伝わる。
（な、何だ？高度が落ちているぞ。どうした！？）
騎乗した火竜を見ると、その首は穴をあけて抉られており、矢が矢羽根まで深く刺さって絶命していた。
きりもみしながら騎士は火竜ごと、タルブより離れた東の草原に、静かに墜落していった。

ウェントゥスは＜ライト＞の魔法で、アルビオン竜騎兵の暗号を用いた嘘の信号を空に送る。
アルビオン空軍の暗号を熟知していたウェントゥスの偽の信号であるとも知らず、撹乱されたアルビオン竜騎兵は空を右往左往と飛び回り、ひたすら上空を警戒し、低空で羽音もたてずに滑空するシルフィードには気が付いていない。
「友よ、いい腕だ。『イーグル』号、旋回して先程と同じ針路を戻れ」
ウェントゥスに＜サイレント＞の魔法をかけられたシルフィードは静かに距離を取り、旋回する。
「クァッ」
単独で飛行する竜騎兵を目標として捉えた黒鷲が合図の鳴き声を送る。
ウェントゥスはブロントの肩を叩く。
「上方四十度、左に二十五度。微調整は私の風でやる」
ブロントは頷き、左手にローゼンボーゲンを構える。

左手のルーンから、弓術に関する技術の全てがブロントの頭に流れ込む。
魔法すらも凌ぐ程の威力を秘めた狩人の技が、体中に刻みこまれる。
ブロントの目が鷹の様に細くなり、上空に浮かぶ火竜の影を狙う。
固く張られた弦に矢を掛け、引き絞る。
弓を握る手がバチバチと電流がほとばしる。
「ウィンデ！」
ウェントゥスが杖を振ると、火竜へと繋がる風の通り道を作る。
ブロントはその作られた風の道に矢を乗せて放ち、矢が火竜へと吸い込まれ、突き刺さる。
「次、上方三十二度。正面だ。ここからでは首が見えない、翼を狙えるか？」
「隠された力を発揮する披露宴となる」
ブロントは矢筒から四本の矢を右手の指それぞれに挟むと、それを纏めて同時に射掛け、矢の＜乱れ撃ち＞を放つ。
散弾の様に放たれた矢が、火竜の翼に穴をあけ、片翼を破かれた火竜はぐるぐる回転しながら地面へと落ちてゆく。

次々と落ちてゆく竜騎兵に、不振に思い始めた竜騎兵が信号を送る。
『敵襲ヲ受ケテイルノカ？正確ナ情報ヲ報告セヨ』
ウェントゥスが杖で光りを送る。
『コチラハ異常ナシ、北ノ空二不審ナ動キアリ』
闇の向こうから返答が返って来る。
『ソノ方ノ所属ト名前ヲ名乗レ』
『雷ヲ運ビシ風ノ＜ウェントゥス＞』
竜騎兵が次の行動へと移れる前に、ガクンと火竜が右に傾いた。

火竜の右翼が矢によって胴体に縫い付けられていたのだ。
「くそ、トリステインの空に一体何が潜んでいるというのだ！うぉおおおお！」
騎士は雄たけび上げながら草原へと墜落していった。

タルブの遥か上空に浮かぶ『レキシントン』号。
クロムウェルは、艦に取り付けられた水時計を確認する。
「間もなく夜明けだな。ミスタ・ボーウッド。君は実に運が良い。二つもの王権が潰える所をその目で見る事をできるなど、そうそうない事だぞ」
ボーウッドは表情を一つ変えずに白む空を見つめていた。
彼は軍人として、何とも言えぬ違和感があった。
空がやけに静かだった。
艦の周りを巡回する火竜のきりきりと響く鳴き声が静まっている。
トリステイン軍の総攻撃に備え休憩を取っているのだろうか？
いや、展開している竜騎兵に艦に帰還する命はまだ誰も出していないはず。
（竜騎兵隊はどうした？姿が見えないぞ）
その時、伝令の水兵が飛び込んでくる。
「差出が『支援者』と書かれた閣下宛ての伝書です！」
クロムウェルはにこやかに笑顔になる。
「おお、遂に水陸両用艦隊が到着したのか？よい、読み上げたまえ」
「はっ！」
伝令は伝書を広げ、高らかに読み上げる。
『支援者ヨリ送ラレシ我ガ艦隊ハ、オルレアン上空ニテ、『ブラックコフィン』号名乗ル空賊ニ襲撃サレシ。拿捕ハ免レタガ、両艦共ニ小破。作戦続行不能トノ判断ニヨリ帰還ス。『親善訪問』作戦ノ成功ヲ祈ル』
「なんと、ここまで来て空賊とはついてないな。仕方あるまい、我々だけでも十分に戦力でトリステイン軍を上回っているのだ。予定

には変更はないな、なあミスタ・ボーウッド？」
　クロムウェルがそう問いかけていた時、ボーウッドは別の伝令が渡したであろう伝書を読んでいた。
「何かあったのかね？」
「どうやら、昨晩のうちに竜騎兵隊が夜襲にあったようです。展開していた二十騎がいつの間にか撃ち落とされた、と」
　クロムウェルは驚愕する。
「誰にも気取られず、アルビオンが誇る竜騎兵隊を撃ち落とせる精鋭を、トリステインは持っていたとでもいうのか？」
「生存した者の証言によれば、『風の如く忍び、雷の如く穿つ』謎の魔物が空に潜む、とあります」
　クロムウェルは両手を広げ、頭を振る。
「馬鹿な、魔物などいるものか」
「ええ、しかし空中戦を熟知した相当な手錬がいたのは確かでしょう」
「子爵はどうした、彼も落とされたのかね？」
「いえ、報告では子爵殿の風竜は被害に含まれておりません。しかし、艦内にも子爵とその風竜の姿は無いようです」
「ふむ……まさか子爵が？いや、それは無いか。あのワルド子爵であろうと、流石に竜騎兵二十騎を相手にする空の技量は持ち合わせていないはず。それに一度裏切った祖国にまた加担する意味が無い」
「閣下、竜騎兵隊は全滅しましたが、本艦『レキシントン』を筆頭に、艦隊は未だ無傷です。ワルド子爵も彼なりに何か策があるのだろう。作戦の続行に何も支障はありません」
「そうであったな、ミスタ・ボーウッド。大事の前の小事に気を取られてはいかぬな。例え竜騎兵を落とす魔物がいようと、この艦隊の艦砲射撃を止める術はないからな。おお、夜が明けるぞ」
　地平線から太陽が覗かせ、明るむ大地と共に、陣を組むトリステイン軍の姿を露わにした。
　ボーウッドは艦に命令を告げた。

「左砲艦砲射撃用意！寝ている者は全員叩き起こせ！」

タルブ上空。

「何とか夜明けまで竜騎兵を全て潰す事ができたみたいだな」

シルフィードに跨るウェントゥスが白む空を見て呟いた。

一番前に座っていたルイズは驚いた表情で、地に落ちた竜騎兵を見渡した。

「信じられないわ、竜騎兵隊をこんな方法をもってたった一騎で倒しちゃうなんて。空賊流と言うのも凄いのね」

ウェントゥスは笑う。

「ハハ、今回は良い条件がたまたま揃っていたからだよ。これほどの利がいつもこちらにあれば空賊稼業も楽なのだがね。それに大局を動かすほど事ではないさ。上空に浮かぶ艦隊がトリステインにとっては大きな脅威であるのは依然変わりない」

ブロントが黙って、煙を上げ、焼け落ちたタルブの漁村を眺めていた。

潮の香りが混じる家屋の焼けた臭い、立ち上る煙と揺らめく海がブロントの心を揺さぶる。

今にも血が逆流し、頭の先を突き抜けて行きそうな感覚であった。

「どうしたの？ブロント」

「なんでもにい」

ブロントの左手が激しく火花を散らしている。

辺りの偵察に飛ばした黒鷲の目を借りて、ウェントゥスは目を瞑っている。

「ようやくトリステイン側も到着したようだな……何故だ！？」

突然ウェントゥスは声を荒げる。

「何故先頭の旗印がユニコーンと水晶の杖なのだ！？」

「え……それってもしかして姫さまの……？」

「ゲルマニア軍の到着を待たずに、アン自らが軍の先頭に立ち、戦

場に赴くとは……、察するにゲルマニアは援軍を出すのを渋ったのだろうな……」

ルイズは心配そうに尋ねる。

「勝ち目はあるの？」

「難しいな、アルビオンの半数程の王軍しか集められていない。何より上空のアルビオン艦隊がいては万に一つも可能性は無いだろう。せめて艦砲射撃を遅らせる手立ては……くそ、あれだけの艦隊を一度には無理だ！」

ブロントはウェントゥスに背中を向けたまま語りかける。

「おいィ？お前それで良いのか？」

「良くはない！アンリエッタを護るべきものがあそこにいないのだぞ？ゲルマニア軍も、王宮の国軍も！あのままでは、アンリエッタは……」

「最強の義務は最強のプレッシャーとなって襲いかかってくる。お前それで良いのか？」

「友よ……一体何を」

「お前はこんな所で俺に話したりする余裕があるのか？」

ウェントゥスははっとした顔になった。

ブロントの背中に背負われたイージスがウェントゥスに面と向かって語る。

「彼女を護るべき者なら、今ここにおるではないか」

「しかし、私がアンを……今更そのような身勝手は……」

「なんじゃ、不意打ちだまし討ちが得意な空賊流を見せた者が、今更その様な事気にしておるのか。空の無粋な者共が気になるのなら心配は無用じゃ。このタルブを護りし神楯イージスが言うのじゃ、任されよ」

ウェントゥスは強く唇を噛む。

「……いいのか、この私が、この手で……？」

「お前がいないアんリエッタに未来はにい」

ブロントはウェントゥスの襟を掴み、シルフィードから放り投げ

る。
「ちょ、ちょっとブロント！」
ルイズが慌てふためくが、ウェントゥスは動じず、落ちながら＜フライ＞の魔法を唱える。
ウェントゥスは晴れ晴れとした笑顔で、飛び去るシルフィードに向けて叫ぶ。
「友よ！また大きな借りができてしまったな！そちらは任せたぞ！」
黒鷲が勇ましく鳴き、ウェントゥスの高らかな笑い声が轟く。
「さあ、行くぞ！この恥知らずのウェントゥス、今参る！」
黒鷲は主人の手を引き、王軍の下へと羽ばたいていった。

「と言ったものの、イージス、本当に何とかできるの？あれ」
ルイズは空の艦隊を指差す。
「逆にそちを問おう。そちはその祈祷書を持ちながら、何をしておるのじゃ？」
「……悪かったわね、何もできない『ゼロ』で」
「では何故この戦場に来たのじゃ？何かを成し得たかったのではないのか？」
ルイズはうー、と唸る。
「わたしだって、何とか姫さまの力になりたいと思っているわよ。でもブロントみたいに戦える訳ではないし、ウェントゥス様みたいに知略があるわけでもないわ」
イージスが威厳を込めて笑う。
「ホッホッホッ、そちが如何なる能力を持っているか等些細な問題じゃ。肝心なのはそちが、相手をどう想ってやり遂げるかじゃ。それを踏まえて、今一度祈りでも捧げてみれば良かろう」
（姫さま……わたしは……）
ルイズはふとポケットの中に入れたあったアンリエッタよる譲り受けた水のルビーをそっと指に嵌めた。
（わたしは、ただ祈る事しかできないの……？）

ルイズが何気なく、始祖の祈祷書を開いた時、ルビーと祈祷書が光り輝きだした。
「な、何よこれ！？」

第２４話［後編］　「追憶の風に抱かれて」

上空のアルビオン艦隊へと向かって行く中、ルイズは手にした光る祈祷書の中に文字を見つけた。
空白のページにルーン文字が浮かび上がっていた。
ブロントの左手に書かれたものと似た、古代文字がページを埋めるように現れたのだ。
古代ルーン文字の授業で習った事を思い出しながら、ルイズはたどたどしく文字を読み説いていった。

序文。
これより我が知りし真理をこの書に記す。
この世のすべての存在は、虚ろを宿る。
四の系統はその虚ろに干渉し、影響を与え、かつ変化せしめる呪文なり。
その四つの系統は、『火』『水』『風』『土』と為す。

ブロントはシルフィードに指示を出し、ぐんぐんと『レキシントン』号へと近寄るように飛ぶ。
「用心じゃ。そろそろ相手も我等の存在に気が付いておる」
「艦隊の魔の手がのぶて来ている以上、艦砲射撃からはのげられない。このままじゃ下の奴らは全弾受ける羽目になる。迷っている時間が惜しいだろ」
ルイズは静かに高なる鼓動で、さらにページを捲る。

神は我にさらなる力を与えられた。
四の系統が影響を与えし虚ろは、虚ろなる闇より為る。
神が我に与えしその系統は、四の何れにも属せず。
我が系統は虚ろなる闇に干渉し、影響を与え、かつ変化せしめる

呪文なり　。
四にあらざれば零。
零すなわちこれ『虚無』。
我は神が我に与えし零を『虚無の系統』と名づけん。

「きゅ、きゅい～」
『レキシントン』号に近づいてきたので、シルフィードが不安げに鳴く。
一隻で空を覆い尽くさんばかりの影は圧巻であった。
「ブロント、艦の注意を惹き付け、地上の者達のために時間を稼ぐつもりなのであろう？」
「ほうお前はなかなか解っている様だな」
「ならば、あの巨艦の左舷前を飛ぶが良い」
「ちょとシャレならんしょそれは……？危険に晒すなら本人に断ってやれよ」
ブロントはバシバシとシルフィードを手のひらで叩く。
シルフィードの方は「嫌だ！」と示すように首を横に振る。
「今あの巨大艦は地上軍に攻撃を加えるために砲弾を装填しておる。しかし、その砲弾を飛竜に当てる事は至難の業じゃ」
「そうか」
「そして、このような艦では竜騎兵に接近されし時は、同じく竜騎兵を出撃させるか……散弾に込め直すのが定石じゃ」
ブロントは片眉をあげた。
「ほう。動きをコントロールしさらに時間までコントロールしていることにも気付かせずにタイムアップさせる事になる」
「そう言う事じゃ。今、王軍を射程距離に捉えておるこの巨大艦はそれで時間を稼ぐ事できるじゃろう。しかし、他の艦もその距離を詰めてきておる。それらが配置についてしまえば流石に全ての艦を止められる術はない、困ったものじゃ、のうルイズ？」
イージスは敢えてルイズに話をふる。

こんな時でも、ルイズは祈祷書をめくる手を止める事ができず、祈祷書に目が釘付けになる。

これを読みし者は、我の行いと贖罪と器を受け継ぐ者なり。
またそのための力を担いし者なり。
志半ばで倒れし我とその同胞のため、『世界の終わりに来る者』を『聖地』に封じるべき努力せよ。
『虚無』は強力なり。
また、その詠唱は永きにわたり、多大な精神力を消耗する。
詠唱者は注意せよ。
時として『虚無』はその強力により命を削り、器に潜みし虚ろなる闇を増幅させる。
したがって我はこの読み手を選ぶ。
たとえ資格なきものが指輪を嵌めても、この書は開かれぬ。
選ばれし読み手は『四の系統』の指輪を嵌めよ。
されば、この書は開かれん。

ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ

以下に、我が扱いし『虚無』の呪文を記す。
初歩の初歩の初歩。『エクスプロージョン』

「まさか……伝説、伝説の系統じゃないの！？……でも始祖ブリミル、あんたヌケてんじゃないの？この指輪がなくっちゃ祈祷書は読めないのに、その読み手とやらも……注意書きの意味がないじゃないの」
はたと気づく。読み手を選びし、と文句にある。という事は……。
よくはわからないが、自分がその選ばれし読み手なのか？
今までルイズが呪文を唱え、爆発し、『失敗』だと思ってきたものも、実はここに書かれた『虚無』だったのではないのか？
信じられないけど、そうなのかもしれない。

とにかく今は他に自分が出来る事はない。
試してみる価値はあるかもしれない。
ルイズの頭の中が、すぅっと冷静に、冷やかに、冷めていく。
先程眺めた呪文のルーンが、まるで何度も交わした挨拶の様に、滑らかに口をついた。
「おや、詔の一つでも詠めるようになったかの？」
「……イージス、あんたもしかして、この事知っていたんじゃないの？」
イージスの高笑いがする。
「ほっほっほ、風が強くて良く聞こえなかったぞ？それより詔が出来上がったのであらば、早速聞かせて貰おうかの？」
「イージス、あんたって……まったく、デルフの言うとおりね。まあ、いいわ。伝説やら神楯を名乗るあんたがそう言うのなら、ここは騙されてやるわ。本当に伝説かどうか見てやろうじゃない！」
ルイズは息を吸い込み、目を閉じた。
それからかっと見開く。
『始祖の祈祷書』に書かれたルーン文字を詠み始める。
精神が研ぎ澄まされ、ルイズの視界から不必要な情報が排除される。
眼前に並ぶ『レキシントン』号の砲門も、ルイズ達を発見し甲板から騒ぎ立てるアルビオン水兵達も、地上に並ぶアルビ　オン軍も、それに迫るトリステイン王軍も。
ルイズは浮かび上がる呪文を朗々と詠み上げる。

「姫殿下！前に出過ぎすぞ！お下がりくだされ！」
馬を駆けるマザリーニ枢機卿は、王軍の先頭を疾走するアンリエッタ王女のユニコーンに追いつこうとしたが、マザリーニが乗る馬は激しく息を切らせるばかりで、ユニコーンとの距離が縮まる気配すらない。

訓練された軍馬でも、幻獣ユニコーンの健脚に敵う筈がなかった。
城を出撃してからというもの、トリステイン王軍はろくな休憩も取らずに、一晩中駆け抜けた。
通常の行軍であれば、定期的に小休止を挟むものだが、止まらずにどんどん進んで行くアンリエッタを放っておいて、のんびり小休止を取れる筈がなかった。
だがそれ以上に、狂信的とも言えるアンリエッタの気迫によって近衛隊や王宮の貴族達はぐいぐいと引っ張られ、定石である小休止を取る事すらみんな失念していた。
砂浜に陣取るアルビオン軍が視界に入った時から、アンリエッタは冷静ではなくなっていた。
いや、出撃した時から、自分の感情に身を任せ、冷静ではなかったのかもしれない。
アンリエッタはちらりと空を仰ぐと、並ぶアルビオン艦隊を確認した。
まだ砲撃してくる気配がない。
地上の敵陣を見れば、数で言えば王軍の倍程もあった。
そして、そのアルビオンの先陣を飾るのが装備を統一してない各種傭兵隊だった。
トリステイン王国内で集められたと思われる傭兵達は、金のためならば容赦なく王女にでも刃を向けるだろう。
（わたくしが築きあげた信頼は悉く奪い去られたというのに、敵は金子でその信頼をいとも簡単に手に入れている。わたくしは一体何をもって人を信頼すれば良いのでしょうか……）
単騎で突出したアンリエッタに気付いたのか、先陣の傭兵達がわらわらと群がり、弓を構える。
アンリエッタはユニコーンを止め、素早く杖を構えた。
＜ウォーター・シールド＞を唱え、正面に水の壁を作りだす。
次の瞬間、矢がアンリエッタを狙って降り注ぐ。
厚く張られた水の壁が矢を飲みこみ、一瞬にして矢の塊になる。

外れた無数の矢が砂浜に突き刺さり、ザァッと音を立てる。
「急げ！姫殿下をお守りせよ！『水』メイジ！『風』メイジ！ええい、誰でも良い！早く殿下のもとへ！」
離れた後方から叫ぶマザリーニの声が聞こえる。
アンリエッタはようやく今戦地に立っているのは自分一人だけであった事に気がついた。
今この場で自分を守ってくれる者は自分しかない。
後方にいる『仲間』も、本当に『信頼』できる者はいるのだろうか？
ここにこうしてついてきた貴族達も、ただ自分達の名誉を守るためではないのだろうか？
次の矢に備えアンリエッタは、水の壁を作り直す。
（ウェールズ様、貴方もこの様な孤独の中でも勇敢に戦ったのですか？わたくしはこうして自分が傷付かない様に、自分を守るだけでも精一杯だというのに……）
水の壁を維持するため、他の魔法が詠唱できず、守り一辺倒で、水の壁で自分自身を閉じ込める事しかできないアンリエッタは戦場の真ん中で酷く孤独に感じた。
自分が傷付かない様に、王宮で人形の様に振舞っていた自分と何も変わっていないのではないか？
「姫殿下！右に敵分隊が！」
「えっ！？」
アンリエッタの右方向には弓を構える傭兵が数人立ち並ぶ。
前に張られた水の壁の死角から射るつもりなのだろう、実際に前方以外は無防備であった。
だが、右に水の壁を張る訳にもいかない。
そのためには水の壁を張り直さなければいけないが、その隙がまったく無い。
「殿下ーッ！」
マザリーニが叫ぶ、しかし近衛隊を含め、間に合わない。

無情にも傭兵達が射掛け、　アンリエッタの横から数十本の矢が迫りくる。
「ウェールズ様……今より、貴方の下に参ります……」
アンリエッタはそう呟き、そっと静かに目を閉じる。

突如、背後から風が吹き、それがアンリエッタを包み込む。
懐かしい感じがする、暖かい風だ。
「クアッ！」
バサバサと翼をはためく音がする。
アンリエッタはそろりそろりと目を開けると、目の前には黒鷲がユニコーンの頭に上に器用に立ち、アンリエッタに会釈をしていた。
自分の周りに張られた＜エア・シールド＞が矢を全て弾いてくれたのか、どこも怪我をしていない。
「待ち合わせに随分と遅れてしまったようだね」
背後から聞きなれた声がした。
「……あ、……あ」
そんな筈はない、自分は死を目前にして夢を見ているのだろうか？
サク、サク、サク。
砂を踏む音がアンリエッタのすぐ傍まで近寄って来る。
恐る恐るアンリエッタは振り向くと、そこには泥汚れにまみれ、橙色の眼鏡をかけた、愛しの彼が立っていた。
「ああ……！まさか、……ウェールズ様！」
「ハハハ、そのウェールズっていうのやめてくれないか？これからは……そうだな、ハルケギニアを翔ける一陣の蒼い風『ウェントゥス』とでも呼んでくれ」
ウェントゥスは軽く冗談言って茶化しつつも、手にもった杖で、砂塵を撒き上げながら迫りくる矢の雨を風で吹き飛ばす。
「ウェールズ様！ああ、ウェールズ様ぁあ！」
アンリエッタはユニコーンから飛び降り、ウェントゥスの胸に飛び込む。

ウェントゥスは杖を持たぬ片腕で、そっとアンリエッタを抱きしめる。

「ああ、そんな！わたくしは夢を見ているのかしら！ウェールズ様、生きてらっしゃったのですね！」

アンリエッタはウェントゥスの肩に顔をうずめる。

「いや、ウェールズ・テューダーは確かにアルビオンで死んだ。しかし、彼から君にと言付かっている。『このウェールズ・テューダーは誓う、永久にアンリエッタを愛する事を、そして死後も君を愛し続けると』！」

アンリエッタの目から涙がはらはらとこぼれた。

「ああ、なんという事でしょうか。どれだけその言葉を待ち望んだことか……」

「すまなかったね、アン。君を不幸にすると思い、君の想いに応えられず、ぼくは臆病にも逃げ続け、傷つけてしまったね」

「なにをおっしゃるの。その言葉だけで、わたくしは幸せです！」

「それを聞いて、この風のウェントゥスは安心したよ！この様な簡単な事を行う勇気をなぜ今まで持てなかったのか！」

「クアッ！」

黒鷲がウェントゥスを嘴で突っつき、ここが戦場である事を注意する。

「ああ、わかっている。敵軍は未だに健在だ。空は友が何とかしてくれているようだが、こちらは私達で何とかせねばならんからな」

「ウェールズ様……」

アンリエッタが想い焦がれた再会だったが、依然危険な戦地に赴いている事には変わらなかった。

せっかく会えたというのに、ここで死によって二人は別れてしまうのか？

不安が頭によぎると、アンリエッタは身震いをした。

「なに、心配ないさ。私にいい考えがある」

そう言って、ウェントゥスは屈託のない笑顔を浮かべる。

その眩しい笑顔を見て、アンリエッタは感極まって涙があふれ出る。

ウェントゥスはそっとアンリエッタの手を取ると、杖を持つ自分と手と合わせた。

「風の吹く夜に！」

ウェントゥスが囁いた言葉は、人目を忍んでこっそり会う時、お互いに呼び掛けるために取り決めた合言葉だった。

「水の誓いを！」

ウェントゥスの意図を察したアンリエッタは涙を拭い答えた。

「ウェールズ様！わたくしの詠唱に合わせて！」

「いいですとも！」

アンリエッタは『水』、『水』、『水』のトライアングルスペルの呪文を唱え、ウェントゥスも『風』、『風』、『風』の呪文を唱え、アンリエッタの詠唱に合わせる。

近衛隊を引き連れ、ようやく駆けつけたマザリーニは驚愕した。

アンリエッタが突然現れた青年と共に、水と風の六乗を詠唱していた。

水の竜巻が二人の周りをうねり始めていた。

トライアングルメイジ同士と言えど、このように息が合う事は珍しい。

殆ど無いと言っても過言ではない。

しかし、王家の血同士ではそれが可能であると言われている。

王家のみ許された、ヘキサゴン・スペル。

「あのお方はもしや……うわっ！？」

黒鷲がマザリーニの馬に飛び乗り、首を横に振る。

それ以上は口にするなとでも言いたげだ。

「……何はともあれ、この場を打開する可能性があるものが何者であろうと気にしておる場合ではないな。近衛！姫殿下の詠唱が完了するまで、何としても二人を死守するのだ！」

アンリエッタの下に駆けつけたメイジ達が、アンリエッタとウェ

ントゥスの周りに魔法の防壁を張り巡らし、地面を揺らしながだれ込むアルビオン軍を押しとどめるために炎や風の魔法で牽制する。
アンリエッタとウェントゥスを中心として、白い砂が舞い上がる。
二人の詠唱は干渉しあい、巨大に膨れ上がる。
二つのトライアングルが絡み合い、巨大な六芒星を竜巻に描かせる。
津波のような竜巻だ。
この一撃を受ければ、大軍とて、ひとたまりも無いだろう。

上空ではルイズ達を乗せたシルフィードはイージスの指示に従い、『レキシントン』号を挑発するように、大砲がぎりぎりで狙えない死角を飛び回った。
『風と雷を操る魔物』が現れた、と驚いた水兵達は砲弾を対竜騎兵用の散弾に変え、撃ち落とすチャンスを見計らったが、これがなかなかどうして、射程範囲に飛び込む直前に青い風竜は身を翻す。
ブロントは呪文を唱えるルイズが振り落とされない様に、しっかりとその体を支えている。
その時である、イージスが叫ぶ。
「ブロント！後ろから魔法じゃ！」
ブロントは咄嗟にデルフリンガーを抜き放ち、半身だけ振り返り、デルフリンガーを突きだす。
槍の様な烈風がデルフリンガーに吸い込まれていく。
「おおぅ！おでれーた！突然だったもんで、何か知らんが吸いこんじまったぜ！お？相棒、やっと俺様の出番ってか！よっしゃ！待ちくた……」
ブロントはシャコン、と音を立ててデルフリンガーを鞘にしまう。
背後に一騎の竜騎兵が、烈風のように向かってくる。
ワルドであった。

ワルドは風竜の上でニヤリと笑い、叫ぶ。
「ガンダールヴ！やはり貴様か！流石は我が宿敵と言ったところだな！竜騎兵隊を一騎で殲滅したその腕は褒めてやろう！」
ブロントは弓を構え、不快感を表しながらワルドに答えた。
「勝手にライバル視するなオレの圧倒的なスキルの前におまえの命は長くない」
ワルドをめがけて、ブロントは矢を放つが、ワルドは風の魔法によってその矢をいとも簡単に叩き落とす。
「残念だったなガンダールヴ！空で貴様の力も発揮できまい！」
ワルドは＜エアブレイク＞を唱え、突風にてシルフィードのバランスを崩す。
シルフィードがぐらりと揺らいでも、ルイズは何事もないように呪文を唱え続ける。

エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ

「お前がただにバカだと思うぞ？バカか？」
ブロントは次々と矢を放つ。
しかし、ワルドは全て魔法で撃ち落とす。
「夜襲であれば、この私も撃ち落とせただろうな。しかし今ではそれはもう無理だ！貴様の矢が尽きた時が貴様の伝説も尽きる時だ！」
「バカが移るもういいからバカは黙ってろ」

オス・スーヌ・ウリュ・ル・ラド

ルイズの中で、リズムがめぐっていた。
古代ルーンを詠唱するたびに、リズムが強さを増し、体の中でうねっていく。
神経は研ぎ澄まされ、ワルドが放つ雑音はすでに一切耳に入らない。

自分の中で、何かが生まれ、行き先を求めてそれが回転していく感じがする。
いつも、ゼロと蔑まれ、魔法の才能がないと言われ続けた自分…。
そんな自分の、これが本当の姿なんだろうか？
ベオーズス・ユル・スヴュエル・カノ・オシェラ
ブロントも、ルイズの詠唱する呪文を聞いて、心が昂る。
左手が熱く滾り、そこから一つの技が頭に流れ込む。
＜サイドワインダー＞
ブロントは目を光らせ、矢を構える。
矢羽根の片側を指で解し、力一杯に弦を引き絞る。
弓を持つ左手がバチバチと激しく火花を放ち、木が焦げる臭いがした。
ギーシュがローゼンボーゲンに掛けた＜固定化＞の魔法がそろそろ限界なのだろう。
「じゃあなカス猿」
矢が飛び放たれたと同時に、弓はぽっきりと折れてしまった。
「それで終わりだな！ガンダールヴ！」
ワルドは風の魔法で矢を撃ちおとそうとする。
しかし、最後にブロント放った矢がいつもと違い、まるで蛇のようにうねり、曲線を描いて迫って来る。
まるで意思を持っているのか、回転する矢はワルドの風を避ける。
「何だこの矢は！くそ、間に合わん！」
ワルドは咄嗟に自分の乗る風竜の手綱を強引に引っ張り、傾ける。
風竜の体を盾にするが、矢の勢いは止まらず、竜の首を貫通して、そのまま矢がワルドの肩に食い込む。
ワルドの風竜は悶え、ワルドは苦痛に顔をゆがめた。
「おのれ、ガンダールヴ！！」

翼を広げたまま絶命した風竜は、吼えるワルドを乗せてそのままゆっくりと滑空するように墜落していった。

ジェラ・イサ・ウンジュー・ハガル・ベオークン・イル……！

上空で、永い詠唱の後、呪文が完成する。

ルイズは、その瞬間、己の呪文の威力を、理解した。

その魔法は巻き込む、全ての人を。

自分の視界に映る、全ての人を、己の呪文は巻き込む。

破壊すべきは何か。

ルイズは顔を上げ、目を見開き、目の前に立ちはだかる戦艦『レキシントン』号を見る。

ルイズは己の衝動に準じ、宙の一点をめがけて、杖を振りおろした。

「……デル・ウォータル！」

「……デル・ウィンデ！」

手を繋ぎ合わせたアンリエッタとウェントゥスが同時に詠唱を完成させる。

膨れ上がった巨大な水の竜巻がうねりながら砂浜に展開したアルビオン軍に襲いかかる。

通常の魔法と比べ物にならないほどの大きさなのに、驚く程に速い。

白い砂をまきこみ、白く輝く水の竜巻が次々と敵兵を飲みこんで行く。

見た事も無い強大な魔法に恐れをなしたアルビオン軍は逃走を試みるが、足元の砂に足を捕われ、竜巻を避ける事ができない。

上空の『レキシントン』号から様子を眺めていたボーウッドはう

ねる竜巻を見て驚愕する。
「あれは……ヘキサゴン・スペル!?あれは確か王家同士でなければ……。まさか、ありえぬ。いや、しかし、それしか考えられぬ。王権は……王権はまだ健在なのか!?」
ボーウッドの声が震える。
「ミスタ・ボーウッド、どういう事かね!?」
突然地上軍が劣勢に追い込まれている状況に、クロムウェルはうろたえる。
その時、青い風竜が横切り、ボーウッドは杖を構える少女の姿を見た。
次の瞬間、上空に光の球が現れた。
まるで小型の太陽の様な光を放つ、その球は膨れ上がる。
そして、空を浮かぶ艦隊を包んだ。
さらに光は膨れ上がり、視界全てを覆い尽くした。
誰もが咄嗟に目を瞑った。
目が焼けると、錯覚するほどの光りの球であった。
光が晴れた後、艦隊は炎上していた。
旗艦『レキシントン』号を筆頭に、全ての艦の帆が、甲板が燃えていた。
ぐらぐらと揺れる艦の中、ボーウッドが怒鳴る。
「被害報告!」
「全マスト破損!船体随所に火災!墜落します!」
「水兵!早急に閣下をボートに乗せ避難させるんだ!」
「アイ・サー!」
水兵は命令通り、クロムウェルを避難用のボートまで引っ張って行く。
ボーウッドは船長の帽子を被り直し、呟く。
「まったく、トリステインの空には一体何が潜んでいるというのだ……」
そして声を張り上げ、水兵達に命を告げる。

「総員！退避できる者はボートに乗り込め！無理な者は対衝撃態勢を取れ！」

「やったわ！本当に……本当に伝説の系統だったのね！」

ルイズは周りを見渡すと、全ての艦が炎を上げて墜落していくのを見た。

どさり。

後ろに座るブロントがルイズに寄りかかって来る。

「ちょ、ちょっとブロント。やめなさ……」

何か様子がおかしい、ブロントの顔色が悪い。

そして頭を抱え込み、かすかに震えている。

「あんた！その顔色……どうしたっての！ブロント？ブロント！」

「……いぃ…。頭が……ッ！」

ブロントの顔が苦痛に歪む。

「ねえ、イージス！ブロントどうしちゃったの！？」

「……大丈夫じゃ」

イージスは淡々と答えるが、ルイズにはそう思えない。

自分が何かしたからか？ルイズは心配になって色々考えを張り巡らせる。

「約束……を、ねえ……さ……」

ブロントはそう呟いた後、ぐったりとする。

ルイズはペシペシとシルフィードの首を手で叩く。

「お願い、下に降りて。寺院の所でいいわ！」

「きゅい！」

シルフィードは短く返事すると、寺院に向かって滑空していった。

墜落していくアルビオン艦隊を、マザリーニ枢機卿は茫然と見つめていた。

地上のアルビオン軍も、その半数以上が水の竜巻によって空に打ち上げられていた。

単純に兵数で言えばこれでようやく互角といった所だろう。
しかし、二つの奇跡を見せつけられ、アルビオン軍は戦う意思を砕かれているはずだ。
その時、マザリーニは空を横切る青い風竜を見つけた。
マザリーニは大声で叫んだ。
「諸君！見よ！敵艦隊は滅んだ！伝説のバハムートによって！」
「バハムート？伝説の竜だって？」
王軍に動揺が走る。
「さよう！あの空飛ぶ翼を見よ！あれはトリステインが危機に陥った時にあらわれ、敵をその閃光を持って滅ぼすという、伝説の竜王、バハムートですぞ！各々方！始祖の祝福我にあり！」
するとあちこちから歓声が漏れ、すぐに大きなうねりとなった。
「うおおおおおおおーッ！トリステイン万歳！バハムート万歳！」
王軍は一気に砂浜を駆け巡り、うろたえるアルビオン軍に突撃する。
マザリーニはアンリエッタとウェントゥスに歩み寄る。
一晩中戦い続けたウェントゥスが砂の上で、手を付けて座りこんでいる。
ウェントゥスの身体を心配したアンリエッタが何やら水の魔法で甲斐甲斐しくその疲れを癒してあげている様だった。
マザリーニはウェントゥスの前に立つと、一礼する。
「この度、加勢して頂き感謝致します。ウェール……」
ウェントゥスは息を切らせつつも、手をかざし、マザリーニの言葉を制する。
「誰かと勘違いしているようだが、私はただの通りすがりの風、ウェントゥスだ」
「しかし……」
マザリーニは、ウェントゥスに魔法をかけるアンリエッタの顔を見た。
いままでアンリエッタに仕えた人生の中で、マザリーニが初めて

見る表情だった。
なるほど、とマザリーニ大体の事を察した。
「いえ、このマザリーニ、貴方様と良く似た誰かと勘違いしておったようだ」
「心遣い痛み入る。ところで聞いても良いか枢機卿？」
「なんでございましょう、ウェントゥス殿？」
「トリステインに、伝説の竜王など本当にいるのかね？」
マザリーニは首を横に振って、悪戯っぽく笑う。
「真っ赤な嘘ですよ。ですが、目の当たりにした光景が信じられず、誰もがその判断力を失った。この私とてそうです。しかし現実に艦隊は墜落し、あのように竜が舞っているではござらぬか。ならばそれを利用せぬ法はない」
「抜け目がないな。だが、使えるものは何でも使う。政治と戦の基本だな」
ウェントゥスはにっと笑い、立ちあがり、身を整える。
「ああ、私はもう大丈夫だ。ありがとう、アンリエッタ」
「このまま行ってしまわれるのですか？アルビオンとの戦がもう始められてしまった今、貴方の亡命を受け入れるぐらいは……」
アンリエッタはマザリーニに視線を送ると、マザリーニは頷く。
「敵は外ばかりではない、王国内に潜む虫を吹き払うには、今のままが都合いいのでね」
「ですが……」
「君は今日から人々の前に立ち、光の中へと導くトリステインの王になるのだから。影から君を支える、背中を守る者も必要だろう？何、姿は見えずとも、風はずっと君と共に」
ウェントゥスは自分の胸を指差し、そしてその指でアンリエッタを指差す。
アンリエッタはぎゅと自分の水晶光る杖を握りしめる。
「……ええ、わかりましたわ。いつの日か、このアンリエッタが、風の貴方と共に陽の下を歩ける事を願いつつ、待ちますわ。ですが、

あまり待たせないでくださいまし、行かず後家と笑われ、年老いるのもわたくしとしても不本意ですから」

マザリーニはそれを聞いて眉をひそめ、軽く笑う。

「それは困りましたな。ウェントゥス殿にはゲルマニア軍一つ分の働きをして頂かないと釣り合いませんな」

「ハハハ、それは手厳しい」

マザリーニは自分の馬に跨り、アンリエッタに声をかける。

「殿下」

「何でしょう？」「何だね？」

アンリエッタとウェントゥスが同時に答える。

「オホン……『姫』殿下。此度の戦、勝利を飾るのに大将がいなくては様になりませぬ。これより、勝利を掴みに行きましょうぞ」

「ええ、今、参ります」

アンリエッタはユニコーンに跨ると、一陣の風が吹く。

振り返ると、ウェントゥスの姿はもう無く、砂浜に残る足跡だけだった。

（ウェールズ様、わたくしに、一国の『王』として立つ力をくださいまし……）

砂浜から離れた林の中で、ワルドは目を覚ました。

「ここは……？」

立ちあがろうとした時、風竜にとりつけられた鐙が足に絡まり、地面に倒れる。

「おお、子爵！起きたかね！」

ワルドは見上げると、顔を覗きこんでくるクロムウェルの姿があった。

「閣下、どうしてここに？」

強く打ちつけたのだろうか、ワルドの胸が刺す様に痛む。

「余一人が乗ったボートがここまで流れ着いてね、敵地の中で孤立

してどうしたものかと思っていた所、子爵の姿が見えたのでね。今からその風竜を蘇生するのでな、少し降りてもらえないかね？」

ワルドは鐙から足を外して、事切れている風竜から降りる。

ふと自分の肩を指で触れてみるが、傷が綺麗にふさがっている。

クロムウェルが指輪で治したのだろうか？

その左手の指輪がキラリと光ると、風竜がびくびくと動いたと思ったら、何事も無かったかのように立ちあがる。

その光景を目の当たりにしたワルドの胸がズキンと痛む。

（チカラヲ……チカラヲウバエ……）

声がワルドの頭の中でこだまする。

「さあ、子爵。余をアルビオンまで護衛してくれたまえ。今回は敗北を喫したが……子爵？どうしたかね、まだ治しておらぬ傷があったか？」

ワルドは杖を抜き、冷たい声でクロムウェルに問う。

「いえ、ところで閣下、ボートに乗って来たのは一人だと言いましたな？」

「うむ、何せ急な事だったのでな。余一人乗せて、あの水兵はボートを切り離してしまったからな。子爵がこうして偶然にも居合わせたのは、実に幸運だったよ」

「幸運？それはどうだろうな」

ワルドがふっと、閃光の如く杖を振り上げ、風の刃をクロムウェルに向けて飛ばす。

その瞬間、クロムウェルの左手が斬りおとされ、腕口から鮮血がほとばしる。

「ぎゃぁああ！！し、子爵！な、何を！」

クロムウェルは右手で血が流れ出る左腕を抑える。

ワルドは不気味な笑みを浮かべ、落ちた左手を拾い上げる。

そして血がまみれた指から指輪は外すと、ごみの様にクロムウェルの左手を落とす。

「自分の秘書の言う事を聞くべきだったな。早々にこの私の心を指

輪で支配してしまえば良かったものの」
「がっ……し、子爵！聞いていたのか！？」
「クロムウェル、貴様が虚無を担う者と信じて従っていたが、ただのペテン師とわかればもうその必要は無い。後は利用できる力は利用させて貰うだけだ」
クロムウェルの顔が苦痛にゆがみ、青ざめる。
「ま、まて。余は……いや私はただ……」
「ふむ、誰にでも使いこなせるとあの女は言っていたが、困ったな、どうやって発動すればいいものか」
ワルドは指輪を自分の指に嵌めて色々試みているが、何か使用するための条件でもあるのか。
「クロムウェル、この指輪の使用方法を教えろ」
その言葉には何も感情が込められていない、淡々とした口調だった。
「そ、それはできぬ！」
ワルドは笑みを浮かべる。
「そうか、まあ良い。直にその考えを改める事になるだろう」
ワルドはピュッと杖を突きだすと、それをクロムウェルの右腿に突き刺す。
クロムウェルの絶叫が響き渡る。
「不相応な力を手に入れてしまった自分を呪うのだな」
林からこの世とは思えない悲痛な叫びが続く。
そして数分後、辺りはとてもとても不気味な静寂に包まれた。

「ほう、首が落ちても復活させられるとは。中々素晴らしい力だ」
ワルドの左手に嵌められた指輪がキラリと光る。
横たわったクロムウェルがむくりと置きあがる。
「これはこれは子爵、御機嫌よう」
「挨拶はいい。これから、アルビオンまで送るが、今まで通りに振舞え。貴族議会にいらぬ疑惑を持たれても面倒だ」

「ええ、子爵のためならば是非も無し」
クロムウェルはニコニコとして、風竜に跨る。
「閣下、お忘れ物です」
ワルドは今まで通り、クロムウェルに向けていた口調に戻る。
地面からクロムウェルの左手を拾い上げると、それをクロムウェルに放り投げる。
「おお、すまぬな。忘れてしまう所であった」
クロムウェルは、手の切り口を自分の腕口に当てると、それが瞬く間にくっついていった。
ワルドは高笑いを上げながら風竜にまたがる。
「フハハハハハ、そうだ！これが求めていた力だ！いや、まだ足りないな！必ずや『虚無』の力すら手に入れて見せるぞ！」

第２５話　「黄昏の恋人たち」

トリステイン城下町、ブルドンネ街では派手に戦勝記念パレードが行われていた。

狭い街路にはいっぱいの観衆が詰めかけている。

聖獣ユニコーンにひかれた馬車から覗く王女アンリエッタの姿を一目見ようと人々は通り沿いの窓や屋上からパレードを見つめ、口々に歓声を投げかけた。

「アンリエッタ王女万歳！」

「トリステイン万歳！」

観衆達は熱狂していた。

王女アンリエッタが率いたトリステイン軍は先日、数に勝るアルビオン軍をタルブの砂浜で打ち破ったばかり。

『聖女』と崇められ、いまやその人気は絶頂であった。

この戦勝記念パレードが終わり次第、アンリエッタには戴冠式が待っている。

母である太后マリアンヌから、国主の証である王冠を受け渡される運びであった。

マザリーニ枢機卿を筆頭に、ほとんどの宮廷貴族達もこれに賛同した。

また、トリステインは皇帝とアンリエッタの婚約を解消する事を決定し、隣国ゲルマニアは渋々ながらこれを受け入れた。

ゲルマニアは援軍を出すのが遅れ、同盟であったトリステインを見捨てた形なってしまった負い目もあり、強硬な態度を示せるはずがなかった。

ましてや同盟の解消など論外である。

アルビオンの脅威に怯えるゲルマニアにとって、トリステインはいまやなくてはならぬ強国である。

賑々しい凱旋の一行を、中央広場の片隅でぼんやりと見つめる敗軍の一団がいた。

捕虜となったアルビオン軍の貴族達であった。

己の目を疑うような奇跡を見せつけられ、空のアルビオンへと戻る自分達のフネが全て落とされてから、アルビオン侵攻軍の殆どがすぐにトリステイン軍に投降していた。

捕虜と言えど、縛られる事も無く、思い思いに突っ立っている。

杖こそ取り上げられ、周りには形として見張りの兵が数人置かれてはいたが、逃げ出そうなどと考えるものはいなかった。

貴族は捕虜になる際に、捕虜宣誓を誓う。

ただでさえ不可侵条約を破った侵攻軍に参加していたばかりだ、その捕虜宣誓を破って逃げだそうものなら、それこそ貴族としての名誉と家名は地に落ちる。

その一団の中、日焼けした浅黒い肌が目立つ精悍な顔立ちの男の姿があった。

サー・ヘンリー・ボーウッドである。

彼はやはり同じく捕虜となった傍らの貴族をつついて言った。

「見ろ。私達を負かした『聖女』のお通りだ」

つつかれた貴族は、でっぷりと肥えた体を揺らしながら答えた。

「ふむ……、女王の即位はハルケギニアでは例がない。いくら我々に勝利したとはいえ、まだ戦争が終わったわけではない。大丈夫なのかね、しかも年若いという話ではないか」

「君はもうすこし王家の歴史を勉強すべきだな。かつてガリアで一例、トリステインでは二例、女王の即位があった」

ボーウッドにそう言われて、太った貴族は頭をかいた。

「ヘンリー、君の歴史に対する関心には相変わらず頭が下がるよ。しかし、してみると、我々はあの『聖女』アンリエッタの輝かしい歴史の一ページを飾るにすぎない、リボンの一つというべきかな。あの光！僕の艦を含む、君が率いた我々の艦隊を殲滅したあの光！驚いたね」

ボーウッドは頷いた。
レキシントン号の上空に輝いた光りの玉は、見る間に膨れ上がり、艦隊を炎上させたのみならず、積んでいた風石を消滅させ、アルビオン艦隊の針路を地面へと向けさせた。
そして驚く事に、その光は誰一人として殺さなかった事である。
光は艦を破壊したものの、船員達にはなんの影響も与えなかった。
火災や不時着で怪我人は何人もでたが、死者は発生していない。
「奇跡の光か、確かにそれもあるが。それよりも砂浜に発生した竜巻の方が私は気になったが……」
「それは本当にあった事なのか？何せ部下達が口々にする事の真偽がいまいち掴めてなくてね」
「ああ、私の知っている事が間違いでなければ、あれは確か……」
そこまで言いかけて、ボーウッドは言葉を飲みこんだ。
あくまで自分の憶測にすぎない。
あの時、砂浜を駆けた竜巻は王家の者達だけに許されたヘキサゴン・スペル。
しかし、それを行うには王室の血を受け継ぐものが二人以上いなくてはならない、しかお互い息があう程に親しい仲でなければ完成しない魔法だと伝えられている。
王女アンリエッタ以外でトリステインに残された王家の血筋と言えば太后マリアンヌしかいない。
しかし太后が自ら戦場に赴いたと言う話しは聞いていない。
ともなれば他の王家の者が関与していた可能性が高い。
『祖国』の皇太子ウェールズがアンリエッタと恋仲である、とボーウッドがレコンキスタにいた頃は良くのその噂を耳にした。
アルビオン王家の血は、ニューカッスルを陥落した時に潰えてしまったと思っていたが、もしかして今もまだ健在なのか？
ボーウッドの中で、小さな希望の様な光が差し込んでいた。
「おい、ヘンリー。何ぼやっとしているんだ」
「ん？ああすまない。何か聞いたか？」

太った貴族は溜め息を吐く。
「我々の様な捕虜でも、希望があればトリステイン軍への志願者を募っているとさ。特に空軍士官は優遇するらしい。それで君はどうするつもりだ？と聞いたのだ」
ボーウッドは少し考え込んだ。
「そうだな、その志願とやらの話に、私は乗るだろうな」
「おや？あの堅物のボーウッドにしては珍しいな。かつての仲間に矛を向けられるのか？」
ボーウッドはにっと微笑む。
「それならば既にニューカッスルでお互い経験済みだろう。それより、私はこのトリステインの『王権』がどんなものなのか、この目で見てみたくなった」
「その王家に対するこだわり、筋金入りだな。まあ、僕はもう軍人を廃業して、このまま故郷の家が身代金を出すのを大人しく待つとするよ。あんな光を見てしまったあとでは、恐ろしくてもう戦場にでる気がしないよ」
太った貴族は身震いをして、ボーウッドはそれを見て笑った。

馬車の中で、マザリーニ枢機卿はアンリエッタの隣で、にこやかな笑顔を浮かべていた。
ここ十年は見せた事のない、屈託の無い笑顔だった。
馬車の窓を開け放ち、観衆の声援に、手を振って応えている。
彼の両肩にのった二つの重石、内政と外交、この二つが軽くなった事を素直に喜んでいた。
しかし、それよりも傍らに座ったアンリエッタの毅然、堂々とした姿が何よりも彼を喜ばせた。
今亡き先王の姿をマザリーニは思い起こした。
「強くなられましたな、殿下」
アンリエッタは観衆に手を振りながら、マザリーニに答える。
「わたくしは昔と何も変わっておりませんわ、枢機卿」

「そうでしょうか？以前の殿下であれば、女王に即位する事を嫌がったと思います。しかし此度は殿下自ら申し出るとは思っておりませんでした」

アンリエッタはにこやかな笑顔のまま答えた。

「ええ、わたくし自身は女王になりたいと微塵にも思っておりませんわ」

「で、殿下！？」

マザリーニは座席から落ちそうになった。

「貴方がおっしゃったではありませんか、利用できるものは利用しろ、と。ならば、あの方との誓いを一日でも早く成就するため、わたくしは女王だろうと奴隷だろうとなって見せますわ」

「いえ、確かにそう言いましたが……あれは……」

「傲慢でしょうか？もし、不服であれば枢機卿、貴方が王冠を被ればよろしいわ。その方が、わたくしとしても王家のしがらみなど気にしなくて済むので話が早いのですが」

マザリーニは気を持ち直してこほんと咳をした。

「このマザリーニをあまり困らせないでください。その様な事をすれば、私は三日もしないうちに民によって討たれるでしょう」

「ならば仕方ありません。枢機卿、貴方にもわたくしの我儘に付き合って貰いますわ。このわたくしがどこのだれと結ばれても、誰にも文句を言わせない程強い国の女王となるために」

マザリーニは開いた口がふさがらない。

「そ、その……本当に強くなられましたな……殿下。どことなく父君に似てきましたぞ」

「何よりも換え難い心強い味方を得たのです。その方を失望させないためにも、わたくしは立ちあがっただけです」

「殿下……」

アンリエッタは、マザリーニ枢機卿に向き直り、真剣な眼差しで語る。

「何度も言いますが、わたくしは強くなどなってはおりません。政

務ではわからぬ事ばかりで、まだまだ枢機卿に頼らねばなりません。メイジとしての腕も上がった訳でもありません。ただ、自分の背後に怯える必要が無くなったわたくしが、枢機卿の目にそう映るのでしょう」

マザリーニは首を振る。

「いえ、それが強さなのですよ、殿下。民や臣下が『王』に求めるのがその堂々とした強き心です。彼の英雄は一人で、このトリステインに幾万の兵以上の強さもたらしてくれたそうですな」

マザリーニはにこやかに微笑む。

「英雄は一人じゃありませんわ」

アンリエッタは手元の羊皮紙を見つめた。

先日、アンリエッタの元に届いた報告書である。

それを記したのは、捕虜の尋問にあたったアンリエッタの信頼する衛士でもあるアニエスによるものである。

タルブで撃墜された竜騎兵の話が書いてあった。

竜騎兵軍をかく乱させ、いつの間にかアルビオン竜騎兵隊を次々と撃墜していった謎の竜騎兵がいたと、その捕虜となったアルビオン兵は語ったらしい。

そんな竜騎兵はトリステイン軍には存在しない。

そう疑問に思ったアニエスは調査を続けたらしい。

その後に、タルブの村での報告が書かれていあった。

村の一人のメイドの話によれば、青い風竜に跨り、村の『御神体』でもある楯を掲げてタルブの空を飛びまわったのは、アンリエッタと旧知の間柄であるラ・ヴァリエール嬢とその使い魔である事。

主人とその使い魔は、戦の後ほんの少しの間だけ休んだ後、風竜に急かされるようにして学院に帰ったとの事で、そのメイドもそれ以上、詳しい話は知らないようだった。

アニエスはこれらの事から、大胆な仮説を立てていた。

ラ・ヴァリエール嬢か、その使い魔が、あの光を発生させたのでは？というものである。

事が事だけに、アニエスは学院に赴いて直接その二人に接触してよいものかどうか迷ったらしい。
報告書はアンリエッタの裁可を待つ形で締められていた。
自分に勝利をもたらした光。
再会を果たした自分とウェールズを守った、太陽の様に眩い光。
あの光を思い出すと、胸が熱くなる。
「貴女なの？ルイズ」
アンリエッタは小さく呟いた。

一方、魔法学院。
戦勝で沸く城下町とは別に、いつもと変わらぬ日常が続いていた。
朝食の際に、タルブでの王軍の勝利を祝う辞がオスマン氏の口から軽くでたものの、授業も普段通り続けられ、他に取り立てて特別な事も行われなかった。
学び舎であるからして、一応政治とは切り離されていた。
それよりも、ハルケギニアの貴族にとって戦はあり意味年中行事でもある。
いつもどこかで小競り合いを行っている。
始まれば騒ぎもするが、戦況が落ち着いてしまえばいつもの如くである。
そんな中、あまり人が来ないヴェストリの広場では、一人で小さな戦いを興じ、熱中する者がいた。
「＜ドラグーン＞！そこを跳躍で避けろ！ああ、足を止めずに周りを回って攻撃を避けないと！」
ブロントに教わった事のコツを掴めてきたギーシュは、この所授業が終わるとすぐにヴェストリ広場に来ては色々なゴーレムを組み合わせて戦術を練る事に夢中になっていた。
今では同時に三種類程のゴーレムを織り交ぜて使う事が自然とできるようになっていた。

自分で自分のゴーレム達を戦わせて、そこから気付いた事で生成するゴーレムの装備を変え、立ち回りを考えるのが楽しくて仕方がなかった。

「ここで＜ダークナイト＞が叩きこめば完璧だな！む、いやでもそうするとこの正面に立つ＜サムライ＞の武器の隔では届かないか」

そんな様子をベンチに腰掛け、頬杖をついているモンモランシーがつまらなさそうに見つめている。

最近他の女の子に声も掛ける事無く、ギーシュが真面目になってくれたのかと喜んだモンモランシーだった。

しかし、時折ギーシュは昼食を摂るのも忘れて、何をしているのかと思って探してみれば、人気の無い広場で子供の様な兵隊ごっこであった。

所構わず口説きまわるギーシュの浮気でやきもきしなくなったのは良いが、そのかわり最近あまり構ってくれなくなっていた。

「この三種は意外と扱いが似ているな。＜エース＞とでも名付けようか！」

誰に聞いているわけでもなく、ギーシュは嬉々として叫び、ゴーレムをガチャガチャ叩き合わせている。

たまに通りがかる他の生徒が、ギーシュが一人で興じる姿を見て笑って行くのを見て、モンモランシーは少し恥ずかしくも思ったりした。

などと自分に云い聞かせたりしてギーシュをぼんやりと見つめていた。

自分だけを見てくれるようにならないかしら。

ふと、自分が以前調合していたポーションの事を思い出した。

秘薬が足りなくて作成をしばらく止めていたポーションが一つあった。

最近になって、街の秘薬屋の仕入れが改善されたので、今なら材料も容易く揃うだろう。

モンモランシーは首をかしげて、考え込んだ。

うーん、いい機会だし……。効果の程も試せるし……。
このポーションが完成したら、ちょっと使ってみようかしらとモンモランシーは思った。

その頃ルイズは、部屋で一人『始祖の祈祷書』を開いていた。
水のルビーを指に嵌めて、読んでみたが、タルブ上空で最初に読んだページ以外は相変わらず空白だった。
指輪の石でページに触れたり、祈祷書を持ちかえてみたり、色々試してみたが、あの時の様に光らない。
「まったく、ブリミルの説明書きは全然参考にならないじゃないの」
ペラペラとページを捲っていると、突然部屋のドアの鍵がカチリと音を立てた。
「あ、ブロント！帰って……」
ベッドに寝転がって祈祷書を読んでいたルイズが飛び起きると、
「やっほ」
ドア口にキュルケが立って軽く手を振っていた。
「あんた、また勝手にカギを……」
「ヴァリエールに用はないわ。ブロントさんいる？」
ルイズは不機嫌そうに鼻息を鳴らす。
「いないわよ。昨夜何か伝書フクロウがブロント宛に来て、それを受けてすぐにどっか行ったわ。わかったら早くこの部屋からでないと、蹴りだすわよ」
ルイズは手でキュルケを追い払う。
「どこへ行ったの？」
「知らないわよ、伝書に書いてあった内容はそこの机の上にあるわ」
キュルケが机の上に置いてある紙一枚を拾って見つめた。
表と裏をひっくり返してみたが、別に文字が書いてある訳でもなく何か小さな絵が描いてあるだけだった。
「何この落書き？仮面？」

キュルケはひらひらと紙を振りながらルイズに聞く。
「知らないわよ、それだけしか描いてなかったんだから。それよりブロントに何か用事なの？誰かの命の危機に瀕しているのなら、ツェルプストーの伝言を伝えてあげるのも考えてあげるわ」
キュルケはぱっと紙を離して、紙をふわりと空気に流して机の上に戻す。
「別に用は無いけどね。タバサは使い魔を連れてどこかに出かけて、あたしは退屈しているから、代わりにブロントさんとお話でもしようかなと思っただけ。まあ、あんたと一緒じゃないのならあたしは別にブロントさんのする事にとやかく言うつもりはないわ」
「あっそ、じゃそのまま自分の部屋に帰ってくれると凄く助かるわ」
キュルケは手をひらひらと振ってドアを出た。
「あーそうそう、ヴァリエール。あんたがあまりにも張り合いが無いから忠告してあげるけど、男は待っているだけじゃ振り向いてはくれないわよ。世の女性と言うのはあの手この手で意中の相手を振りむかせようと努力しているのだから」
ルイズはパタンと祈祷書を閉じて、眉を顰める。
「どういう意味よ」
「べーつに。一緒に住んでいるからって、呑気に待っているだけじゃ、愛しの彼はあんたの事を好きになっているとは限らないって事よ」
「べ、別にブロントはそんなんじゃないわよ！」
「あら、あたしは別にブロントさんと言ってないわよ」
キュルケはけらけらと笑う。
「ツェルプストー！からかいに来たのならいい加減にして、余計なお世話よ！」
「あー、可笑しい。ヴァリエール、あんたのお陰でちょっと退屈が凌げたわ。じゃあ、またね」
ルイズはぷんすかと怒っている。
「いいから、帰って！」

ルイズはキュルケをドアから押し出して、ドアをばたんと閉め、カギをおろした。
今度街に出たら、＜アンロック＞の魔法で開く事が出来ないドア止めでも見つけてこようかとルイズは思った。
そして、そのまま自分のベッドにぽてんと倒れ込んだ。
胸元からリンクパールを取り出して、手にとって眺めてみた。
「馬っ鹿じゃない。これじゃまるでわたしツェルプストーに言われたから、早速やってみているみたいじゃない」
ルイズはぽいっと枕の上にパールを投げた。
(別にブロントとはそういう訳じゃないから。ただの使い魔だから……)
ルイズはぐてんぐてんとベッドの上を転がる。
「で、でも使い魔が何をしているかを知っておくのも主人の務めよね……」
そっと、パールに手を伸ばして、触った所で手を引っ込める。
(それじゃあ、まるで自分の使い魔の事疑っているみたいじゃない！そんな事でブロントの仕事の邪魔しちゃ……)
「ああーもう！」
ルイズは両手で頭をわしわしとかきむしった。
そしてパールをがしっと取って、それに語りだした。

「ブロントいる？」
[――どうした？何かあったのか？――]
「べ、別に。ただどうしているのかな、と思って」
[――今俺はオルレアんにいるんだが。戻ろうか？――]
「いや、いいわよそこまでしなくても」
[――そうか――]
「オルレアンって確かラグドリアン湖がある所だったわよね……」
[――そこでウェントゥスに会った――]
「ええ本当！？」

［――もちろんリアル話――］
「リアル話……って、もう、それより……」
そうしてルイズはブロントと他愛の無い会話を夜まで続けた。

外伝・タバサと仮面　「スモークオンザマウンテン」

「きゅい～トゥーナいっぱい食べ損ねた！騙されたのね～！くやしい！きゅい！」

ガリア上空。

リュティスに向かうタバサを背中に乗せて、風韻竜のシルフィードはタルブ村ではご馳走どころでは無く、魚の一匹にもありつけなかった事を今でも愚痴っている。

タバサはシルフィードを無視して黙々と本を読み続けている。

「シルフィとっても頑張ったのね！タルブ村が無事復興したら、今度こそお腹いっぱいお魚食べてやるんだから！こんな肉の味をした、肉っぽいニセモノはもう嫌なのね！」

シルフィードの手にはブヨブヨした何かの塊がある。

最近売り出された魔法を使った代用肉であった。

肉があまり手に入らない庶民が買う、豆で作った生地に魔法の『錬金』によって肉の味が付けられたものであった。

肉よりも安く手に入るので、タバサは肉をしきりにねだるシルフィードに買い与えたのがこの豆でできた肉の様なものだった。

「シルフィはこう見えても美食家なのね！本物のお魚とお肉を要求するのね！主人は使い魔の食べ物に責任を持つべし。シルフィは使い魔として当然の権利を主張するのね！」

と言いつつも、空腹には耐えきれず、シルフィードは手にした物をちびちびと口に運ぶ。

「お金が無い」

タバサはシルフィードの主張を捻じ曲げる現実を淡々と突き付けた。

「いつも新しい本を買い込むくせに、よく言うのね！本は食べられないし、古くても中身一緒なのね！でも食べ物はそうはいかないのね！もっとシビアな現実に目を向けて欲しいのね！」

「食事は何を食べても同じ様に身体の栄養になる。でも、本は頭の栄養。質が大事」

シルフィードはぷりぷりと怒り、首をぶんぶんと振るが、タバサはもう相手にしない。

「食べ物を笑う者は、いつか食べ物の差で泣くのね！」

シルフィはきゅいきゅい喚きながら、リュティスに向けて飛び続けた。

ガリアの首都リュティス。

街の郊外の一角に広がるヴェルサルテイル宮殿のさらに一角、鮮やかな薄桃色の壁を誇るプチ・トロワでは、ガリアの王女であり、タバサの従姉でもあるイザベラがタバサの到着を待ちわびていた。

タバサと同じ色の長い青い髪。

しかし、その下の顔が持つ雰囲気は、タバサの涼しい冷たい風の様な雰囲気と違い、イザベラのそれは『冷酷』の一言で片づけられる、見る者を不安にさせるものだった。

「遅いねぇ。ほんとにあの『人形娘』はわたしをイライラさせるねえ」

そんな冷酷さをむき出しにした声で唸ると、控えた女官や召使達が怯えた表情になった。

イザベラ王女が機嫌を損ねていると、非常にロクでもない事である。

命に関わると言っても大げさではない。

「この酒に料理……。なんてまずいんだい。もう飽き飽きしてしまったよ。お前らでたいらげな」

イザベラは目の前のテーブルに置かれた様々な料理を一瞥して言った。

それらは国中から集めた選りすぐりのコック達が作った豪華な昼餐であった。

召使達は、ほっとした表情を浮かべた。

どんな難題を持ちかけられるかと不安になっていたが、食事を自分達で片づけるだけならなんも問題はない。
「ただ、時間をかけちゃいけない。一分でたいらげな。一秒でも遅れたら、一週間、食事抜きだよ」
召使達の顔が、恐怖に歪んだ。
その表情が至高のご馳走と言わんばかりの顔で、イザベラは言い放った。
「食べ物に感謝しない奴は嫌いさ。わかったら、さっさとたいらげな。もう、七秒使っちまったよ」
召使達は慌てて料理に飛びつき、食器を使う事も忘れ両手で料理をむさぼり始めた。
「あっはっは！まるで家畜のようだねえ！」
イザベラは高らかに笑う。
そのとき……、入口に控えた騎士が、タバサの来訪を告げた
「シャルロット様が参られました」
「だからあいつの事は『操り人形』って呼べと言ってあるじゃないの！『人形七号』で十分よ！まったく不愉快ね！」
「失礼しました。七号様、参られました」
タバサ達の北花壇騎士は名前で呼ばれる事は殆どない。
それぞれ番号で呼ばれるのが慣例であった。
しかし、タバサは元王族。納得いかない思いを抱える騎士や貴族は少なくは無かった。
「入っておいで！」
料理に群がっていた召使達は、一様にほっとしたような表情を浮かべた。
自分達の暴君の興味の対象が、やっと別のものに移ってくれたからだった。
無言で入って来たタバサを見て、イザベラは目の前で食い散らかされた料理を指差した。
「たまにはお前をもてなしてやろうと思ってね。ほら、一流のコッ

ク達が腕によりをかけて作った料理だよ。食べな」
召使達が散々に食い散らかしたあとなので、残飯のようになっている料理がテーブルの上にあった。
元王族が、口にできるようなものではない。
タバサが無反応なので、イザベラは業を煮やした。杖を持ち上げ、それをタバサに向けた。
「食べな」
タバサは無言のまま、テーブルに近づきフォークを握った。
イザベラがにやっと笑った。
「ああっと、フォークを使うんじゃないよ。宮廷のフォークは、王族のみ使用を許されているんだ。知らないのかい？」
タバサはわずかに目を細めると、肉や野菜の残骸に手を伸ばし、それを口に含む。
「どうだい？おいしいだろ？わたしに感謝するんだね。お前なんか、一生かかっても口にする事はかなわないような高級な食材を使っているんだ」
わずかに硬い表情で、タバサは黙々と料理をたいらげた。
食べ終わったタバサに、イザベラは任務を告げた。
「さて、今回の任務は、火竜山脈に出向いて、時折周辺の鉱山村を襲う悪名高いはぐれ火竜を一匹退治して欲しいのさ。簡単な事だろう？細かい事はそこに書いてあるから後で読んでおきな」
イザベラは冷ややかに命令して、タバサの顔に一巻の羊皮紙を投げつける。
そこにははぐれ火竜に関する領民からの報告が書いてあった。
「ああ、それと私用だけど、わたし毎日同じ様な料理に飽き飽きしちまってね。お前に極楽鳥のタマゴもついでに火竜山脈から取って来て欲しいのさ。公式の任務ではないけれど、お前にとっては同じぐらいに重要な任務である事には変わりないよね？」
後ろに怯えながら立っていた召使達の表情が変わった。
自分達より過酷な運命に置かれた者をみる、同情を含んだ目だっ

た。
「知っての通り、今の季節、極楽鳥のタマゴは簡単に取れなくてね。しかし、わたしは『今』食べたいのさ。だからせいぜい命を張って頑張るんだね。たかがわたしの美食のためにね」
満足気にイザベラは言い放った。

「火竜一匹でも大変だと言うのに、更に極楽鳥のタマゴですって！できるわけないじゃない！きゅい！」
タバサから今回の任務を聞いたシルフィードは、ガリア南西へと飛びながら、驚きの声をあげた。
「いいこと、おねえさま。これからの季節、火竜は繁殖期にはいるの！とってもピリピリしていて、近づいたらどんなものでもその強力なブレスで丸焦げにされちゃうのね！」
シルフィードの言うとおり、繁殖期に入った火竜の雄ほど性質の悪い幻獣はいない。
「しかも極楽鳥は高い山の洞窟に巣を作るけど、同時にそこは火竜の住処でもあるのね！この季節にそこに行くなんて自殺行為なのね！」
イザベラが『私用』と称した極楽鳥のタマゴの採取も、通常は火竜がいない季節を狙って行われる。
タバサを自分の『美食』のために、その様な任務を付け加えるのは嫌がらせ以外のなにものでもなかった。
シルフィはまだ続けてタバサを説得しようとする。
「火竜はシルフィ達古代種たる韻竜と違って、知能の代わりに強力な炎を進化させてきた連中！風竜みたいにものわかりがいいわけじゃないし、おまけにとっても気が荒いのね！きゅい！」
しかしタバサは首を縦に振らない。
「急いで、明日にはつきたい」
「もう！おねえさまったらほんとに竜族の怖さがわかってないんだ

から」
　文句を言えるだけ言ったものの、まさかタバサを放りだして逃げ出すわけにもいかず、シルフィードは仕方なく火竜火山へと飛んだ。
　火竜火山は、ガリアを横切るように六千メイル級の火山が連なる、長大な山脈である。
　いたるところに赤く焼けた溶岩流が噴出し、さかんに振る雨を水蒸気に変え、一面を白く濁った霧で包む。
　シルフィードに乗ったまま、空から直接向かうのが一番早いのだが、それではすぐに火竜に見つかってしまうだろう。
そのため、タバサ達は麓からこっそりと山を登り、極楽鳥の生息地に向かう方法を選んだ。
「この姿で山を登るのはごめんなのね」
　風竜の姿のままでは目立つので、シルフィードは『変化』の魔法で人間の姿になり、タバサが貸したお仕着せに着替えた。
　黙々と山を登って行くタバサに向かって、シルフィードはぶつぶつ文句を並べた。
「まったく、あの最悪姫の食い意地ったらないのね！たかが自分の食堂楽のために、いらない注文を追加するなんて！」
　極楽鳥の住処のある所まで半日もかかった。
　火竜の群れに見つからぬ様、慎重に登ったため時間がかなりかかってしまったのだ。
　濛々と立ちこめる水蒸気の中、瑠璃色に光る鳥の羽が見えて、シルフィードは興奮した声を上げた。
「あの羽！極楽鳥なのね！」
　タバサは振り向いて、自分の口に指を立てて当てた。
「そうなのね、つまりここは同時に例の火竜の巣でもあるのね。きゅい」
　はぐれ火竜の被害を受けている鉱山村からの報告では、雌争いに敗れ、片目に傷を負った一匹の雄の火竜が腹いせとばかりに山脈の各所にある鉱山村にちょっかいを出し、家屋などを焼いて回ってい

るとの事であった。
そして群れからはぐれた行動を取りつつも、未練がましく住処は他の火竜とはあまり遠く離れていないとの事であった。
そのためタバサは、はぐれ火竜に挑み火竜の群れを刺激してしまう前に、極楽鳥のタマゴを早々に回収しておこうと計画していた。
「しかしおねえさま、この霞というか湯気、忌々しいのね。むしむしするし、視界が悪いし。片目が潰されたはぐれ火竜でしたっけ？見つかる訳無いのね」
「でも同時にわたし達をも隠してくれる」
タバサはいつもと変わらぬ涼しい声で、岩の隙間を一つ一つ覗き回っては、極楽鳥の巣を探した。
立っているだけで汗が噴き出る程に蒸し暑く、火竜が闊歩する恐ろしい場所なのに、タバサは全く動じた所が無い姿をシルフィードは見つめていた。
「おねえさまはやっぱり並じゃないのね。きゅい」
タバサは机の下に落ちた羽根ペンを探すかの様な気安さで、ひょいひょい岩の隙間を確かめて行く。
「あった」
やがて、ぽつりとタバサが言った。
「ほんと？ほんとなのね？」
シルフィードも駆け寄り、タバサが指差す隙間に覗き込んだ。
岩の間に、極楽鳥の巣があった。
動物の毛が敷き詰められた中には、瑠璃色に輝くタマゴが三つあった。
「すごい！ほんとにあった！これで任務の一つは完了なのね！」
タバサはタマゴに手を伸ばした。
しかし、岩の隙間は深く届かない。
そこでタバサは魔法を使おうとした瞬間、親鳥が戻って来た。
ビャアビャア！ビャアビャア！
瑠璃色に光る翼とトサカを持った翼長七十サント程の鳥が、タマ

ゴを守ろうとしてタバサの前に立ちはだかり、暴れる。
健気な行為だが、タバサも命がかかっている。
手を振り、親鳥を追い払う。
すると、親鳥は空高く飛び上がり、更に甲高い声でわけきちらす。
ビャアビャア！ビャアビャア！
「ほんとに煩い鳥なのね！」
シルフィードが文句を言った。
その極楽鳥の鳴き声に嫌なものを感じて、タバサは靄の中を凝視した。
「おねえさま、どうしたの？早くタマゴを取って、例の火竜を見つけるのね」
シルフィードがそうつぶやくのと同時に、靄の中から巨大な影が現れた。
タバサは咄嗟に杖を振り、魔法を唱えてシルフィードの身体を弾き飛ばす。
同時に自分も岩の陰に身を伏せた。
ゴォオオオオオオ！
太い柱の様な炎が、タバサ達がいた空間を薙いで行く。
「火竜！」
シルフィードが怒鳴った。
靄から現れたのは全長十五メイルあろうかという、大きな火竜だった。
そして領民からあった報告の様に、その火竜の目には痛々しい二重に重なる引っ掻き傷があった。
任務の対象となっているはぐれ火竜だ。
荒々しくギャアギャアと鳴き喚いた後、はぐれ火竜は上空で反転して、再びタバサ達の方へと向かって行った。
その瞬間、タバサは岩場の隙間から躍り出た。
対象の火竜と遭遇する事は予定外だったが、探す手間が省けた、ここで一気に勝負つけるつもりなのだろう。

目の傷の痛みに怒り狂う巨大な火竜と、それに対峙する小さな少女。

しかしそんな小さなタバサは少しも臆した様子を見せず、身長より長い杖を凛と構え、強力な呪文を繰り出すべく、詠唱を開始する。

わずか数秒の間に、実戦魔法に通じたタバサは呪文を完成させる。

杖の先には大きな氷の槍が出来上がる。

＜アイス・ジャベリン＞だ。

タバサは迫りくる火竜に向けて、＜アイス・ジャベリン＞を放つ。

しかし、火竜が吹きかけるようにブレスを吐くと、そのジャベリンを一瞬で蒸発させた。

「！」

タバサは驚愕した。

あれだけ太い氷の槍が、一瞬で燃やし尽くされるとは思っていなかった。

一瞬で先を読んで、作戦を組み立て、戦うのが得意なタバサであったが、途中で予想外の事態が起こると、判断を誤りやすい弱点も持っていた。

タバサは火竜のブレスの強さを見誤り、そして氷が作りにくいこの熱気を帯びた火山の環境を計算に入れていなかった。

わずかに焦った表情を浮かべ、タバサは＜アイス・ウォール＞を詠唱して、氷の壁を作る。

しかし、火竜のブレスの前には焼け石に水の呪文である。

地面に伏せたシルフィードが怒鳴る。

「無茶なのね！おねえさま、逃げてなのね！」

しかし、遅かった。

火竜は真っ赤に燃えるブレスを吐きだす。

氷の壁が、炎に飲みこまれる。

シルフィードが咄嗟に飛び出して、小さな主人の身体を抱えてブレスをかわした。

しかし、傍らをよぎった火竜の尻尾が、ぶん！と唸ってそんな主

従を弾き飛ばす。
二人は投げ飛ばされ、タバサが呪文を唱える暇も無く、二人は地面に強く叩きつけられた。
朦朧とする意識の中、タバサは何か温かい風に包まれて辺りの靄が晴れた、そしてうまく聞きとれなかったが、背後から誰かの声が聞こえた様な気がした。
『同じブレスばかり使って雑魚丸出しだろ・・まぁいいが』
そこで、タバサは意識を失った。

「気がつきましたか？」
タバサが目を覚ますと、そこはテントの中だった。
寝床代わりの藁の上に、寝かせられていた。
むくりと起き上がると、身体の節々が痛い。
見ると、包帯が幾重にも巻かれている。
隣にはシルフィードが人間の姿のまま、自分と同じ様にして寝かせられている。
タバサとシルフィードを介抱してくれたであろう人物は心配そうにタバサの顔を覗き込んでくる。
年の頃十七、ハと思われる小女だ。
長い髪は無造作に後ろで束ねられ、顔も汚れている。
服はボロボロになり、所々穴があいている。
しかし、彼女の薄い鳶色の瞳には、強い意思の力が宿っている。
生活臭漂う薄汚れた格好だが、高貴な生まれ特有の雰囲気を放っている。
なるほど、右手には杖を握っている、貴族だ。
「あなたが、助けてくれたの？」
少女は首を横に振る。
「わたしはその包帯を巻いただけです。実際にあなたを助けたのは別の二人です」
「別の二人？」

「ええ、何でも『火竜は何匹も倒した事がある』と言う凄腕のメイジとその方のご友人である剣士の二人組です。わたしと目的が偶々一致していたので一緒に行動を取っていたのですが、火竜に襲われていたあなたを二人が見つけ、彼らが火竜の相手をしている間に、わたしが風魔法であなた方をここまで運んだのです」

そのうちに、シルフィードも気付き、ぱちくりと目を開けて絶叫した。

「おねえさまぁ～～～！火竜が～～～～！きゅい～～～！」

慌てた少女はシルフィードに取りつき、その口を塞いだ。

「しっ！音を立てないでください。このテントは魔法で岩に偽装してるんです。今火竜の群れは繁殖の時でその大部分はこちらに気付かないとしても、先ほどの様な雌にあぶれた火竜に気付かれてしまうかもしれません」

シルフィードは、んぐんぐと、言葉を飲みこんだ。

「その二人は今どうしている？」

タバサは少女に訪ねた。

「あの二人組が、先程の傷を負った火竜と何度か対峙した所を見た事があるので心配は無いと思います。息の合ったあの二人は、確かに凄腕だとわたしでも思いました。でも、例の火竜が中々仕留め切れなくて、すぐに逃げられてしまうので、戻って来るとしたらそろそろ……」

少女がそう言った時に、テントの外から人の足音が近づいてきた。

テントの幕が捲れあがると、橙色の色眼鏡をかけたメイジが入って来た。

いつぞやタルブ村で見かけた男だ。

「参った参った、今回もあいつに逃げられてしまったよ。魔法の風で奴が飛び立つのを止める作戦も失敗してしまったよ」

続いて後ろから白い鉄仮面を被った剣士風の男が愚痴をこぼしな

がらテントに入って来た。
「お前頭悪ぃな火竜が空を飛べるのはずるい」
「はっはっはっ、友の言うとおりだ。私の考えた作戦が甘かったな。だがいい経験になった」
タバサは意外な顔ぶれが登場した事に顔色を変えずとも、驚いた。
そしてタバサが何か言おうとした瞬間、シルフィードが仮面の男に飛びついた。
「うわ〜！ブロントさんだ〜！きゅいきゅい！ぴかぴかのブロントさんだ〜！」
仮面の男は手でシルフィードを押しのけた。
「は？俺がブロント？なんでそうなるのかわからん。俺は仮面ヴぁーんなんだが、俺がどうやってブロントだって証拠だよ。言っとくけど俺はブロントじゃないから。あんまりしつこいとバラバラに引き裂くぞ」
シルフィードはむー、と頬を膨らませる。
「う〜、そのぴかぴかはブロントさんなのね。シルフィ見間違えるわけないのね。絶対ブロントさんなのね！」
そこに色眼鏡の男が割り入って来る。
「まあまあ、彼がブロントではないと言う事を証明してあげよう」
色眼鏡の男はこほん、と咳払いをして仮面の男に問う。
「こんにちは」
「何か用かな？」
仮面の男は律儀に答えた。
「ブロントさんですか？」
「俺はブロントさんじゃない」
「そうですかありがとうデルフンすごいですね」
色眼鏡の男はにっこり微笑み、仮面の男の腰に帯びた剣を指差して言った。
「それほどでもない」
「それほどでもねえって、相棒そりゃないぜ……」

腰に帯びた剣が切ない呟きを漏らした。
色眼鏡の男は再びシルフィードに向かってにこやかな笑顔を見せた。
「ほらこの通り、彼はブロントではないよ。しかもインテリジェンスソード持っているのに、それほどでもないと言う程、とても謙虚な者だ」
シルフィードは全然納得がいかず、うー、と唸る。
「そんな白々しい事されてもシルフィ騙されないのね。絶対ブロントさんなのね。それにシルフィ知っているんだから、そこのあなた本当はウェー……」
タバサは杖でコツンとシルフィードの頭を軽く叩いた。
「痛い！何するのね！このちびすけは！」
タバサは首を横に振って、ポツリと呟いた。
「『彼』はブロントでは無いと言っている。人にはそれぞれ自分を名乗れない時がある。それ以上詮索するのは良くない」
「何ね、おねえさまも。ふん、いいわ。シルフィも本当は別に名前があるけど、それはおねえさまとの間だけの秘密だもん」
一同の中で一番見た目が大人っぽく見えるシルフィードが、まるで子供みたいに拗ねた。
タバサは尋ねようした事をようやく聞く事ができた。
「あなたたちは、ここで何をしているの？」

色眼鏡の男が、隣に立つ仮面の男に目配せをして頷くと、質問に答えた。
「私は友の火竜山脈を巡る物見遊山に付き合っていただけ所なのだが、そこで持ち合わせていた路銀が少々足りなくなった所なのだよ。そして偶々噂に聞いたのがこの周辺の村を困らせていると悪名高いあの片目の火竜に対していくらかの賞金がでると言うではないか。そういう訳で私達はあの火竜を狙っているわけだ。嘘ではないぞ、偶然聞いた獲物があの片目に傷負った火竜だったというわけだ」

仮面の男は黙ってそれに頷いた。
タバサはやけに『偶然』を強調した事に少し気になったが、軽く聞き流して今度は小女に目を向けた。
少女はリュリュと名乗った。
リュリュはまず、自分の生い立ちからタバサに語った。
ガリアのとある行政官の娘として生まれ、何不自由なく育った事。
おいしいものをたらふく食べて育った事。
そのうち、『美食』に強く興味を持ち、ハルケギニアを巡り色々な料理を金に任せて食べ歩き、次第に食べる事から、自分で作る事に興味が移った事。
しかし、料理とは身分の低い者が作る物とされていたので、貴族である彼女が厨房に立つ事に対して風当たりが強く、結局彼女は家をでて、各地を放浪して回った事。
「そこである一つの事に気が付いたのです！世の中の殆どの人は、おいしいものを食べられない！と言う事に！美食は、貴族だけのものであってはなりません！万人に認められるべき娯楽なのです！旅の途中、困った私を助けてくれた親切で真っ当に生きている人達が、かつてわたし達が食べていたようなおいしい料理を食べられないのは間違っていると！」
シルフィードは感動した顔で、リュリュに飛びついた。
「素晴らしい！シルフィ感動したのね！きゅいきゅい！」
「そんなあなたが、ここで何をしているの？」
よくぞ聞いてくれました、といった顔でリュリュは傍らからブヨブヨとした何かの塊を取りだした。
「うわ！肉の出来損ない！」
その塊はシルフィードがここに来る途中食べていた代用肉であった。
そこでリュリュは少し恥入った声で呟いた、
「そうです。出来損ないです」
「あなたが作ったの？」

その言葉の調子で気がついたタバサが尋ねる。
リュリュは頷いた。
「はい、わたしが考えたんです。庶民の方々にもおいしい物が行き渡るにはどうしたらいいかって、それで一生懸命考えて、この豆に『錬金』をかけて代用肉を作りました。街の商人と取引して店に置かせて貰っています。それほど売れ行きは悪くは無いのですが……」
「味があんまりよろしくないのね」
シルフィードの言葉に、仮面の男も頷いている。
その通りです、とリュリュは悲しそうに答えた。
「まぁ、肉っぽい気はするのね。でも肝心な何かが抜けているのね。うまくいえないけど、それがこの肉っぽいものを『肉』にするのを拒んでいるのね」
「そうです。私はそれが何であるかを知るために、もっと世の中のおいしい物を、もっともっと知る必要があります。その修業のためにここにいるのです」
「極楽鳥のタマゴ」
タバサはポツリと呟いた。
「そうです！あなた方ももしかして？」
シルフィードとタバサは顔を見合わせて、首をかしげながら頷いた。
「半分はそう。もう半分はあの片目の火竜」
「まあ！わたし達と目的はぴたり一緒ですね！わたしとあなたはタマゴが目的、そしてそこの二人とあなたはタマゴを取るのを邪魔する火竜が目的！ああわたし、世界七大美味の一つとうたわれる、あの極楽鳥のタマゴ食べてみたいのです！それも殆ど手に入らないこの季節の！きっと、手に入りやすい季節のものより、おいしいに違いありません」
「で、こんな所にテントを張っているわけなのね」
「はい、二週間近く張っているんですけど、あの火竜に邪魔されて、うまく極楽鳥の巣を探し当てる事もできなかったんです。いざ見つけても、親鳥がすぐに火竜を呼び寄せる習性をもっておりので。あ、

でも先日から協力していただいているヴァーンさん達のお陰で何とか火竜の注意を向けて貰っている間、タマゴがある巣を探せるようになった所なんですよ」

タバサはそこで何故あの場に彼女等が居合わせていたのか納得いった。

「タバサさんが極楽鳥の巣の在りかを見つけてくれたので、今度こそはタマゴを取れる筈です！」

色眼鏡の男が更に付け加える。

「空を自在に飛ぶ火竜相手に、私の『風』だけで抑えつけるのに難儀していたが、君のその『水』と『風』を合わせた『氷』があれば助かるのだが。どうだ、同じ目的を持つ者同士協力してくれないか？」

仮面の男が口を挟む、

「何いきなり怪我人に無理を言っているわけ？」

「そうだったな。何、その身体に響くような無茶な事は言わない。あの火竜が逃げるのを止めるための氷魔法を唱えて欲しいだけだ。荒っぽい事は私と友が引き受ける」

タバサにとっても悪い条件では無い。両方の目的が一度に達成できるのであれば、願ったり叶ったりだ。

それにあまりぐずぐずしていては火竜の繁殖期が終わり、子育ての時期になれば片目のはぐれ火竜以外にも他の火竜達も辺りを警戒するようになるかもしれない。

そうなってしまうと火竜退治やタマゴ探しどころではなくなってしまう。

タバサはこくりと頷いて、互いに協力する事に賛同した。

「おねえさま、おねえさま。シルフィは何すればいいのね？」

リュリュはちょっと困った表情を浮かべた。

「そ、そうね。じゃ、あなたは親鳥を鳴かせる係、って事でいいかな？」

「わかった！シルフィ頑張ってあの煩い鳥をびゃあびゃあ鳴かせる

のね！るーるー♪」
絶望的な任務が思っていたより簡単に済みそうとわかり、シルフィードはご機嫌に鼻歌を歌い出し始めた。
「タバサさん、今からでも、身体大丈夫ですか？」
「問題無い」
「ヴァーンさん達は……大丈夫のようですね」
見れば、男達二人は既に準備を整えてテントをでてしまっている。

一同はタバサ達が火竜に襲われた所までやってきた。
辺りは相変わらず白い水蒸気に包まれていたが、色眼鏡の男が軽く杖を振り、風を起こすと、山のごつごつした黒い岩肌が露わになった。
「タバサさん、巣のあった場所覚えていますか？」
タバサは辺りを良く見まわして、見慣れた岩の形を探しだすと、巣があった岩の隙間を指差した。
「では、私が魔法で岩の中に潜り隠れます、そこでええっと、シルフィさんでしたっけ？あなたが親鳥を鳴かして火竜を呼んだら、すぐにテントの所まで逃げてください。ヴァーンさん達が火竜の注意を惹きつけた所を見計らって、私がタマゴを回収します」
一同はリュリュの出した作戦に対して頷く。
リュリュは『土』の魔法を唱え、巣の傍らの地面に潜りこむ。
タバサは男達二人と共に火竜が現れた時に飛び出せるように岩陰に隠れる。
一人残されたシルフィードは、辺りに再び白い靄が立ち込めるのを見て、急に不安になりだした。
火竜が今くるのではないか、と軽く怯えながら、岩の隙間を覗き込む。
「シ、シルフィ行くよ？あの火竜呼びだすのだからね？み、皆準備いいのね？」
だが誰も返事をしない。

「ええい、もうどうにでもなれなのね！」
シルフィは隙間に手を突っ込んでバタバタと振りまわした。
突然差し伸べてきたシルフィードの手に驚いた極楽鳥の親鳥はけたたましく鳴いた。
ビャアビャア！ビャアビャア！
火竜を呼び寄せるに様に甲高く鳴いた後、間もなくして巨大な影が靄の中に現れた。
「きゃ～、火竜がきたのね～！」
そう叫び、シルフィードは一目散にテントのある所へと走り出した。
その叫びを合図に、岩陰に隠れていたタバサ達が飛び出す。
計画通り、片目の火竜が又しても極楽鳥の鳴き声によってやって来たのだ。
片目の火竜は雄たけびを上げながら、上空から飛び降りてきた。
しかし、仮面の男の姿を見るや否や、逃走しようと翼をはためかせた。
「おいィ！ウェントゥス！？」
「今度こそ大丈夫だ！」
色眼鏡の男が杖を振ると、火竜の周りの空気が歪む。
するとまるでずしりと重くなったかの如く、火竜がバランスを崩し、再び足が地につく。
「友が言っていたな、火竜が飛べるのはずるいと！それならば、と＜フライ＞の逆をする風魔法をかけてみたのさ！奴の周りの空気を重くした」
「ほう、経験が生きたな」
仮面の男は剣を抜き放ち、盾を上げて地に降りた火竜に突貫する。
火竜の塞がれた右目の死角に入るように仮面の男は火竜の周りを時計周りにぐるぐると旋回する。
姿が中々捉えられない火竜は必至に首を回して、白く光る人間の姿を見つけては炎のブレスを吐く。

灼熱のブレスは仮面の男を掠めつつも、大した効果はでていないようだ。
「タバサ君、ブレスの直線上に立っては危険だ、我々も回るぞ！」
そう言い放ち、色眼鏡の男は反時計回りで火竜を中心に旋回しはじめた。
タバサは少し考えて、仮面の男と重ならない様に大きく時計回りで回りだした。
土から顔を出したリュリュはその様子を遠目から見て、その宇宙の様に壮大で綺麗な光景を前にして、ふと見とれてしまっていた。
「きゅい～～～！道を間違えたのね～～～！」
逃げる時に、逆の方向に向かってしまっていたシルフィードが、戻って来て、横切って行った。
困惑した火竜は、重くなった自分の翼を無理やり広げ、飛び立とうとした。
「相棒！こいつ逃げる気だぞ！」
剣がそう叫ぶと、仮面の男は盾を突きだし、それで火竜の腹を強打した。
心臓が止まるような衝撃を受けた火竜がぐらりとよろめく。
「未だタバサ君！『氷』の魔法で火竜の動きを！」
色眼鏡の男がそう叫ぶのを聞き、タバサは杖を振り、＜ウィンディ・アイシクル＞を唱える。
『水』一つに『風』二つをあわせたトライアングルスペル。
しかし、先ほど受けた怪我によって本調子ではない上に、思っていたよりも精神力を消耗していたタバサは『水』一つを詠唱するのがやっとだった。
「ダメ、氷が作りだせない」
タバサは首を振ったが、色眼鏡の男は明るく答える。
「『水』魔法、それで良い。私は『風』には少し自信があるが、『水』魔法の詠唱が不得手なのでな、あとは任せろ！」
色眼鏡の男はタバサの水の詠唱に重ねて、『風』を二つ合わせて

きた。
タバサは驚いた。
他人の魔法に重ねて詠唱する事など聞いた事が無い。
自分はいつもの様に『水』を唱えているが、この男は慣れた雰囲気で、『風』の詠唱を自分にあわせてくる。
「ラグーズ・ウォータル…」
続けて色眼鏡の男が詠唱を完了させる。
「イス・イーサ・ウィンデ！」
その瞬間、タバサの杖から無数の氷の矢を飛び放たれる。
火竜の翼の薄い膜を突き破り、穴だらけにして再び火竜を地に落とす。
その隙を逃さず、仮面の男が剣を振り上げる。
「ボッパルブレードでバラバラに引き裂いてやろうか！」
一呼吸の合間に、仮面の男の剣が火竜を四回切り裂く。
火竜に刻みつけられた斬撃の痕が捻じり、湾曲する。
小さくうめき声を一つ上げて、片目の火竜はずずん、と地面に倒れ、絶命する。
「す、凄い……本当に火竜を退治してしまうなんて……」
倒れた火竜を見つめるタバサ達の後ろから、泥まみれのリュリュがタマゴを大事そうに抱えていた。
「それほどでもない。まさかそれが出来なかったらタマゴだけ持って逃げるつもりだったのかよ？お？」
「いえ、そんな事は！でも一応念を入れて、逃げられてしまってもタマゴだけでも確実に手に入れておけるかな、と思って。その」
「それより俺はこの火竜を倒した証拠がいるんだが、貰ってもいいのか？」
仮面の男は倒れた火竜を指差してタバサに尋ねた。
タバサは任務としては問題の火竜さえ倒せれば、別に証拠品を持ち帰る必要が無いので、構わない、と一言だけ返事をした。
それを聞いて、仮面の男は剣を手にとって倒れた火竜に向かう。

「お、おい相棒。俺様を構えて何をするのかな？一応念を入れておくが、俺は武器であって、調理器具じゃねえからな」
仮面の男が携えた金色に輝く盾が口を開く。
「火竜の鱗をも斬り開き、骨を断つ程の切れ味を持つ刃と言えば誰かのう？」
「そりゃ、お前。このデルフリンガー様しかいないだろう……っておいちょっと待て相棒！俺様は包丁じゃねえって！いやー、やーめーてー！」
仮面の男は剣の悲鳴を無視しながら、てきぱきと火竜の角、爪、頭骨、肉、心臓と次々と『素材』へと解体してゆく。
リュリュはタバサに駆け寄る。
「タバサさんありがとうございました。おかげで無事極楽鳥のタマゴが手に入りました！わたし、このタマゴをおろそかにしません！きっとこの味を、代用肉に活かせてみせます！」
そう言って、リュリュは自分に一つだけ残して、残りをタバサに渡す。
「修業にもっと必要なのでは？」
「修業と言っても、食べて味を知るためですから。一口あれば、用は足ります。もしよろしければ今ここで試してみます？」
リュリュはそう言うと、タマゴを持ち、それに杖を振りかざした。
タマゴの周りの空気が熱せられ、表面が蒸されて瑠璃色の殻が土気色に変色していく。
リュリュが慎重に殻をむくと、ぷりんとした白身が現れる。
いい匂いが辺りに立ち込めた。
「ふむ、これが幻の季節の、幻の極楽鳥のタマゴか……見た目は普通のタマゴに見えるが」
色眼鏡の男は興味ぶかそうに覗きこむ。
「あ、ヴァーンさん達もどうぞ、一緒に食べてみましょうよ」
火竜を解体し終わって、いつの間にやらどこかに仕舞い込んだ仮面の男は剣を布で拭っていた。

「うっ、うっ。俺様汚れちまった。生臭い肉を切る包丁にされた。うっ、うっ」
「まったく、剣が女々しく泣くでない。斬ってしまえば、肉はどれも一緒じゃろうて」
「そういうならよ、イージスてめは胡桃割るのに使われてもいいのかよ？」
「それは嫌じゃ。だが胡桃を相手にするわけがなかろう。それとこれは違う問題じゃ」
リュリュは仲良くタマゴを四等分にして分けると、口に含む。
苦労して手に入れた味だ。
さぞかし夢を見る様な味に違いない。
「……」
「……」
「……」
しばらくの沈黙が続いた。
まず色眼鏡の男が感想を漏らした。
「なんというか、懐かしい味がするな……実にアルビオン風な……」
「……その、調理方法が悪かったのでしょうか？」
「おいィ？これはゆで卵なのか？シャレにならんしょ」
タバサが首を振り、一言で切り捨てた。
「まずい」
リュリュはがっくりうなだれる。
「この季節のタマゴは食用に適さないみたいですね。ああ、これでは肉の味が遠ざかるばかりです」
突然仮面の男が両手を上げて、首を振る。
「肉の味を知るのに、タマゴを食べている時点で相手にならないことは証明されたな。本当の肉の味を知りたかったら明日ここにきてもらえませんかねえ・・？」
そう言いながら、腰のカバンから先程切り捌いた火竜の肉を取り出して、熱く滾る溶岩流の隣の地面に剣を突き刺した。

「ちょっ。相棒。てめ、つるはしなら持っているだろ」
仮面の男は溜め息を吐くと、カバンからつるはしを取りだしてザクザクと硬い地面を掘った。そしてその掘った穴に竜の肉を埋めた。
その様子を不思議そうに見つめた後、一同はシルフィードが待つテントへと戻った。
翌朝、肉を埋めた場所に戻ると、何とも旨そうな匂いが立ち込めていた。
「おいしそうな匂いなのねー！お肉ー、おーにーくー♪きゅいきゅい！」
久々の肉の香りを嗅いで上機嫌のシルフィードは腰を左右に揺らしていた。
風竜の姿をしている時の癖で、嬉しい事があると、無意識にその滑稽な仕草を取っていた。
「まさか、あの肉を食べるのですか？そんな事想像した事も無かったです……その、食べる側が食べられてしまうのは盲点でした」
リュリュは仮面の男が掘りだした肉を見た。
分厚い肉の外側がこんがりと焼き上がり、仮面の男が剣で器用に切り分けて行くと、中はルビーの様に朱色を帯びた肉汁滴るミディアムレアに焼き上がったステーキになっていた。
今回はシルフィードも含む一同が切り分けられたドラゴンステーキを口にする。
シルフィードがステーキを口にする時、タバサは声をかけて静止しようとも考えたが、その暇もなく一口で頬張ってしまっていたため、何も言わず、自分も黙ってステーキを口にした。
「……！」
「……！」
「……！」
全員が感銘の息を漏らした。
「これは……！本当に焼いただけの肉か！？ローストした牛肉以上の肉があったとは！」

「凄い！肉の生命力が感じる程に生き生きとした味！まるで体中に血が駆け巡るようです！これ一枚で三日は食べなくても平気な気がします！」

「お肉！最高なのね！これが本当の肉の味なのね！」

タバサが一言だけ的確な感想を漏らす。

「うまい」

リュリュは興奮して、仮面の男の手を取ってぶんぶんと振った。

「この味です！わたしが探していた「肉」の味です！これほど強く記憶に刻み込まれた味は一生忘れません！ヴァーンさんありがとうございます！まだこの世には知らない美味がある事を知りました！ハルケギニアの美食を知っていたつもりであった自分が恥ずかしいです！もしかして、さぞかし名のある料理人なのでしょうか？」

仮面の男は首を横に振った。

「それほどでもない。俺より調理スキルが高い奴なら知っているんだが」

「ほんとですか！お願いです！誰だか教えてください！」

「トリステイん魔法学院のマるトーって言うんだが……」

リュリュは仮面の男の手をぐいぐいと引っ張る。

「場所はわかりません！だから案内してください！何と言ってもそのマルトーさんに合わせて頂きますよ！料理人の意地としてこれは譲れません！」

リュリュが仮面の男を連れて早々と山を下りていき、それに色眼鏡の男も笑いながらあとを追う。

「なんか今回とっても面白い任務だったのね！きゅい！さあ、おねえさま早く帰ろうなのね」

リュリュ達がいなくなった事を確認してシルフィードは風竜の姿に戻り、タバサを乗せて帰路についた。

道中、タバサがシルフィードの食べた肉が火竜の肉で会った事を教えた。

種は違えども、竜族の肉を食べてしまった事にシルフィードは複雑な気持ちになった。

しかし五分後には「おいしい物には罪はないのね」と言う事でケロリと開き直ったとか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3174p/

謙虚な使い魔～ブロントさんがルイズに召喚されたようです～

2010年12月5日03時40分発行